

あえて艦これの世界でゴジラになってみた

豆柴タンク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日車に引かれて死んでしまった主人公（名前はない）神様に会い転生できることに、主人公は艦これの世界でゴジラとなり転生する事になった、果たして艦これの世界でゴジラになって何をするのか………考え中である!!!

ネタは色んな所から、あと島とか多いです

補足がちよつとありまして、取り敢えずバース島に着任した艦娘を書いときます

空母	大鳳	龍驤	瑞鳳	祥鳳	蒼龍	翔鶴
駆逐	不知火	黒潮	陽炎	朝潮	霞	荒潮
軽巡	球磨	多摩	木曾	五十鈴	長良	鬼怒
重巡	古鷹	加古	摩耶	鳥海	利根	
戦艦	金剛	比叡	榛名	霧島	扶桑	山城
工作艦	明石					

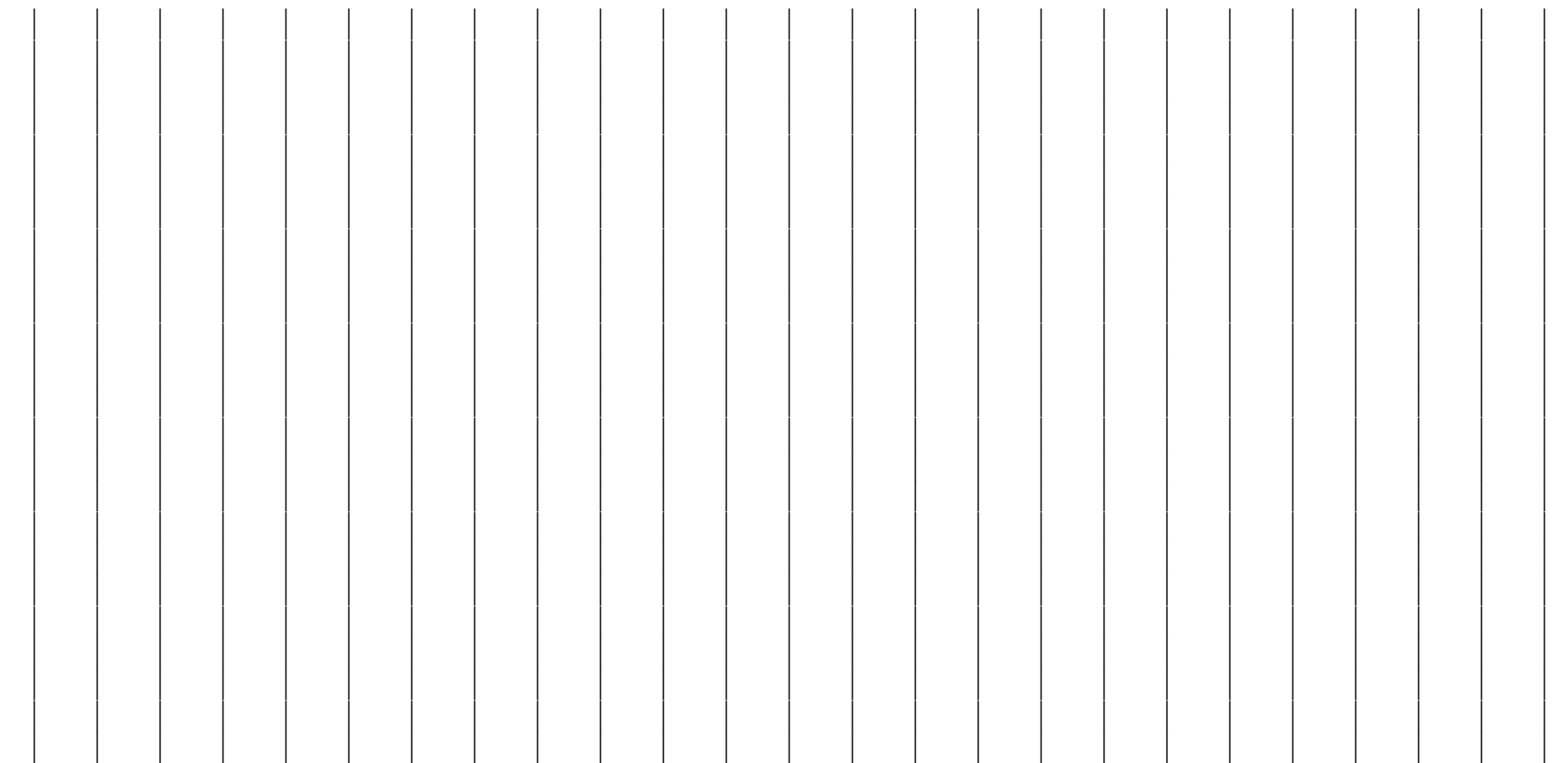
と言った感じでいきたいと思えますか作者の表現力等によりキラ崩壊してたり誰だこいつって感じになるかもしれないのでその辺は勘弁してください

後は一応話はオリジナル？だと思っうんですけど設定とか色んな所（ユーオーブ動画とか）から参考にさせてもらってるのでその辺ご了承のうえお願いします

目次

11話	124
10話	117
9話	111
8話	106
7話	101
6話	93
5話	87
4話	82
3話	76
2話	70
1話	64
本編	
深海棲艦 side	55
????	50
演習(狩)	42
明石失踪事件	36
番外編 クリスマスだね (後編)	30
番外編 クリスマスだね (前編)	24
深海棲艦 side	22
大本営 (報告会后)	16
大本営 会議2 (報告会)	10
歓迎会	4
大本営 会議 1	1

3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1
6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



262 257 251 245 239 233 228 222 216 211 204 199 194 189 184 179 174 168 163 157 152 146 141 136 130

5
4
話

5
3
話

5
2
話

5
1
話

5
0
話

4
9
話

4
7
話

4
8
話

4
6
話

4
5
話

4
4
話

4
3
話

4
2
話

4
1
話

4
0
話

3
9
話

3
8
話

3
7
話

367 362 356 350 344 338 332 327 321 315 309 304 298 292 286 280 274 268

大本営 会議 1

天龍達が救出されて数日後

—————大本営、会議室—————

今、この会議室では天龍達が深海棲艦と接触し、救出されるまでの経緯を提督が説明していた、説明している間会議室の空気は重く、とてもピリ付いた空気が場を支配していた。そして…

「以上で、報告を終了します…」

そうT督が閉めると、机を強く叩く音が響いた

「ふざけるな!!そんな説明で信じられると思っているのか!!敵の大艦隊に遭遇して逃げてたら恐竜が敵を蹴散らしただと!冗談も休み休み言え!!」

T督の説明を聞いていた別の鎮守府の提督の怒鳴り声が響く

「いいか、貴様の艦隊に割いた艦隊の燃料も只ではないのだ、そもそも我々が貴様の救援要請を受けたのは敵の大艦隊が日本に攻めてくる可能性があつたからだ!、そうでなければあれほどの艦隊が動くこともなかったのだぞ、それが行ってみれば敵艦隊は全滅していて、しかもそれは恐竜が蹴散らしただと、そんなので納得出来る筈がないだろう!!そもそも、本当に敵と出くわしたのかも怪しいわ!!」

「!…しかし!天龍達を救出した海域には深海棲艦の残骸も多数確認されており…」

「だが百歩譲って敵が居たとしても、警戒を引き継いだ艦隊からは恐竜の様な巨大な反応はその一带からは確認されていないそうだが?」
「それも、先ほど報告した通り、奴は海に潜ってその海域を離脱したと思われ、その様子を我が鎮守府の救援艦隊が目撃しております、引き継ぎの際にも注意されたしとその事を報告したようです」

「ふん!本当は見間違いで敵の大艦隊何か居らずに少数の相手だったんじゃないのか?それで逃げてる内に殲滅させただけだろう」

「そんな事はありません!私は彼女たちの言うことを信じています」

「はっ!どうだかそもそも、艦娘なんぞ兵器でしかない、人間扱いしている事態おかしな話なのだ」

「それは聞き捨てなりません、我々が深海棲艦と戦うことが出来てるのは彼女達のお陰なのですぞー！」

「戦うことができてるだと！じゃあ今のこの状況はどう説明する戦う事ができているのであれば救援なんぞ要らなかったんじゃないのか」「しかし…」

「もういい!!双方静まれ…」

言い争っている提督達の間に入ったのは説明の後もずっと黙っていた元帥だった

「何がどうあれ貴様の艦隊に救援を出したのは事実だ、今回の救援に回った艦隊の燃料の半分は貴様が出せ、そしてその恐竜に関しては今は不問とする、今がそんな事で言い争ってる場合ではないのは貴様たちも良く解ってるはずだ。だがもし、今回の騒動が本場で百隻にも近い敵の艦隊を殲滅させた。そんな生物が存在するとしたら我々は深海棲艦の他にそんな化け物と戦うかもしれないということだけ頭の隅に置いておけ…以上だ今日はこれで解散とする」

元帥はそう言葉を終わらせると立ち上がりさっさと出て行ってしまった

「お待ち下さい、それでは我々は納得できません…くそ!!いいか、今回はこれで済んだが次があるとは思うなよ」

そう言うと他の提督達も立ち上がり会議室を後にしていく、そして残されたT督も全員が出ていったのを確認してから会議室を後にした。そして帰りの車内にて一緒に来ていた長門が

「どうだった、と言うのは野暮な事か…その様子だと随分絞られたようだな」

「ああ…此方の説明は殆んどまとも聞いてくれなかったよ…見間違いないじゃないかって」

「そうか、しかし私達は確かに見たんだ、黒くそして巨大な生物を、何より天龍達が目の前で見て…私には信じてくれとしか言うことが出来ない…」

そう言うと長門は悔しそうに俯いてしまった

「はあ…そんな顔しなくても私は君たちを信じているさ、私は君達の

提督なんだからな」

「提督…ありがとう」

「まあ、今回は皆無事に帰ってこれたし、それでよしとしようじゃないか、それに疲れた帰ったら少し休むよ…」

「そうか、そうだな皆無事だったこの事にまず喜ぶとしよう、しかし！帰ったら書類が待っている休んでもいられんぞ…と普段なら言うんだがな今回はしょうがない帰ったらゆつくり休むといい」

そう言いながら長門は微笑んだそれを見て提督は

「ああ、そうするよ、速く帰りたいな。我が家に」

「ああ」

そんな会話をしながら提督達は鎮守府へと帰っていった

歓迎会

鎮守府の皆に挨拶をしたあと歓迎会が行われた、会場では色々な料理が大量に並んでいたしかし、ゴジラは陸に上がれないのでゴジラは料理にありつけないでいた。

そんな中ゴジラに話しかけてくる子が居た

「どもども、初めましてゴジラさん私、重巡洋艦青葉です。ちよーつと、ゴジラさんを取材させてもらいたんですが今、時間大丈夫ですか？」

青葉か突撃取材をしにやって来た、何かかれちゃうんだろ!!

「まあ、今暇だしいいぞ」

その言葉を青葉が聞くといつの間にか出したのかペンとメモ帳を用意して早速質問をしてくる

「有難うございます。では最初に貴方はどこからきたんですか？」

「どこから来たか…」（転生してきましたって妙な変な風になりそうだから止めておこう）

「海の中？」

「海の中？と聞いてますと」

「うーんなんていったらいいのか気づいたら海の中に居たって感じかな」

「なるほどなるほど」

「では、次の質問です。いまおおきさはどれくらいありますか？」

「さあ、計ったこと無いから解らないな」

「そうですか？ならしうがなないですね」

「25メートル位だよ」

「!?!」

そこにはリトルが居た

「私はゴジラの妖精だからね大体は把握してるよ」エッヘン

「おおうこれは丁度いいですね一緒に取材しても？」

その青葉からの誘いにリトルは

「まあいいよ、報酬はここに在る甘味全てね」

「ええ、ええそれで結構です。宜しくお願いしますね」

そうして青葉の取材は続き最後に写真を撮ることになった

「おー、上半身しか見えてなくても凄い迫力ですね。うはーこの角度カッコいい、ゴジラさん、少し上向いてくれます、おーおー空を見上げるゴジラいいですねー」

こんな感じで10分位ずっと撮っている、そんなこと考えていると青葉は正面に来て。

「ありがとうございます。お陰でいい記事が書けそうです」

「おーそれはよかったな」

「はい！それで最後にもう一枚写真をお願いしますたくて」

「またか、あんなにとったのに？」

「ええ、今度は迫力有る写真が欲しいんですよ。これが最後ですからお願いしますー！」

そう言うのと青葉は頭を下げた。だがその様子を見てゴジラのいたずら心に火をつけた

「まあ最後の一枚だしいいぞ」

「本当ですか、有難うございます。それじゃあ早速迫力の有るポーズをお願いします」

青葉はカメラを構えてゴジラを見ている。ゴジラはそんな青葉に顔を近づけ口を大きく開けて一気に迫っていった

「ピィ!!!」

青葉と後少しのところでゴジラの顔は止まると青葉はカメラを構えたままへなへなと座り込んでしまった

「どうだ、迫力ある写真がとれたか♪」

「はははははい、とつとも迫力ありました」

「ハハハハハハハビツクリしたか」

ゴジラは笑い、自分がからかわれたことを知った青葉はゴジラに猛講義をした

「もおーおー本当に怖かったですの食べられるのかと思いましたよ!!」

「ハハハハ、すまんすまんつい魔が差してね」

「まったくもう」

「所でいつまでも座ってるんだ？」

「そういつまでも立ち上がらない青葉にゴジラが聞くと

「…抜けて…れません」

「えっなんだって？」

「腰が！ぬけて！たてないんです!!!」

顔を真っ赤にさせ青葉が怒鳴った

「あー、それは悪いことしたなすまなかった」

「まあいいですよ暫くここにいれば直りますし」

そう言つて動かなくなる青葉を見て気まづくなったゴジラは

「なっなあ、リトルはせっつかくだし青葉を医務室に連れてつてやってくれないか」

「えー何で私なんですか」

「何でって、青葉に甘味要求してたろこの料理のなかにもあるらしいから青葉運んでくるついでに食べてこいよ」

「私はどうですか!!」

「うーん、それならいいか」

「いいんですか!!」

そう言つてリトルは青葉を担いで医務室の方へと歩いていった。

そしてまた一人になったゴジラはまた机に並んでる料理を見ていた

(まあ、俺が食ったら全部食っちゃうしな…べつ別に鳳翔さんや間宮さんの料理が食べられないと思つてねーしー)

「おーいゴジラー、食べ物持つてきたよー」

「川内ー!!信じてたぞー!!」

「うわあ!ビックリしたー、そんなにお腹すいてたの?」

「いや、すまんそう言う訳じゃないんだが、こういう料理つてこっち…いや食べたとき無いから気になつてたんだよ」

「あーそっかー、料理つて初めてだろうしね、それじゃあ食べさせて上げるよ口開けてー…:えーつと何か私が食べられそうな感じがする。

大丈夫、大丈夫」

「川内?どうしたんだ?」

「いや、ないでもないよ！それじゃあ行くよ。そりゃー」

川内は掛け声と共にゴジラの口に料理を投げ込んだそして、バクンという音がした

「ど…どうゴジラちゃんと味わかる？」

「……………」

「ごっゴジラ？」

「うっ…」

「う？」

「ウマーーー!!（。D。）」

「うまい!!これはうまい何て料理なんだ」

「あーこれは七面鳥の丸焼きと焼き鳥だよ♪」

川内が料理名をいった瞬間艦娘達のある一角からゴオ!!という音が聞こえたとか何とか

（何かどこから変なプレッシャーを感じた気がするが）

「おーい、ゴジラー俺達も料理持ってきたぞー」

「おー、天龍達もありがとな」

「お料理一杯持ってきたのです」

「お肉に野菜に魚料理色々あるわよ♪」

「私はウオツカを持ってきたよ」

「いーっばい食べさせて上げるんだから」

「おりゃー」

「てりゃー」

「とりゃー♪」

「えーい！」

暁達もゴジラの口にどんどん料理を投げ込んでいく、そんな様子を遠目に見ていた他の駆逐艦の子達が興味をもって近づいてきた

「ねえーねえー私達も料理あげてもいい？」

「いいよー」

「えっ！暁が言うのかいー！」

許可がでた瞬間、駆逐艦の子達は思い思いに料理を持ってきてゴジラの口に投げていった

「コラー！貴方達!!」

そんな怒鳴り声が聞こえた瞬間駆逐艦の動きが止まった

「貴方達、料理を投げるなんて、なんて事してるんですか!!」

「でも鳳翔さん…」

「でもじやありません、なんだってこんな「バクン」バクン?」

鳳翔が音のする方を見てみるとそこには料理を頬張っているゴジラと目があった

「あつ…えつと…初めまして鳳翔といいます…」

「初めましてゴジラといいます、料理とても美味しいです」

「そっそうですか?有難うございます。お口に合ってよかったわ」

鳳翔はいきなり目の前に現れたゴジラに動揺しつつ挨拶をし、それと同時になぜ駆逐艦の子達が料理を投げていたのかを理解した
「うっうん。えー皆が料理を投げてた理由は解ったわ。でもそんなに一遍に投げ込んだじゃゴジラさんも味が解らないじゃない一品づつに
しなさい」

「「はーい」」

「ゴジラさんも余りこの子達に合わせないでもいいですからね」

「あっはい気を付けます」

「…所でもう一人居ると聞いているんですけど?」

「あーリトルならあそこに…」

そう言つて目線で知らせる方へとその場所では

「うびゃくくくくくくく甘味だ、甘味だーウヒヤヒヤヒヤヒヤ、
バクバクバク夢にまで見た甘味だー」
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

そんな奇声を上げながら狂ったように甘味を食べていた

「えくと、あれは…」

「あー、何かすいません。あいつにとつて生まれて初めての甘いもの
なのでテンションおかしくなっちゃったみたいで」

「あ、あらそうなんですか…」

ゴー

ウワーナンカダシタゾー

「う、嬉しそうでよかったわ。それじゃあ楽しんでね」

「あつはい、有難うございます」

そう言つて鳳翔は去つていった

「ねえ、ゴジラ」

「どうした響?」

「また頭の上に乗せてくれないかな?」

「いいぞ」

そう言つてゴジラは響に頭を寄せて頭に乗せた

「ウラー!!」

その掛け声と共に立ち上がったゴジラと響を見て駆逐艦達は目を輝かせていた

「うわー、いいなーいいなー私も!私も乗りたい!!」

「かつこいいっぱい。次は私が乗りたいっぽい!!」

そんな声があちこちで上がった

「はいはーい、順番、順番、皆並んでねー」

川内がそう言つて駆逐艦達を並ばしていった

「たく、しゃーねーな。悪いけどゴジラは10分位づつ一緒に散歩して来てやってくれ」

「解つた、そんなじゃちよつくら行つてくるよ」

そう言つてゴジラは残りの時間を駆逐艦達と散歩して過ごした。因みにリトルは

「もっとだ!!もっと甘味をー!!」

「はーい、ただいまー。まだ食べるんですかー」

間宮と伊良湖に甘味のお代わりを要求していた…そして

「くっ!」航戦の誇りに賭けて負けられない!!」

「赤城さん、別に大食いしてるわけじゃないのよ」

何故か食母がリトルと張り合っていた

大本営 会議2 (報告会)

「……………大規模作戦終了後……………」

「以上が今回の大規模作戦の全容となっております」

そう告げ武蔵は視線を資料から元帥達の方へと向けた。

「信じられんな。まさか本当にこの様な化け物が居るとはな…」

「映像を見せられてもいまだに信じられませんか」

「しかもそいつのお陰で作戦が成功したというのも面白くないですね」

「やはり見間違いではないのかね、実際は我々の作戦道理事が運び見事深海棲艦の基地を攻略した、そうだろう」

そう言葉を発した人物は椅子にふんぞり返りながら武蔵を見た

「お言葉ですが中将、もしあの場にゴジラが居なければあの物量と後から出てきたエビラになんの対処もできずに我々は全滅していたと、あの場に居た誰もが言うでしょう」

「では、何か、貴様は我々が考えた作戦はなんの役にもたたなかつたと言いたいのか？」

「そうは言ってはいませんが、あれは誰も予想できない不足の事態でした。予想を遥かに越えた敵の量、更に怪獣エビラの襲撃どれをとっても誰にも予想なんてできない…」

「……それでそのエビラという化け物は深海棲艦どころか艦娘の攻撃も通じないという事だが、今後そういったのが出て来て対処できるのか」

その言葉に武蔵は顔をしかめながら

「解りません、少なくとも駆逐艦から軽巡の攻撃は聞いていませんでした、重巡や我々戦艦の攻撃も効果的なダメージは入ってないようでした」

「では、今の所打開策はその我々に手を貸してくれた怪物だけなんですな」

「はい、その通りです。しかし、我々に力を貸してくれた、この戦いに勝利を授けてくれた者は化け物や怪物なんて名前じゃない、彼の名前

はゴジラだ!!!」

武蔵の怒鳴り声に先程までゴジラを化け物呼ばわりしていた者達は静まり返る、そこに

「まあ、落ち着け武蔵」

ある男が声を発した、その声を聞いて武蔵は

「ハ！申し訳ありません元帥殿」

元帥と呼ばれた男は更に続けて

「他の者もそうだ、作戦はうまく行きこうして今戦力の建て直しが出てきているんだ、喜ばしいことじゃないか」

「しかし元帥、只でさえ深海棲艦という敵が居るのに更に別の敵が現れたのですぞ、しかも深海棲艦も艦娘の攻撃が効かないような化け物が！」

「ふむ、武蔵よ」

「ハッ！」

「さっきの報告ではそのゴジラは艦娘の味方をするが我々人間の味方をする訳ではないと言っていたのだな」

「はい、確かにそう言っていました」

「そうか…なんにか理由は言っていたかな？」

「それは、…人間が嫌いなんだそうです、しかし人間にも良い人間と悪い人間がいるのは解っている、話し合えば解り合えるかもしれないが自分の事を知った後、自分を利用しようとしたり驚異に思い攻撃してくるかもしれない、もちろんそれは艦娘にも当てはまるとは言っていました。私が私に答えてくれたのはこんなところ。それに今度また何か助けが必要な時は手を貸してくれるとも言ってくれました」

「なるほど、解った。それで武蔵は彼らと直接連絡が取れるらしいね、今連絡は取れるのかな？」

「取れますが、向こうが応答に答えてくれるかは解りません」

「構わない、頼めるかな」

「解りました」

武蔵はそう言うと言インカムを取り出しインカムについているボタンを押す。

するとインカムから呼び出し音（お好きな音楽を流してください）
がなり暫くその音が会議室に鳴り響く

「……………」

『はい、もしもし』

「もしもし、私だ武蔵だ、今時間大丈夫だろうか」

『うーんまあいいか、大丈夫だよ』

「そうかありがとう、実は今元帥達に先日の戦いの報告をしていてな。
一度君達と話をしてみたいと言うので連絡したんだ、構わないだろう
か」

『えー、それはめんどくさいな〜』

「そこをなんとか頼めないか」

『うーくん、……しょうがないなあ、まあゴジラは今忙しいから無理だ
けど私だけならそんなに時間が掛からなければいいよ』

「そうか助かる、他の者にも会話を聞かせても良いだろうか？」

『別に良いよ、インカムをスピーカーに繋げば皆にも聞こえるよう
なるから』

「解った、すまないな少し準備するので待つてくれ」

『了々解』

「元帥、ゴジラは出れませんが相方の妖精リトルが話をしてくれるそ
うです。今スピーカーに繋げて会話できるようにしますので」

「解った」

そして武蔵がインカムを机に置きスピーカーに繋ぐ

「リトル、繋げたぞ聞こえるか？」

『はいはい、聞こえるよー』

「待たせてすまなかつたな、今から話す人が元帥だ」

そうして武蔵は元帥に首を縦に振り合図を送る

「初めまして、私は日本海軍の元帥をしているものだ。今回は急な申
し出を受けてくれてありがとう、君の事はリトルと呼べば良いかな
？」

『うん、リトルで良いよ』

「解った、それで早速質問なのだからリトルは妖精なのかい？」

『うんそうだよ』

リトルの返答に会議室居る者達がざわめいた

「本当に妖精が喋っているのか…」

何人かが妖精が喋っていることに疑問に持ちながらそう呟いた

『まあ信じてても信じなくても私は別にどっちでも良いけどね、それで、早く本題に入ってくれないかな私達も暇じゃないんでね』

「それはすまなかった、妖精と喋るなんて初めてなのでね、それでは本題なのだが一度私達、もしくは私と会ってくれないかな？」

『普通に嫌だけど』

リトルの即答に流石の元帥も目を丸くさせてるのを見て武蔵が

「ちよつりトル！少しは考えてから答えてくれ」

『いや、だって会う必要性が無いんだもん、何で会わなくちやいけないの？』

「あ、あーすまない、いきなりだったね、理由としては先の戦いの後君達は艦娘の味方をするが人間の味方をする訳ではないと言ったそうだね、もちろんその理由も」

『うん、言ったよ』

「そこには話せば解り合えるとも言ったそうだね」

『言ってたね』

「だから我々と解り合い、共に戦ってもらうために一度話し合いがしたいんだよ」

『共に戦う気がないのでお断りします』

「またもやりトルが即答するとそれを聞いた武蔵が頭を押さえてなに言おうとした瞬間

「貴様！さっきからその態度なんだ!!」

「一体誰と喋ってるつもりだ!!」

「調子に乗るのも大概にしろ!!」

先程まで黙っていた聞いていた何人かが騒ぎ始める、更に他の者が言葉を発しようとした時

「黙れ!!」

元帥の怒鳴り声と共に全員が静かになった

「リトル、部下の非礼を詫びよう、すまなかつた許してほしい」

元帥の謝罪にリトルは

『別に気にしてないからいいよ、まあでもあんな事言ってる奴等と解り合うなんて真つ平ごめんだけどねwwwwそれじゃあ結論も出たことだし、私も忙しいからまたね……あつそうだ武蔵、別に武蔵達艦娘とはこれまで通りだから気にしないでね♪あつ！因みにそこにいる人間達に何かされたら直ぐに言うんだよ、いいね』

リトルのその問いかけに武蔵はどう反応して良いかわからず「あ、ああ」と曖昧に答えるしかできないでいた

『あははは、そうだよねそんな所に居たら答えずらいよね、ごめんごめん、それじゃあね元帥』

「あ、ああ今回はすまなかつた、またいづれ連絡させてもらうよ」

『またいづれ、ね。まあ良いんじゃないそれじゃあ…』

そう言つてリトルとの通信が終わつた。

武蔵が片付けたのを確認し、元帥はため息を吐き先程騒ぎ立てた者を睨みながら

「はあ、やつてくれたな貴様ら…」

睨まれた者はたじろぎながらも

「しかし元帥！あのままでは我々は舐められたままでした!!」

「あんな訳のわからない奴等にこちらが下手に出るなんてどうかしてますー！」

そう騒ぎ立てる者の言葉を聞いて元帥は呆れながら

「お前らは…そんな事で私とリトルとの会話に割り込んだのか」

元帥は頭を抱えながら

「良いかお前らは今後我々の驚異となる未知の敵に対抗するために必要な協力者との繋がりを切ろうとしたんだぞ、今回は運良く見逃してもらえたかもしれないが、そんな事も解らない奴等がいたとは……もういい今日はここまでにしよう、全員出てつてくれ」

「しかし元帥！我々は…」

「いいから出ていけ!!!…これ以上私を怒らせるな」

怒鳴られた者達はそれ以上何かを言うことはなく部屋を出ていっ

た。

部屋に残ったのは元帥と武蔵のみであった、元帥は深く深呼吸をして武蔵に問いかける

「武蔵よ、君から見て我々は彼等に歩み寄ることができると思うかい」
「……そうですね、難しいかもしれませんが無理ではないと思います」
「……………そうか」

元帥はそう言うとき顔をうつ伏せになり

「もとおおお！やだああああ!!なんだよ怪獣って……!!意味わかんねえーよー」

「しっかりしろ！お前は海軍の長なんだぞ!!」

こうして元帥の叫びと共に大規模作戦の報告会が終わった

大本営（報告会后）

「……………元帥の叫び後……………」

「ハアアアア漸く海域解放できて喜ばしい事なのに、何故にこんなため息が出るんだ」

机に頭を乗せながら元帥が呟くのを見て武蔵は

「まあ実際に解放されて喜ばしいことじゃないか、頼もしい仲間もできただ」

そう返す武蔵だが元帥は

「その頼もしい仲間に悩まされてるんじゃないか！海軍総出で挑んだ戦力で敵わなかったかも知れない相手を一匹で殲滅したんだぞ。なのに他の連中と来たらそれを理解してる奴が少なすぎる!!」（泣）

「まあ確かにそれは言えるな、それどころか自分達の方が上だと思ってる輩もいたな」

「折角友好的にしようと思ったのに邪魔しやがって！

……………今からでも連絡してどうにかなる思うか武蔵？」

「うくむ、少し間を開けた方がいいと思うが」

「はあ、そうだよな、所で本当に彼等との通信手段はそれしかないのか？」

「ああ、頼んで一つだけ作ってくたのだ」

「マジかあ、最悪それが我々の切り札になるかもしれないのか。

……………そんなもんどろ扱えば良いんだよ!!」

「まあまあ落ち着け、取りあえずは私が預かってタイミングを見て何か連絡してみる、それで向こうの機嫌が良いときにでも話が出るよう計らおう、そうすれば大丈夫だろう」

「……………解った、頼むよ」

「ああ、この武蔵に任せておけ！」

「…壊すなよな」

「だ、大丈夫だ！」

「本当に本当に壊すなよな!!」

「大丈夫だから、任せておけ」

「はあ、誰か変わってくれねえかな」

そう言つて元帥は机の引き出しから胃薬を取り出した：

――――

――――

――

――

――――――第⑨鎮守府――――

「ハアアアア、帰ってきたー」

「だらしないぞ提督よ、もつとシヤキツとしろ！」

「そんなこと言つたつて、あの会議室で起きたことは話したろ、これくらい勘弁してくれよお」

「駄目だ、せめて執務室に着くまで我慢しろ」

「へーい」

そう項垂れる提督と長門は現在大本営での会議を終えて自分の鎮守府に帰ってきたところだった、そして長門に言われ執務室に向かっている

「あつ提督戻ってきたんだね」

「おー川内、今戻ってきたところだ、何か変わったことは無かったか？」

「あーうんまあ、無かったかな…」

そう川内が言い淀む

「うん？ 歯切れが悪いな、本当に大丈夫なんだろうな？ 海域が解放されて前線までの距離が空いたからつて油断できないんだ、些細なことでも直ぐに連絡してもらわないと困る。川内！ 本当に何も無かったんだな！」

「!!、はい、何もありませんでした！」

先程の態度とは違いT督は提督として川内に聞いた、それを察した川内は背筋を伸ばし敬礼をして答える

「ならいい、でもなんであんな歯切れの悪い言い方したんだ？」

「実は…ゴジラを探しててね」

「ゴジラを？ またなんで」

「いや、あの後こっちは一度も来てないし、もしかしたらもう会えないのかなって皆で話しててさ、だから哨戒の時にまた会えないかなって少し探してたんだよ」

「そうか、結局住んでる場所とかは聞けなかったしな、まあその内作戦とかで会えるさ武蔵がゴジラ達と直接連……ら……く……」サー

今度は提督が黙りその顔はどんどん青くなる

「どうしたの？提督」

「な、なあ、この間の作戦で使った通信機って……」

「えっあの通信機って……あっ!!」

「ゴジラ達と通信できるってリトルが!!」

「そうだ！そうだった！忘れてた、ありがとう提督、早速皆にも教えな
いと」

そう言つて川内は駆けていった。そして残された提督と長門は

「なあ、長門」

「どうした？」

「これって大本営に黙ってた方がいいよな……」

「……まあ、その方がいいだろうな」

「うっ!!」

提督が急に腹を押さえ顔をしかめる

「大丈夫か？腹がいたいならトイレにいった方がいいぞ」

「違う！腹じゃなくて胃が痛いんだよ……こんな事になるならあの時全部大本営に報告しときゃ良かった」トホホ

「まあ……頑張れ！」

そう訴える提督に長門はどこか優しい顔をして執務室まで肩を貸した。頭の中で胃薬の場所を思い出しながら……

――

――

――

――工 廠――

「ふう、これでおしまいと♪」

現在工廠では明石が、海域が解放され資源が入ってくるようにな

り、前よりも整備がしやすくなった事で今まで資源の節約で整備できなかった装備を点検していた

「あー、これで漸く落ち着いたー、」

明石は背伸びをしながら今まで整備できずに放置されていた装備を点検、整備できたことに満足し椅子にもたれ掛かる

「さて、お茶でも淹れますか」

「ー、ー」

「〜♪〜♪」

明石は鼻歌を歌いながらお茶お用意する

「ーかしー」

「お茶菓子は〜♪」

明石はお茶菓子を探して戸棚に顔を入れている

「明石ー!!」

「うわあ!!」ガン

明石は戸棚に頭をぶつけた

「いっつつつ、」

「あつごめん大丈夫?」

明石は涙目になりながらも答えた

「うー大丈夫です。それよりは皆さんお揃いでどうしたんですか?」

そこには川内を初め、他の艦娘達が集まっていた

「インカム!」

「ん? インカム、インカムがどうかしたんですか? 壊れたんなら直ぐに直しますよ」

「違う! ゴジラ達と話せるインカムがあるでしょ!」

「え、ええ、ありますけど…何故に皆さん一緒に?」

「それは……」

そうして川内は明石にゴジラ達と話せるインカムの事を忘れていた事そしてさつき提督と話してそれを思い出した事を話した

「話は解りましたけど、皆さん忘れてたんですね。あれから誰も使おうとしなかったからどうしたんだろうと思ってましたよ」

「あははは、忘れてました」

「まあ、リトルさんも海域が解放されたから忙しいんだろうって言うてましたから気にはしてないみたいですけどね」

「あははは、えっ!」
「えっ」

「明石あれからもリトル達と連絡取り合ってるの?」

「えっ? まあインカムの管理してるの私ですし、それにリトルさんとは装備とかで色々と相談に乗って貰ってますよ」

「もつと…」
「え?」

「もつと早く教えてよー!」

「えー! だって皆さん忘れてるなんて思わなかったんですもん」

「うっ、まあそれは確かにそうだけど」

「それに忙しかったのだって事実なんですから」

「それもそうだけど」

「私、悪くないですよね?」

「はい、ごめんなさいその通りです」

「解ればよろしい」

「それで?」

「それで?」

「いや、インカム使うんですか?」

「あー、そうだった! うん! 使う」

「フッフ、ゴジラさん達喜ぶと思いますよ、この前ゴジラさんと喋ったときに「あれから皆から連絡が来ない…嫌われたのかな…」って言うてましたから」

明石のその言葉にその場にいる艦娘達が固まる

「ご、ゴジラそんなこと言ったの。すっ直ぐに連絡を…」アバババ
「大丈夫ですよ、ちゃんと今は皆忙しくて連絡とれないだけだって私とリトルさんで慰めておきましたから」

「そっかー…なら良かった、良かったのか?」

「さっ、それじゃあ貸し出し記録に名前を書いた人からインカムを持って行ってくださいね♪」

そうして明石は奥からインカムを出し机の上に並べた

「数には限りがあるので何人かと一緒に使うようにして喧嘩しないように、後向こうに迷惑が掛からないようにしましょうね、それとちやんと期限までに戻すように」

「はーい」

そうして艦娘達はインカムを取り各自散っていった。

そしてその後ゴジラ達のところに第⑨鎮守府の艦娘達からひっきりなしに連絡来るようになった、暫くして明石が「皆掛け過ぎ!!」と怒られ、決まった時間に二時間だけ日替わり制で掛けるようになった
それとは別に後日、大本営と鎮守府に胃薬が大量に届けられたとか

深海棲艦 Side

「……大規模作戦終了後……」

基地が陥落して数日がたった、我々は別の拠点に逃亡する事に成功した、正直あの海域から出られたのはありがたいが多大な被害を被ってしまった。あの忌まわしき黒い怪物が現れたせいで！まさかあんな奴と攻めてくるなんて艦娘共め!!

基地の周りを根城にしていたあの赤い怪物達があんなにあつさり倒されるなんて：我々でも手出しできずにいたのに、あの島になってた木の実がなければどうしようもなかった。偶々最初に襲われた部隊の一つがあの実を持ってたのが始めだったがあれがなければ本当にどうしようもなかった。

だが我々もただ逃げてきた訳ではない！あの戦いで黒い方の怪物の血液を手に入れた、これを研究して奴に対抗する武器を作るそれが今我々が取り組む事だ。

ソシテソノ武器ヲ量産シテ艦娘共トアノ黒イ怪物ヲ根絶ヤシニシテヤル!!」

「姫サマ、先程カラ誰トオ話ヲサレテイルノデスカ？此方ノ姫ガ来テクダサイマシタヨ」

「!!キユ：急ニ喋リ掛ケルンジヤナイ！ビックリスルダロ!!」

「シツ失礼シマシタ、シカシ先程カラ：」

「ナツ！キツ聞イテイタノカ、ドツドコカラ：」

「ソレハモチロン基地ガ陥落シテカラツテトコカラヨ、才陰テ聞ク手間ガ省ケタワ、折角ウチノマデ来タノニズツトコンナトコロニ籠ツテテ何シテルノカト思ツタラソシナ事情ガアツタノネ」

そう言つてこの拠点を任されている姫が近づいてきた

「フーン、コレガソノ怪物ノ血液？」

「アアソウダ、マダ少シシカ調べテナイガ、コノ血液ダケデモ凄マジイエネルギーダ」

「ヘエー、タツタコレダケナノニ？」

「アア、コレダケデダ、モシコレヲ使ツテ武器ヲ作レレバキツト今マデ

「ニナイスゴイノガデキル」

「スゴイジャンナイ！ソノスゴイ武器ハイツデキルノ？」

「ソレハ、ソノー…」

「ナニヨ、勿体ブツテルノ？」

「イヤ、ソノー…ドウヤツテ使エバイイカワカラナイ…」

「ハア!?アレダケ言ツテタノニ、使イ方ガ解ラナイノ！」

「ダ、ダツテアンナノ見タコトナイシ、ドウ扱ツテイイカナンテ、スグニハ思イ付カナイ!!」

「エエ…」

そう言つて呆れる姫に今まで黙っていた部下の深海棲艦が

「アノー、ソンナニスゴイエネルギーダツタラコノ基地ノ動力源ニシタラドウデシヨウカ？」

「エー！」

部下のその提案を聞いて固まる二人

「ソウカ！使イ方ガ解ラナケレバソノママ使エバイイジャンナイ！貴方天才!!」

「エへへ、ソレホドデモ」テレ

「チャット待ツテ、ソンナ訳ノ解ラナイノウチノ動力ニ使ウノ！イヤヨ！セメテモウ少シ調べテカラニシテヨ!!ソレニタツタソレダケデコノ基地ノエネルギーニナルノ？」

「エー、サツキハ呆レテタノニ、マア確カニコレダケジャンア、セメテモウ少シアレバナア…」

「デシヨウ、ダカラ使ウナラモット調べテカラニシテヨネ！」

「解ツタワヨ、シヨウガナイワネ」

それから私達は研究を続けた、今だに解らないことだらけだけど、解ったことはやはり基地の動力としては量が少ない事ともしかしたら近代化改修に使えるかもしれないと言うこと、まだ実験しないとなんとも言えないが成功したら我々の大幅な強化に繋がるかもしれない………多分!!

番外編 クリスマスだね (前編)

『今年もクリスマスイルミネーションがーーーー』

ピッ

『多くの恋人たちがーーーー』

ピッ

『スカーレット隊全滅!』

ピッ

ピップツン

「あー今年もこんなイベントが来たかー、はあー何が楽しいんだかさっぱりやらんね!!」

ゴジラは自室のテレビを消し寝転がる

「大体他所様の神様の誕生日祝ったってしょうがないじゃん、日本関係ないじゃん…はあ、」

「何黄昏てるの?」

「えっ、いやもうじきクリスマスだなーって思っただけだよ」

「そうだね!楽しみだね!!」

「はあ、お前楽しみなの?」

「そりやそうだよ、なんたってケーキ食べ放題だからね!これを楽しみと言わずなんと言おうよ!!」

そう言ってリトルは拳を上に掲げた

「あーそっかお前らはそういう楽しみがあるからな」

「お前らはってゴジラは楽しみじゃないの。食べ放題だよ」

「まあ、食べ放題は楽しみだけど、俺甘いもの好きだけどあまり量は要らないかなって」

「えー!なんかもったいないね、そんだけ大きな身体してるのにあんまり要らないなんて」

「まあそれは人それぞれだよ」

「ふーん、なんかあったの?」

「リトルよそういうのはあまり聞かない方がいいんだぞ色々あんだから色々…ね」ズーン

「なんかあからさまに落ち込んでる!!……まあ今年は私達妖精達と一緒にパーティーでもしてパーティー騒ぐようよ」

「パーティーねえ、まあ今は確かにお前らがいるからな」

「そうそう、さっ、食堂にいくらクリスマスまだまだあるけど限定ランチとかディナーが出てきたからね♪」

「そうだななんか食ってさっさと寝るに限るよな!!」

「おーっ! ってなんか違う気がするがまあいいや」

「さ、てと行きますか?」

「どしたの?」

「あー、すまん通信が入った」

「あーそう出てあげれば」

「そうする、もしもし誰だ?」

そう言つてゴジラは通信を始める因みにリトルもこの通信を聞いてるらしくインカムを付けている

『も…もし、ゴジ…聞こ…る?』

「あーすまん少しノイズ、と言うか周りの人の声であまり聞こえない」

『そう、ちよ…と待…て、皆…うるさくてゴジラ聞こえないって、もう少し静かにして!』

『でも私達も喋りたい!』

『さっきのじゃんけんで決まったことでしょ、ちゃんと守って!』

『『はい』』

『まったくもう、ごめんゴジラ待たせちゃって今度は聞こえる?』

「あー聞こえるぞ、どうしたんだ川内?」

『うん、クリスマスの事なんだけど…』

「クリスマス?」

『あー、ゴジラは知らないか、うーんと神様の誕生日を祝う日、みたいな日があるんだけど24日が前日のクリスマスイブって言って25日が本番みたいなんだけど』

あーなんか知らないって事になってるけど知ってるんだよなー、まあ知らないふりしてよ♪

『24日パーティーするんだけど、ゴジラ来れる?』

「24にか？俺が？鎮守府に？」

『うん、そう、駆逐艦の子達がゴジラに会いたがっちゃって……：……どうかな？』

「えー、いや、まあ、行けなくはないけど、皆でパーティーするんだろ邪魔になるんじゃないか？」

『そんなことないよ！ゴジラなら大歓迎だし私も久しぶりに会いたいしそれにプレゼント交換もやるんだよ』

「プレゼント交換ねえ」

『あープレゼント交換ってのは皆で持ってきたプレゼントを渡し合うゲームなんだ』

「んーそうすると俺から持っていけるもの無いぞ」

『無ければ無いで大丈夫だよ、ゴジラにとって初めてのクリスマスパーティーなんだから♪』

「うぐう、そ、そうかそう言うことならお、お邪魔しようかな……」ガハア『うん♪楽しみにしてるよ、待ってるからね♪』

「お、おう、あまり期待しないようにな」

『フフフ、そんなに気にしなくて大丈夫だよ、それじゃあまたね』

「おう、お休み」

そう言つて通信を切るとリトルが

「良かったじゃん、パーティーに誘われて」

「ああ、自分でもビックリだよ。プレゼント……何がいいんだ？」

「それは自分で考えた方がいいんじゃない？」

「でもこれといったものないしなー、島の名産品？それとも資材？」

「うーん、資材でいいんじゃない、どうせ名産品なんて向こうじゃ何処でも手にはいるしね、だからと言って家の兵器なんて持ってたら此方の存在がバレるからね」

「そうだなー、そう考えると資材が無難だな」

「問題はどれくらい持っていくかだね」

「ん？そんなの一通りドラム缶一杯づつもっていけばいいんじゃないか？」

「えーまあ、ゴジラがいいならいいけど」

「あそこには色々世話してもらったからな恩返しにはなるだろう」

「そうだね、じゃあ早速準備しようか」

こうしてゴジラ達は鎮守府に向かう準備を始めた

――

――

――

――

――とある海域――

「モウソロソロアノ時期ガヤツテクル、コノ日ニナルト艦娘達ハ浮ワツイテ警戒ガ緩クナルラシイ、我々ハソノ日ニ合ワセテ、奴等ノ基地ニ奇襲ヲ仕掛ケルゾ!!」

「**「オー!!!」**」

「夕級様、ドウヤラ我々が奇襲ヲ行ウ日ヲ、クリスマスト読ンデルヨウデス」

「ホウ、ドウイツタ日ナノダ?」

「ナンデモ、ドコカノ神様ノ誕生日ヲ祝福スル日ノヨウデス」

「何?祝福ダト、フン、虫酸ガ走ル!!ソナ事ナラ尚更徹底的ニ奴等ヲ潰シテヤロウ、全艦用意セヨ我々ノ数ハ五百ヲ越エテイル、コノ圧倒的戦力デ奴等ヲ蹂躪スルノダ!!」

「**「オー!!!」**」

暗闇のなか蠢く深海棲艦達もクリスマスに向けて行動を開始した

――

――

――

――

――

――そしてクリスマス当日――

「何とか夜までには着きそうだな」

「そうだね、…でも、本当にこんなに資材持つてくの?」

「こんなにつて途中で上げてきた奴だから家には響かないだろう?」

「いや、まあそうなんだけど、うーん、まあいいか困るの私じゃないし

♪

そんな話をしながらゴジラ達は第09鎮守府に向かって進んでいった

「所でゴジラはクリスマスになんかあったの？」

その言葉にゴジラはビクツとする

「べ、別にナンモナイヨ」

「え、絶対嘘だー、教えてよー…ん？」

「やだよって、どうしたんだ」

「いや、深海棲艦の反応がこの先で出てるんだ、それもスゴイ数だよ」
「マジか！そんなに数揃えてくるってことは何処か攻めるつもりだな」

「この辺ならもう私達が行く、鎮守府しかないはずだよ！」

「ならここで何とかしないと、行くぞ!!」

「GO!GO!」

—————

—————

—————

—————

—————可哀そ……深海棲艦達 side—————

「サア時ハ来タ、今カラ動ケバ丁度夜二着ク、日ガ暮レタラ艦載機ヲダシテ、空爆ヲ行ウ、ソノ後我々ノ艦砲射撃ニヨツテ、奴等ヲ根絶ヤシニスルノダ!!」

「二オー——!!」

「何が祝い事ダ、クダラナイ我々ノ憎シミ奴等ニ思イ知ラセテヤルゾ!!」 ザザザ

「二オー——!!」

「サア全艦出撃ダー」 ザバアアアア

「二オツ!!」

「ン?ドウシタノダ才前達?変ナ掛ケ声ニナツテルゾ?ソンナニジツト此方ヲ見テ、モウ出撃ノ号令ハ出シタゾ……ナンダマダ私カラノ激励ガ欲シイノカ、欲シガリサンドモメ、シヨウガナイナー」 テレ

「イイカ、奴等ハ…「タ級様！タ級様！」…ナンダ今カラ言ウカラソ
ナニ急カスナ」

「ウシロ！ウシロ！」

「ン？後ロ？」クルリ

タ級が後ろを見るとすぐそこにゴジラがいた

「……………エ？」

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

固まるタ級にゴジラが至近距離からの咆哮浴びせた、それによりタ級は後方へと吹き飛ばされた、そしてその咆哮を皮切りに深海棲艦達がゴジラへの攻撃を開始するがいくら撃ってもゴジラには効かず、ゴジラは熱線を吐き深海棲艦を蹂躪していく

「ナ、ナンダコイツハワ、私ノ艦隊ハ？」

漸く起きたタ級は自分の艦隊の様子を見たが既に半数以上の艦隊がゴジラによつて壊滅していた

「ソナ、私ノ艦隊ガ…グウウウウ貴様ー！！！」

タ級が叫びながらゴジラに砲撃を開始するとそれに続き残った深海棲艦の艦隊が再び攻撃を開始した…がやはり先程と同じようにゴジラにはダメージが無くどんどん数が減っていき、そして

「ハア、ハア、ハアクソウ！ココマデ来テ、ココマデ来テーアアアアアアアアア…」

最後にタ級達はゴジラの熱線によつて消滅した

「ふう、終わった、終わった他に深海棲艦の反応は無いよな」

「うん、この辺りに反応は無くなったよ」

「そうか、それじゃあ鎮守府に向かうか」

そうして再びゴジラ達は鎮守府を目指すのだった

番外編 クリスマスだね (後編)

「……………鎮守府……………」

「こっちの飾りつけは終わったよー」

「解った、それじゃあ今度は外にテーブルを運ぶのを手伝ってやってくれ」

「了く解、初めてだね、外でのクリスマスパーティーなんて」

「まあそうだな、今回はゲストが大きすぎて建物の中には入れないからな」

「そうだね♪ゴジラも初めてのクリスマスパーティーだもん、驚かしてやろうー!」

「ふっそうだな、それじゃあ頼んだぞ」

「はーい!」

現在鎮守府ではゴジラが来ると言うことで外にパーティー会場を設置、飾り付けを施していた

「ねえ、料理とかもう運んでいいのー?」

「ふむ、もうすぐ日も暮れるしそろそろ良いだろう、机が用意できてる所から運んでくれ」

「了く解、皆ー料理もう運んでいいってー」

「二おー!」

「任せてください、大丈夫満身なんてしないから」

「ここは我々が鎧袖一触よ」

「あつー航戦のお二人は結構です、飾りつけの手伝いしててください」「えー!」

「さつき鳳翔さんに言われてお二人を料理に近づかせないようにと言われたので」

その言葉を聞いて二人は崩れ落ちる

「ぐふ、そんな…ターキー…が」バタ

「ぐっ…七面鳥の癖に!」バタ

「今誰か七面鳥って言った!!」

「いや…そんな所で寝転がらないでくださいよ、そもそもさつき料理

盗み食いしたお二人が悪いんですから、

それに始まったら皆で食べれるんですから」

「それもそうですね♪行きますよ加賀さん!!」グウ

「お腹が過ぎました」グウ

そう言つて二人はその場を離れていった

「はあ、あの人達もあれがなければなあ…」

—————食堂（戦場）—————

「間宮さん！こっちの料理できましたー」

「はい、じゃあできた順に出して行って！」

その日食堂は戦場と化していた、ゴジラが来ると決まってから今日まで食堂を任されている補給艦間宮は大量の料理の材料などの確保や下拵えなどに躍起になっていた

「間宮さんこっちのオードブル120個目できました！」

「間宮さん！お皿空いてるのありませんかー」

「間宮さん料理の仕上げ見てくださーい」

「間宮さん…」

「ちよ、ちよつと待つてくださーい……うーそんなにいっぺんに言われても何でこんなことに」グルグル

間宮はゴジラが来るからと色々を用意しようとしたがゴジラの大さを考えればそもそも量が足りないという事で、前日まで色々下拵えをしたはいいが料理に掛ける時間がなくなってしまったのだ、そして当日食堂は日が上る前からフル稼働しているが手が足りない状態が続いてるそして

「間宮さん♪ケーキのスポンジ200個目出来たー♪」

ゴジラに食べてもらおうと言つて駆逐艦の子達が朝からケーキのスポンジを焼き続けてオーブンが全て占領されてしまっているのである

「う、うまく焼けてるわねもうケーキ作りは完璧ね」

「うん、もっと焼いてゴジラに食べさすんだー♪」

「え！も、もう十分じゃないかな、ほら仕上げとかしないといけない

しく」

「えーでも皆で手分けして作ってるから大丈夫だよ！」

そう、しかも駆逐艦達は手分けしてケーキを作っているのだからこれと言った遅れは出ていない、スポンジが出来れば外に運ばれ待機していた他の子が次々と巨大ケーキに追加していく、そして疲れた子は別の子と交代して作っているのだから無理無く作れているのだ

(くう、無理に止めようにも説得するのに時間が掛かるしその間に料理を仕上げないと、どうすれば…一か八か！)

「うーんとそろそろ他の料理でもオーブン使いたいから半分オーブン使ってもいいかしら？」

「えっいいよ」

(よっしやー、これで何とかオーブンが確保できたわ！)

「そう、ありがとうそれじゃあこっちの空いてる方を…」おっそーい!!スポンジまだーもう仕上げ終わってるよーほらほらどんどん焼いてってー!」

そう言つて突如乱入して来た島風によって、空いているオーブンに用意してあったスポンジの容器を全て入れられ

「これ焼き上がってる奴だよねーじゃあ持つてくね♪」

そう言つて焼き上がったスポンジを持つてあつという間に居なくなつてしまった、それを見た間宮は

「グフウ」ガクリ

膝を落とし項垂れた

(くつまだよ、取りあえずは他の料理を仕上げないと、間宮の名に懸けて料理を完成させる!!)

そう決意を目に宿し今だ手を付けてない大量の食材がある厨房に目を向けるが

「間宮さーん、そろそろ始めたいのですが一端外に集まってもらつて良いですか」

提督が間宮を呼びに来た

「……………」シロメ

「間宮さん？」

「ふっふっふっふ」

「え、どうしたんですか？」

「これだけは使いたくなかった、出来るだけ手作りで皆には料理を食べて欲しかった、でももう時間がない妖精さん!!」スチャ

間宮が妖精を呼び間宮は保護マスクを付ける、そして妖精は間宮に巨大バーナーを渡した

「ちよっ間宮さん!!」

突然の事に提督は狼狽していると間宮は躊躇無く引き金を引いた

ゴバアアアアと音をだし間宮の放った炎が厨房に置いてあった材料を包んだ、そして数十秒後炎が収まるとそこには完成された料理が並んでいた

「……………え?、えー!ー! 高速建造材って料理にも使えたの!!」

提督と周りで手伝いをしていた艦娘が驚いているとガシヤンとバーナーを下ろした間宮はそのまま崩れ落ちた

「ちよ、間宮さん大丈夫ですか」

「うっ、うううう使ってしまった本当は使いたくなかったのに…」

「ま、まあ料理が出来たので良しとしましょうよ、ね」

「はい…」

「それじゃあ皆料理をもって外に集まってくれ」

そして料理を全部運び艦娘達が全員集まったところで提督による挨拶が行われ

「それじゃあ皆メリークリスマス!!」

「メリークリスマス!!」

クリスマスパーティーが始まった、しかしまだゴジラは姿を現せてはいなかった

「ゴジラ来ないねえどうしたんだろ?」

「うーん今日来れるって言ってたからもうすぐそこまで来ててもおかしくないんだけどね、通信してみる?」

「そうだねちよっつと連絡してみる。もしもーしゴジラーもしもーし

……………あれ?」

「どうしたの?」

「ゴジラからの応答がないの…」

「え!?!」

「どういうこと?」

「えつやばくない皆に知らせない!!」

まさかの以上事態にパニックになりそうになりながら誰かにこの事を知らせようとした時

~~~~~BGM~~~~~

BGMがなり始めた、するとかいめんが盛り上り

「メリークリスマース!!」

ゴジラが現れた、頭に乗っているサンタの格好をしたリトルがラジカセを持ちながら艦娘達に挨拶をする

「ホーホーホー、はいメリクリメリクリ皆お待たせーお招きありがとー」

「リトル、ゴジラもやっときたってゴジラの頭になんか付いてない」

そう言っってゴジラの頭を見るとゴジラからトナカイの角が取り付けられていた

「いや、まあ折角クリスマスパーティーに呼ばれたから仮装くらいしたらっってリトルが」テレ

「ああ、そう似合ってるんじゃないかなー」

「そうかありがとな」  
「う、うん所でゴジラ達が遅くなったのってその仮装してたからなの?」

「いや、来るときに深海棲艦の艦隊と鉢合わせてな、どうやらここを狙ってたみたいだったから潰してきた」

「ブーーーーー!!!ちよちよちよちよつと待つてその話!」

ゴジラに挨拶しようとして近づいてきた提督はその話を聞いて吹き出した

「う、うちを狙ってきてたって本当なの!」

「うん?この辺だと狙うとこっつていうとここしかないかなって」

「ま、マジか〜」ガクリ

「まあ全滅させたから問題ないだろ」

「いや、そういうことじゃなくてね」

「そう落ち込むなよ、プレゼントを持ってきたんだから」

ゴジラはそう言って自分に取り付けてあるドラム缶を陸にあげた、ドストドスンと音をたてて置かれた中には鋼材、弾薬、燃料、ボーキサイトが一杯に入っていた

「なあー！」パクパク

「こっこれは…どこで手に入れた」

「あー安心しろここに来る途中でとってきた資材だから一杯あっても困らないだろ！」グ

「あ、ああそうだなでもいきなりこんなに貰ってもああどう報告すればいいんだ」

「？まあいいや、他にもあるんだよ」

「まだあるのか!!」

「ありまーす」

そういうとサンタリトルは袋を出した

「はいはい皆並んで並んでー今からプレゼント配るから」

リトルのその呼び掛けに艦娘達は反応しリトルの前にならび始める

「はい皆並んだねー、じゃあこのゴジラ君人形かりトルキーホルダーのどちらか選んで持っててね」

「おー！かわいい、私ぬいぐるみ」

「私はキーホルダーー！」

「私はえーとえーとぬいぐるみで！」

こうしてゴジラ達は艦娘達にプレゼントを配り始めた

「アバババどうすんだよあの資材どう報告すればいい、どうしよう」

その後クリスマスパーティーは和やかに進み（一部心労）ゴジラも間宮や駆逐艦達の作ったケーキなどを食べて過ごした、勿論食べた後艦娘達に囲まれて色々とゲームをしてクリスマスパーティーは無事に終わった

そして提督の心労が深まった夜であった



## 明石失踪事件

ゴジラと第9鎮守府に滞在して数日がたった頃、人気の無い倉庫の中にリトルが居た

「ここなら大丈夫かな?」

そう言つてリトルが床に手を翳すと、手が光だしそこから小さい妖精が数人出てくる

「さあ皆今日から君達はここの鎮守府に潜入してもらおうよ。目的は明石を私達のいる島に来てもらつて少し手伝いをしてもらうこと。その為に君達には私が指示を出したら直ぐに明石を此方に運んでもらう為にこの鎮守府に潜んでいてほしいんだ、宜しくね♪」

リトルがそう言つたと妖精達は敬礼をして答えた

「あ、そうそうこの中の半分は大本営に向かつてくれる?理由は同じ理由で明石をゆつ……運んでもらう為だから頼んだよ」

リトルは其れだけ言つと倉庫の外へと出ていった。残された妖精は敬礼を解きバラバラに散つていった

### ――工場――

「ふう、これで今日の修理も終わりつと!」

作業場で明石は作業を終え一息ついた所で作業場に誰か入ってくる気配があつた

「ん?誰か来たんですか?」

だが返事は返つてこない

「あれ、気のせい?」

そう思い振り返つても誰もいなかった

「んー?ん!?!」 ペシペシ

自分の足を叩かれた感じがして足元を見ると其処には妖精達がいた

「よ、妖精さん達だったのか、ビックリしたなーどうしたんですかそんななに乗まつて?」

妖精達に問いかけると妖精達は紙とペンを取り出し

『新しく着任しました。宜しく願いますね』と書いて見せた

「あー、新しく来た子達ですか。珍しいですね挨拶に来るなんて」

その言葉を聞き少しあせった様子を見せる妖精達だが

「これから宜しく願いますね、頼りにしますよ♪」

そう言つて明石は妖精に挨拶を返した、挨拶を聞いた妖精達はホツとして敬礼をして見せた

「うーん。それじゃあどうしようかしら。いつもいつの間にか増えてたからこういう機械なんて滅多にないし、折角だから何かしたいんだけどな。うーん…」

明石は何か無いかと考えながら周りを見てみると、先程まで装備の整備や修理などしていた為作業場がかなり散らかった状態になっていた

「じゃ、じゃあちよつと片付けるの手伝ってもらえる…かな?」

明石がそう願いますと妖精達は敬礼をして周りに散つていった…のだが

「有り難うたすかつ…えっ!」

妖精達は工具や機材を片付ける為に散つていったが片付けを開始した妖精達は、あれよあれよ片付けていきものの数秒で片付けを終えた。

明石は片付けが終わった作業場を見て呆然とする

妖精達はまたもとの場所に戻っていた

「す、すごいあつという間に終わった。はあ〜!有難うございます!!助かりましたよ。改めて宜しく願いますね!!」

こうして第9鎮守府で妖精達は明石の信頼を得たのであった。

そして数日後、大本営でも

「あなた達が来てから大分作業が捗るようになりましたね。この調子でお願いしますよ♪」

大本営の明石も妖精の有能差に驚き、それから信頼を寄せるパートナーにまでなっていた

——それから暫くして——

## 第9 鎮守府

ピリリリリ、ピリリリリ、ピリリリリ、ピッ

工廠に電子音が走った

「誰ですか？ココではマナーモードにして下さいよー」

明石は作業しながら携帯の所有者に注意する。が、その後に謝罪などの言葉が聞こえてこなかった。明石は不審に思い作業を止め辺りを見渡すと妖精達が寄ってきた。

「あなた達誰か携帯もった人見なかった？」

妖精達は首を振る

「そう、まあいいか。さてと続き続きつと…ん？」クイクイ

明石が作業に戻ろうとすると、妖精の何人かがお茶やお茶菓子を持ってきた。それを見た明石は

「あれ、もう休憩の時間でしたっけ？。作業してたから気づかなかつた。うくんでももう少して終わるからこれ終わったらね」

そう言つて作業に戻ろうとする明石にお茶だけでもと進めてくる

妖精

「あ、ありがとう喉は乾いてたからちようど良かった。いただきます。ゴクゴクゴク…ぷはあー！美味しいありがとね♪

それじゃあ…作業に…もど…:zzz」パタン

お茶を飲んだ明石は眠つてしまい、倒れるのを妖精達が補助して寝かせた

明石が完全に寝てるのを確認した妖精は明石に機械を取り付け作動させる。

すると明石の上に大きな穴が開き明石を吸い込んでいった。そして妖精達は明石の居なくなった作業台の上に置き手紙を置いてその場を去っていった

「た、大変です提督!!」 バタン!

慌ただしく扉を開けはなち大淀が叫ぶ

「おわあ! な、なんだどうした!?!」

書類仕事をしていた提督は突然のことに驚き慌てる

「あ、明石が、明石が連れてかれました!!」

「……は?、はあ!! い、一体どこに誰が何のために!?!」

「それが…その」

「なんだよ言いよんどんで、まあ何であれ家の物に手え出してきたんだ。誰であろうがただじゃおかん!!」

至急救出艦隊を編成し明石奪還作戦を発令する。編成は…「提督!」なんだ! これから忙しくなるぞ!

「いえ、その明石を連れてったのはリトルさんみたいなんです」

大淀の発した人名? を聞いて提督は固まる

「……マジで?」

「マジです」

「何で解ったんだ?」

「置き手紙がありました、内容を読みます」

拜啓、鎮守府の皆様はお元気でしょうか。私とゴジラは日々自分達のすむ場所をより良くするために動いています。

さて、本題なのですがこの度私達が住んでる家をリフォームするためにそちらの明石さんの手伝いが必要となりました。誠に勝手な

がら少しの間明石さんをお借りします、3〜7日ほどでお返しできる  
と思うので宜しくお願いしますね♥？ 以上です。」

「はあく〜」ガツクシ

手紙を聞き終えた提督は予想外すぎる人物による犯行と解り頭を  
抱える

「無理だ、どうしようもない…」

「て、提督?」

「何処に居るかも解らない相手を探すのは無理だ(ヾノ・▽・)」

「で、ではどのようにしますか?」

「取り敢えず3〜7日には返してくれるっていつてるんだから其れま  
で待つしかないだろう」

「それじゃあ今ある明石への修理や改造の仕事は?」

「どーにもなりません。帰ってくるまで待つしかないだろ」

「!……はあ、そうですね」

「まあ帰ってきたらゴジラ達の住みかがどんな所かぐらいは聞いてみ  
よう。結構ゴジラの住んでるところがどんどこか気になってたし  
♪」

「まあそうですね、彼らが私たちを無下に扱うとも思えませんし。お  
土産話でも聞かせてもらいましょうか」

「ははははは」

「あはははは」

「ははははははは、ハア…」

こうして明石のことは諦めた第9鎮守府の提督だが、三日後に帰っ  
てきた明石は居なくなっていた時の記憶がなくゴジラ達の住みか  
については一切解らないままだったが明石はその日溜まっていた仕事を  
あつという終わらせていったそれを見た提督が

「あ、明石大丈夫か?無理してやってないか?」

「?いえ、無理どころかすこぶる体の調子が良くてどんどん仕事捌け  
るんですよ!不思議ですよなやっぱりゴジラの所に行ってたときに  
何かしてたのかな?」

「そ、そうか別に体に以上なければソレでいいんだ、うん」

「有難うございます。所で提督！」

「は、はい？」

「変形合体ってイイと思いません!!」

「は、な、何の話？」

「いえ、なんか無性に合体できる何かを作りたくて。どうしてでしょう、前までそんなに考えたことなかったのに？」

「まあ確かに引かれるが、何で変形合体？」

「さあ、何故でしょうか？」

「取り敢えず何か作るときは報告してから作ってくれよ」

「はくい！」

こうして明石失踪事件は幕を閉じたが、これとは別に大本営でも同じような事が起こっていたが其れはまた別の機会に

## 演習（狩）

メカゴジラが説明を終え、艦娘とゴジラの間が十分空いているのを確認してから

『はい、演習開始ー』

メカゴジラの合図によりゴジラ（昭和メカゴジラヘッド）は艦娘達に向かつていく

『XXXXXXXXXX』

いつものゴジラの鳴き声と違い戸惑う艦娘達

「ちよっ、何あのゴジラの頭の。鳴き声もいつもと違うし！」

「四の五の言っていないで距離を取るんだ！。ゴジラの攻撃範囲に入らないように動け！」

艦娘達はゴジラから距離を取り逃げるが、ある艦隊はゴジラに対して突撃をかけていった。

その艦隊とはゴジラと一番付き合いのある第九鎮守府の艦隊だった

「全艦ゴジラと間隔を開けて包囲しろ！、この戦いはゴジラと演習をしたことがある我々が前に出るしかない。それにあれから私達がどう成長したかゴジラに見せるいい機会だからな。他の艦隊が手を出して来る前終わらせるぞ！」

そう、第九鎮守府の艦隊は一時期ゴジラが滞在してたときに何度か演習を行っていたのでこういった場面慣れていた……が、

艦隊がゴジラを包囲しようと展開中ゴジラの背鰭が光熱線が飛んで来て艦隊の一部を薙ぎ払った。その光景を目の当たりにした第九鎮守府の艦隊は動きを止めてしまった。

「……えっ？ちよっと待って、演習でしょ。なんで熱戦を吐いたの。え？……皆は？」

そう言つて熱線で薙ぎ払われた仲間の方へと全員が顔を向けると

ポポポポポン

と音がなりよく見ると無傷の艦娘の影が見えた。が、艦娘の頭の上に白旗が靡いているのが解った。熱線を食らった艦娘は訳が解らな

い様子で

「え、何が起きたの？」

と、周りに確認しているどうやら他の艦むすも無事のようにですホツとする長門や川内達。だがホツするのもつかの間ゴジラは更に艦隊に詰め寄ってくる

「えっちよつと待って!!熱線もありなの!!」

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX!」(もちろん、ありです!)

ゴジラは意気揚々と熱線を吐きアピールする。それを見て先程はまでとは打って変わって第九鎮守府の艦隊は

「こんなの明らかに勝ち目ないじゃんかー!!」

そう言ってゴジラから距離を取ろうとするも自分達から距離を詰めてしまったので、ゴジラは安全だと解っているせいもあり容赦なく熱線を艦娘達に吐いていった

「うわああああー!!」「ポポポポポン」

熱線を食べらった艦娘は白旗が出て放心状態になりその場で座り込むそんな艦娘をメカゴジラが

『はい、白旗がでて脱落した人はこっちですよー♪』

そう言って回収していった、そんな中

「うわああああー!!」

とうとう長門までが熱戦の餌食になってしまった。長門は座り込みその場から動かなくなってしまったのをメカゴジラが回収する

『流石ビックセブン結構持ちましたね』

「……………」

『あれ、気を失ってるのかな?』

「ひ、光…が。」ブクブクブク

『な、なんか思い出しちゃったのかな? ま、まあ気絶してるみたいだし大丈夫かな?』

何かを思い出しちゃったかもしれない長門を回収

そしてそのゴジラは

「XXXXXXXXXXXXX!」(ちよつと楽しくなってきた)

徐々にテンションを上げていた



そして、あつという間に第九鎮守府の最後の艦隊となってしまうた川内、神通、那珂、天龍、龍田、そして第六の暁、響、雷、電、ぶつちやけゴジラが意図的に残していた艦娘達、そのメンバーに一応ゴジラは少し躊躇しながらも熱線を吐いた、その間に

「ゴジラのバカーー!!」

「くう!!」

「きやあああ!!」

「ちったあ手加減してくれてもいいだろー!!」

「これが手加減じゃないのかな」

「ぴやああああ」ジヨツ!

«Ослепительно»

「うひやあああ」

「なのですー!!」

「(。(。ド)チーーン」

熱線を吐き終えたゴジラは複雑な気分のまま残りの艦隊の相手をしてしに行くのであつた

—————  
—————  
—————

———

「第九の連中がやられたぞ!!」

「けどお陰で距離を取ることができたわ。空母は艦載機を発艦させてください!!」

残った艦隊は第九のお陰で距離を取ることができ空母から攻撃機を発艦させることに成功した

「よし!!攻撃開始!!」

号令によりゴジラに対して本格的に攻撃を開始した(なおここまで誰も実弾を使っていることに対して誰も疑問思っていない)

「(来いや、カラーー!!)」

ゴジラは雄叫びを上げ攻撃機を迎撃するが、流石に空母中心に組まれた艦隊だけあつて数が多く時間がかかっていた。その間に艦娘

達は

「よし、ゴジラが航空機に気を取られてるうちに距離を保ったまま砲撃をくわれえるんだ！」

なんとかダメージを与えようと奮闘するが距離を開けすぎていたため砲弾が届かない艦娘も出ていた

「うー、ここからじゃ届かないっぴよん。もっと近づかないと当てられないっぴよん！ 弥生、うーちゃん達はもっと近づいて攻撃するっぴよん」

「えっ!? ちょっと、まずいよ。ここからでも牽制にはなるんだからここにいよ。…ちょっと、引つ張らないで」

一部の艦娘が前にでると言って前進する

「おい、お前ら勝手に前に出るな！、今は耐えて機会を見るんだ」

「大丈夫だぴよん。今はゴジラは攻撃機に夢中で今のうちに近づけば気づかれないっぴよん。睦月型の本気を…ゴバァァァ

前に出てきていた駆逐艦達にゴジラの熱戦が襲う

「うわあ！ 駆逐艦がゴジラの攻撃に巻き込まれたぞ!!」

水しぶきの中から出てきた駆逐艦達は頭から白旗をなびかせながら立っていた

「う、うぴよー、し、死ぬかと思った。…ぴよん」

「あわわわ、私死んでないよね大丈夫だよね！」

自分が無事が確認している駆逐艦達にメカゴジラが

『はーい、白旗だった人たちはこっちに来てねー、邪魔になっちゃうから』

その言葉を聞き移動を開始する駆逐艦達だが。ゴジラの近くを通るときに

「ね、ね、弥生」

「何、卯月」

「今ならゴジラの頭に乗れそうじゃない？」

「はあ！、何を言ってるの？」

「いいからいいから行って見るっぴよん」グイグイ

「ちよ、卯月！、駄目だから押さないでよー!!」

「くそ、もう航空機が落とされたのか!」

「これからどうしますか?」

「……………もう、取り敢えず引き撃ちするしかない?」

「……………確かに」

「取り敢えずやれることと言ったらこれくらいだし。後はどうしたらいいか解んないわよ」

「おーい!」

「ん?」

「おーい!」

「どこからか声がしない?」

「確かに、でもどこから?」

「おーい!!」

「ちよつと皆ゴジラの頭の上見て!!」

そう言つて残つた艦隊はゴジラ（昭和メカゴジラ）の頭の上に違和感を感じた。そこには

「やつと気づいたつぴよん。おーいここだつぴよーん」

「あわわわわ!!」

ゴジラの頭の上には既に脱落したはずの駆逐艦乗っていた

「~~XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX~~」(ちよ、お前らなにやってるんだよ!!)

「うーちゃん達はここで見学することにしたつぴよん」

「~~XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX~~」(はあ! 見学だと!?)

「何言ってるか解らないぴよん。けどきつといいよつて言ってるに決まってるつぴよん。ありがとゴジラ!」

「違うと思う、早く降りよう。ここは危ないよ」

「~~XXXXXXXXXXXX~~」(そうだ早く降りろ)

「ほら、ゴジラは大丈夫だつて言ってるぴよん。なんかあつても守つ

「てやるって言ってるぴよん」

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」(言ってるねー!!)

「言ってるないこの感じは絶対言ってるないよ！ 降りよ、ね。」

卯月はゴジラの言葉が解らないのをいい事にゴジラの頭を占領し、弥生はそんな卯月をなんとか下に降ろそうと孤軍奮闘するが説得は失敗し、弥生自身もゴジラの頭から降りられなくなっていた

「さあ、ゴジラ。残ってるのはあそこにいる艦娘だけっぴよん。一思いに一気に薙ぎ払うっぴよん」

「ちよ、何言ってるの卯月！」

「えっ？ だって本当にあそこにいるので終わりっぴよん。さっさと終わらせてゴジラの家遊びに行っくっぴよん」

「……………」(や、やりずれー)

「……………」絶句

「さあ行くっぴよんゴジラ!!」

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」(もう、ヤケクソだー)

卯月の合図でゴジラは戦闘を再開する

「きゃー！ コラ、卯月あんたたちねー！」

生存組の艦娘達から卯月達にヘイトが高まっていく

「ぶっぶくぶー。今ならこっち(ゴジラ)の圧勝っぴよん。さあどんどん行くっぴよんよー」

卯月の指示で(聞いてない)ゴジラはどんどん残りの艦娘達を追い込んでいく

「そうっぴよん。そっちに追い込むっぴよん」

「ちよっと、卯月落ち着いて、お願いだから静かにしてて」

そして

「う、うわああああ!!!」

最後の艦娘がゴジラの光線によって白旗を上げた。

「はあ、楽しかったぴよん」ツヤツヤ

「……………はあ、」ゲッソリ

「ふう、終わったか」仮面取りーの

「お前ら終わったんだから早く降りろよ」

「あっはい、解りました。でもちよっと高いので海面に近づいてくる  
と助かります」

「あいよ、解った」

そう言つてゴジラは卯月と弥生を下ろすために顔を海面に近づける………がそこには最後まで戦っていた艦娘達が集まっていた

「うゝづゝきゝゝ、きさまゝゝ！」

「げっ!? やばいつびよん、ゴジラうーちゃんはこのまま頭に乗った  
まま移動するから早く立ち上がるつびよん」

そう言つてゴジラに立つように言いますが

「卯月」

「?なんだつびよん?」

「ギルティー！」

「びよん!!」

ゴジラは卯月を下で待つ艦娘達の真ん中に下ろしてあげた

「うゝゝづゝーきゝー、覚悟はできてるんだろうなく」ニッコリ

「う、ううう、我が人生に一変の悔い無し!!」

「うびゃー………!!!」

『さ、終わったんで皆さん私に付いてきてください。気を失ってる子は私が連れて行くので渡してくださいねー、ではこちらでーす』

こうして急に始まった演習はゴジラの圧勝となり一人の駆逐艦の悲鳴が木霊した。そしてゴジラも

「なんの躊躇もなく熱戦はいてきたよね」

「いや、あれは当たっても大丈夫なやつだから」

「でも怖かったです!」

「死んだかと思いました」

「う、ぐう、す、すいませんでした」

などとちよつと責められながらも無事に演習も終わりゴジラとメカゴジラはバース島へと艦娘達を招待したのであった。

????

——ワタシハ ドコニイルンダ?——

——コノヒカツテイルノハ ナニ?——

——ホシ? マワリヲミテモ オナジヨウナ ケシキダ——

——ワタシハ ナゼコンナトコロニイルノダ——

——オモイダセ オモイダセ ワタシハ イツタイ——

——……………ソウダ ワタシハ アノトキ…!!——

ガ、ガアアアアアアアアアア

——ソウダ、ワタシハ ウラギラレタ——

ダレニ

——アイツニ ワタシトオナジ シンカイノ ヒメニ——

——ワタシハ ナカマジャ ナカッタ——

ダレノ

——アイツ ゴジラノ——

——ワタシノコトハ タスケテクレナカッタ——

——ワタシニハ ナカマガイナカッタ——

——ウラメシイ ウラメシイ ウラメシイ——

——ナゼアノトキ タスケテクレナカッタ——

——ナゼアノトキ ナカマニナツテクレナカッタ——

——ウラメシイ ウラメシイ ウラメシイ——

.....

—————

—————

—————

—————

—————

だが今のワタシには何も出来ない。ただ漂っているだけ。目的もなく出来ることもなく漂っている、周りには星の海、音もなく。ただただ静かだった

どれぐらいだったか解らないがなんとなくここが宇宙であると思える位には長く漂っている。

そして自分のどこかでこうしてるのも悪くはないかもと思いはじめていた……が、そうは行かないらしい、先の方で黒くて丸い渦が発生して、そちらにどんどん吸い寄せられていつている。自分ではどうしようもない。あーあ

——怨メシイナ——

その言葉は音とはならずには自分は渦のなかに引き込まれていく、また暗く、暗く。海の底のように深く、深く……。



とある深海棲艦基地内部

「姫様、最近艦娘達ノ行動ガ活発化シテイルヨウデス。近々ドコカニ攻勢ヲカケル可能性ガアリマス、ドノヨウニイタシマショウカ」

「ウゥン、ソウネ。マアココハマダマダ安全ダケド。警戒ハ強化シトイテ、ソレト順海ルートカラノ報告ヲ頻繁ニスルヨウニ。後ハ」

「……アノ、姫様少シヨロシイデショウカ」

「ナニ？」

「アノ姫A様達ハドコニ配置スル予定デショウカ？」

「シナイヨ。」

「……ハ？」

「ダカラ配置シナイヨ。アンナ疫病姫ナンテ配置シタラコツチガ迷惑ダカラネ」

「デハ！」

「ウン、マア無駄飯喰ライニナルケド何モサセル気ナイカラ安心シテイイヨ♪」

「ソウデスカ、安心シマシタ。シカシドウスルノデスカ？」

「ドウツテイワレテモネ、私モ困ツテルンダケド……」

「ス、スイマセン」

「アイツノ居ル所ハ必ず災イガオキテル、ココモモシカシタ……」

「チヨ、姫様ヤメテクダサイヨ！」

「アハハハ、ゴメンゴメン。デモ何が起コルカ解ラナイ警戒ハシトキナサイ。ソレトアイツノ監視モシツカリネ、クレグレモナニモサセナイヨウニネ」

「ハッ！了解シマシタ」

「チョット！イツマデココニ入レオクキヨ！ココカラ出シナサイヨ！！」ドンドン

姫Aはビオランテから逃げ延びた先の基地で以前の自分の仲間を使った実験の数々を密告され現在隔離されている

「クソ！隔離スルナラセメテ研究室ニシテヨネ、気ガ利カナイワネ！」ガン！

姫Aがヤケクソとばかりに扉を蹴飛ばすと扉が開いた  
「！」

「チョット！アンマリ乱暴ニシナイデヨ、壊レルジヤナイ！！」

「ダツタラサツサトココカラ出シナサイヨ！」

「アンタ、ナンデココニ入レラレルカ解ツテナイノ？」

「解ツテナイノハアンタ達ノ方ヨ、イイカラサツサトココカラ出シナサイ。モシクハ姫ニ会ワスカ連レテキナサイヨ！」

後ナンデアンタ下ツパノクセニ姫級ノ私ニタメ語ナノヨ！！」

「アーモウ、ウルサイシ注文モ多イシ、全部ダメダシ！」

後私ハ下ツパジヤナイ！ココノ副官ヲヤツテルンダゾ、アンタト話ス為ニ来タノニナンダソノ態度ハ！」

「ハ？アンタガ副官マアイイワサツサト出シナサイヨ」

「クツコイツ：マアいい私モサツサト終ワラセタイカラナ。イイカ、才前ニハ我々ノ基地一ヶ所ヲ艦娘ニ、モウ一ヶ所ヲ自分ノ実験デ破壊シ更ニ自分ノ部下モ全滅サセタ罪ガ掛カツテイル。ソノ事ニツイテ詳シク話セ」

「詳シクモ何モ報告書ハダシタデシヨ、マアソノ後直グニコンナ部屋ニ入レラレタカラ話タクテモ話セナカツタケドネ！」

「ウルサイ、サツサト話セ」

「チツ、イイコレガ話終ワツタラ私ヲ解放シナサイ、コンナ事デ時間ヲ潰シテル暇ハ無いノ」

「ソレハ私ガ決メル事ジヤナイ。イイカラ話セ」

そして姫Aは副官にエビラに襲われた事とその対処法、艦娘と共に攻めてきたゴジラの事とその強さ、そのゴジラから取れた血液を使った深海棲艦の強化実験、その実験での暴走と姫Bの最後を話した  
「コレデ全部ヨ、私ハアノ時止メタ、ソレヲ聞カナカツタカラ姫Bハ死ンダンダ。」

私ノ忠告ヲ聞カナイト今度ハ、オ前達ガ同ジ運命ヲタドルゾ」

「……ソノ忠告ヲ聞クカドウカハ我々ノ姫ガ決メル。オ前ハココニ居レバイイ……開ケロ」

そう言うと扉が開き副官が出ていく

「必ズヨ……」

「？」

「必ズアంతタ達ハ私ヲ必要トスル。必ズネ！」

「……閉メロ」

そうして閉まっていく扉の隙間から見た姫Aの顔は酷く歪んだ笑い顔だった

## 深海棲艦 Sid

カチャカチャと暗い部屋に響くタイピング音、そのタイピングをしているのは深海の姫である。

・は真つ暗にした部屋で唯一光が点った画面を見ながら文字を打ち続けている、そこへ。

〈カチ〉、とスイツチの音とともに部屋が明るくなりその部屋に数人の深海棲艦達が入ってきた。

「ソレデ、姫。進捗ハドウ？」

そうやって・に話し掛けたのはこの泊地を収める空母棲姫

「進捗、順チョー順チョー」

そういう姫・は空母棲姫を見ずに言う、そのことが気に障ったのか空母棲姫がつめる

「アンタガー・アノ化物ノ対処法ガ解ツタツテイウカラ、コウヤツテ牢屋カラダシテ自由ニシテヤツテルンダ！。ソレナノニイマダニソノ対処法トヤラハ隠シタママダナンテ。本当ハアリマセンデシタツテイウナラ今ノウチダゾ！」

「ク、…」

「…ク？」

「クハハハハハハ!!」

「ナ、ナニガオカシイ!!」

「ハハハハハ、イヤゴメンナサイ。イマダニアレヲ化物ヨビダトハ思ワナカッタカラ、イーイ、アノ化物ノ呼びは怪獣、ソシテ私達ガ倒ソウトシテイル黒イ怪獣ノ名ハ：ゴジラ！」

「怪獣、ゴジラ？」

「ソウソレガ奴ラノ名前、アイツ、ゴジラニ対応デキルモノヲ作クロウトシタワ：最初ハゴジラノ細胞ダケデ、デモウマク行カナカッタ、次ニヤツノ細胞と我々深海棲艦に融合サセテミタ。

結果ハ失敗シ私ハ2ツモ基地ヲ失ツタワ：大事ナ友人モ。デモ解ツタノヨ私ノ作りタカッタノハコンナノデハナイト、アンナ訳ノ解ラナクテ制御出来無イ者ジャナイ。

私達ガ欲シイノハ我々ノ命令ヲ聞キ従順ナル怪獣…ソウダト思モ  
ワナイ?」

「確カニソシナ怪獣ガ我々ノ側ニイテクレレバ心強イガ…ソシナ怪獣  
イルノカ?」

空母棲姫の間に姫・は『ニツ』と笑う

「イルトモ、イヤ正確ニハ作クルノサ我々ノ我々ダケノ怪獣ヲナ!」

「ナツ!出来ルノカソシナコトガ!!」

空母棲姫の言葉に姫・は笑いながら

「…もう作つてある」

いうと同時に先程までいじつてたキーボードのエンターキーをお  
押した

カシヤ、カシヤ、

音ともに照明が部屋の真ん中にあるものを映し出した

「?!ナツ、コレハ…」

それを見て空母棲姫は絶句する、そこには自分たち深海棲艦を生み  
出す装置が置いてあった、だがおいてある事自体は問題ない大きさ以  
外は…そこには巨大な建造機が置かれてあり、そして中には巨大な何  
かが入っていた

「ドウ驚イタデシヨ?」

空母棲姫は

「コ、コレハ一体何ナンダ!!」

「言ツタデシヨ怪獣ヲ作ルツテ、私ハ思ツタノヨ私達ト同ジ方法怪獣  
作レバ少ナクテモ私達ノ命令ニハ従ウハズダツテ。

ダカラワタシハ今マデ集メタゴジラノデータヲツカツテ深海棲艦  
怪獣ヲ設計シタノヨ、ソシテモウスグ…《ピーー》イヤ今完成シタワ。  
さあ!出テキナサイ深海怪獣ガイガン!!」

「!!」

「……………」

「……………」

「何モオコラナイガ？」

「チョットマツテネ！アツレーコレデイイハズナンダケドナ。

アレーエツトー」

姫・は設計図などをパラパラと見ていく、そして

「エツ！音声認識？私ソンナコトシタ覚エナインダケド…エツコレガ  
パスワード…」

そして戻ってきた姫・は

「ガイガン起動ー！ー！！」

その姫・の叫びとともに建造機に入っていたガイガンの目が光、外  
に出てくる、そして両腕を使いポーズを取ると

「??、??」 シャキーン

ガイガンは雄叫びを上げ更にポーズを変えてドヤ顔をするが

「ネ、ネエ彼女？ハ一体何ヲシテイルンダ？」

「!!、??ー??ー!!」 シャキーン

「エツ!?ナンカイツテルンデスケド」

空母棲姫は必死に何かを伝えようとしているガイガンを見て姫・  
に問い掛ける

「エツ？ア、アアソウダツタ言語ノ共通化シテナカツタワネ。チョツ  
ト待ツテテ」

そう言つてコンソールを動かし色々と設定していくすると

「いに？より??ムリカラ??めた？コノワレガキタカラニハも？心配は  
ない！さあ共？艦むすたちに地獄を見せてやりましょうぞ！」

「オオ、ナンカ少シズツ何言ツテルカワカツテキタゾ！」

「オ、！調整デキタカナ、オイガイガンモウ一度言ツテミロ」  
「御意」

「へっ?ギョイ?」

ガイガンはもう一度ポーズを決め

「古の封印の眠りから目覚めたこの我が来たからにはもう何も心配はない!さあ共に艦むす達に地獄を見せてやりましょうぞ!!」シヤキーン

「オオ!頼モシイジヤナイ!コレナラ問題無クイケソウネ」

そう言つて空母棲姫は姫・の方を振り向くと

「アレ!ナンカオカシイ、コンナノハ入レタ覚エナカッタハズダケド。ウゝン……マアイイカ。

ドウヨ空母棲姫、ナカナカノモノデシヨウコレデコレカラノ進行ハ楽ニナルハズヨ。マアマダ試験ガ残ツテイルカラスグニハ出セナイケドネ」ドヤア

「ソウネ、確カニガイガンガ使エルヨウニナレバソウイツタ作戦モ楽ナルデシヨウネ。

デモ試験ノ前ニ先ズヤラナイトイケナイコトガアルンジヤナイノ?」

「?ヤラナイトイケナイ事?、何カアツタカシラ?」

空母棲姫の質問に答えられない姫・そんな彼女を見て空母棲姫は

「本当ニワカラナイノ?」

「エエコレトイツテガイガンノ評価試験ヨリ大事ナ事ハナイワヨ」

それを聞いて少し照れるガイガンだったが空母棲姫が

「姫・貴方ドコカラコノガイガンヲ外ニ出スツモリナノ?」

その質問に対して姫・は

「ソンナノソコノ扉ヲトオツテ……アッ!」

「ヤット気ツイタヨウネコノ建造室ノドコ見タツテコンナ大キナ怪獣ヲ出セルトコロナンテナイジヤナイ!」

「ソウダツタワ、研究ト建造デソツチニ頭ガ回ラナカッタワ……ズーン  
そう言つて落ち込む姫・

「ソレデ?」

「ソレデツテ?」

「ダカラ!ガイガンハドウヤツテ外出スノヨ?」

「エツト…穴ヲ掘ツテ？」

「ドツチニ？」

「エツ？ソノ上ニ向カツテカシラ」

「ソツ、解ツタワ暇シテソウナヤツ集メテサツサト掘リマシヨウ」

「エツ！イイノ？」

「アタリマエデシヨ、黙ツテヤラレテ崩壊シタラモット大変ダシネ」

「空母棲姫…」トウンク

「ジャ、頑張ツテヤリナサイヨ。ソレジャ」

そう言つて立ち去る空母棲姫

「チヨチヨチヨットマツテ、アナタも手伝ツテクレルンジャナイノ？」

立ち去ろうとする空母棲姫を止める姫・

「エツナンデ私ガ手伝ワナイトイケナイノヨ、私ハココノ司令官。  
トップナノヨ人手ハカシテヤルンダカラ頑張ンナサイヨ」

そう言つて今度こそ空母棲姫は出ていった、残された姫・とガイガ  
ンとその他は

「ジャ、ジャアトリアエズ穴掘リシマスカ？」

「ソ、ソウダナ」

「マ、マアガイガンニ任セレバ問題ナイシナ」

「えっ？」

「エツ？」

「一緒に掘つてくれるんじゃないんですか!？」

「ハ、ハア！、ワ、ワタシハ姫級デオマエノ生ミノ親ダゾソナコトス  
ルハズナイジャナイカ！」

「ええ！じゃあ誰が掘るところ指示出してくれるのだ！」

「ソナノアタナガ考エナサイヨネ」

「そんな…」

ギヤーギヤーギヤーギヤー

ギヤーギヤーギヤーギヤー

そうして言い合つてる二人だったが不意に部屋の扉が開いた

ウィーン



「スイマセン、コチラノ手伝イヲシロト命令サレタノデスガ…」

そこには数人の深海棲艦が来ていた

「エ、アア、ゴクロウサマ早速ダケドソコノガイガンと一緒に地上ニ通  
ジル通路ヲ掘ツテチヨウダイ」

「解リマシタ：因ドコヲ掘レバイイノデシヨウカ？」

「：クツ、ソノアノヘンカラ上ニ掘ツトイテチヨウダイ」

姫・は適当に指を指し掘る場所を指定した

「私ハ他ニモヤルコトガアルカラソツチハヨロシクネ」

「!!」

「ワカリマシタ」

そう言うのと部下の深海棲艦がガイガンのところへ行き挨拶をする

「ワタシハ重巡ネ級ダ、ヨロシク頼ム」

「あつ、どうもよろしく…いや今から我とソナタ等は私の仲間だとも  
に頑張つていこ…う…では、……」

「??:ドウシタノダ？」

「か、…」

「カ？」

「カッコいいではないか！何その眼帯超好みなのだが。わ、我にも同  
じものを貰えないだろうか」ソワソワ

「エ、エエ？ソレハ、マアイイケドマズガイガンニ合ウ物ヲ用意シナイ  
トダメダゾ」

「む、確かに…でもいま欲しい。一体どうすれば…」

「エエト、トリアエズ穴掘マセンガイガンサンガ掘ツテル間ニ良サソ  
ウナモノミツケトキマスカラ。」アセアセ

「そうか？なら張り切つて掘らなければならぬな！」

そう言うのとガイガンは壁際に立ち、ポーズを取る、そして

「ハァー！、ギルティシザーズ!!」ガリガリガリ

両手のハンマーハイドを振り回して穴を掘っていく、更に

「おりゃーブラッディカッター」ガリガリガリ

と言いながら腹部の回転カッターを回していく

「そしてこれがレッドムーンレーザー!!」ビィー

そして額から光線を出して岩を砕いていく

それを見ていた深海棲艦達は、

「コレ、私達イルカ?……」

「ト、トリアエズ砕イタ岩トカ邪魔ニナラナイヨウニ片付テオコウヨ」

「エ、ア、アアソウダナ」

そうしてガイガンと深海棲艦達の工事は順調に進み

ガラ

ガラ

ガラ

「お、おお!!とうとう地上出ましたよ!!」

「ヤリマシタネ!ガイガンサンノオカゲデアットイ間ニ開通スルコト  
ガデキマシタヨ!!」

バンザイー      バンザイー

「バンザイー!……トソウダガイガンサン」

「ん、どうしました?……いやどうしたのだ?」

「屈ンデクダイ」

「えっ?はい」

そう言うとガイガンは屈むと

「オイコツチダ」

と何人かの深海棲艦がやってきてガイガンの頭に飛び乗る

「えっ?ちよつとなにをー!」

いきなりのことに困惑するが

「大丈夫デスヨ。少シジツトシテテクダサイ」

「う……解った」

そうやってじつとしていると目の前が暗くなった

「アー、ヤツパリソウヤナツチャウカ左側ヲアゲテミテクレ」

そう言われた直後に

ガイガンの左だけ見えるようになった

「え？これは一体何なんですか？」

「眼帯欲シイッテ言ッテマシタヨネ、ダカラ、ブレゼントデス」

そう言つて鏡にガイガンを写すとガイガンの頭には額を半分隠す黒い布が巻かれていた

「お、おお!!ありがとうございます、ありがとうございます!!うおおおおお、やったー!!」

そう言いながらガイガンは地上ではしゃいでいた

「ハーハッハッハ、これで我も深淵が覗けるようになるぞー」

(おそろいになった!!)

それを見ていた深海棲艦が達には級が

「ナ、ナア…皆カラ私ッテアンナフウニ見ラレテタノ？」

「……………イヤ、マア」メソラシー

「アソコマデデハナイケド……………ネ」メソラシー

「マア格好ナンテミンナ違ウカラ」メソラシー

「……………ソウカ」ズーン

「アンタ達何ヤツテルノヨ?。穴掘リハ終ワツタラモウ地上ニデレルデシヨ。モウココヲ発進場所ニスルカラ周リヲ整備スルワヨ。ソシテソレガ終レバ。ガイガンノテストヲスルワ。」

サア!、サツサト動クノヨ!

姫・により指示を受けた深海棲艦達はガイガンの掘った穴を整備し始めていく、その様子を見て姫・は

「穴ヲ掘ル速度、岩ヲ砕イタレーザーノ威力、両腕ノ鎌ノ攻撃力、ドレモ申シ分ナカッタ。アトハ防御面、コノ調子ジャ大丈夫ダト思ウケド、コレガ成功スレバトウトウ我ラハ怪獣ニタイシテ對抗スル手段ヲ手ニ入レラレル。フフフソウスレバ艦むすハモチロンアノゴジラトカイウ怪獣ニダツテ…フフフ、アハハハ、アーハッハッハッハッ」  
そうして姫・の笑い声はあたりに反響して基地全体に響いていた

「ちよー、なんかあの人急に笑いだしたんですけど大丈夫なんですか？」

「アー、マアイツモノコトダカラソノウチナレルヨ」

「ほく、私の生みの親にしては可哀想な部分もあるんだな。

……優しくしよ」

「三」才前ガソレヲ言ウノカ!!」三

## 本編

### 1話

「…なんなんだよこいつは」

敵の艦載機が海に落ち海面が燃え上がる海上で軽巡洋艦天龍は頭上を見上げ呟いた、そこには黒く巨大な生物がたたずんでいた。

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」と咆哮をあげる生物を天龍達は見上げることしかできないでいた……

…そして少し前の別世界そこには丁度車に轢かれて死んだ若者がいた、そして今現在若者が居るのは白い空間で目の前に白髪の老人が立っていた。

「テンプレすぎんだろー！ー！ー！！！」

「まあ、そう言うなよその調子じゃわしが神なのも解ってるじゃろ、お主は死んだからとりあえず転生させるからなんか要望あるかの？」

「イヤイヤイヤ説明雑すぎんだろ、もつとなんか説明とかないんですかね！」

いきなり神とか言う老人が転生させるからとかぬかしてきやがった確かに転生ものは好きだが自分がそうなるといういろいろと困る

「え〜めんどいの〜」

えっ！めんどい、めんどいとかぬかしたぞこの神うわーなんか殴りたくなってきたー

「まあまあ落ち着けてジョークだからゴッドジョーク実はのお主が死んだとき……丁度死者数がキリ番だったんでな、なんか特典をあげようと思ったんじゃよ」

えーなにそれどんな反応すればいいの喜んでいいのか解んねーよキリ番だからとかどつかの商店街とかスーパーののりじゃんまあ転生できるから喜んでもいいのか…腑に落ちねえ!!!

「あー要望って何でもいいのか？」

「まあ基本的にはなんでもいいぞい」

んー何でもいいのか、どうしようかなーやっぱり艦これの世界とか行きたいしなーでも提督とかで指示だしとかできないし艦息になってもなあー…なら

「艦これの世界にゴジラとして転生したい!!」

「うむ、艦これでゴジラ…ゴジラ!!艦これの世界で？提督とか艦息とかじゃなくて？」

「いやー俺艦娘とは仲良くしたいけど指示だしとか無理だし戦うのも連携とかできないそうだから、それなら昔から好きだったゴジラとして転生したいなあーと」

「まあお主がいいならいいんじやがでは転生させるぞ」

「あつてもなんか意思疎通できる方法も欲しい!」

「うむ、解つた。では今度こそ転生させるぞ」ペカー

こうして俺は艦これの世界にゴジラとして転生することになった

「……………とある海域……………」

「オラ、へばるんじやねーぞお前ら、追い付かれるぞ」

「皆！救援要請は出したから諦めないでねえ」

「当然よ、諦めるなんてレディのする事じゃないわ」

「その通りだよ」

「まだまだ全然大丈夫なんだから!」

「頑張るのです!!」

現在天龍、龍田、暁、響、雷、電の遠征艦隊は大量の深海棲艦の艦隊に追われているその数は百隻超えていた。

「くそ、何だつてこんなところに敵の大艦隊がいやがんだ…うわあ!!」

天龍が悪態をついた瞬間近くで爆発が起きた砲撃の音がしなかったので天龍は空を見上げ舌打ちしながら叫んだ

「敵の艦載機だ、皆輪陣形をとれ対空射撃開始!」

「…了解…」

艦隊は防御体制を取ったが敵の空爆は激しくなる一方だった

「くっ！撃つても撃つてもキリがないね」

「このままだと追いつかれちゃうのです!!」

「きゃあ！もう痛いじゃない」

「天龍ちゃん、このままだともう…」

龍田が何か言おうとした瞬間また近くで爆発が起きた今度は遅れてドオンと砲撃音が聞こえてきた。

「くそ、追いついて来やがった!」

そう敵艦隊の射程距離に入ってしまったのだ今度は空爆に砲撃が加わり先程よりも激しい攻撃が天龍達を襲った

「もうダメ、耐えられない!」

「くっ!!」

「押さえられない!」

「もうダメ!」

「イヤー!!!」

「ちくしょう、ここまでかよ…」

敵の艦載機は天龍達に止めを指すため爆弾を落とそうと近づこうとしたその時、海が光り青白い光の線が弧を描き上空に伸びて行った、そしてその光に巻き込まれた敵の攻撃機は爆発し海面に墜ちていった。

天龍達、深海棲艦達は何が起きたか解らず攻撃が止み光が出てきた海面を見ていた、すると海面が盛り上がり何か黒く巨大な怪物が姿を現した。

「XXXXXXXXXXXXXXXX」怪物が咆哮をあげる

「なんなんだよこいつは…」

「……………時間は少し遡り……………」

うん…ここは…どこだ確か神様に艦これの世界に転生してもらったはずだけど真つ暗だな、それになんか浮遊感があるな…ん？上に光が見えるって事は水…水中か？

ゴジラにしてみらったけど暗くてよく解らないなとりあえず少し移動してみるか

（おお、動いた当たり前だけど…手はよく見えないな、とりあえず海面を指すか…）

ゴジラは移動を開始したその体を動かす度に周りの海水を掻き分けスピードが上がっていく

（結構スピード出るななんか楽しくなってきた）

そうして海面を指しながら泳いでいると遠くから爆発音が聞こえてきた。

（なんだ、誰か近くで戦っているのか？丁度いいから行ってみるか）

そう思いゴジラは爆発音がする方へ泳いでいった

（ん、あれか？）

海中から上を見上げるとそこには輪になって動いている足が6人分見えたそしてその周りには大量の爆発が起こっていた

（おいおい結構ヤバイんじゃないのか）

ゴジラはスピードを上げ海面に上がっていく

（そういえば戦うにしても熱線とかどうやって出すんだろう？）

もうじき海面に出ようとした時そんなことを考えていると6人の方に黒い物体が近づいているのが解った。

ヤバイと思い咄嗟に口を開き力を溜めると近づいてくる黒い物体に狙いを定め力を吐き出した、すると口から熱線が吐き出されて少し遅れて海面で爆発が起こった。

そしてそのまま海上に一気に上がるとそこにはこちらを見上げている少女達がいた、その少女見て艦娘であると解り無事を確認すると嬉しさから咆哮を上げた。

（よかったーちゃんと艦娘の方助けてたわ、これで深海棲艦だったらどうしようかと思っただわー）

そう思い艦娘を見下ろしているとトントンと背中を少し強く叩か



れる感じがしたので振り返ってみると深海棲艦の砲撃が飛んできていたのだった。

ゴジラは砲撃を受けながら

（あれ、これって深海棲艦からの攻撃だよな？全然痛く無いぞみた感じ俺が知ってる艦種でも戦艦や空母、駆逐艦や重巡とほぼ揃ってるな確かあの光ってるのはフラグシップとかエリートとか言うやつだよなそれにあの小さいのはレ級とか言うのだったな、あいつが艦隊の指揮してるのか？）

そんな事を考えている間にも深海棲艦からの攻撃は絶え間なく続いてきたがゴジラには全然効いていなかった。

（そろそろウザりたいな…殺るか）

そう思いまずは航空機に向かい熱線を吐き出し薙ぎ払って行く、先程まで大量に飛んでいた航空機は一気に数を減らしていった

それを見ていた深海棲艦は呆気にとられていた。

正気に戻った深海棲艦は完全にゴジラを目標に攻撃を開始した。

「ナンダ、アイツハイキナリデテキタトオモツタラコチヲ攻撃シテキタゾ、メンドウダガ先ニヤツヲカタツケル全艦ヤツニ攻撃ヲ集中シロ」

レ級はめんどくさそうに指示を出した数でも火力でも此方の有利なのは変わらないただ殺す奴が増えたただだと考えていたがそうはならなかった

「レ級様ヤツニ攻撃ガツウヨウシテイマセン、ソレドコロカヤツガハナツテクル光線デ航空機ハ全滅シマシタ。ワレワレモヒガイジンダイデス。」

その報告にレ級は唾然とした先程まで獲物を狩ろうとしていたのは自分達のはずだったのに今では逆に狩られる側になろうとしていた。

なぜ、とレ級は考えた今だに数では圧倒的に多いはずなのになぜ自分達が後退しなければならぬのだろうか、

そう思うと今度は怒りが込み上げて来たなぜ自分達が後退しなければいけないのかと

「モウイイ、ワタシモデル！ノコリノ艦隊モワタシニツツケ」

そう命令を下しレ級と残りの深海棲艦の艦隊か突撃を開始した：がその直後熱線が深海棲艦たちを薙ぎ払った。

（ふう、あらかた空の敵は片付いたな、後は艦隊だけだけど向こうは後退してるしこのまま追いかけてもしようがないかな……. . . . .）と思つてたら向こうから突撃してきたなとりあえず熱線吐いどこ）

（うん突撃して来た奴はほとんど居なくなつたな、じゃあ残りもやっちゃうかどうせ深海棲艦とは戦うしね）

「バカナバカナアリエナイナンナンダオマエハイツタイナンナン  
ダー……. . . . .!!!」

夢を見てるんだと思つたさつきまで死にそうになつてたのに急に海が光つたと思つたら敵の攻撃機が墜ちて次の瞬間目の前にでつかい怪物が現れて、今度は深海棲艦と戦い始めたと思つたらあつという間に敵を沈めていつてるあんなにいた深海棲艦がもうほとんど居なくなつてるあの怪物が口から光線を出すと敵は爆発し沈んでいつてる周りにいる龍田達もその光景をしんじられない物を見る目でみている。

最後の艦隊だろう何か叫びながら狂つたように怪物に攻撃しているが怪物が光線を吐いたらその後には最初から敵なんて居なかつたかのように海面が揺れてるだけだった。

## 2話

「全部倒しちゃった…」

誰かがそう言った多分暁達の誰かだろうだが今はそんなのはどうでもいい問題はこの後あの怪物がどう動くかだ。

さっきのを見てどうやっても逃げれるイメージが沸かない。

怪物がこつちを見た目が合ったそう思った瞬間身体中から汗が吹き出たのが解った…

(ふう、終わった、終わった、よかったー倒せて倒せなかったらどうしようかとおもったわ。さて、艦娘の方は無事に逃げられたかなつと、あれ、まだ居たもしかして何処か怪我して動けないのかな取り敢えず近づいてみよう)

「天龍ちゃん!!天龍ちゃん!!あの怪物がこつちにくるわ、早く逃げないと天龍ちゃん聞いているの!!」

「暁達どうなっちゃうの?」

「……………」

「天龍さんどうしたらいいの」

「怖いよー」

龍田達が何か叫んでる、でも俺はあの怪物と目があった瞬間から体が動かねえんだ、目を離せば今度はこつちにあの光線が吐かれるんじゃないかと思うと目を離せなかつたし体も動かなかつた。

多分もうあいつの光線の射程入ってる、それほど近くに怪物が来ている

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

怪物が近くで咆哮を上げたそしてこちらをジッと見てくる。

ああ、終わったそう思った時遠くからプロペラ音が聞こえてきた深海棲艦の攻撃機はプロペラ音はしない、味方の攻撃機だ!!

そう思い辺りを見渡すと後ろの方から味方の艦隊と思われる影が見えた。

「皆すぐにごこから離れろー！！！！」

天龍の号令で龍田達は一齐に怪物から離れた、龍田達も味方の攻撃機を確認していたため天龍の号令にすぐに反応する事ができた。

攻撃機が怪物から天龍達が離れたのを確認したのか後方の艦隊から砲撃音が開始された……

（ふむ、取り敢えず艦娘の近くまで来たけど……さつきはよく見なかったけど結局誰なんだろう知ってる艦娘だったらいいなー……ん!?あれは天龍、龍田、暁、響、雷、電の第六駆逐隊じゃないか、いやっふーーーやっただぜーー）

（おっと嬉しきの余り叫んでしまったが普通こんな怪物が目の前に来たら怖がるよな、なんか暁達皆涙目だしどうしたもんかなー）

（そういうえば神様にコミュニケーションとれるようにお願いしたはずなんだけどなどうすりゃいいんだ、言葉喋れないし……ん?何かプロペラ音がするな、あれは……プロペラ機だから艦娘側の艦載機だよな?……あつ遠くに艦隊っぽいのが見えるあれがそうかな?)

「皆すぐにごこから離れろー！！！！」

（ん?離れろって?あつ天龍達が凄い勢いで俺から離れていく何かじみに傷つくな……まあどうやら天龍達は向こうの艦隊の方に向かうみたいだし、俺はどうするかなー）

と考えると周りで爆発が起き水しぶきが上がったそして少し後に砲撃音が聞こえてきた、どうやらあの艦隊がコチラに砲撃しているらしい

（それもそうか、こんな怪物が仲間の近くにいたら俺なら間違いなく攻撃するもんな……しかしまずいな別に艦娘と敵対しようとは思ってないし攻撃も遠いせいかな全然当る感じしないし航空機からの攻撃もないようだしもしかして追っ払うために砲撃してるのかな?)

（うーんよし！取り敢えず逃げよう!!）

そう思いまた海中へと潜って行く、が逃げたはいいがまだこの世界に来てから1日もたってない自分が住む場所拠点になる所を探さなければいけない別に海中でもいいのだができれば陸の方がいいと考

え何処か適当な島を見つけるためその場を後にした…

……少し時間を遡り艦娘 side ……

(私達は今天龍達遠征組の救援要請を受け長門を旗艦とした12隻の2艦隊からなる救援部隊として急いでいる、報告によると100隻を超える敵の大艦隊に見つかってしまったようだ、他の鎮守府にも応援を頼んだようだが時間的に天龍達は絶望的だろう仮に無事だったとしても何人残っているか、そう思うと自ずと力が入ってしまう。)

「加賀さん、大丈夫？ 顔色が悪いわよ」

「ええ、大丈夫です赤城さん少し焦ってるみたい」

「大丈夫ですよ加賀さんきつと間に合いますよそれに他の鎮守府からも艦隊は出ているんですから」

「ええそうですね、ありがとう赤城さん」

「赤城、加賀、そろそろ合流予想海域が近づいてきた、攻撃機を飛ばしてくれ」

「了解」

長門にそう言われると赤城と加賀は矢筒か矢を取り出し弓を構える。

「赤城、攻撃隊発艦」

「加賀、攻撃隊発艦」

二人が矢を射ると飛んでいったや複数の戦闘機に変わり空へと飛んでいった。

「よし、なにか解ったらすぐに報告してくれ、各員海域に入ったらすぐに戦闘になるかもしれん、心していてくれ!!」

「了解」

攻撃機を飛ばして数分後戦闘機からの映像が送られてきたどうやら遠くで黒煙が見えてきたようだ、しかし戦闘をしている様子はない、間に合わなかったそう頭によぎったしかし同時に妙だと思った、報告では100隻を超える敵の大艦隊が居るはずなのにどこにもいないのだ。徐々に黒煙が近づいてくる、すると海面に立っている天龍

達が見えた。

赤城はすぐに長門にその事を報告する

「居ました天龍達です、全員居ます。」

「何!!本当か、全艦急ぐぞ」

しかしそれを加賀か止める

「待ってください、妙です報告にあった敵の艦隊が見当たりません……えっ何あれ!!」

「どうした何があった」

「天龍達の近くに…あれは恐竜? 巨大な黒い恐竜が天龍達に近づいて行ってます!!」

「恐竜だと確かなのか? 見間違いじゃ…「あつあれ!!」 どうした!!」

陸奥の指差した先には遠目だが黒煙が見えてきた、そして黒煙の間を巨大な何かが移動しているのが見えた。

「本当に居たのか…!!全艦砲撃用意、奴の注意を此方に向けるぞ!!」

「ダメです天龍達が近すぎて危険です!」

「くっしかしこのままなにもしないで指を咥えて見てるわけには…」

「!!天龍達がこちらに気づきました! 恐竜から距離を取り始めています。」

「よし、天龍達が離れたのを確認できしだいあの恐竜に全艦隊で攻撃を開始する合図は加賀、頼めるか?」

「大丈夫よ、問題ないわ」

長門は全艦隊に号令をかけいつでも撃てるように砲撃体制に入  
た

「もう少し、もう少し離れて……今!!砲撃開始!!」

加賀の号令によって轟音とともに艦隊の一斉射が始まった、しかし砲撃は恐竜の元には飛んでいかずバラバラに飛んでいった。

「なんだ、なぜ狙った場所に飛んでいかないだ!」

長門が困惑し周りを見てみると他の艦娘も同じ様で皆困惑している  
ると空母勢からも

「えっ!何で攻撃してくれないの!」

などと聞こえてくる、そして長門が艦装を見ているとそこには小さな人が立っていた、妖精である妖精は砲撃の際照準を合わせたりダメージコントロールや空母にとっては艦載機の操縦などしてくれる存在だ、その妖精が艦装の上で手を×点にして首を横に振っている。「どうしたんだ、艦装に何か問題が起きたのか？」

しかし妖精は首を横に振り艦装に問題は無いと伝えてきた。「では一体どうしたと言っんだ!!」

長門は苛立ちながら妖精に詰め寄ろうとした時

「長門さんあれを!!」

と加賀が指した方に目を向けると

そこには海中に潜って行く恐竜が見えた。

「なっ!!あいつは潜れるのか!駆逐艦と軽巡は対潜警戒!下から来るかもしれない油断するな!!」

長門はゴジラが潜るのを見てすぐに他の艦娘に警戒を促す、すると「おーい皆ー」と声が聞こえてきた、天龍達が合流したのだ

「天龍無事だったか」

「ああ皆大破状態だから無傷って訳じゃ無いけどなんとか生き延びたぜ」

そう天龍はボロボロの状態ながらも言ってみせた。

「ああ、本当に良かった、だかまだ安全という訳ではないあの恐竜や、敵の艦隊がまだ居るかもしれん」

「恐竜?あの怪物の事か…その事なんだが……」

そう言う天龍はこれまで起きたことを長門に話した

「バカな!!あいつ一匹で敵艦隊を全滅させたというのか!?!」

「ああ、信じられないかもしれないが全部事実だ、こいつらも見てる」  
そう天龍は龍田達に同意を求めると龍田達は全員頷いた。

「まあ、なんにせよ一旦お前達を鎮守府まで護衛する、報告は後で提督にしてくれ、ここは他の艦隊に任せよう。」

そう言う天龍は艦隊に号令をかけた

「我々はこれより天龍達を護衛しながら鎮守府に帰還する。陸奥、他の鎮守府から出ている艦隊にも打電してくれ。それと先程天龍から

聞いた事も伝えといてくれ。」

「解ったわ」

長門はそう言うとう自分の艤装をみつめ…

「一体さっきのはどういう事だったんだ？」

先程の妖精とのやり取りを思い出しなから帰路に付くのであった



### 3話

深海棲艦、艦娘との初めての接触&初戦闘から3日がたったゴジラはというと

(うくんあれから3日たったけど良さげな島が見あたらないなー)

海中に潜りながら自分の住む場所を探していた。

因みに道中見つけた深海棲艦は取り敢えず全滅させながら時々魚などを食べてみたりして海底で取り敢えず暮らしていた。

(そろそろ最初に居た場所からだいぶ離れたから大丈夫だよな? これ以上魚食つてるとゴジラじゃなくてジラになりそうだし、やっぱ魚ばっか食つてるとダメだよな!!)

そう思い海面から顔を出すと遠くに島が見えた。

(おっ、丁度いいやもう面倒だしあそこにするか)

そして島に上陸したゴジラは久しぶりの陸に少しワクワクしながら浜辺から内陸へと歩いていくと山の麓まで着いた

(うくんこのまま山沿いに歩いてみるかもしかしたら都合よく洞窟とかが見つかるかもしれない)

そう思いながら歩いていると丁度良さそうな洞窟を見つけることができた近くには湖がみえる優良物件だ

(オツケーご都合主義万歳もう、俺様信じちゃうまあ実際に会って転生までしてもらったから信じる信じないもないんだけどね! ここなら海からも空からも見えないしそれなりに広いからいいかな、ここをキャンプ地とする!!)

ここを拠点に決めたゴジラはまず周りの木を引き抜いたり倒したりして湖までの道を作った。

そして引き抜いた木は洞窟の中に入れて自分の寝る場所に敷き詰めていった。

そして自分の住みやすい環境を整えていると下から。

「おーい、おーい」と聞こえてきた。

自分以外ここには誰もいないと思っていたゴジラは慌てて下を見てみるとそこには小さいゴジラが立っていた、小さいといっても人間

の大人と同じ位の大きさはあるがそのゴジラが喋りかけてきたのだった。

「ようやく、落ち着いて喋れるよここまで結構時間かかったね。私は貴方に付いてる妖精だよ」

そう言うと小ゴジラは口を開けるとそこから妖精の顔見えたそう、着ぐるみだったのだ。

その光景を見てゴジラは啞然としていたが妖精は構わず喋り出す。

「私はあなたと艦娘とのコミュニケーションを取り安くするために生まれてきました、他にも私は他の妖精ともコミュニケーションは勿論通信などもできますまあ距離はそんなに広くはありませんが、これから宜しくお願いします」ペコリ

妖精は自分の事を一通り喋るとゴジラからの反応を待ったがゴジラからの反応は無かった。

「あー、おー聞いてますかー」

妖精がもう一度ゴジラに問い掛けると

「は!?悪い悪いいきなりだったから少しビックリしてた、因みに俺が言ってる事は解るのか?」

「はい、勿論解りますそのための私ですから」

「なるほど因みに艦娘とのコミュニケーションってどうやってやるんだ?」

「あーそれはあなたは普通に喋ってくれば私を通して艦娘に翻訳されて伝わるようになりますから普通に会話する感じで大丈夫ですよ、他には通信とかテレパシーみたいに特定の人とかと会話する事もできます」

「なるほど解った、じゃあなんで最初艦娘に会ったときに出てきてくれなかったんだ?」

「それはまだ私が生まれてなかったからです、私が生まれたのはついさっきですから」

「なるほどね……じゃあまあこれから宜しく」

「はい宜しく願います」

(まあさつき生まれたんじゃしようがないよな艦娘と会うのが早すぎ

たのかなー、まあ天龍達を助けられたから良かったことにしよう、うん)

「因みに名前とかあるのか」

「さつき生まれたばかりなんですからあるはずないじゃないですか」

「確かにそうだな、それじゃあ名前をつけよう、何か候補とか要望あるか?」

「名前ですか? うくんこれと言って困らないのでなくてもいいですけど好きに呼んでもらっていいですよ」

(好きにか、なんて呼ぼう着ぐるみの形からしたらやつぱりリトルかな)

「うん、じゃあこれからリトルって呼ぶわ」

「リトルですか解りました、私はリトルです」ビシ

と言いいリトルは敬礼してみせた

「じゃあ早速だけどリトルは普段どこにいて後何食うんだ?」

ゴジラは疑問に思ったことを聞いてみた

「私は基本的にゴジラさんの背鰭の中に? 辺りに居ますよ、食べ物は基本なんでも食べますよ因みに好きな食べ物は甘いものです、まあ食べなくても大丈夫っちゃ大丈夫なんですけどね」

「なるほど解ったそれじゃあまずは住む所を完璧に仕上げちまおうまあ甘いものは現状入手不可能だから我慢してもらおうことになるけどそのうち何とかしてみよう」

「解りました」ビシ

こうしてゴジラとリトルとの共同生活が始まった。

島の探索などから始め食料の調達などして暮らしていたがリトルがいつの間にか洞窟の近くにログハウスを作っていたのはゴジラも驚いたのでいつ作ったか聞いてみると。

「私も妖精ですから材料があればこれくらいはすぐ作れますよ」フンス

とどや顔で言った、そうして自分達の寝床、食料など足りないものなどを確保しながら1ヶ月が過ぎた頃。

「ゴジラさん、ここでの生活には慣れましたか?」

「ん？おう、だいぶ慣れてきたな」

「それは良かったです。」

リトルはその答えを聞くと満足したのかうんうんと腕を組ながら頷いた

「では、そろそろ艦娘に会いに行きましようか!!」

行きなりそんな事を言ってきた

「ん？嫌々ちよつと待ってなんでそんな事いきなり言ってくるんだ？」

「そんな事じゃないですよ、私はあなたと艦娘とのコミュニケーションをとるために生まれてきたのにまだ一回もそんな機会が無いじゃないですか!!」

「だから行きますよ艦娘に会いにハリアップ」

そうリトルが捲し立てるのも仕方がない最初の艦娘との接触以降島に上陸してから海には出ておらず、自分達の生活などを優先させていたのでそう考えるとリトルはまだ本来の仕事が出来てないのである

「あー確かにそろそろ島から出て艦娘にも会いに行きたいがどうやって接触するよ言っちゃなんだが最初会ったときに普通に攻撃されたしいきなり目の前に現れたりしたらそれこそ怖がられて攻撃されるぞ」

「うーん確かに最初の話を聞いた感じだと私の交信エリアに入る前に攻撃されそうですね…それじゃあ海中から近づいて私の交信エリアに入ってから喋りかければいいんじゃないですか、そしてその後姿を現せばいいんですよ!!」

「なるほど確かにその方が接触しやすいかお前天才か！よし、それでやってみるか」

そうしてリトルとゴジラによる艦娘との2度目の接触に向けて作戦を立てながらその日は終わりを向かえた

「……………そして次の日……………」

「では、これより艦娘と出会おう作戦を開始する!!」

「イエーイ」パチパチパチ

俺達はまず艦娘と出会うためにまず海に出て艦娘の居そうな場所や航路がないか探すことにした。

リトルの話ではある程度の距離に居れば艦娘と一緒に居る妖精を感じ取れるらしい

そんなわけで島から出てしばらくは適当に泳いでみることにした島の場所がわからなくなならないか心配したがリトルが懐から海図を取り出して問題ないと言われた妖精って凄い！

島から出て泳いだが深海棲艦の姿しか確認できなかったというか海図をリトルに見てもらい日本の場所を確認してもらった所初日に転生した場所が日本に近かった様で今住んで居る場所は日本から離れた場所だったようだ。

しかし今回はリトルが海図を見てくれているので前は3日掛かっていたが今回は1日で初日の転生した場所に戻ってくる事ができた。

「しかし道中深海棲艦しか見なかったけど日本は大丈夫なのか？」

「さあ？私もその辺は気になりますけど現状がどうなってるかなんて私に聞かれても解りませんよ。」

「それもそうだな」

考えてみると自分達は这个世界について全然知らないのだと思っ

た。

「なあ、日本まで後どれ位で着くんだ？」

「うーんそろそろ陸が見えてくる場所まで来てるはずですよ」

そう言われ海面から顔を出してみるがもうすでに周りは暗くなっ

ていた。

しかし遠くに陸地の明かりが線のように見えていた

「おーなんとか陸の明かりが見える場所まで来れたな、取り敢えずも

う少し進んだ所で今日は休むか」

(何だかんだですつと泳いでたから少し疲れたし)

「そうですねもう夜ですし暗いと逆に怖がらせちゃうかもしれないですしね」

そうしてしばらく進んで陸地の明かりがだいぶよく見えてきた頃

「よし、だいぶ近づいて来たしこの辺で休むかじやあまた明日なお休み」

「はい、お休みなさい」

-----

-----

-----

-----

-----

-----

「……………てください」

「起きて下さい、ゴジラさん!!起きて下さい!!」

「んあ…なんだ、もう朝か?」

リトルに起こされ寝ぼけながら答える

「違います。艦娘の反応が近づいてきているので起こしました交信可能な範囲に入りますよ!」

「えっ!ちよつと待っていきなりで頭回らないのに…!」

「では作戦どおりいきますよ幸い向こうは一人ですから大丈夫ですよ」

とリトルは無言を言わず交信を始めようとしていた

「ちよつ!ちよつと待ってー!ー!!」

## 4話

夜はいい、夜は好きだ、暗いだけじゃなく星も、月もよく見えて綺麗だし、運が良ければ流れ星も見れる、勿論夜戦での砲雷撃戦も好きだけどやはり戦うよりもこうして星を眺めてる方が好きだ、最近は何より良い事がなかった。

戦線は膠着状態、それだけならいいが明らかに敵の勢力が増えてきているし、前に遠征を出した時は敵の大艦隊に見つかってあわや全滅しそうな所を恐竜が現れて敵を倒したって言うし…

「この先一体どうなっちゃうんだろうな…」

そう呟いても答えは返ってこない今は夜の哨戒兼散歩中だ、自分以外誰もいない。

「はあ…少し遠くまで来すぎたかなそろそろ戻ろっと」

そう思い踵を返そうとしたとき

『ご…今晩わ…いいいい夜ですね!!』

いきなり声が聞こえてきた

「え…う…だ…誰!!」

急いで周りを見渡したが誰もいない

私は警戒を強め辺りを見渡した時

『あーえっと、取り敢えず敵ではないので安心してください』

そんな言葉が聞こえてきた

「何処に居るの！隠れていないで出てきなさい!!」

少し言葉を強めて喋ったが正直不安だ、敵ではないと言っていたが信用はできない、それに今は一人だもし相手が複数居たら不味い…何より相手の位置が解らない。

…マズイマズイマズイ体から嫌な汗が出はじめた。

『解りました、今から出て行くので攻撃しないでくれますか？』

後、できれば怖がらないでほしいんですけど…』

「解ったわ、攻撃はしない後怖がるのも…もしかして幽霊？」

少し考えて答えたけど本当に幽霊だったらどうしようそう考えていると

『いや、幽霊ではないです、取り敢えず出ていきますね』

そう言われ待っている電探に反応が出てきた：でもこの反応って大きすぎない、それにこれって：海中から!!

そう思った瞬間目の前の海面が大きく膨れ上がり中から巨大な恐竜が現れた、そして目の前の恐竜はさつきと同じように

「こんばんわ、いい夜ですね」と声を掛けてきた

：待つて待つて待つて予想外過ぎて声がでない!

えつなにこの恐竜ってあの時の？ それに喋ってるって事は意志疎通が出来るって事でじゃあ私はどうすればいいんだ、えつと取り敢えず挨拶されたんだから

「え…えつと…つ…こんばんわ!!」

なんとか言葉を絞り出して挨拶を返したがこの後どうすればいいのか全然解らないよ!!

「良かったどうやらこちらが喋っている事が通じてるようですね、では改めて俺の名前はゴジラと言います、宜しくお願いします。」

そう言うゴジラと名乗った恐竜は頭を下げた

「あつはいご丁寧にどうも、私は川内型軽巡洋艦1番艦の川内つて言います、宜しくお願いします。」

こうして2度目のゴジラと艦娘の接触は今度こそうまくいった

「それでゴジラ…さん？は私に何か用なんですか？」

「えっ！いやその用っていうかただここで休んでいたら川内さんの反応があったんで声を掛けさせてもらっただけで別に用事があったとかそういうのじゃないんですけどすみません、迷惑でしたか？」

しかし帰ってきた言葉は用はないけど近くに私が来たから声をかけただけと言う、それを聞いてますます訳が解らなくなった彼は一体何がしたいのだろうか。

少なくとも攻撃をしてくる素振りも無さそうだが、あの巨体だまだ警戒はしといた方がいいだろう。

「い、いや迷惑じゃないよ、えーとそれじゃあ君はなんでここで休んだの？」

取り敢えず向こうの情報を聞き出さないきゃ



「それは艦娘に会いに来たんだよ」

「えっ！私達に会いに？なぜ？」

「なぜと言われるとどう答えたらいいか解らないけど実は、俺のつれの要望でここまで来たんだ、丁度いいから紹介するよ、おいリトル。」

ゴジラはリトルと言うと自分の後ろに目を向けたすると背鰭の一部が青白く発光すると光の玉が出て来て海面へと落ちていった、そして海面に接触すると玉が弾け中からもう一体のゴジラが姿を現した。

「初めまして川内さん私はゴジラの妖精、名前はリトルと言います以後お見知りおきを」

そう川内の前で自己紹介をしたリトルだが川内は目を丸くして固まったままだった。

(よ、妖精が喋ってる!!こんなの始めて、一体何がどうなってるの。)

川内は混乱しているがリトルは続けて言葉を掛けた。

「私はゴジラが艦娘とコミュニケーションを取るために生まれた妖精なんです、だから今ゴジラと川内さんが会話をするための中継所の様な役割をしています」

ようやく再起動した川内はリトルが説明してくれた事を頭で整理すると

「格好も大きさも違うけど確かに妖精なんだね、それでその、リトルさんのおかげで私はゴジラさんと喋ってられるってことね」

「まあ大体それで合ってます、それに私は他の妖精とも会話や交信が出来ますからね川内さんの妖精とも先程から交信してましたよ」

そう言われた川内は自分の肩を見てみるといつの間にか両肩に妖精達が集まっていた

「?…えっこれはどういうこと」

川内には解らなかつた、今まで声までは聞こえないけど一緒にやって来た妖精達だ、大体の事は理解できるようにはなっていたが今、川内の肩の上に乗っている妖精は何がしたいのか解らなかつた、そこにリトルが近き手を出す…

「イエーイ」

「「「イエーイ」」」

とハイタッチを始めたのだ

もう何がなんだか解らないといった感じに川内は乾いた笑いしか出せなかった。

「まあ、そう言う事でリトルを通して艦娘と交流するためにここまで来た所川内さんに会ったって感じです。」

「本当は昼間に会えればなって思ったんですけど…まあ…多分うまくいったかなー正直川内さん取り乱して救援呼ばれたりしたらどうしようかと思つてましたから」

「あーそれに関しては大丈夫、送つてないからでもどうして艦娘なの、人間じゃなくて？」

「あーそれはただ艦娘の事リトルから聞いて興味を持ったからだよ」

「ふーん…じゃあ私達が敵対するって事は無いわけね」

「まあそうならないようにしたいな」

そんな事を話していると川内は何か思い出したように

「そうだ、ゴジラさんは1ヶ月前に深海棲艦の大艦隊を全滅させてなかった」

「1ヶ月前、あーうん、確かに全滅させたよ」

「その時艦娘も居なかった？」

「居たよ6人丁度近くに居て危なそうだったからね何よりその6人を助けるために深海棲艦の艦隊を全滅させたからね」

そう言うのと川内の顔色が変わった

「深海棲艦から天龍達を助けるために出て来てくれたの…」

「えっそうだよ」

「…やっぱりあの時の恐竜ってゴジラさんだったんだ。」

ありがとう、おかげで大切な仲間達を失わずにすんだよ」

「あの時居たのは天龍、龍田、暁、響、雷、電つて言うんだ、そうかあの時ゴジラは助けに来てくれてたんだね…ごめんなさい」

いきなり川内が謝ってきた

「いや、謝られる様な事なんか…いや、あるんだよ私もあの時天龍達を助けるための救援艦隊にいたから、あの時私達は貴方に攻撃した、

貴方が天龍達を助けようとしてくれていたのに私達は貴方に攻撃してしまっただから、ごめんなさい謝って済む問題じゃないのは解ってるけど今の私にはこうやって謝ることしか出来ないから」

そう言っつて川内は頭を下げた、そんな川内を見てゴジラは

「頭を上げて下さい、別に攻撃された事については全然怒ってないのっていうか多分あの状況なら俺でも攻撃してただろうし気にしないで下さい、それに弾も当たらなかったし、追い払うためにしてきたんでしょ？」

「え!!いや、それは…」

と川内は申し訳無きそうにうつむいた。

「え!!当てる気だったの」

「ごつごめんなさい」

と川内は再び謝った

「いや、まあいいよ別に気にしてないから大丈夫、大丈夫だから」

とゴジラは慌ててフォローした

「うん、ありがとうでもあの時当たってたらかうして話してられなかったかもしれないし…」

とまたうつ向いてしまった。

「あーいや、別に当たってても会いに来たから安心していいよ」

「…本当？」ウルウル

と上目使いで聞いてきた

「ほんと、ほんと（くっかわいい!）」

と若干照れながら返した

「なら、よかったよ、でも、あの時ちゃんと狙ったのに弾が狙い通り飛んでいかなかったんだよね、どうしてだろうその後は大丈夫だったのに」

と川内が首を傾げているとリトルが

「それに関しては私のせいでしょう!!」ドヤア

と二人の間に割って入ってきた

## 5話

リトルが二人の間に入って来て若干ビツクリしながらも川内は「どういう事」と聞くと

「その時私は、生まれていませんでしたが生まれる前兆はあったと思います。それをあなた達艦娘の妖精が感じ取って、仲間を攻撃しないようにしたと言っています。」

「言っていますって誰が?」

川内が聞いてみるとリトルは

「やだなー川内さんの妖精に來たに決まってるじゃないですかー」

「あつーそっか、妖精さんと話せるんだったね、そっかーそれで攻撃が当たらなかったのかーこれで謎が解けたよ…あーところで、この事報告しても大丈夫かな?」

「結構問題になってるんだよね…」

川内は遠慮気味にきいてきた。

「うくん、どうしまししょうか、ゴジラさん私は別にかまいませんけど…」

リトルはゴジラに判断を任せた

「うくん、俺は、出来れば報告するのは待ってもらってもいいかな?」

と難色を示した、その答えに川内は真剣な顔になり

「理由を聞いてもいいかな?」

川内は理由を求めてきた

「理由はいくつかあるが、まず俺たちがまだ艦娘と人間を信用してないって事だね、俺はまだ艦娘では天龍さん達と川内さんしか会ってない。人間に関してはまだ会った事もないんだ、だから信用もなんもないし。」

「それはそうかもしれないけど、皆信頼できる仲間だよ」

「確かに川内さん達の仲間ならと思うけど皆が皆とはいかないよ、川内さんの報告は他の人にも行くんだろ、それを見た人が俺達を危険だと判断するかもしれないしね、そうなると今後艦娘とも敵対するかもしれないからそれは避けたいんだ、だからまだ報告するのは待って

欲しい。」

ゴジラの言い分を聞いて川内は途中「そんな事ない!!」と言いそうになったが冷静に考えれば確かにそうなる可能性は十分あると納得した

「…解った、この事は報告しないよ安心して…とっもう結構時間たちやっただね、私はそろそろ行くよ」

そう川内は別れの挨拶をしてきたそれを聞いてまずリトルが

「解りましたまた会いましょう」

と挨拶をし川内はゴジラの方に顔を向けた

「あーこっちもだいぶ楽しい時間が過ぎました、また会いましょう川内さん」

と挨拶したが川内は怒った顔をして

「川内!!さんは要らないよ!!」

「いや、でもまだ会ったばかりだし」

「いいのさん付け禁止!」

とまくしたててきたのでゴジラはここは折れとく事にした

「はあ、解りました。川内また今度会いましょう、それと俺もさん付け入りませんかからね」

「うん、よろしいそれじゃあまたねってそうだ聞いとかなないといけないいことがあつたんだ、ゴジラはまだこの辺に居るの?」

「ああ、しばらくはこの辺を彷徨く予定ではいるよ」

そう答えると川内は少し間をおいて

「ふーんそっか私、夜になるとこの辺で一人でぶらぶらしてるからまた会って話そうよ!」

まさか向こうからお誘いを受けるとは思ってたので少し戸惑いながら

「こっこちらこそ川内が良ければ宜しくお願いします。」

と言うと川内はあははと笑い手を振って

「それじゃあまた明日ねーバイバイ」

と鎮守府の方へと帰っていった。

それを見えなくなるまで見送ったゴジラとリトルはまた寝るため

に海へと潜っていった所で

「ん！また明日って言ったか」

と最後に川内の言った言葉を思い出し、少し楽しみだと思いながら眠りに着いた

そして川内も

「うわー！まさかゴジラ達に会えるとは思わなかったなー、明日も会えるしなに話そっかなー楽しみだな、やっぱり夜はいいなー」  
とうきうきしながら帰っていった。

――――鎮守府川内型の部屋――――

「…ただいまー…」ソローリ

「お帰りなさい姉さん、今日はずいぶん遅かったですね」ニツコリ

ビク「じっ神通、起きてたんだ…い…いやー今日は星が綺麗でさっ  
い、いつもより遠出しちゃってさ」汗

「はあ」と呆れたように神通はため息を吐くと

「いいですか、姉さん!!今はまだここまで深海棲艦があまり出ないからと言って一人で夜出歩くなってこちらの身にもなってください…最近ではあの出来事の後から天龍達皆が海に出るのも怖がつて遠征もままならないんですから姉さんが使ってる燃料もタダじゃないんですから…って姉さんどうかしましたか」

神通が喋っていると真剣な顔で考え込む川内が目に入った

「…何か考え事ですか?」

「うん…ねえ神通、六駆の達が海に出たがらなくなったのって深海棲艦の艦隊に襲われてゴ…恐竜と会った後だよね」

「ええ…そのはずですね、あの後最初は平気みたいでしたが後から大きめの波を見ると怯えたり取り乱したりするようになりましたね…それがどうかしましたか?」

「うん、もしかしたら天龍達をまたもとに戻せるかもしれない」

「…!!本当ですか姉さん!一体どうやって戻すんですか!!」

神通は川内に詰め寄った

「うわあつと落ち着いて神通もしかしたらつて話だから」

「それでも、最近いい噂は聞きませんし、少しでも明るい話があるなら聞きたいですし、それに落ち込んでるあの子達を見るのもなんだか辛くて…」

そう言うとう神通はうつ向いてしまった

「うん、そうだね…(どうしよう、その落ち込んでる原因と友達になつたなんて言えない!)」

「それで、姉さんどうするんですか？私にも協力させてください」

「その話、那っ珂ちゃんも協力するよー!!!」

ガバツと布団を巻き上げながら那珂が立ち上がった

「なっ那珂起きてたの!」

「起きてたのじゃなーい二人してずっと喋ってるんだもん、嫌でも起きるよそれにく皆を笑顔にするのはアイドルのお仕事なんだよー」  
キヤルン

「えーいやそれは解んないけど、うーんどうしようかなー」

川内は腕を組考えていると神通が

「私達では協力するには力不足ですか？」

「いや、そう言う訳じゃないんだけど、うーん何て言えばいいのかな  
〜」

さすがに天龍達が怯える原因になったゴジラに会わせるとは言えない川内だか神通も那珂も大事な妹達だ、出来るだけ隠し事はしたくない川内は

「取り敢えず明日の夜まで待つてくれる、それまでに考えとくから」

「…解りました、明日の夜まで待てばいいんですね」

少し考える素振りをし、神通は同意し那珂もそれにならった

「うん、ごめんね二人とも」

と川内は二人に謝罪したが

「いいえ姉さん、少しでも皆のために必要な事なんでしょう謝る必要は無いわ」

「そうだよーそれに私も最近の鎮守府は元気がないなーって思ってた

し何でも言つてよ」

「二人とも…ありがとう」

「それじゃあ夜も遅いし早く寝よ、夜更かしはお肌に悪いんだから!!」  
そう那珂が言うのと川内達は眠りに着いた

翌朝川内はゴジラに会うために昨日ゴジラと会った海域に向かつていた

「うまく了承してくれるといいなあ……………」

「ん！なんだあの黒いの…深海棲艦!!まだこっちには気づいてないみたいだけどあの方向だと鎮守府に向かっているな…どうする救援要請を出して援軍が来るまで私が引き付けるか、でも今の鎮守府の戦力じゃ援軍を呼んでも…ゴジラなら何とかしてくれるかな場所もここからならすぐだし一か八か助けてもらおうよし、そうと決まったら何が決まったらなんですか姉さん」

「うわああ、じ、神通に那珂なんでこんな所に!!」

「なんでじゃありません、姉さんがまた一人で海に出るのが見えたから追つて来たんです」

「那珂ちゃんも同じ理由です」

神通は困った顔をし那珂は笑顔で答えたが次の瞬間二人の顔は真剣なものへと変わり現状把握に取りかかった

「川内今、私達は敵を発見これを追跡状態にあります」

「そこで私は鎮守府に応援要請を出し、敵を追跡、応援艦隊の到着と同時に挟撃を仕掛けたいと思いますけどどうでしょう」

と神通は作戦を練り上げ川内に意見したが川内は

「…いや、私達で引き付けよう」

「正気ですか姉さん軽く見ても50は居ますよ！それを私達だけで引き付けるなんて無謀にも程があります!!!」

—

神通は信じられないと思いつながら川内に詰め寄った50対3なのだ引き付けるにしてもその先に待つのは死しかない、姉である川内の考えている事が全く解らないのだ

「神通、那珂、私を信じて絶対誰も沈めたりしない」



川内は神通と那珂を交互に見た真つ直ぐに力強い眼差しで

「!!っはあ…解りました、姉さんの言うとおりにします…」

神通はため息を吐きながら川内の案に同意した

「那珂ちゃんはー川内ちゃんに着いてくよー」

那珂は明るく川内に同意した

「ありがとう二人ともじゃあ敵艦隊に一斉射した後は私に着いてきて、目的は敵の撃破じゃなくて此方に誘き寄せるのが目的だから無理しないようにね」

「了解（だよー）」

そう言う川内達は敵艦隊に向けて攻撃を開始した

## 6話

川内達による奇襲攻撃を受けた深海棲艦の艦隊は川内達を見つけるとそちらに進路を変更し追いかけて来た

「よし！釣れた、それじゃあ着いて来て二人とも、それと那珂水偵飛ばして敵の状態を教えてあと私達との距離が敵と離れすぎないように見といて」

「了解だよーまかせて」

「神通は敵に牽制をしかけながら敵が近づいてきたら教えて」  
「解りました」

そして付かず離れずの戦闘が始まって一時間ほど経った時、川内が動きを止め

「おーい！ゴジラー！リトルー！いたら返事してくれーおーい！」

いきなり大声で叫び始めた。神通も那珂も何がなんだか解らず川内が何がしたいのか検討もつかない、ただ今解っているのはこのままでは敵に追い付かれてしまうという事、そしてもうすぐ敵の射程範囲に入ってしまうという事だ

「おーい！ゴジラー！リトルー！いたら返事してくれー」

となおも川内は叫ぶ、そんな川内を見て神通はもう駄目だと思っただ。きつと今までの心労とこの状況に押し潰されて、姉は壊れてしまったのだと思い、何とか正気に戻ってもらおうと川内に渴を入れるため近づこうとした瞬間

「はいはい居ますよー、ゴジラはまだ寝てるけどね、どうしたの川内？」

と声が聞こえてきた、今自分達の周りには川内と私に那珂しか居ない筈なのに一体何処から声がしているのか解らなかった。

「良かったー、まだここに居てくれて、実は今深海棲艦に襲われてるんだ。だから助けてくれない！」

「そうですか、解りました。少し待っててくださいね。今…叩き起こしてきますから」ニヤリ

と、どんどん話が進んで行ってしまつて、着いていけないしていると

「良かったー！神通、那珂、これで助かるよ!!」

「姉さん、いい加減説明してください、一体これから何が起こるっていうんですか!!」

「那珂ちゃんも説明を要求するよー!!」

神通と那珂は一緒になって川内に詰め寄る、姉妹二人に詰め寄られながらも川内は笑いながら

「私の友達に助けを頼んだんだ、一緒に戦えばきつと勝てるよ」ドヤアとドヤ顔で言ってきた

「友達？それは…」

神通が何か言おうとした時だった

「うおおおおおお、無事か川内ー！ー!!」

ドバーンと豪快に水飛沫を上げながら、ゴジラが川内達の前に現れたのだ

それを見た神通と那珂はゴジラを見上げながら開いた口が塞がらない状態になっていた。そんな二人を余所に川内は状況を説明しようとした時、ドゴーンとゴジラが爆発した。敵の攻撃が川内達の前に現れたゴジラに命中したのだ

「…ゴジラ、大丈夫!!」

川内は爆煙に隠れて見えなくなった、ゴジラに心配そうに呼び掛けるが、反応がない、もしかしたら今の攻撃でゴジラが深手をおったかもしれないと思い、川内の顔が青くなる。自分がここまで敵を連れて来たせいでゴジラが死なせてしまったんじゃないかと

「ゴジラー返事してよー!!」

と川内は悲痛な叫びをあげるが

「んあ、ちよつとブーツとしてた、寝起きなもんでブーツとしちゃうんだよね」

などと煙の晴れると無傷のゴジラから、そんな呑気な返事が帰ってきたのだ

「ゴジラ…怪我とかしてないの?」

川内は恐る恐る聞いてみると

「怪我?いや、これと言って怪我はしてないぞ」



そう言うのと川内はうつ向いてしまった。

「いや、確かにいきなり助けを呼ばれたときはビックリしたけど見ての通り怪我もしてないし川内達も無事だったんだからそれでいいじゃん」

「…でも」

また何か言おうとする川内にゴジラは

「ストッププー…これ以上は平行線だよ、それにそんなに気になるなら頼みがあるんだけど…」

その言葉に川内は顔を上げ

「何！何でも言つてよ、私にできることなら何でもするよ!!」

んー！今何でもするつて…いやいやそうじゃない

「あー…何て言うかその、俺と…とっ友達になつてくれないでしょうか…」

そう遠慮がちにゴジラが言うと川内は目をパチクリさせると

「えっ私達、もう友達じゃなかったの?」

と聞き返してきた

「え!!だつてまだ会つてそんなに経つてないし、良くて知り合い位かなーつて思つてたんですけど…えっ本当に友達になつてくれるの?」

「だから私達はもう友達だと思つてるつて、言つてるじゃん」

川内は先程の落ち込んだのはうって変わつて今では腕組みしてプリプリと怒っていた

「あっなんかすんません」

とゴジラが謝ると

「プツアハハハ…」

「ごめんごめん、さっきまでこつちが謝つてたのに今度はゴジラが謝りだしたからつい笑っちゃった」

ああ、そういう事かと納得すると不思議とゴジラも笑い始めていた

「アハハハ…確かに二人して謝っているなアハハハ」

そうして二人で笑い合っていると

「んーうん!!姉さん二人で笑い合っているのはいいですが、そろそろ私達の事の紹介と説明をお願いしますー!」

神通が痺れを切らして話しかけてきた

「あつごめんごめん二人とも、ゴジラこの二人は私の妹で…」

「川内型の二番艦の神通と言います」

「同じく川内型三番艦、そして、艦隊のアイドル那珂ちゃんです」

二人に自己紹介をされ

「あつどうも俺はゴジラって言います。それとこっちは妖精のリトルって言います」

「どうも、私がリトルです」

そう言いながら川内の横に現れたリトルに神通は驚きながら

「あなた、妖精なんですか?…随分大きいですね」

「ええ、まあ他の妖精に比べたら大きいですけどゴジラに合わせているからですかね?まあ私達妖精にとって大きさはそれほど問題ではないですからね。」

「そうなんですか、なんか妖精さんと喋ってるなんてなんだか新鮮な感じですね。これから宜しくお願いします」

「はい、こちらこそ宜しくお願いします。那珂さんも宜しくお願いしますね」

「こちらこそよろしくねー、ゴジラもよろしくねー」

「お、おう宜しくお願いします」

こうしてゴジラと神通と那珂との挨拶が終わった

「それで、これからどうするんだ。川内達は怪我してるし途中まで送ってこうか?」

ゴジラがそう提案すると

「いや、それは嬉しいんだけど今日は一つゴジラに頼み事があって来たんだ」

「頼み事?」

「うん」

そう言うと川内は鎮守府の話をした、そこには最初に助けた天龍達が居ること、そして最近その天龍達が海に出るのも怖がっているその原因がゴジラにあるということを話をし、ゴジラが怖いという誤解を解くために天龍達と会って欲しいと伝えた

「マジか、あの時の事がそんな事になってるとは思わなかった…会うのはいいけど俺の事怖がってるんでしょ大丈夫なの」ズーン

ゴジラは落ち込みながらも川内にそう聞くと川内は少し考えてから

「うん、そこは私が何とかこの海域まで連れてこようと考えてたんだけど、この辺にも深海棲艦が現れるようになるよ、ちよつと難しいんだよね。そこでゴジラには鎮守府までとは言わないから近くまで来て欲しいんだ…どうかな？」

川内がそう提案するとゴジラは考え始めるが

「姉さん！本気ですか!!いくら話を通じるとはいえ鎮守府の近くまでなんて危険すぎます。先程助けていただいたのは感謝してますが、それとこれとは話が違います。私は…私はまだ彼を信用できません…」

そう言うのと神通は顔を伏せてしまった。だがそこに那珂が

「うーん神通ちゃんが言ってる事も解るけど、私は少しは信用してるかな助けてもらったって言うのもあるけど、川内ちゃんの友達みたいだし話してる所見ても悪い人？恐竜？」

「ゴジラは怪獣っていつてたよ」

「じゃあ悪い怪獣って感じはしなかったし、でもまああんまり近くでも問題があるし海上で会うと他の人にも見つかる可能性もあるから…どこか近くの島とかで会うのがいいんじゃないかな」

「でも、仮に島で会うにしてもあの子達に更に追い討ちになったりしたら…」

「確かに、追い討ちになるかもしれない。けど会って話をしてみればきつと解ってくれるはずだよ。ゴジラは味方で悪い奴じゃないんだって、神通がも那珂もそれは解ったでしょ？」

「それは、そうですね…」

尚も心配している神通に川内は

「それに、皆のたになるならなんでも協力してくれるって言ったじゃない…」

「確かに言いましたけど…うーんもう！じゃあ、会うときは私達も一緒です。それならいいです」

「やった！那珂もそれで大丈夫？」

「うん、私もそれでいいよ」

「決まりだね。そういう事なんだけど、ゴジラもそれでいい？」

「いや、元々俺が原因なんだし、俺もそれで大丈夫だけど。いつにするんだ？」

「そうだね、2日後位でどう？場所は今から案内するから取り敢えず島に着いたら隠れといて、作戦は私のまずリトルと天龍を会わせてから、リトルに事情を話してもらおうの。そしてそのあと、ゴジラに出て来てもらうって感じかな」

「解った、それでいこう。それじゃ早速移動を開始しますか」

「うん、それじゃ私達に着いて来て…ちよつといい？」

「うん、どうしたんだ。改まって」

「ゴジラの頭の上に乗せて貰いたいなーっと思って、ほら、なんか眺めとか良さそうだから、どうかなーと思って…ダメ？」

（ぐっ！その上目使いは反則だろ、それに目立っちゃダメなんじゃないかかったのか？）

などと考えていると

「なっ！姉さんなに言ってるんですか!!」

「うー！ちよつとでいいからさー、いいじゃん乗せてよー！」

「ま…まあ乗るくらいなら…」

「ちよっ！ゴジラさんまで！」

「本当、やったー！」

「もう二人とも今がどんな状況か解ってるんですか!!」

「まあまあ、神通ちゃん、取り敢えず私が水偵飛ばしとくから、今は川内ちゃんの好きにさせよう」

「でも…：はあ、解りました、警戒は私達でやっときます」

「ありがと、神通、那珂、それじゃあお言葉に甘えてゴジラ、宜しくね!!」

そう言うのと川内が近づいてきたので、取り敢えず顔の半分を水面に出した状態にし、頭に乗しやすい状態にした

「へへ、ありがとね」



そう言つて川内は頭に上つて来た。

「取り敢えず、もうちよい浮くからしつかり掴まつてろよ」

そして、川内を乗せたゴジラは上半身が見えるくらい浮き上がると

「うわあー！すつごい、たかーい、遠くが良く見えるよー！」

「どうだ、お気に召したか？」

「うん！最高だよ、あーこれで夜だったら、星とか見えてもつとよかつたんだけどなー」

「それは残念だったな、それはまた今度の時にしろよ」

「うん…えっ！また乗せてくれるの？」

「これ位いつでもやってやるよ、それじゃあ、そろそろ行くぞ」

「うん!!それじゃあ、しゅっぱーっ、しんこー!!」

そして川内の号令でゴジラ達は目的地の島へと出発した。

## 7話

ゴジラ達が移動を開始してしばらくすると、遠くに島が見えてきた

「あつあの島だよ、ゴジラ」

「ほお、結構大きい島だな」

「でしょ！たまに皆で遊びに来たりしてるんだよ」

「皆でつて、大丈夫なのか？」

「…うん、今はそんな事にしてるような状況じゃなくなってるからね」

「う…なんか、聞いちゃ悪かったな」

「いや、いいよ」

そんな話をしていると、島が随分近づいてきたので、ゴジラは、島の手前で川内を下ろすために海面から顔を半分出した状態になった

「うーん!!ありがとう、ゴジラ!とても気持ちよかったよ」

「そうか、それならよかったよ。それで、この島に隠れていればいいのか?」

「うん、そうしてて。もし、時間が掛かりそうな時は私が知らせに来るから」

「解った」

「それじゃ。ゴジラ2日後に、ここに皆を連れてくるから、宜しくね」

「あー、あんま自信ないけど、頑張りわ」

「それじゃあ、2日後にね、それじゃあ私達は帰るから、じゃーねー」

そうして川内達とゴジラは元氣ハツラツ作戦（那珂案）の打ち合わせをし、別れたのであった

そしてその日、入渠を済ませた川内が天龍と話をするために、天龍の部屋の前に来ていた

「…よしー」

川内は気合いをいれてから目の前の扉をノックした

すると中から「誰だ」と声が聞こえてきた、居てよかったと思い、声をかける

「川内だけど、今大丈夫?」

「川内…ああ、大丈夫だ、今開けるよ」

その言葉の後に天龍が顔を出した、しかし目の下には隈ができていようだったし、顔色も悪いようだった

部屋に招き入れしばらく黙っている川内にたいして天龍が

「どうした、なんか用事かあつてきたんじゃないのか」

「ああ、うん、そうなんだけど、最近天龍達海処か外にも余り出てないじゃない。それで明後日、神通や那珂と一緒にいつもの島に遊びに行こうと思つてね。それで、良かったら、天龍達や六駆の子達も一緒に行かない？気分転換にもいいでしょ」

川内が天龍を誘っていると、天龍はうつ向いてしまった

「悪い、誘ってくれるのは有りがたいんだがまだ…怖いんだ。今、こんなこと言ってる状況じゃないってのは解ってる、でも…あの日、あの怪物と目があつた後からどうしても思い出しちゃうんだ、寝てても夢の中であいつが目の前にいて、奴の口から光線が俺を飲み込まれる瞬間毎日目が覚めるんだ。自分でもどうにかしなきゃとは思うんだが…どうしていいか解らないんだよ！龍田も似たようなもんで、チビ達は誰か他の奴が居ないと安心して生活ができない状態なんだよ、だから悪いけど今回は…」

「…大丈夫、今回は私達も一緒だし、それにその悩みも島に行ったらきっと無くなる…だから今回は、私を信じて一緒に来てくれないかな」

「でもよー」

「いいから、ここでじつとしてると体にも悪いよ。んじや明後日の朝、港で待ち合わせだからね…来なかつたら無理矢理にでも連れてつちやうんだからね。龍田さんや六駆の子達も伝えといてね〜それじゃあね」ドロン

「伝えといてねーって、俺が伝えるのかよ…おい！川内!!」ハァー

天龍はため息を吐くとしばらく考えていた、このまま自分達が腐つていってしまうのかと、冗談じゃないこんな事で落ち込んでいても仕方がない。現にあの怪物の目撃者は俺ら以外では救援来てくれた艦隊ただ、それにあんな所に居たんだ、もうどっかに行っちゃまってると思つた方が妥当だ、あの島だったら会うなんて事もないだろう。よ

し！俺は行くぜ

「…よし！天龍抜錨だ!!」

そうして天龍は龍田と六駆の子達と話をするために歩き始めた

「……少し離れた場所……」

「姉さん、予定通り天龍さんが皆を誘ってます」

「ふふん、旨く行ったみたいだね。それじゃあこつちも

、計画に穴が無いか確認して2日後に備えよう」

「よーし、やるぞ！川内型！オー……!!」

「……………」

「ほら、神通も那珂も一緒にいくよ、オー……!」

「おっおー」

「オー」

そうして、天龍達が皆を説得するのを影で支えつつも作戦決行日になった

港には、川内達と天龍達が集まっていた

「よーし、皆ちゃんと来たね、今日は前に皆で行っていた島に遊びに行きたいと思いまーす。遊ぶ道具とか持ったから、いっぱい遊ぶよー」

勢いで説明した川内だか天龍達は余り乗ってこい

「悪いな川内。何とか皆連れてきてくれたが、やっぱりまだ怖がつてるみたいなんだよ」

そう言うとな龍は皆の方に目を向けた

「大丈夫よね、またあの怪物が出てこないわよね」

「大丈夫だよ暁、今日は近場の島までだから、あそこまで行かないから

大丈夫だよ」ナデナデ

「私は…まだ怖いわ」

「電も怖いのです」

「皆く大丈夫よお、今日は川内ちゃん達も一緒だから今日は楽しみましょー」

そう言う龍田も顔色が悪かった

そんな様子を見た川内は、思ったよりゴジラの与えたトラウマは根が深そうだと思った

「でも、ここで諦めたらもつと酷くなっちゃうかもしれない！」

川内は気合いを入れ直して皆に号令をかける

「それじゃあ、今から作戦名サタデーナイトフィーバー(偽)を開始する」

その号令を受け天龍達は恐る恐るではあるが、海に立ち、川内達の後を付いていくのであった

そして川内達は目的の島へと着くことができた。道中暁が帰るとごね始めたり、電が遠くに、黒くて大きな物が見えたなどと言って、それを聞いた天龍が救援要請を出そうとしてそれを止めたりいろいろあつたが、何とか到着することができた

「あー、疲れたー」

「姉さん、まだ島に着いただけですよ。この後が本番なんですから、今からそんなのでは困ります」

「うーん、那珂もありがとね、六駆の面倒任せちゃって」

「大丈夫だよー、最初は暗かったけど今は、結構笑ったりしてるし」

「そっか、ならよかったー、それじゃあ少し遊んでから作戦実行ってことで」

「はい」

「OK」

そうして、その後しばらくの間、川内達と天龍達は思い思いに遊び、今では天龍達は完全に笑顔を取り戻していて、楽しそうに遊んでいる。川内はそろそろかと思いい天龍達を呼び集めた

「よーし、皆集まったね！どう、来て正解だったでしょ♪」

川内のその言葉に天龍は

「おっおう、何かいろいろスッキリしたよ、チビ達も前みたい怖がつて、海にはいる感じじゃ無くなったし…来てよかったよ、サンキューな川内」

そう言葉を出した天龍は龍田、暁、響、雷、電の順に顔を見ると皆笑顔で頷いた

「そっならよかった。それでお昼の前に天龍達に会って欲しい人？いや、妖精が居るんだけど、会ってもらえる？」

「ん？会わせたい妖精？工房とか艷装妖精とかじゃないのか？」  
「うん、私達もたまにはぐれ艦娘とかいるでしょ。そんな感じの妖精なの」

「へえー、そんな妖精も居るんだな。いいぜ会おうよ、こっちも興味あるし、な！」

天龍は龍田や、六駆の子の方に顔を向け同意を求める

「もちろん、妖精さんだもの、レディとして確り挨拶するわ！」

「ハラシヨー」

「どんな子なのか楽しみね」

「なか良くできるといいのです」

六駆の子達に同意してもらった川内は、早速呼ぶことにした

「おーい、リトルー大丈夫だったー、でて来ていいよー！」

川内が森の方に声をかけると、数秒後森の中からガサガサと出てくる影が見えた。そしてその姿を見た天龍達は驚きの顔へと変わった

「どうも、初めまして妖精のリトルです。宜しくお願いします」ペコリ

そのリトルの挨拶を見た天龍達は、固まったままだった。その反応にリトルが困惑していると

「でっでけー、それに喋ってる。すげー！」

「あ…あら、この子喋るのね」

「は、はじゆめまして、私はあつあかちゆきよ！」

「暁、落ち着いてかみかみでなに言ってるか解らないよ」

「大きいわね、どんな子なのかしら」

「はわわ、ぬいぐるみを着てるのです。かわいいのです」

リトルを見た天龍達は驚いていたが、さほど大きな困惑などなくすぐに仲良くなることができた。

そしてリトルを交えて川内達は昼食をとる事にした

## 8話

昼食をとり食後の休憩を取っていると雷が

「ねえリトル、リトルは一体何をやる妖精なの？」

そう質問してきたので、リトルは

「私はゴジラが、艦娘とコミュニケーションを取れるようにするが役目だよー」

「??ゴジラって何？」

「ゴジラは怪獣だよ、君たちとはもう会ってるはずだけど、その時はまだ生まれていなかったから、うまくコミュニケーションとれなかったみたいだね」

その言葉を聞いて、天龍と龍田は顔を青ざめた

「ちよつちよつと待つてくれ俺達と会ってるのか、そのゴジラって奴と、一体どこで会ったんだ。おつ俺達はリトルと…」

そこまで言つて天龍は気づいた。リトルの格好だ、最初は恐竜の着ぐるみだと思つて気にしなかったが、良く見ると似ているのだ、あの日見た巨大な怪物の姿と…冷や汗が出る、違つていて欲しいと思ひながら天龍は質問を続けた

「おつ俺達と会つたつて、1ヶ月位前の事か？」

「うーうん、それ位つて聞いてます」

リトルのその答えに暁達も何かを察したのか、顔が青くなつていく「でも誤解しないで欲しいんだ、あの時ゴジラは君達を助けようとしてたんだよ」

「嘘だ!!あの時、確かにあいつは、俺達を狙つてたんだ!!」

「でも助けようとしたのは本当だよ」

激昂する天龍を止めたのは、川内だった

「…私も助けてもらったからね」

川内の意外な言葉に天龍は固まった

「は…助けてもらったつて、あの怪物にか、お前、あいつに会つたことあんのかよ!!」

「うん、それに友達にもなつたよ」

天龍は、いや、他にも龍田や暁達も、もはや川内のいつている意味が解らなかつた

「もう一つ言うと、今回皆を呼んだのはゴジラの誤解を解くために、ゴジラと話をしてもらおうと思つてね」

「はつあいつと話し合うつて、今から、冗談だろ」

天龍はさすがのように川内に目を向けるが

「大丈夫、本当にゴジラは悪い奴じゃないんだ、見た目は…まあ怖いんだけど、話せばきつと解り合えるから」

「…本当に、あんな怪物と話し合いをするのか？」

「うん、そうして欲しいと思つてる」

「…そうか、少し暁達とも話し合わせてくれ、いきなりすぎて皆混乱してんだ」

「確かにそうだね、こつちこそ急にこんな事言つてごめんね。私なりに考えて、天龍達に元気になって欲しくて、こんな事したんだ」

そう言うと川内は天龍達に向かって頭を下げた。

その姿を見た天龍は頭をかくと

「あーそれは、こつちも悪かつたから頭を上げてくれ、取り敢えず皆と話しして来るからよ」

「あつ、それならリトルも入れてあげて、ゴジラと一番一緒だったのはリトルだし、解んない事あつたら答えてくれるから」

「おつおう、解つた、そうしてみる」

そして、天龍達はリトルと一緒に川内達から離れていった

「そう言う事だ、どうするよ皆、俺には一体何がなんだか解らねえよ」

「そ…そうねえ、いきなり話し合いだなんて、どうしたらいいか解らないわあ」

「…ねえリトル、あなた達は本当に私達を助けようとしてくれたの？」

暁はリトルに質問する

「はい。その時私は生まれていませんでしたが、確かにあなた達を助けにいったと言つてました」

「それは、間違いないのか？」

「はい、それでその後、川内さんに会つて天龍さん達が、元気がなく



なっているのを知って、へこんでましたし」

「ほ…本当なのか」

そして、天龍達はリトルに質問などしたりして話を整理していった  
「ゴジラについては、リトルに話してもらった事を信じるとして、これから会うんだが皆大丈夫か？」

「私はく何とか大丈夫よ」

「私はちよつと怖いけど、レディとしてお礼くらい、  
、いわなきやね」

「問題ないよ」

「私は会ってみたいわ、何か聞いてたら興味が出てきたわ」

「わ…私は怖いですが…でも、暁ちゃん達も一緒なら頑張るのです！」

「解った、それじゃあ、川内の所に戻ろう」

天龍は全員に、ゴジラと会う意志があるか確認をとると、川内にそれを伝えるにいった

「おい川内」

「あつ、天龍！戻ってきたね、それで、どうする」

「あくいろいろリトルに聞いたよ…ゴジラに会うよ」

「そっか、ありがとう。それじゃあ早速呼ぶからちよつと待ってて」

そう言うのと川内はリトルと話してから海岸に行き

「オーイ、ゴジラー、大丈夫だつてー、もう出て来てもいいよー」

川内が呼び掛けて、少し待つと、島から少し離れた場所の海面が盛り上がり、ゴジラが姿を現した…顔半分だけ。

ゴジラは顔を半分出した状態で島に近いて行き

「どうも、お久しぶりです。ゴジラです」

とそのまま天龍達に挨拶した、天龍達は戸惑いながらも

「あつああ、お久しぶり？…です、俺の名前は天龍よろしくな」

「私は、天龍ちゃんの妹で龍田つて言うの、宜しくね」

「こつこんにちは、わ、わわ私はあかちゆ…暁つて言うの、  
、宜しくお願いします」

「ひさしぶりだね、私は響、不死鳥とも呼ばれているよ」

「こんにちわ、私は雷よ、宜しくね」

「電なのです、よ、宜しくお願いするのです」

全員の自己紹介が終わった所で天龍が

「なあゴジラ、あんたがあの時、俺達を助けに来てくれたってことは川内やリトルから聞いたよ。あの時はありがたいな、それにそんな時勘違いしちまって悪かったな」

そう言つて、天龍が頭を下げると龍田と暁達も頭を下げた

「いや、あの状況じゃしようがないよ、こちらこそ怖がらせて申し訳ない。それにその後も、トラウマみたいになってたって聞いてたから、その、今は大丈夫か？」

その言葉に天龍は固まり

「あつああ、正直まだ少し体が強ばるけどなんとか大丈夫だ、な…なあもしかしてゴジラが顔半分しか見せないで島に上がってこないのは、俺達を怖がらせないためのなのか？」

「え!? あつああうん、川内達と話し合つて顔半分だけなら余り怖がられないかなつて、あと島に上がつちやうと皆顔見上げて話すことになつちやうから、この方がいいかなつて思つて…え! もしかして逆に怖がらせちやつたかな…」

「い…いや、そう言う訳じゃないんだ、さっき言つたように話を聞く前ほどじゃないから大丈夫だ、ただ本当に悪い奴じゃないんだなつて思つて、あの時も俺達のために助けに来てくれて、今回も俺たちに気を使つてくれて、何か逆に申し訳なくつて…うん、決めた、俺はもうゴジラを怖がったりしない、それにあんまりうじうじしてるのは何か俺らしくないしな。皆はどうだ」

そう言うのと天龍は龍田達を見た

「私はくまだ少し怖いけど、天龍ちゃんがそう言うなら、私も怖がらないように努力するわ」

「暁は、まだ怖いけどでも、助けてくれた恩人を怖がるのはレディじゃない気がするの、だから私も怖がらないようにするわ」

「私は、正直ゴジラが敵だったらつて怖かつたけどそうじゃないつて解つて、ホツとした感じだね。これからなか良くできたらと思つよ」  
「私もまた襲われたらつて、怖かつたけど、これからは大丈夫よ、すぐ

「にって訳じゃないけど悪い人じゃないみたいだし」

「わ…私はまだ怖いのです、悪い人じゃないって事は解ったけど、やっぱりまだ怖いのです」

「電…うん、無理しなくても大丈夫だよ、ゴジラだって解ってくるよね！ねっ！ゴジラ」

川内はゴジラにそう言うと

「えっおっおう、それはこっちが怖がらせちゃったから「でも!!」

「電も皆と一緒に、少しずつゴジラさんと仲良く出来たらなって思ってるの…です」

そう最後に電は付け足した。

それを聞いた天龍達は笑って電を抱き締めた

「ああ、皆で少しずつでも仲良くしていこうな」

そうして暫く天龍達は抱き合っていた

それを見ていた川内が

「じゃあ、皆でゴジラの頭の上に乗せてもらおうか！」

と言ってきた

## 9話

「じゃあ、皆でゴジラの頭の上に乗せてもらおうよ!」

その言葉で抱き合ってた天龍達の空気がピシッと凍った

「えっ…川内…さつき少しずつって話をしてたと思うんだけど」汗  
そう言う天龍に合わせて暁達もうんうんと、首を縦に振る

「えっ…だから最初にゴジラの頭の上に乗って仲良くなるんじゃない」

川内は首を傾げながら話をする

「いや、最初は話をしてみたりとか、色々お互いに知ってから乗せてもらうとかじゃないのか?」

天龍もなんとか食い下がろうとするが

「そう? 私は会ってそんなに経ってないけど、乗せてもらったけど、すっごい! 気持ちよかったよ、飛んでるみたいだった!」

その川内の楽しそうな言葉になんと返そうか天龍が迷っていると

「それなら、私が乗せてもらってもいいかな」

「なっ響!」

天龍と川内の話に割って入ったのは響だった

「私は、元々敵になったら怖いと思っていただけで、その可能性が無くなれば…そんなに恐れてはいないからね。どうだろう乗せてくれるかい?」

と響はゴジラへと問いかけたが、ほぼ蚊帳の外だったゴジラは急な問いかけに、若干慌てながら返事を返した

「うえっ! ああいや、うんいいよ、ぞ」

その返事に響はキョトンとした後笑い始めた

「アハハ…そんなに慌てなくてもいいよ、何をそんなに慌てる必要があるんだい、体も力もゴジラの方が大きいのに…それとも私を乗せるのは嫌かい」

響は少し不安そうにゴジラに聞いた

「いや、嫌じゃないむしろウェルカムだよ、たださつきまで話に入っていなかったから、急に振られて慌てただけなんだよ」

「そっか、それならよかった。それじゃあ近づいてもいいかい」

「ああ、どうぞ」

響はゴジラにそう言うと、海に出てゴジラに近づいていった  
「ふむ、このまま口の方から上がっても大丈夫かな？」

「ああ、大丈夫だよ、噛みついたりしないから安心して」アハハ  
「……………」

その言葉に響は少しビクツとした、その反応を見たゴジラは

「わー！冗談、冗談だからゴメン本当に大丈夫だから!!」

慌てふためくゴジラに

「流石に、君が言うのと洒落にならないよ」プクー

と少し怒ったように返した

「ゴメン、ゴメン心配だったら後ろから乗るといいよ、ゴメンね」

「ううん大丈夫だよ、これくらいの冗談は言い合えるようになりたい  
しね」

そう言うと、海面から少し出ている鼻先から頭の上へと上がって  
いった

「うん、思ってた通り結構ゴツゴツしてるね」

「そうかい、自分ではそういうの解らないからね、それじゃあ、体を出  
すから確り掴まってね」

「ダー」

そしてゴジラはゆっくりと体を海面に上げていき、上半身が出た状  
態になった

「取り敢えずこれが海上に一番出た状態だけど、怖くないかい？」

その問いかけに響は少し、興奮しながら

「ああ、大丈夫だよ、これは想像以上に気持ちがいいね」

「おーい、響ー、大丈夫かー!」

したの方から天龍が声をかけてきた

「うん！思ったよりも、とても気持ちがいいよー」

そう返事を返し

「ねえ、このまま進んでくれないかい」

その要望に答えゆっくりと海上を進んでいくゴジラ

「おおー!!ハラショー、こいつは力を感じるね!!もつと速く進めるか



「別に響が降りなくても、皆で乗ればいいじゃない」

「皆と一緒に怖くないのです」

そうして、響を乗せたまま暁達の話し合いは続いた、それを見てゴジラは

「別に、皆のつても大丈夫だから皆で乗ればいいよ、もちろん確り掴まって落ちないようにしてくれよ。そうじゃないとまた川内達に怒られるからな」

ゴジラのその言葉を聞いて、暁達はゴジラに近づいていった。先程の失敗もあるので今度は怖がらせないのうに黙っていた、まだ少し怖がりながらも暁、雷、電はゴジラの頭上に乗った

「よし、皆乗ったね…それじゃあ立つから確り掴まっててね」

「二はーい！（なのです！）」

そしてゴジラはさつきと同じ要領で立ち上がりゆっくり歩き始めた

「うわー綺麗ー」

「遠くまで良く見えるのです」

「風が気持ちー」

「フフン、そうだろう」

（（なんで響が自慢げなんだろう））

「四人とも大丈夫かい、速すぎたりしないかい？」

「皆大丈夫そうだよ、ゴジラそろそろさつきみたいスピードを出してくれないかな」

「ん？いいよ、それじゃあ、もう少し速くするから皆確り掴まってね、危ないと思ったら直ぐに言ってくれ」

「結構速くなるの？」

「大丈夫だよ、さつきもやってもらったけどすごく気持ちがいいんだ、それと、一つお願いがあるんだけどいいかな」

「二？」

「よし、皆準備はいいかな、それじゃあいくよ」

そう言うとゴジラはスピードを上げていった

「うわー、はやーい」





そう天龍が閉めようとしたが

「なに言ってるの、天龍達がまだじゃない」

「うえー！いや俺たちは別に乗らなくてもいいかな〜って、なあ龍田！」

「そうね〜無理して今日乗らなくてもいいと思うの〜」

天龍はそう言って断ろうとする二人に

「天龍さん達も乗せてもらった方がいいわよ、スツゴい楽しいんだから」

「ゴジラとも仲良くなるには、丁度いいと思うよ」

暁と響にそう言われて観念した天龍は

「解った、解ったから、ほら行くぞ龍田」

「えっ！え〜そうね一緒にいきましよう」

そう言うと天龍達はゴジラに近付き

「お、おう、それじゃあ、今度は俺たちもお願いしていいか？」

「よ、宜しくね〜」

そうゴジラに話し掛けた

「おう、大丈夫だぞ、それじゃあ上がったら確り掴まってくれ」

「ああ、それじゃあよろしく頼む」

「お願いするね〜」

天龍達は少しビク付きながらも頭の上に上がり、言われた通り掴まった

「よし、それじゃあ立つからな」

そう言うとゴジラは立ち上がりゆっくり島の外周を移動し始めた

## 10話

天龍達が島を出て少しすると天龍が馴れてきたのか

「おお、本当に眺めいいなー」

「ええ、風も気持ちいいわあ」

「ハハハ、それならよかった」

そうして感想が言ってから天龍達は無言になってしまったが

「…なあ、ゴジラ」

「ん、何だ」

「なんで、あのとき助けてくれたんだ？」

「ああ、その事か、それはたまたま俺が近くにいたからってだけで偶然だよ」

「そうか、偶然か…それでも俺は、ゴジラに感謝してるんだぜ」

「そうか…」でも…でも、それと同時に恐れてるんだ、さっきはあんな風に言っただけで、俺も龍田もお前の事が怖くて仕方がない、悪いやつじゃないのも解ってる、暁が元気になってお前になついて安心した。でも、俺達は最初にお前と会って、あの強さを知ってもし敵になったり、襲ってきたらと思うと気が気じゃないんだ!!今だって本当は震えてるんだ…」

「天龍ちゃん…」

素晴らしい終えると、天龍達は泣き始めてしまった、そして天龍達の思いを聞いたゴジラは

「確かに、あの時、俺は天龍達を怖がらせてしまった、それでもあの時、天龍達を助けたかったって言うのは嘘ではないし、怖がらせちゃったけど後悔もない、だから、さっき天龍が俺を怖がらないって言うってくれた時俺、嬉しかったんだ、こんな姿だから直ぐに受け入れられないとは覚悟していた。でも天龍は川内とリトルの話聞いて受け入れてくれた、怖がらないようにしてくれた、正直それだけで十分だ。無理しないで少しずつでいいから仲良くしてくれたら嬉しい。」

「ゴジラ…ありがとな、何か良い使わせちゃって」

「いや、いいよ、内側に溜め込むよりはいい。それで、天龍はどうする」

「??どうするって何をだ？」

「響達が大声で叫んでたら、天龍達は叫ばないのか？」

「えっ！いやー俺達は別に…」

「いいからやってみ、俺もするから」

「うっ…わっ解ったよ…龍田も、ほらやるぞ」

「え！わっ私も」

「当たり前だろ、俺だけなんて不公平だ」

「わっ解ったわよ」

「…よし行くぞ、スウー」

「うわー…」

「わっわー…」

「もっと大きな声で!!」

「ワアアア…!!」

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

そうして天龍達とも島を一周しなんとか仲を縮める事に成功したゴジラであった…

「はあ、確かに、さっきよりもスッキリした感じだよ、ありがとな、ゴ

ジラー」

「え〜そうね、震えも止まってるわ…」

「ならよかった。それじゃあ、降ろすからな」

そしてゴジラから降りた天龍達は川内と合流して

「どうだった、天龍、随分スッキリした顔になったけど」

「ああ、もう大丈夫だ、心配かけて悪かったな川内、そしてありがとう」

「…」

「えっ！いや、そんな、私はただゴジラと仲良くして欲しかっただけで

…」

「あー！川内ちゃん照れてるー」

「姉さん、こう言うときは素直に、お礼を受けとればいいんですよ」

「うーうん、どういたしまして、皆！」

そうして天龍達のゴジラへのトラウマは川内のおかげで取り敢えず克服する事に成功した

「よし、それじゃあ、そろそろ帰ろうか？」

「そうですね、余り暗くなる前に戻りましょう」

「皆もそれでいいよね」

「ああ、それで問題ねえけどよ、ゴジラはどうするんだ」

「俺、俺は自分の島に帰ろうと思ってるけど」

「ええ！ゴジラ帰っちゃうの!!」

ゴジラが自分の島に帰ると言うのと暁達が残念がっていた

「せっかく仲良くなったのに、残念だね」

「もつと一緒に遊びたかったわ」

「ゴジラさんのお家は、ここから遠いんですか？」

「んっ？大体この辺から1日半位いった場所だな」

「結構遠いな、それに、今の状況じゃあ、こつちから向かうのは無理そうだ」

「なあ、こつちに来るのが難しいって今、そんなに悪い状況なのか？」

「そっか、その辺ゴジラに話したことなかったもんね」

そう言うのと川内は今の戦況を話始めた、深海棲艦との数の違いとそのせいで補給もままならなくなって来たことを話した

「そうか…そんなに悪い状況だったのか」

「うん、それで近々補給路の確保のために大規模作戦が開始すると思う」

「!!姉さん、そんな事まで喋っては…」

「解ってる!!…ゴジラ、出来ればその作戦に参加して欲しいの、都合のいい話をしてるのは解ってる、でも、その作戦が失敗したら…もう、私たちに後はないかもしれないから…」

「川内：俺からも頼む、ゴジラが協力してくれればきつと作戦は成功する、怖がっという都合のいい事言ってるのは解ってる、でも！お願いします!!」

そう川内と天龍が頭を下げると龍田、神通、那珂、暁達も頭を下げた

「……………」

と言ってきたのだ。ゴジラはそれを見て

「おいおい、頭を上げてくれ皆」

「でも」と川内が言いかけるが

「俺達はもう友達だろ、友達が困ってたら助けるのは当たり前で、それに命が掛かってんなら尚更だ。だから頭を上げてくれ、俺と皆は友達、いや仲間なんだから」

「ゴジラ：うんありがとう、そして改めてお願い、私達を助けて…」

そう川内が言うとゴジラは力強く

「おう、俺に任せとけ！絶対に作戦を成功させてやる」

「うん、ありがとう」

そう言う川内達は、皆泣き始めてしまった、いきなり泣き始めたのでゴジラもリトルもオロオロとしてるだけで、皆が泣き止むまで待つしかできないでいた

「ゴメンね、ゴジラ、急に泣いちゃって、なんか安心したら涙が出てきちゃった」

「いや、それはいいんだが、大丈夫か？」

「うん、もう大丈夫、ありがとうね、それで早速んだけどゴジラにはこの島にいて欲しいんだけど大丈夫？」

「ああ、それは問題ないよ、ちなみにその作戦っていつになるんだ？」  
「うん、作戦事態はいつになるかはまだ私達にも知らされていないんだ、だから決行日が決まったら教えに来るよ、たぶんまだ偵察とかして敵の規模とかを見てるんだと思うから、もう少しかかると思うんだ、それと出来れば一度ゴジラには私達の鎮守府に来て欲しいと思ってるんだ、どうかな？」

「うーん、確かに、いきなり参加したら混乱するかもしれないしな、解った、そっちがよければ向かうよ」

「良かったー、私の方から提督には話すから後で迎えに来るよ」

そう言うて安堵している川内にゴジラは

「ただ一つ勘違いしないで欲しいことがあるんだ」

その言葉に川内達は息を飲む

「…勘違いって？」

「それは俺は、あくまで川内達のために参加するんであって、人間の命

令で動く訳じゃないってことだ、何かあった場合、俺は川内達の安全を優先に動く、そこを勘違いさせないでくれ」

「あつうん…ありがとう、取り敢えず伝えとくね」

「おう、伝えといてくれ、それじゃあ、鎮守府にいく日までここで待ってるわ」

「うん、そうしてくれる。それじゃあ私達はこれで帰るね」

「ああ、またな」

そう言うとき天龍や神通達も別れの挨拶をし、島を後にした

—————

—————

—————

—————

—————

—————

とある深海棲艦の基地外周海域

「撤退！撤退だ!!」

「なんなのこいつら、全然攻撃が効かない」

「空母は艦載機を飛ばして、他にも水偵も飛ばせる人は飛ばして、何としてもこの事を司令部に伝えて、ここには怪物がいるって!!」

「解ったわ！艦載機発艦！」

「発艦!!」

「頼んだわよ、私達も急いで…」ドガガガ、ドカーン

「何が!!」

飛ばされた艦載機と水偵は突如現れた深海棲艦の戦闘機の攻撃によつて、すべて墮とされた

「艦載機と水偵が!!…あれは、深海棲艦の艦隊!!」

「くそ！何だつて、こんな時にやっぱりこいつらは新しい深海棲艦の仲間なのか!!」

「いや、見て、あいつら深海棲艦の方にも向かってるわ!」

「本当!!よし、今のうちに撤退するわよ、急いで!!」

「待って、あいつら何か散布してる、黄色い液体みたい」

液体を散布する深海棲艦、すると今まさに近付いていった怪物は反転し、こちらに戻ってきた

「そんな！どうして戻ってくるの!!」

「今は、そんな事より、一刻も早くここから離れるわよ!!」

「何で、何で、何で、なん…は」

ザバアという音とともに、巨大なハサミが見え止まっていた空母の艦娘を捕らえた

「いやあああ！助けてー!!」

「捕まった。皆あのハサミを撃つて、助けなとー!」

そして捕まった仲間を助けるために、攻撃をするが

「い…痛い…痛い痛い痛い…」バツン

ボチャン、ボチャンと仲間だった物の上半身と下半身が海に落ちた、そして、それを皮切りに

「早く、早くここから離れないとつガ…」バツン

一人、また一人と怪物達に真つ二つにされていき、とうとう艦娘は一人だけになってしまった

「嫌だ、こんなの嘘だ！何で私達だけ深海棲艦も居るのに、助けて、助けて、…ハッ！そうかあの黄色液体、あれのせいだ、あの液体の散布されてる所まで行ければ…」

そう思い、深海棲艦の方へと駆け出そうとした瞬間足に痛みがはしった、恐る恐る見てみるとそこには怪物のハサミが自分の足を挟んでいた

「いやあああ！離せ離せ離せ」

ハサミを攻撃するがビクともせず、艦娘はそのまま宙に持ち上げられた

「XXXXXXXXXX」

怪物は鳴き声を上げると、艦娘を口へと運んでいった

「そんな!!いやいやいやー、やめてやめてやめてー」バキバキボキメ  
キヤ

艦娘は必死に抵抗したが、抵抗虚しく怪物に食べられてしまった、そしてその場所には怪物以外誰もいなくなった、唯一、遠くでその光

景を見ていた深海棲艦達

「アハハハ：カワイソウナカンムス、オオカタテイサツニデモキタン  
デシヨウネ。フフフ、ウンガナカツタワネ」

「センカンセイキサマ、ソロソロモドラナイトクスリノ、ノコリガスク  
ナクナツテキマシタ」

「ソウ、ソレジャア、キトウシマシヨウ、ニシテモ、イマイマシイヤツ  
ラダ。コノヤクヒンガアルカライイモノノ、ワレワレノコウゲキモフ  
セグトワ」

「ホカノカイイキデモ、ドウホウガシヨウソクフメイニナルバシヨガ  
アルヨウデス、ヤツラガホカニモイルカノウセイガ」

「ソウ、デハヤクヒンノセイサンライソガナイトネ」

そう言うとき深海棲艦はその海域を後にした、その様子を五体の怪物  
に見られながら

「「「「」」」」



## 11話

「……………鎮守府、執務室……………」

「提督、大本営からの書類があるぞ」

「ん…ありがとう長門どれ…ふむ、とうとう来たかしかし、これは」

「何が来たんだ？」

書類を見て、真剣な顔つきになった提督に長門が質問する

「ああ、今判明している深海棲艦の基地に攻勢を掛ける、大規模作戦が決行される事が決まった」

「そうか…とうとうこのときが来たか、今まで何人も海に散っていった、我々も、もういつまでもこの戦線を維持するのは困難なってきた…この作戦にすべてを掛けるという訳だな」

「そう言う事なんだろう、基地の制圧、海域の解放による資源、物資の確保、この作戦の成功で多くの問題が解決に向かうはずだ…しかし、妙だな？」

「妙とは？」

「いや、この作戦辞令書には攻撃する基地の場所と日時しか書いてなくてな、予想される敵の艦種どころか、大まかな敵の配置すら書いてないこれでは、こちらでは対策が練れない」

「ふむ、きつと今度の会議で知らされるのではないか、万が一でも失敗の出来ない作戦だ、本営も慎重になってるんだろう」

「それならいいんだが…」コンコンコン

そんな話をしていると執務室の扉をノックする音が聞こえた  
「誰だ」

「川内です」

「入れ」

「失礼します」

そう言って入ってきた川内は、部屋のピリ付いた空気を感じ

「二人ともどうしたの？何か変だよ」

その言葉に提督は話そうとしたが、後で集会開いたとき全員いる場所の話そうと思い、話すのを止めた

「いや、何でも無い、それよりどうしたんだ」

「えっ！あーそうなんだ、実は提督に会ってほしい人？が居るんだけどさ」

「ん？なんだ、その含みの言い方は？」

「うん、私も何て言っているのか解らないんだけど、私達に力を貸してくれるって人がいるんだ」

「何、このタイミングでか？…そいつは何者なんだ、はぐれの艦娘とでも遭遇したのか？それなら、そのまま連れてくれば良かっただろう、何か問題でもあるのか？」

提督は、このタイミングで接触して来た人物に警戒していると

「いや、艦娘とかじゃないんだ…」

「ふむ、会うのはいいが、何故そいつは我々に力を貸すと言ってきたんだ？」

その質問に川内は

「えっとそれは、私とその人と友達になって、それで力を貸してほしって頼んだから」

「何？友達になっただと、そいつが何者かも解らないのに力を貸してほしいと頼んだのか！今がどういう状況か解っているのか、もう少しで大規模作戦が発令されるんだぞ。そんな時に得たいの知れない奴を招き入れるような危険な事、出来るはずないだろう!!」

提督は少々声を荒げながら川内に言った、その様子をみていた長門が

「まあまあ、少し落ち着け、もう少し詳しく川内に聞いてから判断してもよからう。そうだな川内、詳しくそいつの事を教えてくれ」

そう言っつて川内に助け船を出した

「ありがとう、長門さん、その、変な言い方してごめんなさい、自分でもどう説明したらいいか纏まっていなかったみたい」

「いや、此方こそすまない、少し興奮してしまったようだ」

「いやいいよ、それでその人のことなだけどね実は人でもないんだ、それに長門さんも見たことあるんだ」

「何だど？それは、どう言うことだ」

「実は、前に天龍達を助けに行った時に出た恐竜なんだよね」

川内の言葉に今度は長門が声を荒げ

「そんなバカな話があるか！あんな化け物と一体どうやって友達になるんだ、第一意志疎通が出来ないではないか!!」

「うん、実は…」

そうして川内は天龍達を助けた後、夜にゴジラとその妖精であるリトルと会ったこと、そして友達になり天龍達を協力して天龍達を元氣付けた事を話していった

「そんな、本当の事なのか、確かに最近天龍達は前のように元氣になっていたが、にわかには信じられん」

「でも、本当の事だよ!!」

「何にしても、深海棲艦百隻以上相手にして勝てるような奴が協力してくれると言っているんだ、取り敢えず会ってみる価値はあるな：解った、会おう、それでどこで会えばいいんだ？」

「ありがとう、提督それで場所なんだけど。鎮守府に来てもらおうと思ってるんだ」

「何だと！そんな怪物を鎮守府に招くというのか!!」

「怪物なんかじゃない！ゴジラはいい奴なんだよ、それに信用も出来る、何より今の状況じゃあ私達が行くよりも、ゴジラに来てもらった方が全然安全なんだよ」

「それは、そうだが：くっ！もういい私は提督に従う、提督：決めてくれ」

そう言つて長門は提督の判断を待った

「確かに、川内の行言つた通り今の状況ではその方がいいだろう、しかし本当に信じてもいいんだな、川内」

そう言つて提督は川内を見つめた、それを川内は真つ直ぐ受け止め

「うん、絶対大丈夫、私を：ゴジラを信じて！」

その答えを聞き提督は

「ふう、そうかではそうしよう、長門、今日の1700に哨戒任務のある者以外講堂に集合させてくれ、そこでこの事を全員に説明する」

「いいのか、全員だなんて混乱するかもしれないぞ」

「構わない、どうせ鎮守府に来た時点で皆に知られるんだから、それに大規模作戦の事もある、その事も話すよ」

「確かにそうだな、すまない、冷静でなかったのは私の方だったようだ」

「いや、いいよ、私も急にこんなことになって正直慌てないでいるのであるのがやつとだ…とところでいつそのゴジラはうちに来るのかな？」

「ああ、うん、今日にでも皆に説明してくれるんなら明日にでも連れてくるよ」

その言葉にまたしても驚く提督達だが、なんとか持ち直し

「そ、そうか、ではそうしてくれる他に何かあるか？」

「えっとお…その…いや、もうないかな」

「?…そうかでは1700に講堂で、ああそれとその際川内も私の隣に来るように」

「了解しました」

「では出て行きたまえ」

そうして川内は執務室を後にした

そうして1700講堂には鎮守府に所属している艦娘の殆どが集まっていた

「急に集会だなんて、何かあったのかな？」

「警戒任務がある人以外全員だもんね」

あちこちでそういった話がされる中、講堂に提督達が入ってきたすると行動の中は静まり返りその中を提督達は檀上に上がっていき

「全員集まっているな、今日集まってもらったのは他でもない、大本営から敵基地攻略の大規模作戦が決行される事が知らされた、我が鎮守府からも必要最低限の防衛力を残しての全力出撃が言い渡されている。作戦決行日は今日より2週間後だ、それまでに装備の点検や各自体調を整えておくように、それと私は三日後に大本営に向かうことになる、その間留守を頼むぞ、それともう一つ、これは川内、お前が説明してやってくれ」

そう言うと提督は下がり川内が前出る

「皆、私の方からは、実はこの大規模作戦で心強い助っ人が頼めたん

だ」

川内のその言葉に周りがどよめいた、今のこの状況で助っ人なんて考えられなかったからである

「それは、どんな艦種の艦娘なんですか？」

もちろん全員がその助っ人を新しい艦娘だと思い、そんな質問が返ってくる

「いや、その助っ人は艦娘じゃないんだ、この間天龍達を助けに行った時に巨大な恐竜が出たって噂が出たじゃない、実はその助っ人ってその恐竜なんだよね」

川内のその答えに天龍達以外全員が??マークを浮かべたが川内は気にせずに続けた

「その恐竜の名前はゴジラって言うんだけど、実は私達と一緒に妖精さんが付いていて喋ることが出来るのそれで…」

そうして川内は執務室で話したことを全員の前で話たそして最後に

「私は、ゴジラなら皆とも仲良くやっていけると思ってる、最初は怖いかもしれないけど話してくれたらきつと解ってもらえると思うんだ」

川内が喋り終わると今度は行動の中から天龍が

「川内の言っていることは本当だ、俺達も最初は怖がっていたけど、ゴジラと話してみてもこいつは悪いやつじゃないんだって思った、現に俺達は話をする前はゴジラに恐怖を抱いていて部屋から出られなくなってたけど、川内とゴジラのおかげで前と同じように元気になれたんだ」

素晴らしい終えると、龍田と暁達からも同意の声が上がりその言葉を聞いていた他の艦娘もまだ半信半疑の様だが、特に反対する者もおらずその様子を見ていた提督が

「それではこれで連絡事項は以上とする、現在哨戒に出てる者には後で伝えてやってくれ、ああそうだ、川内、ゴジラが来るとしたら何時くらいに来れそうだ？」

「うん、朝迎えに行くから、昼過ぎ位にはこれらと思う着いたら連絡す

るよ」

「解った、では明日の昼過ぎ川内から連絡が入ったら放送するから空  
いてる者は港に集まってくれ、では解散」

そうして、解散した者達は一斉に川内と天龍達の周りに集まり、ゴ  
ジラについて質問していった、こうして鎮守府での1日は過ぎて行っ  
た

## 12話

次の日、川内はゴジラを迎えに島に来ていた

「おーい、ゴジラー、リトルどこー?」

川内はゴジラ達を探して森の中へと入っていき、暫くすると

「ハイハイ、こんにちは川内」

「あっ!! いたいた、こんにちはリトル。ゴジラは?」

「ゴジラならこの先にいますよ、今呼びますね、おーいゴジラー」

リトルが呼び掛けると森の奥からバキバキと木々を倒しながらゴジラがやって来た

「はいよー、どうしたんだリトルー」

「川内が来たよー」

「こんにちは、ゴジラ」

「おう、川内今日はどうした?」

「うん、この前鎮守府に来てほしいって言ったじゃない、その事なんだけど」

「おお、言ってたな行く日決まったのか?」

「うん、今日来てほしいんだ」

「今日! 随分急だな、まあいいけどじゃあ今から行くのか?」

「うん、まあ昼過ぎくらいに着くようにすればいいから、そんなに急がなくても大丈夫だよ」

「そうか、まあ俺達は大丈夫だから行くとするか」

「解った、それじゃあ着いてきて、道中ちよつと話しとかないといけない事もあるんだけどね」

そう言う川内達は島を出発し、鎮守府へと向かう

「ねえゴジラ」

「どうしたんだ、何か話があるって言ってたけど?」

「うん、実は一つ謝らないといけない事があった」

「謝ること? 何かあったのか?」

「前、ゴジラ作戦中人間の言うこと聞かないから、その事伝えとくように言われたじゃない」

「ああーその事か、何か問題でも起きたのか？」

「そう言うゴジラは少し険しい顔になる」

「いやー問題っていうか…私が伝えられなかったんだ。伝えようとはしたんだけど…やっぱり言いづらくて…」

その後川内は執務室での会話や講堂での事をゴジラに話した

「そうか、作戦は2週間後か。まあ他の艦娘とは会ってみないと解らないし、それに川内が言いづらいのは尤もだ、気にする必要はないよ、その辺は俺が直接言うから気にしないでくれ」

「ゴジラ…ありがとう、それと会うときなんだけど前みたいに最初は顔だけ出してくれない」

「おう、その辺は解ってるよ、町とかも近くにあるんだろ？俺の姿なんて見られたらパニックになっちまうからな」

「ああ、その辺は大丈夫だと思う町からは見えないところだから」

「そうか、なら安心だな」

その後もいろいろな話をしながら海を進んでいくと

「見えたあれが鎮守府だよ」

「ほお、あれが」

「うん、そう、私ちよつと鎮守府に連絡するよ、もうすぐ着くって」

そして川内は通信を始めた

「—————鎮守府、執務室—————」

「提督、川内から連絡が来ましたよ、もうすぐ着くそうですよ」

「そうか、解ったそれじゃあ放送を入れてくれ、場所は工房奥の港だ、頼んだよ大淀」

「はい、了解しました」

「そう言う大淀は執務室を出ていった」

「ふう、とうとう来たか」

「そう言う提督は椅子に深く座り直す」

「どうした、今さら怖じ気づいたか？」

「いや、いまだに信じられないんだよ、長門や皆が見たって言う恐竜がうちの鎮守府に来るなんて…」

「確かに、しかも我々に助力してくれると言っているんだ、私でさえま



だ信じられないよ」

「まあそれももうすぐ解ることだ、一体どんな奴なのか見極めさせてもらうとしよう」

「そうだな、どれ。そろそろ行くとしよう、我々が遅れたとあれば信用にも関わる」

「確かに、それは困るな。では、行くとしよう」

「そう言う」と提督と長門は執務室を出ていった。しばらくして港につくと、そこには既に多くの艦娘達が集まっていた

「あつ！提督と長門さん、やっと来たんだね、もう遠目に川内さん見えてきてるよ」

「む、そうか、どれ…あれ、川内しか見えないぞ？」

「うん、そうなんだけど、天龍さん達が言うには潜ってるんじゃないか…だって」

「確かに、あの時も潜っていたな、それなら川内しか見えなくても納得だな」

「なるほど、潜ることも出来るんだな」

「ああ、あの時はきもが冷えたよ、下から攻撃されるんじゃないかと思っただけだから」

「あー、そんなことも言ってたな、あの時は本当に信じられなかったよ」

「まあ信じろと言う方が難しかったしな、あの時の報告でも本営は信じなかったのだろう？」

「ああ、俺だって報告しててなに言ってるか解らなかつたから、その時は俺も肝が冷えたよ、でもこうして実物に会うんだ、信じるしかないだろう」

「フフフ、そうだな…おっ！どうやら着いたみたいだ」

「そう言つて海を見ると川内はすぐそこまで来ていた  
「皆ーただいまー連れてきたよー」

「そう言つて、港に着いた川内が海から上がってきた」

「お帰り川内、無事でよかったよ、それで、ゴジラはまだ潜っているのかな？」

「うん、まだ潜ってもらってる、それじゃあ早速呼ぶね！ゴジラーもう出てきて大丈夫だよー！」

川内がそう言うと、海が盛り上がりゴジラが顔だけだした。集まった艦娘達が「おーー！」と声を出す、顔から下を出さないゴジラをみて？マークを出していた、それを見て川内が

「あー皆、ゴジラが顔しか出さないのは皆を怖がらせないようにするためなんだ」

そう説明すると艦娘達は納得したのうに「あー」と声を出した、その様子を見ていたゴジラが

『なあ川内、そろそろ自己紹介しても大丈夫か？』

そうゴジラが言葉を喋るとまたしても艦娘から「おーー！」と声上がるがそこに提督が

「少し待ってくれ、先ほどゴジラが鳴いていたが喋るんじゃないのか？それとも皆にはゴジラが何を言っているのか聞こえているのか？」

その言葉に艦娘全員とゴジラが提督を見た

「えっ…提督、ゴジラがなに言ってるか聞こえてないの？」

その問いに提督は

「ああ、鳴き声は聞こえるが言葉は聞こえてこないな、皆は聞こえているのか？」

再び提督が尋ねると、艦娘達は全員聞こえていると言ってきた

「マジか！俺だけ聞こえてないのか!!」

そう言って提督が項垂れていると

「私がお答えしましょー!!」

そんな声が聞こえてきて、提督が首を上げるとゴジラの方から光の玉が飛んできて中からリトルが出てきた

「初めまして、私はゴジラの妖精リトルと言います」ドヤア

リトルが自己紹介を済ませると周りが静まり返り、次の瞬間

「「しゃっ喋ってるー!!」」

とその場にいる艦娘と提督が叫んだ、その様子を見てリトルはさらにドヤ顔を続けた。そしてようやく周りが落ち着いて来た頃

「そろそろいいですかね」

そうリトルが聞くと

「あつああすまない、取り乱してしまって、それで私だけゴジラの声が聞こえないのはどうしてなんだ？」

その問いにリトルは

「それは艦娘とゴジラは私を通して会話などが取れるんですが、人間とゴジラでは私を通して会話が出来ないんですよ、そもそも妖精が見える人間とは、基本的に友好関係にありますけど妖精と繋がりがあ  
るわけではないですから、まあ稀に繋がりがあある人間はいますけど  
ね」

「そうすると私は、繋がりがないとゴジラと会話できないと言うこと  
なのか？」

「そうなりますね。まあゴジラは人間の言っていることを理解してい  
るので、問題はないと思いますけどね」

「そうなのか？」

と提督がゴジラの方を見ると、ゴジラは首を縦に振り答えた

「まあ、ゴジラの声は艦娘の誰かに訳してもらおうといいですよ、取り敢  
えずゴジラに挨拶してもらいましょう」

「そっそうだな、じゃあ長門通訳頼むそれとゴジラ、話の腰を折ってす  
まなかった」

そう謝罪するとゴジラは短く鳴いた、それを長門が

「気にしてないそうだ」

そう訳してきたそしてゴジラは

（なんかもう、ゴジラ、ゴジラ言われて俺の紹介要らないんじゃないか  
？）

『えー、初めまして。ゴジラと言います、今回の作戦では皆さんと戦う  
ことになりました、宜しくお願いします』

そう挨拶が終わると周りから拍手が起こった

「すごい！本当に一緒に戦ってくれるのね」

「ハイハイ、ゴジラは何の恐竜なんですかー」

など感想や質問が飛んできたが長門が声をあげ

「皆、静かにー…まだ提督の挨拶が済んでないのたぞ」

そう言っつて、回りを静かにさせた所で提督が前に出て

「先ほどは失礼した、申し遅れたがこの鎮守府で提督をしているT督だ、今回は作戦への助力大変有り難いと思っている。ようこそ我が鎮守府に、君たちを歓迎しよう」

提督が挨拶し終わるのを見て、今度は長門が前に出て来て

「私は長門型戦艦1番艦の長門だ、宜しく頼む」

そう短く挨拶してきた所で

「取り敢えず、歓迎パーティーのつもりで料理を用意させたんだか…ゴジラが何を食べるか解らなかつたから適当に用意させてもらった。口に合えばいいんだが、この機会に川内達以外の艦娘とも仲良くなつてほしいと思っっている」

そう提督が言うのと料理が運ばれて来て、歓迎パーティーが始まった。そしてその間、ゴジラとリトルは艦娘達に囲まれていると質問責めになったのであった。こうしてゴジラの鎮守府初訪問は一先ず大成功に終わった

## 13話

次の日、提督と長門はゴジラのいる港に訪れていた

「やあ、おはようゴジラ、昨日は楽しんでくれたかな？」

そう挨拶しながら昨日の事を聞いてきた提督

「おはよう提督、長門、お陰さまで楽しくすごせたよ。と言っているぞ」

提督は長門に通訳してもらいながら

「それはよかった。これからも仲良くやってくれと嬉しいよ…所で今日来たのは他でもない、今度の作戦についてなんだけど、明日俺は大本営に向かう予定なんだ、そこで作戦会議があるんだが。君の事を報告しないといけないんだけど大丈夫かな？」

少し躊躇いながら聞いてきた提督にたいしてゴジラは

『報告するのは問題ないぞ、さすがに俺みたいなのが姿を現したら混乱しちまうからな』

「そう言ってもらえると助かるよ、そこでゴジラの写真を撮らせてもらえないだろうか？」

『何で写真なんかとる必要あるんだ？』

疑問に思い提督に聞いてみると

「いや、前に君の事を会議で報告したら誰も信じてくれなくてね、今回はゴジラ自身がいるから証拠として撮らせてほしいんだ」

『あーなるほどね、そういう事なら撮っていいぞ…と言うか昨日青葉がかなり撮ってたからそこからええばいいんじゃないか？』

昨日の事を振り返ると青葉がいろいろと撮っていたのを思い出す

「あーやっぱり撮っていたか、後で一応見に行ってみよう取り敢えずこっちでも撮っておくよ、いいかな？」

『あぁいいぞ』

ゴジラからの許しが出たのを長門に確認してもらい、提督はゴジラを色々な角度からカメラで撮っていった

「うん、これくらい撮ればいいかな」

そう言ってカメラをしまうと

「ありがとう、これで大丈夫だと思うよ」  
するとゴジラが

『本当に写真だけで大丈夫か？やっぱ俺が直接行った方がいいか？』

提督は困った顔をし

「そうしてくれれば一番なんだけどさすがに本営に連れてくと混乱が起きるからね、取り敢えずゴジラが存在して協力してくれる事を伝えられればいいよ…」

『そうだ、その事について伝えとかないといけないことがあるんだ』  
そして次にゴジラが鳴いた瞬間長門の顔が険しくなった

「それは、一体どういう事だ？」

長門は警戒しながら聞き返したが

「長門、ゴジラはなんと云っているんだ？構わないからそのまま訳してくれ」

そう提督に言われ躊躇いながら

「ああ解った…作戦には協力するが基本人間の言うことは聞かない、もしも何かあった場合自分の判断で動かさせてもらう。そう云っている」

「何？…そうか、しかしまあ正直これは俺の意見なんだが、ゴジラのよ  
うな怪獣を指揮下に置いてても我々にはてに余る気がする。正直自分の判断で動いてくれた方が助かるかもしれん、一応作戦にも流れがあるからそれだけ知ってくれていればそれで構わないと思っっている…  
ただ本営の連中がそれで納得するとは思えないね」

そこまで言って、提督は一旦言葉を切った

「確かに何かしら保険を掛けなければゴジラの事を信じてても彼らは安  
全性を疑うだろう」

「安全性か…確かに人間の言うことを聞かないなんて伝えたら、余計  
その辺を疑ってくるだろうね」

「うーん、どうしたものか…ゴジラはなにかいい案無いのか？」

『ふむ、それ少し考えたんだけど、艦娘の言うことはちゃんと聞くつて  
事にしたらいんじゃないか？』

「ふむ…それだと少し弱いな、艦娘の言うことを聞くからと納得はしてくれまい、仮に誰か特定の艦娘の言うことを聞くとしても何かあったらその艦娘の所為にされてしまう」

『うーん…じゃあ思いきって報告しないってのは?』

「それでは作戦の方で支障が出る、作戦中ゴジラが出てきたら他の艦隊が混乱する、下手するとゴジラが撃たれるぞ」

『いや、それでもいいじゃないか、作戦はここで聞いて頃合いを見て俺が介入するんだ、そして深海棲艦を倒していく、作戦が終わったら長門達が来て俺と会話して俺が味方であることを伝える、そうすれば会議で説明しなくていいし、俺は好きに暴れられるし別の鎮守府の艦娘とも交流出来るまさに一石三鳥だ!!』

「うーむ確かに言われてみればその方がいいのかもしれないが…しかし」

そう長門が悩んでいると

「おいおい、俺を置いてけぼりにするなよ、長門ゴジラはなんて?」

そう質問してきた提督に長門は先ほどはゴジラと話した内容を伝えた

「…うーん確かにその方が楽だな…うん、よしそうしようか」

提督のその言葉に長門は啞然とし

「提督! 本当にそれでいいのか、作戦が滅茶苦茶になるかもしれないのだぞ」

「長門…俺はねもう疲れたんだよ、これから会議だってだけで頭一杯なのにゴジラの事も説明しろなんて言われたらもうね、倒れそうなんだよ、幸いまだ本営には連絡してないからね、だからこの案でいこう…頼むよ」

そう懇願する提督を見て

「む、うーんしかし…はあ確かにそうだな、その方がなにかと良さそうだ」

しばらく悩んでいた長門も折れたようで、この案に乗ることにした「よし!! 決まりだ、これで仕事が一つ減った! それじゃあ、ゴジラは作戦結構日までここにおいて、艦隊と一緒に出撃してから本隊と合流前に

少し離れた所で待機してもらおう、後はゴジラのタイミングで突撃してくれ、それでいいかな？」

「ああ、解つただそうだ」

「よしーあー肩の荷が一つ減ったー、それじゃあ後は作戦会議に備えるだけだ、あーよかつたそれじゃあ俺は執務室に戻って仕事することにするよ、ゴジラは好きになしていいよ、それじゃまた」

「あっおい待つてくれ提督…ふう、まあこの短期間で色々あったからな、それじゃあゴジラ、私も行くとするよ」

そう言つて提督達は執務室に帰つていった

「提督も大変だなー」

「まあこの鎮守府にいる艦娘達の命を預かる身ですからね」

「命かー、やっぱり俺には提督業は向いてないなあ」

「そうですか？結構艦娘とも仲良くしてるし、向いてるんじゃないですか？」

「いや、俺には作戦なんて考えられないし、命を預かるなんて出来ないよ」

「でも、もう作戦に参加するんですから、多かれ少なかれ艦娘が沈む事も覚悟しないといけませんよー」

「うっ…それは、確かに艦娘が沈むなんて事考えてなかつたよ。俺がいれば艦娘は沈まないと思つてたし」

「それが、甘いんですよ！ゴジラは一人しか居ないんですから、一人で戦局変えることができてても被害がでない訳じゃないんですから。それに、今回の作戦では深海棲艦と撃ち合つてる所に突撃するんですから、つく前にやられちゃう子だつて要るかもしれないですよ！」

リトルのその言葉にゴジラはなにも言えないでいた

「今、私達は戦争をしています。彼女たちも覚悟して戦っているんですよ、ゴジラも何があるか解らないんですから、何かあつてもいいように心の準備と覚悟が必要ですよ」

「ああ、確かに、言われるまで気づかなかつたけどこれは戦争なんだよな、人間と艦娘が深海棲艦と殺しあつてるんだよな、俺はどこか違う感覚で戦つてた、この体なら何でも出来る、作戦も余裕だと思つてた



その考えは間違いだったんだな、ありがとうリトル、気づかせてくれて」

ゴジラはリトルにお礼をいい

「これからも俺が間違ってたり勘違いしてたら、また教えてくれよな」  
「出来れば自分で気づいてほしいんですけどね、まあサポートするのと私の役目見たなものですから、その時はビシビシ行きますよ!」

「ああ、宜しく頼む」

「おっ!そろそろですかね」

「ん、どうした何かあるのか?」

「ええ、私は工房の方に行ってきます。今回の作戦で必要になりそうな物作ってきますね」

「おお、そうかなに作るか解らんけど頼むな」

「ええ、もちろんです後何を作るかは後でわかりますから、それじゃ」

そう言うとりトルは工房の方へと歩いていった

## 14話

リトルが工房へと歩いていった後。入れ違いで艦娘達がやって来た

「あつゴジラさん、おはようございます」

「「「おはようございます」」」

「ああ、おはよう、皆揃ってどうしたんだい？」

そこには軽巡が二人駆逐が四人並んでいた

「私達はこれから遠征に行つて資材集めをしてきます」

「あー、だからドラム缶を持つてるのか、…でも危ないんじゃないのか。この前天龍達が遠征した時襲われたじゃないか？」

「それは、資源が一杯あるところまで行つたからで、少しだったらこの辺の海域でも手に入るんだ。私達はそこに行くの、だからそこまで危なくないよ」

「そうなのか？それなら安心だな。…なあそれに俺も着いていつちや駄目か？邪魔はしないようにするからさ、どうやって資材集めてるのか興味あるんだよ」

そうゴジラが頼むと艦娘達は少し困った顔をして

「私達は大丈夫だけど、ゴジラは大丈夫なの？。さつきリトルとすれ違ったけど、リトルがいないと私たちと会話できないんじゃないの？」

そう言われハッ！とするゴジラ、今まで普通に会話していたがリトルがいないと会話する事が出来ない事を思い出した

「そうだった。今はまだ大丈夫だけど、離れすぎると会話出来ないんだ。それだと何かと不便だよな…悪いやっぱりさつきのは無しにしてくれ、困らせて悪かったな」

「いや、いいよまた次の機会にでも一緒にいこう」

「そう言ってもらえると助かるよ。ありがとう」

「いいえー、それじゃあ私達はもう行くね」

「おう、行つてらっしゃい」

「「「行つてきまーす」」」」

そう言つて艦娘達は海へと出ていった

「そうだよなー。リトルがいないと皆と話せなくなっちゃうんだよなー」

そんなこと考えていると、今度は別の艦娘達がやって来た

「こんにちはゴジラ、ぐきげんうりゆうわしゆうです」

((((( ))) (ね) (わね) (なのです) )))

暁達が他の駆逐艦達を連れてきた

「こんにちは暁」( 噛んだな、フ、可愛いぜ！ )

「ゴジラ、今暇かい？」

「ああ、暇だけど、どうしたんだそんな大勢で？」

「別に大したことじゃないよ、暇なら私達と遊んでくれないかな？」

「ああ、そういうことか、構わないよ何をするんだい？」

「ハイハイ、私かけっこしたい！」

「私は隠れんぼしたい！」

そう思い思いにしたい事を言っていく駆逐艦達だが

「いや、悪いが海から上がるのは不味いから、俺が陸に上がることの無い遊びにしてくれ」

その言葉に「「え〜」」と声が出たが、仕方がないと納得してくれた

「じゃあ昨日みたいにまた頭に乗せて!!」

一人がそう言うのと周りの子も同意したのか、今度は誰が最初に乗るかジャンケンを始めた

「一番は私なんだから、負けないよー！」

「速いのは、私なんだからー！」

「私も、負けないっばい！」

「…負けない」

「私達も負けないわよ！」

こうして駆逐艦達のジャンケン大会が始まった

「「「ジャンケン」」」

「「「ポン!!」」」

~~~~~10分後~~~~~

「やったー、勝ったー!!」

「うー、負けたっばい」

「：勝った」

「私が負けた、私がスローリィー…」

「1番じゃなかったけど、勝ったー!!」

「勝ちました」

こうして勝ち上がった四人の子達がゴジラに乗ることになった

「それじゃあ、ゴジラさんお願いしまーす」

「二お願いしまーす二」

「はいよ、今顔を寄せるからそこから乗ってくれ」

そう言うゴジラは皆の方へと顔を近づけていった

「今度こそ、私がいつちばーん!」

その掛け声と共に他の子達も飛び乗ってきた

「全員乗ったか?」

「二はい、乗りましたー二二」

「それじゃあ、動くからしっかり掴まってるよー」

そうしてゴジラは駆逐艦達を乗せて海へと出ていった

「それで、どこまでいけばいいんだ?」

「うーん、そんなに遠くまで行けないから。10分位この辺うろちよろしてくれればいいかな、じゃないと他の子の番にならないし」

「了解」

そう言うゴジラは体を浮かせ立ち上がった

「うわー!すごい、眺め、本当に飛んでるみたい」

「昨日は乗れなかったけど、今日は乗れてよかったー」

「：とても風が気持ちがいい」

「アハハハハ」

時々スピードを上げながら泳いでいくゴジラだが

「なあ、皆ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「??何が聞きたいの?」

ゴジラの急な質問に駆逐艦達はすぐに答えてくれた

「皆今回の作戦に参加するんだよね。：怖くはないのか?自分の仲間

が沈んじゃうかもしれないとか、そういうの怖いとか思わないのか？」

ゴジラの質問に駆逐艦達は、先程のはしゃいでる様子は無くなり、真剣に考えた後ゴジラに話した

「確かに怖いよ、私達は後方で補給艦の護衛とかが多いけど、前線で戦っている人達をもっと怖い思いをしているし、もしかしたら待ち伏せや、前線を抜けてくる敵もいるかもしれない。でも私達は私たちに出来ることを精一杯やろうと思ってる。…仲間が安心して戦えるように」

「私達の中には前線に行く姉妹も居ます。その時は無事に帰って来てほしいと思うと同時になんで私は前に行けないんだろうと思います。私達は戦うために生まれてきた存在ですから、もちろん沈む気はありません。皆で一緒に帰れるように全力を出すだけです！」

「それに、今回はゴジラも一緒に戦ってくれるし、前ほど絶望もしてないしね！」

「…そうか、皆ちゃんと考えてるんだな、俺はまだ考えが甘かったみたいだよ」

「そうなの？」

「ああ、俺は俺が居れば、今回の作戦は成功させられると思っていただけ、俺一人じゃ戦線は支えられないし、俺の居ない所じや艦娘が沈むかもしれないって、これは戦争なんだからってリトルに言われたんだよ」

そうゴジラが言い終わると

「ふーん、そんなこと言われたんだ」

「そ、…恥ずかしながら俺はそんな事も考えてもいなかった」

「まあ確かに、リトルの言うことも解りますけど、ゴジラさんは私達がそんなに頼りないと思ってるんですか？」

その言葉にドキリとした

「いや、…そんな事は思っていない」

「でも少しは思ってるんですよね」

「うっ…はい」

「はあー、確かに私達はゴジラさんから見たら頼りないかもしれませんが、今まで深海棲艦を抑えてきたんですよ。もう少し信頼してくれなくても良くないですか」

うんうん、と他の子達も同意する

「それに、私達は沈むために戦いに行く訳じゃないんです。絶対について言えないのが辛いですが、私達は沈みません、だからゴジラさん…私達を信じてください!」

そう言葉を終えた後、駆逐艦達はゴジラの言葉を待った

(そうだよな、艦娘と仲良くなりたくてここまで来たけど、どこかでも艦娘の事を信頼してなかったんだ。少なくともこの鎮守府に居る艦娘の事位信頼しないと…はあ、こんな小さな子達に教えてもらうなんて、俺ももつとしつかりしないと…)

「ああ、今まで悪かった今度、いや今からでも皆を信じるよ」

その言葉を聞いて艦娘達は顔を見合わせてニツ!と笑いあった

「そうそう、遅いよゴジラさんはー」

「私達もゴジラさんを信頼してるんですからね」

「頑張つて、皆で作戦を成功させましょう!」

「「「おーおー!!」」」

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

そうして皆で雄叫びを上げ、鎮守府に帰って来た

そして、そこには仁王立ちしている戦艦と空母が待っていた、その姿を見てゴジラは嫌な予感がしたのであった

そして港に着くと

「これはどういう事ですか」

冷たい視線を送りながら加賀が質問してきた

15話

冷たい視線を送りながら加賀が質問してきた。

因みに、現在駆逐艦の子達は全員正座させられ、ゴジラは顔だけ海から出してる状態である

「どっどっという事とは、どっどっという事でしょうか？」

その質問に加賀は

「どうもこうとありません！貴方は知られては不味い存在なんですよ、それを海に出るだけならまだしも、雄叫びを上げて帰ってくるなんて!! 一体何を考えてるんですか!!」

「うっ、すみません、何かその場の雰囲気について叫んじやいました(汗)」

「はあ、今のところ目撃者が居ない様ですが、叫び声はここまで聞こえてたんですよ。町の方まで届いてたらどうするんですか!!」

「すみません」

「海に出るなどとは言いませんが、周りの事も注意してください。解りましたね!」

「はい、解りましたね」

「」「ごめんなさい」「」

「全く、この子達は…」

「まあまあ、その辺でいいだろう」

「しかし、また同じことがあったら大変なことになりますよ」

「そこは、もう大丈夫じゃないのか、ゴジラも反省してるみたいだし」

「はあ、解りました、次からは気を付けてくださいよ」

そう言っただけで加賀の説教は終わり、今度は戦艦が

「やあ、ゴジラ、私は伊勢型航空戦艦二番艦日向と言う」

「こんにちは」

「早速だがゴジラの頭の上に乗せてほしい」

「えっなんでまた」

「この前曉達に聞いたんだか、君の頭の上に乗ると飛んでるみたいだと言っていたのでな、もしかしたらその状態で瑞雲を飛ばせば一緒に

飛んでいると言う事になるんじゃないかと思ってね」

そんな事を言った、日向の周りは呆然としながらも加賀が

「一体何を言ってるの、さっきあれほど釘を指したばかりなのに…」

「加賀よ、君も一度くらい思ったことはないかい、航空機と一緒に飛んでみたいと」

その質問に加賀は少しい淀み

「い、いえ私はそんなこと考えてなんか…」

「本当にそう思っているなら別にいい、だが私は目の前に夢を叶える可能性があつたらそれを試したいのだよ。瑞雲とこの空を一緒に飛んでみたいと言う夢を…だから協力してくれないか、ゴジラ」

日向はいい終えると、ゴジラの方を見た、見られたゴジラは少し考えながらも

「え、今怒られたばかりだし不味いんじゃない」

「いいや、別に叫んだりしなれば大丈夫だ、それにすぐに済ませる、

問題ない！それに海に出るのは構わないといっていたじゃないか」

「まあ、確かに言われてみれば…」

「だろう、では行こう、今行こう、すぐに行こう！」

日向はそういいながらゴジラに詰め寄っていった

「解った、解りました、どうぞ乗ってください」

「うむ、ありがとう、では行こう」

「ちよつと待ちなさい」

そう言って止めたのは加賀だった

「貴方達二人だと心配だわ、私もついて行くわよ」

そんな事を言ってきた、しかしそれを黙って見ていけない人達が居た

「日向さんや加賀さんだけずるいっばい」

「私達も順番待ちしてたんですよ」

駆逐艦の子達から不満の声が上がった

「ちゃんとジャンケンで決めるっばい！」

「そうです、ちゃんと守ってください！」

そう声を上げる子達に日向が

「すまないな皆、しかし先程ゴジラの上に乗ることで問題が起きた、私と加賀はその再発防止のために乗るのだ、これをしないと今後ゴジラの頭の上に乗ることを禁止せざるを得なくなる。解るねでは、出発だゴジラ!!」

「そんなの横暴っぽい」

「汚い、大人は汚い」

「ハーハッハッハッ」

駆逐艦達の不満の声を背中で受け止めながら、日向は高笑いをし、加賀は頭を押さえるのだった、そしてゴジラは再び海へと出ていった。そして沖に出た頃日向が

「うむ、ここら辺なら大丈夫だろう、ゴジラ、スピードを上げてくれ」

ゴジラは言われた通りスピードを上げた

「おおー！これが駆逐艦達が言っていた空を飛んでるみたいな状態か、想像以上だなー！」

「確かに、これほどとは思いませんでしたね」

そんな感想を言っていると日向が艀装を展開し

「瑞雲発艦!!」

そう言うのと日向から何機もの瑞雲が発艦していくそれを見ていた加賀は

「な…何をしているんですか！こんなところで発艦させるなんて！私達はゴジラと話をするために、ここに来たはずですよ」

「あーそれならもう答えは出ているだろう、あれだけ駆逐艦達に好かれていて何回も私達の仲間を助けてくれた、私はゴジラを信じるよ…：おっ！見てみる瑞雲の妖精さんが手を振ってくれてるぞ、しかも同じ高さでだ！凄いじゃないか!!」

そんな日向を無視して加賀が話しかけてきた

「はあもういいわ、ゴジラ、私達は貴方と話をしに来たの、提督や駆逐艦の子達とは打ち解けたみたいだけど、まだ私達は貴方を信じきれないわ。同じ戦場へ行く者として確証がほしいの、確実に貴方が裏切らないと言う確証が…」

「確証ね…逆に聞くが、どうしたら加賀は俺を信じてくれるんだ？」

加賀は少し考えてから

「そうね、貴方の考えを聞かせてちょうだい、貴方が一緒に戦場に行くに当たって、貴方の考えが、意志が知りたいの」

そう言われ少し考えていると日向が

「何、そんな悩むことはない、君はどうして戦っているのか、なんのために戦っているのか、それを聞かせてくれればいい」

「あーそう言う事か、…フッフ、アーハツハツハ…」

急に笑いだしたゴジラを見て加賀と日向は驚いていた

「一体何がおかしいと言うの、これは真面目なことな事なのだけれども」

加賀が圧を飛ばしながらゴジラに言う

「あーごめんごめん、実はさ、さつきもリトルと駆逐艦の子達とも同じ様な話をしたばかりなんだよ」

「あの子達が同じ様なことを？」

「ああ、最初にリトルにこれは戦争で皆覚悟して戦っている、俺が居ても沈んでしまう艦娘は必ず出てくる、俺一人じゃ全員を守るなんて出来ないだって言われてさそれで考えたんだよ。そして駆逐艦の子達にいつてみたんだよ。そしたらさ、怒られちゃってさ」

「怒られたの？」

「ああ、私達はそんなに頼りないのかって、仮にも今までこの海を守ってきたんだって言われてな、それに私達は沈むために戦いに行くんじゃないって皆が無事に帰って来れるように全力でやれることをしてるんだって言われて正直自分が恥ずかしかつたよ。」

こんな小さい子達でさえそんな考えをしているのに俺は全然そんな事考えてなかったんだなって、だから俺は最初に艦娘を信じようと思ったんだ、全部の艦娘って訳ではないけど…少なくともこの鎮守府の艦娘は信じようと思っつてね、その後気分が高まって叫んじまったのは悪かったが、まあ何が言いたいかと言うと俺はこの鎮守府の艦娘を信じることにした。この戦い、俺一人ではどうしようもないけど皆と一緒にならきつとうまく行くと思うんだ、だから加賀達も俺を信じてほしい！」

そうゴジラがいい終えると加賀は額に手を当てていて日向は腕組みをしてうんうん、と首を振っていた

「はあ、私は私達が貴方を信じられるかどうかを聞きに来たのにまさか信じてほしいだなんて直球で言ってくるなんて…まあ、戦場に出る覚悟はあるみたいだし、今はそれでいいでしょう、取り敢えずあなたを信じます」

その言葉を聞いたゴジラは

「ありがとう」

「礼を言うにはまだ早いわよ、結果は戦場で見せてちょうだい…航空機発艦！」

そう言うと加賀はおもむろに航空機を発艦させた。

発艦させた航空機はゴジラの回りを飛んだ後ゴジラの横を飛び加賀達に手を振っていたその様子を見て

「確かに、悪くないわね」

加賀はそう言って、航空機に乗っている妖精に手を振っていた、その様子を見ていた日向は小さい声で

「まあ、そうなるな…ゴジラ、話も終わったんだそろそろ戻ろう、駆逐の子達も待ってるはずだ」

そう帰るように促した

「そうね、あまり長いと後が怖いようだし」

「おっ、もういいのか、俺のこと信用出来ないとかその辺の問題は？」
ゴジラがそう尋ねると加賀が

「それなら先程言いました、戦場で結果を見せてその働きで貴方を信じるかどうか決めるわ」

「そ、そうですか、それじゃあ港に戻りますね」

こうしてゴジラは本日二度目の散歩が終わった

もちろん港に着くと駆逐艦達が群がってきて頭に乗る人を決めていたので早く乗せてくれと催促された、そんな事していると加賀が

「貴方には期待してるわ」

そう言い残しその場を後にした

そして、この日はいつの間にか作られていた「咆哮禁止」と書かれたプラカードを首に付け駆逐艦たちと遊んだのだった

16話

次の日の朝、提督達が大本営に行くので挨拶に来てくれた

「おはよう、ゴジラ」

そう言う提督の顔は疲れる感じがした

「ああ、おはよう提督。何か疲れた顔してるじゃないか：ほら見ろゴジラにも疲れていると言われているんだ、提督もう少し休んだ方がいいんじゃないか？」

「いや。大丈夫だ長門、少なくともこれから会議だ、休んでいられないよ。それにゴジラの事を話さないで済むだけでもだいぶ楽になったんだ、だから大丈夫だよ」

「提督：無理だけはするなよ」

「解ってるよ長門、それでゴジラ、今日俺達は大本営に行って作戦会議をしてくる、この会議によって我々の今後が決まる、会議は多分3日位掛かると思うんだその間この鎮守府を頼んだよ」

「XXXXXXXXXX」

「任された、だそうだ」

「そうか、それなら安心だ、それじゃあ行ってくるよ」

そう言う提督達は大本営へと出掛けていった

そしてしばらくして、昨日と同じ様にドラム缶を持った艦娘達がやって来た

「おはようゴジラさん」

「おはよう、今日も遠征に行くのか？」

「うん、資材は毎日取りに行って貯めておかないとね」

「なるほどね、所で昨日言ってた遠征に着いてくって話だけど、今日着いていっていいかな？今日はリトルもいるし問題ないだろう、リトルもそれでいいか？」

そう聞かれたリトルがゴジラから出てきて

「私は問題ないですよ。むしろちよいといいです」

そう言うリトルはどこからかインカムを一つ取り出して艦娘に渡した

「これはゴジラと会話する装置です。まあ人間用に作ったんですけどね。艦娘が付けると私とゴジラが離れていても会話することができず、他にも誰かに聞かれたくないような内緒話もできるんです。一応試験をしたいと思っただんで丁度よかったです」

その説明を聞いてインカムを耳に取り付けた艦娘

「へえ、そんな事出来るんだー」

『どう、ゴジラさん聞こえる?』

「ん? おお聞こえるぞ、これは俺にしか聞こえてないのか?」

ゴジラがそう言うのと周りにいた他の子が

「えっ! 今なにか言ったの?」

「本当に内緒話が出るんだ!」

「ねえリトル、このインカムはこの一個しかないの?」

インカムに興味津々の子供がリトルに群がる

「ごめんね、一応二個は作ったんだけどまだ量産してる途中なんだよ。資材もそれなりに使っちゃう事になりそうだし、取り敢えず一個試験できればいいから今はそれしか出せないよ」

その言葉を聞いて少しガツカリした感じだったが、すぐに気を取り直して今度はゴジラに

「ねえゴジラさん。今日一緒に行くんだったらゴジラさんの上に乗せてつてくれない」

「コラー! そうやって楽しそうとするんじゃないやありません」

そう提案した駆逐艦を叱る軽巡だったが

「えー、でもせっかく一緒に行くんだから乗せてってもらった方が燃料も食わなくていいじゃん。それに楽しいし」

うんうん、と周りの子供達も賛同して首を縦に振っていた。最初は勢いよく叱っていた軽巡だったが徐々に押されていき

「でもそれじゃあ、私達仕事サボることになっちゃうよ」

「別に全部ゴジラにやってもらおう訳じゃないよ、ただ乗せてってもらって場所についたら、後は私達で資材回収すればいいんだから」

「うーでもー…」

尚も悩む軽巡を見て、ゴジラは助け船を出そうと

「俺なら構わないよ、元々こつちからお願いしてるんだからそれくらい問題ないよ」

「そ、そうですか?」

「そーそー、それに今回の資料回収はゴジラにとつてもいい勉強になるからね。乗せるのは授業料だと思つて貰つた方がいいよ、それにこうやって話してる間に結構時間たちやったんじゃない?」

リトルのその言葉を聞いて慌てて時計を見てみるともうすでに出発時間をかなり過ぎていた

「あー!急いでいかないとー!!」

時間を見て艦娘達が慌てていると

「大丈夫、大丈夫。ゴジラに乗っていけばこれくらいの遅れは取り戻せるから。さっ、乗った乗った」

その言葉を聞いて落ち着きを取り戻した艦娘達がゴジラに乗り込んでいった。しかし、今回は六人いるため頭の上と言うわけには行かず、ゴジラがうつ伏せの状態になり背中に乗ることになった

「皆乗ったか?」

「「「はーい!!」」」」

「その、宜しくお願いします」

元気のよい駆逐艦の子達と、まだこれでいいのかと悩んでいる軽巡の子、それらを乗せてゴジラは初めての遠征へと向かった

「あゝ…楽だゝ」

そう言いながらゴジラの背中に乗った駆逐艦の一人が両手両足を投げ出し大の字で寝転んでいた

「ちよつとー!いくらなんでもだらけすぎよ!」

「えゝゝでも他の子も似たようなもんだろゝ」

そう言つて回りを見渡すと他の子もゴジラの背緒によじ登つていたり、ドラム缶を縛つていたロープをゴジラに繋いでゴジラから発生する波を使って波乗りなどしていた。それを見て項垂れる軽巡

「もおー、ゴジラさんも何か言つてやってくださいよゝ」

若干涙目になりながら訴えられ、ゴジラもどうしたものかと考えていると

「コラー皆ー、今日は遊びできてるんじゃないんだからしつかり周りも警戒しないとダメでショーー！」

「リトルさん…」

「リトルお前…まずてに持つてるジューズを置いてから言えよ」

リトルはどこから出したのか、ビーチパラソルとテーブル設置してあり、ビーチチェアに座りながらジューズを飲みながら注意していた。もちろんサンングラス装備で…

「お前のその格好じゃなければ、すごい説得力あったんだがな」

リトルはジューズをテーブルの上に置くと

「失敬な！私はちゃんとインカムの調整とかしてるんだからね！」

「しかしなー、少し周りも考えてやれよー軽巡ちゃん固まっちゃったじゃないか」

「あーまあそれは、「ねえねえーリトルー」ん？なんだい？」

「ジューズまだあるの？」

「ジューズならそのクーラーボックスのなかに入ってるよ、皆の分もあるからねー」

「本当!!やったー。オーイ皆ー」

そう言うのと駆逐の子は皆の方へ向かって行った。そして軽巡の子は泣きながら白く燃え尽きていた

『もう、いや』

そんな言葉がゴジラの頭に聞こえてきた

「いや、なんか、そのくすいませんでした」

そんな事がありながら進んでいくと

「ゴジラさん、ここで止まって下さい」

軽巡の子から指示か飛んできた

「了解、ここでもいいんだな。周りには何も無いようだけど？」

「うん、ここであってるよ。それじゃあ皆、作業にかかるわよ」

「「「はーいー」」」」

という声と共に皆が動き出した。皆は持っていたドラム缶を海に投げ入れ暫くじつとしていた

「おっ、もういいかな？」

そう言ってドラム缶を引き上げるとドラム缶のなかには鋼材が入っていた、他の子のドラム缶にも弾薬やボーキサイトが入った状態で引き上げられた

「へえー、こーやって資材集めてるのか、一体どうなってるんだ？」

ゴジラは不思議に思い聞いてみると

「さあ、解らないわ」

そんな答えが帰って来た

「へっ!?解らない、こんな当たり前に引き上げてるのに?」

「うん、妖精さんがこの辺で取れるよって、教えてくれた場所にドラム缶を落とすと資材が手にはいるの。燃料もそうよ、逆に妖精さんが教えてくれないと全然資材が手に入らないわ」

「へえ〜」と言いながらゴジラはリトルの方を見るがリトルは関係ないといった感じでビーチチェアで寛いでいた

「不思議が一杯だなー」

ゴジラはそれだけ言って作業が終わるまで空を見ていた

そして作業が終わると軽巡から

「ゴジラさん終わりましたよー」

と声を掛けられ、首を動かしてみると資材の入ったドラム缶を持った艦娘達がいた

「終わったか、結構時間かかるんだな」

「まあね、でも今日はだいぶ楽かな。ゴジラさんに乗ってきたお陰で体力にも余裕があったし、大成功だよ♪」

そう言っではしゃぐ艦娘達を見て、まあこーいうのもいいなと思っ
ゴジラはその様子を見ていた

17話

鎮守府に帰ってくると駆逐の一人が声をかけてきた

「ねえねえ、ゴジラー」

「うん、どうかしたか?」

「明日も一緒に遠征しない?」

「あー、まあ俺も暇だし構わないぞ」

「本当! やったー、オーイ皆ー」

その答えを聞くと駆逐艦の子は走って行ってしまった

「本当にいいの?」

「何が?」

「あー気づいてないかー、まあ私もインカムの調整できるしまあいいか」

「だから何が…」

「明日になったら解るよ」

「??」

リトルが最後に言ったことに違和感を感じながらもその日の遠征は無事に終わった

—————

—————

—————

—————

その日の食堂にて

「今日は楽しかったねー♪」

「うん、あんなに楽しければやりがいがある」

そんな話をして食事をしていると

「やけに楽しそうね、今日何かあったの? 隣いい?」

「いーよー」

そうやって別の子が席に着くと

「それで、何があったの貴方達今週は遠征だったでしょ?」

「うん、実はゴジラと一緒に行ってきー♪」

「は？ゴジラと？」

「うん、それでゴジラの上で寝転んだり、ゴジラにロープで引つ張ってもらったりしたんだー」

「えー、何よそれ羨ましい」

「それだけじゃないよ、リトルがジュースくれたりしてとても楽しかったー♪」

「ねー♪」

「…………ちよつと」

「うん？」

「何よそれ、羨ましいじゃない！今日ゴジラ居ないと思ったたらそんな事してたのね!!」

「う…うん、明日も一緒に行ってくれるって…」

「あ…明日も!?うー…代わりなさいよ!!」

「代われって言われても…」

そこまで言って気づいたが、いつの間にか二人の周りには他の駆逐艦の子達に囲まれていた

「今日ゴジラさんと遊ぼうとしてたのにずるい！明日代わってよ！」

「私もー」

「私もー」

と食堂が騒がしくなってきたところで

「静かにしなさい!!!」

その怒鳴り声に周りはシンと静まり返った

「貴方達一体何を騒いでいるんですか」

「加賀さん…あの」

そうしてこの騒動の原因を聞いた加賀は

「いいですか。こんな騒ぎが起こるようでしたらゴジラは遠征は禁止ですー」

その言葉に駆逐艦の子達からは

「「え〜〜!!」」

という声が上がった

「え〜、じゃありません、こんなことが起こるようでは仕方ありません

ん」

そう加賀が言いつけ、周りが静かになるとその中からてを上げる子がいた、遠征組の子である

「何か？」

「あ、あの、その今日ゴジラとまた明日もって約束してもらって…」

「それでしたら私から伝えておきます」

「えっ…でっでも私達遠征の時しかゴジラと遊べないし、それに…」

「それに、何ですか」

「それに、もうすぐ大規模作戦が始まるのに私達だけゴジラと遊べないなんて嫌だよ」

そう言うとその子は泣き出してしまった。まさか泣くことになるとは思ってなかった加賀はオロオロし始めるがなんとか落ち着き

「そ、そう、では別の方法を考えましょう」

「別って？」

「う…そっそれは、そう！ゴジラにはローテーションを組んでもらって、遠征に行く日と鎮守府に居てもらう日を決めてもらうのよ！それなら問題ないでしょ」

加賀はなんとか頭をフル回転させ出した案だが、駆逐艦の子達の反応を待っている間汗が吹き出すほど緊張していた

「…うん、それならいいよ」

その言葉を聞いた瞬間加賀は心の中でガッツポーズをとり

「やりました」

と小声で言ったのであった。こうしてゴジラの知らないところでゴジラの予定が全て艦娘達によって決められていった

その頃ゴジラは

「今日も静かで星が綺麗だなー…」

などと呑気な事を考えていた…次の日艦娘達から

「これが今日からの貴方の予定表です」

と艦娘達から笑顔で渡されたその予定表には、朝から晩まで様々な艦娘との予定がビッチリと書かれていた

「さて、では早速始めましょうか」

そう言われ、その日から作戦決行日前日までゴジラは艦娘達と過ごしていった。途中帰って来た提督に

「何かゴジラ少し疲れてないか？」

などと喋っていたが聞こえないふりをして誤魔化した、そして、作戦決行日の朝まだ日が昇ってない中、鎮守府の港には今回の作戦に参加する艦娘達が並んでいる。そこに提督が艦娘達の前へと出てきて

「諸君。今日は正に人類にとっての今後が決まる最大の作戦が始まる、この作戦の失敗が意味するのは人類の敗北だ。だが成功すればそれは深海棲艦の奴等への反撃を意味する、諸君らは今、その分岐点にいる。：勝とう今まで散っていった者の為に、そして今回は我々には力強い味方も居る。ゴジラとリトルだ、彼らから渡されたインカムは皆着けたか？これはゴジラと離れていても会話が出来るものらしいうまく使ってくれ、それとゴジラの事を知っているのは我々だけだ。そこの所気を付けてうまく立ち回ってくれ……それでは時間だ第9鎮守府、暁の咆哮作戦を開始する全艦出撃!!」

提督のその掛け声と共に攻略艦隊は一斉に動き出した

「なあ、ゴジラ」

皆が慌ただしく動く中、指令室に向かう提督に話しかけられた

「俺は、指令室で状況を聞いて指示を出すことしか出来ない。君のように皆と一緒に戦うことも出来ない、正直彼女達と一緒に場所で戦える君が羨ましく思うよ」

「でも提督、皆提督の事を信じてるから提督の指示にしたがってるんだろ」

「確かに、皆指示にしたがってくれているが所詮現場と指令室だ、不測の事態が起きた場合、状況が解らない以上指示も下手に出せない……だから頼む。もし、そんな事になった場合皆を助けてやってくれ。頼む！」

提督はゴジラに頭を下げた

「提督……解った。その時は任せてくれ、まあ元よりそのつもりだったけどね、そのために協力してるんだから提督は指令室から安心して指示を出してくれ、現場は任せてくれ」

「ああ、頼んだぞ。君の活躍に期待している」

そう言うのと提督はゴジラに敬礼をした

「おう、期待してくれ」

それだけ言うのとゴジラは艦隊の後を追った

作戦初日

各鎮守府より出撃した艦隊は、深海棲艦の基地があると予想される海域へと進軍、途中にある島を集結地点及び前線基地とし、そこまでの補給線を築くために動いていた。ゴジラは第9鎮守府の補給艦隊と共に行動していた、一応他の鎮守府に見られたら不味いのでゴジラは海に潜っていた

「なあ天龍…」

補給艦隊の護衛をしている天龍に声をかける

「なんだよゴジラ」

「皆大丈夫かな、今ごろ戦ってるんだろ俺がいった方が…」

「大丈夫だよ、ゴジラからしたらあれだけど皆強いんだから、それにうちは補給艦の護衛にゴジラがいてくれるお陰でその分前線に人数を割る事が出来たんだ、それにこのインカムのお陰で前線とも連絡がつきやすくなってるんだ。何かあれば連絡してくるさ、なんだったらゴジラが連絡してみればいいじゃないか」

「そ、そうだったな、俺から皆に連絡できるんだったな、ちよつと誰かに連絡してみるよ」

「心配性だなー、ゴジラは」

そんな言葉を聞きながらゴジラは前線にいる川内に呼び掛けることにした

「おーい、川内聞こえるかー？おーい」

「はい、こちら川内ってゴジラ！何かあったの！」

「いや、こっちは問題ない。そっちの様子が気になってな、大丈夫そうか？」

「こっちは徐々に戦闘が増えてきてるね、この調子だと前線基地にする予定の島は敵の基地になってるかもね」

「それは大丈夫なのか？皆怪我とかしてないのか？何かあったらすぐ連絡しろよ」

「大丈夫だよゴジラ、確かに敵の数は増えてきてるけど他の鎮守府の艦隊とももうすぐ合流するし、何かあったらすぐ連絡するから」

「そうか、なら大丈夫だな」

「もう、心配性だなーこれでも私達結構強いんだよ、もうちよつと信用してほしいなー」

川内は少し不機嫌を装った声でゴジラにいった

「うっ…すまない、どうも胸騒ぎがしてな」

「まあ、こんな作戦に参加するなんて初めてだろうし、心配するのも解るけど、私達は大丈夫だから」

「…そうか、すまん邪魔しちゃって」

「いいよ、いいよそろそろ合流するみたいだから切るね」

「解った、それじゃあな」

そう言って川内との通信を切った

18話

川内との通信が終わると天龍が

「終わったか？」

「ああ、天龍の言った通りだったよ」

「だろー…なあ前線の方はどうなってるんだ？」

「結局心配してんじやねえか」

「しようがねえだろ。皆今まで一緒にやって来た仲間なんだから心配位するだろ」

「まあ確かに、安心しろって言った方がいいのか解らないが戦闘は増えてきてるけど問題ないそうさ。もうすぐ他の鎮守府の艦隊とも合流できるらしい。ただ前線基地にする予定だった島が深海棲艦の基地になってるらしいから今日は海上で皆と合流して明日攻略するらしい」

「そうか、やっぱり敵の手に落ちてたか…よし！早く本隊と合流しないと。よっしゃあ、行くぞお前ら!!」

そう言うくと天龍達は急ぎ本隊と合流するために先を急いだ。

そして、本隊と各鎮守府の艦隊が合流した連合艦隊は海上にて補給と修理、そして偵察機による敵の基地の偵察などを行い、次の日の早朝に攻略を開始することを決め作戦初日が終了した

翌日早朝より艦隊は動き出し、敵基地へと向かっていった。その戦いは一日中行われ、天龍達も補給や修理と治療などの手伝いをしていた、幸い日の落ちる前に敵基地の制圧は完了したので島に上陸した艦娘達は休むことなく前線基地の設営に取りかかった。

3日目、日本からの補給物資と共に工房妖精さん達が来て前線基地の設営が急ピッチに行われた。妖精さん達が来てくれたお陰で倉庫や食堂、そして入渠施設が建てられこれにより艦娘達は怪我を直せるようになった。

4日目、基地の設営が終わったので4日目は鋭気養う為に休日となった。艦娘達は思い思いに羽を伸ばし休暇を楽しんだ、もちろんその間哨戒等行っていたが更にその回りをゴジラが海中から島の周

りを警戒していた。

そして5日目の朝島の周りにはすでに艦装を身に付けた艦娘達が各鎮守府ごとに整列していた

「全員揃っているな、諸君おはよう。私は今回の旗艦を任された戦艦武蔵だ、宜しく頼む。さて今日まで少ない情報を元によくここまで戦ってきてくれた。そして今日これから向かう海域は本営や他の鎮守府が必死に偵察を行い。そして誰も帰ってこなかった場所だ。だが無駄ではなかったはずだ！」

我々が敵の基地の場所に当たりを付けられたのは殆どの艦隊がこの先の海域に向かうと言って消息を絶ったからだ。

必ずそこに敵の基地が在る筈だ、散っていった仲間達のためにも必ずこの戦いに：暁の水平線に勝利を刻むぞ。総員抜錨!!」

武蔵の号令と共に全ての艦娘達が動き出した。そしてそれを遠くから眺めていたゴジラも攻略艦隊の後から出発する補給艦隊の後を着いていくのであった

————数時間後攻略艦隊————

「妙だな…」

武蔵が訝しげに声を出した

「武蔵さんどうしたんですか？」

「ああ、もうすぐ目的の海域に入るはずなんだが、今まで一度も深海棲艦と戦闘になってない。

それどころか姿すら見ていない、基地があるならもう敵と遭遇していてもおかしくないはずなんだが…」

「それじゃあ、もしかして当てが外れたってことですか！」

「いや、まだそうだと決まった訳ではない。もしかしたら敵に誘い出されているかもしれない」

「…畏つてことですか」

不安そうにしている艦娘を見て、武蔵は明るい声で

「なに、これだけの艦隊で動いているんだなとかなるさ。

しかし、そろそろ偵察機を出してもらって先の様子を見てもらおうか」

そう言うと武蔵は各艦隊に偵察機を飛ばすように指示を出した
(頼むから、当たりであってくれよ)

そう思いながら飛んでいく偵察機を見つめていた。
そして暫くして

『武蔵さん!!』

「どうした何か発見したか!!」

『はい、敵基地を発見しました……でもこれは』

「どうした報告ははつきりしろ!!」

『はい、その、敵の基地になっている島は深海棲艦で溢れ返っています。海も真つ黒で数は私達の倍以上いるかと……』

その報告を受け武蔵は絶句した。昔から敵の城を攻め落とすには敵の三倍の兵力が必要と言われているなかで、すでに敵よりも戦力が劣っているのだ。しかも倍以上に

「しかし、ここで引くわけには行かない。我々にはもう後がないのだから、…全艦隊に告ぐ、敵基地を発見、これより我々は敵基地の攻略を開始する。空母は攻撃機を発艦しろ。」

我々は陣形を整え敵基地に攻撃を開始する!!」

こうして、連合艦隊の敵基地攻略戦が幕を開けた…

その戦いのしたに蠢くものには誰も気づいてすらいなかった

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

-----その頃補給艦隊では-----

「本隊の方で敵の基地を発見したらしいわ、これから攻撃を開始するって」

「そう。忙しくなるわね、護衛艦も警戒を強めてください。何かあったらすぐ報告を」

「了解」

そして、艦隊が広がり警戒していると天龍達とは反対側を警戒していた艦隊から

「ソナーに感あり!...でもこれは大きい!!」

皆、爆雷投下用意」

そんな報告を受け皆が戦闘態勢になるなか、天龍達は焦っていた
(大きいってことはゴジラか? なにも言っていないのに一体どうした
んだ、ここで姿を現せるのか?)

それとも本当に敵?)

そんなことを考えていると

「天龍さん! こっちにもソナーに感あり。大きいですけどゴジラさん
じゃない!!」

「何?!」

天龍がそう言うと同時に

「天龍!! 今すぐそこから離れろー!!」

ゴジラから焦った声を聞いて天龍はすぐにヤバイと思い

「皆ここからすぐに離れろー!!」

天龍の叫び声を聞いて反射的に動き出した艦隊だが、

次の瞬間海から巨大なハサミが現れた。そして天龍達はゴジラ
のお陰で逃げるのが間に合ったが、反対側の艦娘が逃げ遅れて一人鋏
に捕まってしまった

「きやあああああ...あつ」バツン

捕らわれた艦娘はあつという間に真つ二つにされてしまった。

そして、その後に艦娘達の前にエビラが姿を現した

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

「なっなにこいつ」

戸惑っている艦娘達をよそにエビラは先ほど真つ二つにした艦娘
の死体に近づき死体をたべはじめた。そしてその光景を見た艦娘達
は

「こっこいつ、私の仲間をー!!!」ドンドンドン

その攻撃を皮切りに他の艦娘達もエビラに対して攻撃を開始した。

そして天龍達の方でも現れたエビラに対して攻撃を開始してい
た

「なんなんだこいつは...くそ! 攻撃が効いてないのか。皆、引きなが

ら撃て！もうすぐゴジラが来てくれる筈だ。それまで持ちこたえるんだ!!」

「でも、私達が引いたら陣形が崩れちゃう。向こうの艦隊が孤立しちゃうー！」

「くそ、『おい、聞こえるか。一旦ここから離れるぞ！おい!!聞こえてないのか、おい!!』くそ、あいつら頭に血が昇ってて此方声が聞こえてないぞ…ゴジラ早く来てくれよ」

そう言いながら応戦していると、突然エビラの動きが止まった。そしてその場で暴れだしたのだ、よく見てみるとエビラの尾の部分をゴジラが持っていた。そして暴れるエビラを押さえつけるとゴジラは尾を持ったまま体を回転させ勢いをつけ反対側にいるエビラへと投げ飛ばした。

飛んでいったエビラは見事にもう一体のエビラに当たりそれを見たゴジラは大きな雄叫びをあげた

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

その瞬間全ての者の動きが止まった。艦娘達は攻撃のを止めゴジラを見てきた

「なっなんなの一体何が起きてるの…」

艦娘の一人がそう呟くとゴジラの背鰭が光まだ目を回しているエビラ達に対して熱戦を放った。そして一匹のエビラに直撃した、そして熱戦を浴び続けたエビラはボンと音をたて爆発した。そして近くにいた艦娘達が爆発の余波を受け体勢を崩していた

「くう、一体何が…えっ!」

体勢を立て直した艦隊が見たのは、さっきまでどれだけ攻撃してもびくともしなかった怪物の上半分がなくなった姿だった。そしてその怪物を倒した黒い怪物がこっちに向かって来ていた、その光景を見て震えの止まらない、他の艦娘も同じように怪物を見て固まっていた。そして

「う、うわああああああ!!!」

その叫び声と共に全員が黒い怪物に攻撃をしようとした

19話

『待て攻撃するな!!』

そんな声が無線機から聞こえてきた、それを聞いて全員の動きが止まる

『俺だ天龍だ、ゴジ〜…黒い怪獣の隣を見てくれ』

そう言われ怪物の隣を見ると天龍が怪物のすぐ隣で手を振っていた。その光景を見て艦娘達は状況が解らなくなってしまった。

一体最初に現れた怪物は何なのか、その怪物を一瞬にして倒した怪物は何なのか、そしてその怪物の隣に当たり前のように居る天龍は一体何をしているのかと

なんとか回らない頭を回して考えるがよく解らなかった

。そんなことを考えていると

『皆此方に来い！まだ後一匹残ってるんだ、急げ此方の黒い怪獣は俺達の味方だ、安心しろ』

なんて事を言ってくる、向かうもなにもそつちから徐々に此方に向かって来ているのを見て尻込みしそうになるが、よく見ると黒い怪物の周りには天龍の他にも多くの艦娘達がいた。それを見て少し安心した…が警戒は緩めなかった

「わっ解ったわ。今行く…でも本当に大丈夫なんでしょうね…」

『大丈夫、大丈夫こいつは俺たちの味方だ、それは保証する。それよりさっきの奴の生き残りはまだ近くにいるんだから急いでくれ』

そう言われ漸く艦隊が動き出した、だが皆不安に思いながらもゴジラの方に向かっていく。そしてもう少しで合流しようとした時

「XXXXXXXXXX」

合流しようとした艦隊の後ろからエビラが襲いかかってきたのだ。

ゴジラはそれを見て熱線を吐こうとしたが近くに艦隊が居るので吐くのを止めエビラ目掛けて咆哮を上げながら突撃していった

「XXXXXXXXXX」

そして、エビラとゴジラに挟まれる形になってしまった艦隊は大混乱である。片や攻撃の効かない怪物片や味方と言っていた怪物が猛

突進してくるのだ、もう死んだと誰もが思っていると

『おい！此方だそいつの脇を抜けてこい、そいつを信じる!!』

そう天龍が言ってくる、そいつって此方の黒い怪物の事？しかし、この状況じゃあ信じるしかない

「皆！私について来て!!」

そう言うのと突進してくる黒い怪物の方に向かって前進した、急激に近づいてくる怪物を見て今にも発狂しそうになるが他の皆も何とか正気を保ってるようだった。

そして怪物との距離が0になる。

艦隊は無事に怪物の脇を通ることができた、通りすぎて暫くすると後ろからズンと大きな音が聞こえてきた、後ろを振り返ると怪物達が取っ組み合い戦っていた、その間に天龍達と合流を果たした

「天龍!!」

「お前達無事か?」

「無事なはずないじゃない!あいつら一体なんなのあの黒い怪物が味方ってどういうことなのよ、何であんたはそれを知ってるのよ!! 一体何がどうなってるのよ!!」

合流して直ぐ艦隊の指揮をしていた艦娘が天龍に捲し立て掴み掛かった。天龍は一瞬目を見開いたが直ぐに冷静になり自分の襟首を掴んでいる手をゆっくり掴み今の状況を説明し出した

「落ち着けよ。正直俺も何が何だか解らないんだ、あのエビの怪物の事はなんもわからねえ、けど黒い方は前に俺達を敵から助けてくれたんだ。さつきもあいつから俺達を助けてくれたし、俺達に攻撃してこなかったろ」

「そんなの偶々私達が目に入らなかつただけかもしれないじゃない!あのエビの怪物は私達の仲間を食ったのよ!あいつも私たちを食うかもしれないじゃない!!」

「違う!あいつはそんなことしない!!」

「何でそんなこと言えるのよ!なんの根拠があつてあいつの肩を持つのよ!!」

「それは…」

「ゴジラはそんなことしませんよ」

天龍が言葉に言い淀んでいると後ろから声が聞こえた。全員が声のした方へと振り返るとそこにはリトルが立っていた

「なっ何あんた！いつの間に関後に、というかその格好あの怪物と同じ…」

「そうです。初めまして私はゴジラの妖精名前はリトルと言います」

そうリトルが名乗ると事情の知らない艦娘達はリトルを見たまま固まってしまった、その様子を見たリトルは気にせず話を続けた

「ゴジラはあなた達の味方ですし貴方達を食べたりしませんよ」

その言葉を聞いて先ほどの艦娘がリトルに質問した

「さっきゴジラって言ったけど、それはあの黒い怪物の名前なの？」

「そうです。黒い方がゴジラ、そして赤い方がエビラと言います」

「なっあのエビのことも知ってるの！」

「まあ名前くらいしか知りませんがね…それよりここからもう少し離れませんか、ここだとまだゴジラの戦いの邪魔になっちゃうんで」

リトルにそう言われゴジラの方を見て確かに離れているといつてもあの巨体で暴れられるところも安全とは言いがたい、そう思い素直にリトルの言うとおりに離れることにする

「解ったわ、でも離れたら色々聞かせてもらうから」

「いいですよ、でも私達が離れば直ぐに終わると思うので本人に直接聞いた方が早いと思いますよ」

リトルはそう言うゴジラの方を見た

————ゴジラ side ————

（よし、無事に合流したようだな、まさかエビラがあんな爆発するとは思わなかったな。近くにいた子達に怪我がなければいいが）

「とりあえず、こいつをどうにかしないと」

そう言うゴジラの前には今まさに取っ組み合いをしているエビラを睨み付ける、この世界に来て初めて自分と同じ大きさの敵を前に緊張しながら戦っていた

（さつきは遠距離から熱線で倒せたが今は接近戦だ、取り敢えず鉢に

気を付けて戦うしかないな)

ゴジラはエビラからのハサミ攻撃を払い除け体当たりを繰り返した。エビラとゴジラの体がぶつかり合う度に高波が発生していたがその事に気を付けられる余裕がゴジラにはなかった。だがゴジラが一瞬目を艦娘達の方へ向けると艦娘達はもうすでに遠くへと移動していた。

その様子を見てほっとした瞬間エビラの鋏がゴジラの左腕を捕らえた

「ぐおおお、いってーくそ、離しやがれ！」

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

ゴジラは残った右腕で応戦するがエビラも挟んだ腕を離す様子もなく粘ってくる

(くそ、思ったより強いな劇中じゃ両腕もぎ取って終わりだったな、同じようにすればなんとかなるか…ん？皆も離れたんだし熱線で攻撃してもいいんじゃない？よし！)

ゴジラは右腕で残った方の鋏を掴みエビラを逃がさないようにし、エビラの顔に向かって熱線を吐き出した、エビラは顔面に熱線を諸に受け数秒後ボンと音を立て爆発した。

そして爆発の煙が晴れるとそこには沈んでいくエビラの下半身と両腕にエビラの残った鋏を持っているゴジラが姿を現した、ゴジラは持っている鋏を放り投げ勝利の雄叫びを上げた

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

雄叫びをあげ終えたゴジラは離れている天龍達と合流するため動き出した。そして天龍達と合流すると天龍達以外の艦娘達はゴジラを警戒していた

「お疲れさまゴジラ、随分早かったね」

艦娘達が警戒する中リトルが劳いの言葉をかけてくれた

「そうか？結構苦戦したんだが」

ゴジラがそう返すと艦娘達の顔が驚きの顔へと変わった

「なっ！あつあんた喋れるの？」

艦娘が驚き、声をあげ聞いてくる

「ん？おう、艦娘とのコミュニケーションはとれるようになってるから喋ったり意志疎通は出来るから問題ないはずだけど」

「そう、言葉が通じるなら大丈夫よね…まずはお礼を言わせてちょうだい」

「お礼？」

「そう、私はこの艦隊の指揮を執っているものよ、貴方がいなければ今ごろ全滅してたかもしれない。だからありがとう、お陰で私達は助かったわ」

「いやー、偶々近くにいただけだし助かって良かったよ」

「ええ、そうね、でも納得はしてないわ、天龍、貴方達前にもゴジラに助けてもらったって言ってたわよね。それじゃあゴジラが喋れるの知ってたんじゃないの？」

そう言うくと天龍達を睨み付ける

「いや、それは…」それはそんな時りとるが居なかったから意志疎通出来なかったんだよ」

「えっ…そうなの？」

「あつああ、さっきはいきなり喋りだしたからビックリしたよ」(棒)

「そうなの？」

「ああ、まさかこんなところで会うなんて思ってもみなかったよ」(棒)
「ふーん」

天龍が更に問い詰められそうになると思いゴジラは助け船を出すことにする

「なあ、それよりもお前達はいまここに居るので全員なのか？」

ゴジラのその問いかけに少し戸惑いながら

「いいえ、私達の他に前方に別の艦隊がいるわ」

その答えにゴジラは少し考えてから

「それじゃあ、其の別の艦隊と合流した方がいいだろう」

「えっいや、私達はここから離れる訳には…」

「いや、よく考えてみてくれ。さっきのエビラは2匹居た、もしかしたら番かもしれないしたら他にもエビラが居るかもしれない」

ゴジラがそう言うくと艦娘達の顔が青くなる、あの攻撃の効かない怪

物が他にもまだ居るかもしれないという言葉聞いて怯える艦娘もいた、その様子を見ながらゴジラは話を進める

「確かに…急いで向かわなきゃ。全艦急いで前線部隊に合流するわよ」

その号令を受け艦隊が動き出す、その様子を見てみると天龍はゴジラに手をあげて助かったと伝えてきた、そうしていると艦隊の指揮をしている艦娘が近づいてきて

「…ゴジラさん」

「何だ？」

「都合のいいこと言っているのは重々承知しています。ですがどうか私たちと一緒に来てくれませんか…もしゴジラさんの言った通りになつてたら私たちじゃどうしようもありません、どうか私達の味方になつてくれませんか」

そうして深々と頭を下げた

「大丈夫だよ」

「えっ？」

「言われなくても着いてくし、俺は艦娘の味方だからな」

その言葉を聞いて顔をあげた子は涙を流しながら

「有難うございます!!」

もう一度頭を下げてから艦隊に戻っていった

20話

ゴジラとリトルは移動中色々聞かれたが⑨鎮守府の事は伏せて島での生活などを喋っていた、そしてもうじき攻略艦隊と合流できると思った矢先、天龍が

「おい！向こうから緊急の通信が入ったぞ」

天龍のその言葉で場の空気が変わった、そして天龍が通信を終える

と

「どうやらゴジラの読みが当たっちゃったみたいだ、向こうでもエビラが三体出たそうだ、今はなんとか持ちこたえてるけど深海棲艦と挟まれた状態でいつまでもつか解らないらしい」

「そんな…このままじゃ私たち負けちゃうの…」

そう言って進む速度が落ちていく艦娘達、そんな中天龍が

「バカヤロー！まだ負けた訳じゃねーだろ、それに此方にはゴジラが居るんだ、急げばなんとかなるかもしれねーだろ!!」

そう言って仲間を鼓舞する中

「なあ天龍、その攻略艦隊まであとどれ位でつくんだ？」

ゴジラがそんなことを聞いてきた

「えっ！あつああ、あと15分くらいで見えてくると思うが」

「そうか、それじゃあ俺は先にいつてるよ」

ゴジラはそう言うスピードを上げていった、今までは他の艦娘に合わせて泳いでいたがそれを無くして本気で泳ぎ始めたゴジラはあつという間に天龍達から離れていった

—————攻略艦隊side—————

「艦隊攻撃開始!!」

武蔵の合図と共に深海棲艦の基地へと艦娘達が砲撃を始める。

深海棲艦も襲撃を受け迎撃体勢をとろうとするが密集しているためうまく迎撃出来ずにいた。

そして密集しているがために艦娘達の砲弾の雨にさらされ、回避しようとしても見方と衝突してしまいまともに動けずにいたが数では戦力を上回っている深海棲艦達は徐々に反撃を開始する。

数が多い分その弾幕は濃く艦娘側の爆撃機も容易に近づけずいた、空では制空権を海では敵を殲滅せんと激しい攻防戦が繰り広げられていた

「くっ敵は我々よりも多い、徐々に引いて前に出てきた敵を確実に倒していくぞ。空母はまだ無理に攻めずに我々の上を守っていてくれ。軽巡と駆逐艦は魚雷を使って敵を攪乱させるんだ!!……くそ！撃つても撃つても切りがない」

『武蔵、聞こえるか』

「どうした長門、何かあったのか」

『いや、敵の様子がおかしい』

「何？」

武蔵は敵の様子を見る、いまだに激しい戦いは続いているが

「敵が…前に出てこない？」

『そうだ、我々がいくら誘きだそうとしても、あれ以上前に出てこない。何か裏があると思わないか』

「裏というと……何か守っているのか？」

『解らない…もしかしたら別動隊がいるのか、それか新兵器があるとか…念のため別動隊のいる可能性があるということと考えた方がいいだろう。補給艦隊をこちらと合流させといた方がいいんじゃないか』

「しかししたら補給中狙われる可能性がある」

『だが別動隊がいて補給艦隊が襲われて打撃を受ければ我々は補給すら受けられなくなるぞ！』

「うっ！確かに…その可能性はある。解った補給艦隊に…」

武蔵が言い終わる前に後方で大きな水柱が3カ所から上がった

「XXXXXXXXXXXX」

「XXXXXXXXXX」

「XXXXXXXXXX」

突如として艦隊の後ろから現れたエビラ、その姿に艦娘達は咄然とするが直ぐに後方に居た空母の護衛をして居た駆逐艦達が煙幕を張りエビラの視界を遮る

「空母の皆さんは本体と合流してください。私達はその間こいつを引き付けておきますから…急いで！」

「!!…解ったわ、でも私達も上空から援護するわ。無理しないでね！」
駆逐艦の声で我に帰った空母達は前にいる艦隊と合流するために前進し始めたが、前線は前方の深海棲艦の相手をしているため後方に戦力を割くことが出来ずにいた

「なんだあいつらは！新種の深海棲艦か!!」

『解らない。だが後方にいた空母達は無事に此方と合流できそうだが、今は空母の護衛艦隊が応戦しているが火力が足りてるとは思えない。前線の戦力を回すしかないだろう』

「しかしこの状況では下手に戦力を分散させるわけには……なんだあれは？」

武蔵が深海棲艦の方を見ると半分以上の深海棲艦が黄色い液体を自分達の周りに散布し始めていた

「なんだ？何を巻いているんだ、それにやつらの攻撃も弱くなってきた、攻撃よりもあの液体を撒くことを優先させているのか？

一体なんの意味が…まあいい攻撃が弱まるのはこちらとしては都合だ。長門！こちらは私が見る長門は後ろを頼む」

『了解した』

長門はそう言うとう自分の艦隊と共にエビラの対処に向かう

「ああは言ったが我々でどうにか出来るとは思えんな、ゴジラに早く来てもらうか…」

そう言つて長門は通信機に手をかけ天龍に連絡を取った。

「こちらは長門、天龍聞こえるか？」

『こちら天龍、良かった。丁度連絡を取ろうとしてたんだよ』

「どうした、何かあったのか？」

『ああ、でっかいエビの怪物が現れたんだよ。しかも2匹も』

「何だつて！そっちにも出たのか、いま大丈夫なのか!!」

『そっちにもつて、まさかそっちにも現れたのか!』

「ああ、こっちは3匹だ。いま対処に向かっている」

『3匹も!!…いいか、そいつの名前はエビラ。ゴジラがそう言つてた、

そいつには少なくとも駆逐艦や軽巡の攻撃は効かない、俺達もいまゴジラと一緒にそっちに向かっている、それまでなんとか持ちこたえてくれ』

「解った、だが何時まで持つか解らない。今そのエビラと深海棲艦に挟まれた状態だ、出来るだけ早く来てくれ」

『解った、急いで向かう！』

「頼む、通信を終わる」

そうして天龍との通信を切った。そして今度は他の艦隊へと通信を開いた

「全艦隊に通達、後方に現れたやつらの名前はエビラ、奴等には駆逐、軽巡の攻撃は効かないらしいもしかしたら戦艦クラスの攻撃も効かない可能性もあるため無理に戦おうとせず逃げ回るんだ、もうじき援軍が来る。そうすればこの戦況も変わる、それまで持ちこたえるんだ！」

長門の通信を聞いて艦娘達は動揺していた。自分達の攻撃が効かないかもしれない事、そして援軍が来れば何とかなるという長門の言葉とそんな相手にどう対処すればいいのか今の状況に頭が追い付いていなかった

『長門！、今のは一体どういう意味だ、なぜやつらの事を知っている！！』

他の艦娘達が混乱する中、武蔵の怒鳴り声が聞こえた。長門は冷静に伝える

「先ほど補給艦隊に連絡した所、向こうでもこいつらに襲われたらしい」

『何！、艦隊は無事なのか！！』

「何人が殺られたらしい、それにこちらの攻撃が効かなかったそうだ」

『では、どうやって奴等を退けた？』

「……ゴジラだ」

『ゴジラ？』

「あーそうだ、ゴジラだ。前に天龍達が襲われた時に怪物に助けられたって報告をあげただろう。その時の怪物がゴジラだ」

『あの報告は受けているが、それが一体……まさか!』

「そう、そのまさかだ。天龍達の方に現れたエビラは2体居たそうだがその後現れたゴジラによってあつという間に倒してしまつたらしいんだ。そしてゴジラは我々の味方をしてくれると約束してくれたらしい、そしてこつちに向かつて来ている援軍がまさにそのゴジラなんだ、幸い深海棲艦からの攻撃が弱まっている。ゴジラが来るまで何とか我々が持ちこたえればまだ勝機がある」

『…解つた、そのゴジラが来るまで持たせればいいんだな。だが本当に大丈夫なんだろうな?』

「ああ大丈夫だ、私が保証しよう」

『フツお前がそこまで言うんなら大丈夫なんだろう。よし!全艦隊援軍が来るまで何とか持ちこたえろ!踏ん張りどころだぞ!!』

こうしてエビラ、艦娘、深海棲艦達の攻防戦が激しさを増していった

21話

「……深海棲艦 S i d e ……」

「姫様、艦娘共ガ我々ノ基地ニ攻撃ヲ仕掛ケテキマシタ」

その報告を受けた姫と呼ばれた深海棲艦は、笑みを浮かべながら答えた

「ソウ、ヨウヤクココニ攻撃ヲ仕掛ケテ来タノネ。ヨクココマデコレタワネ、アノ怪物ハドウシタノカシラ、マサカ倒シタノ？マサカネ。マアソノウチ出テクルデシヨウ、ソレマデ私達ガ相手ヲシテマシヨウ。ドノミチ数デハコチラガウエナノダカラ、フッフ、アノ怪物ガ現レタラマタアノ絶望ニ満チタ悲鳴ヤ断末魔ガ聞ケルノカシラ楽シミダワ」

そう言うとき姫⑨は更に笑みを深めた、そこに

「ナンダ、マタ艦娘共ガチヨツカイカケテ来タノカ？」

声のした方を見るとそこには複数の深海棲艦が立っていた

「エエ、デモ今日ハ偵察デハナク本格的ニ攻メテ来タヨウダヨ」

「（・▽・）ヘエーヨウヤクカ、デモドウセアノ怪物ニ食ワレチャウンデシヨ」

「ソレガマダ姿ヲ現シテナイミタイナノ」

そう言うともう一人も笑みを浮かべ

「ヘエ、ドツカ行ツテルノカシラ、マアイナケレバイナイデ私達鬼ヤ姫級ガ相手スレバイイシ、最近アンマリ動イテイナイカラ体ガ鈍ツチャツテ」

「ソウネ、アノ怪物ノセイデコノ島カラ滅多ニ出ラレナイカラ仲間ヲ増ヤシテモ置イテオク場所ガ無いノヨネー。丁度イイカラ艦娘ニアル程度減ラシテモライマシヨウ、ドウセ怪物ガ出テキタラアイツラ終ワリナンダシ」

「チヨット、貴方」

姫がそう言うとき近くに控えてきた深海棲艦が前に出てきた

「（。ㇿ。）ハッ！ナンデシヨウ」

「アノ怪物ガ出テキタラ私達ヲ呼びニ来ナサイ、ソレマデハ防御ニ徹

シテアマリ前ニ出ナイヨウニ戦イナサイ」

「（。ㇿ。）ハッ！了解シマシタ」

そう言うのと命令を受け取った深海棲艦は下がっていった

「サテ、ドウナルカシラネ」ニイ

そうして時は経ち

「（。ㇿ。）姫様、怪物ガ3匹、艦娘ノ背後ニ現レマシタ」

「ソウ、デハ行キマシヨウカ、彼女達ノ最後ノ戦イヲミニ」

「（・ε・）チエツ今回ハ戦エルト思ツタンダケドナー」

「フウ、マタコノ島カラ出ラレナイノカ…」

「マアマア、ソウイウナヨ、ナンナラ賭ケルカ、艦娘共ガ生キテココカラ脱出デキルカドウカ」

「ソンナノ賭ケニナラナイダロウ」

そう言つて肩を落としながら姫、鬼級は外に出るために移動を開始した

一行が外に出るとそこは激しい砲撃と対空砲火の飛び交う戦場だった。しかし姫達は敵からの砲撃を気にもせず双眼鏡を覗いた

「アハハハ、本当ニイツパイ来テル」

「デモモウ終ワリネ。アノ怪物ト私達ニ挟マレテハ時間ノ問題デシヨウ、今回ハドウスルノ？」

「ウゥン、ソウネ、セツカク艦娘達ハ数ヲ揃エテ来タノダカラ、コチラカラノ攻撃ハ最低限ニシテ、アノ怪物達ニジワジワ殺サレテクノヲ見ルトイウノハドウカシラ」

「イイネ、ソレジャア、アイツラガドレクライモツカ予想シナイカ！」

「イイワネ、私ハ一時間モツト思ウワ」

「私ハ二時間ネ」

「一時間半」

「皆結構長メナノネ、私ハ三十分ネ」

「エー、ソンナニ短イカー、私ハアレダケイツパイルカラ三時間位ダト思ウナ」

「ドウセ勝テナイト解ツテ、直グニコツチニ突ツ込ンデクル、ソウシタラ我々ノ攻撃デスグ沈ム」

「ナルホドネ、ソレ ज्याア答エアワセダー！」
そう言うのと再び皆で双眼鏡を覗き始めた

—————

—————

—————

—————艦娘 side—————

「きやあああああ」

「きやあああああ」

エビラ達の攻撃により徐々に艦娘達の被害が大きくなってきた
た

「長門さん！援軍は一体何時来るんですか、もう持ちません!!」

「もうすぐだ、もうすぐ来るはずだ、……!!いや今来たようだ」ニイ
「え？」

長床その言葉に一瞬何を言ったのか聞き取れずにいると、海が光その後自分達と対峙していたエビラが目の前かえから居なくなり、光の柱が現れたその光を見上げると光の先端にエビラが見えたが直ぐに真つ二つになり落ちてきた、その光景は今いる全てのものが見ておりその間、双方共に攻撃の手を止め見いつていた

そして光が収まり海を見ているとゴジラが現れた、ゴジラと対峙する形になった艦娘達は警戒して砲をゴジラに向けているが

「遅くなったな、皆大丈夫か？」

その言葉を聞いて更に驚く艦娘達、そんな中長門が

「待ちわびたぞゴジラ、よく来てくれた。感謝する」

「おう、待たせたな。でも感謝の言葉は全部終わった後に聞かせてもらう、まだ一匹しか倒してないからな、エビラは俺に任せて長門達は深海棲艦の方に集中してくれ」

「一人で大丈夫なのか？」

「ああ、むしろ近くに居られると戦いづらいからな」

「そうか、確かに悔しいがそうした方がよさそうだ。了解した。でも何かあったら直ぐに頼ってくれ」

「おう、そんな時は頼むわ」

そうして長門は武蔵と合流し、深海棲艦の対処に戻っていった
そしてゴジラも2匹のエビラと対峙していた

「XXXXXXXXXX」
「XXXXXXXXXX」

「さーて、お前らの攻略法なんてきつきのやつらで解ってんだよ、一気に決めてやるよ!!」

そう言うとゴジラは再び熱線を吐き一匹のエビラを吹き飛ばした、それを見た残ったエビラは急いで海の中に潜り、ゴジラを下から狙おうとしていた…が襲う直前にゴジラは海中に熱線を吐き潜っているエビラに当たった、次の瞬間海で爆発が起こりエビラの死体の一部が浮き上がってきた

余りにも早く終わってしまった、戦いを見て艦娘達は歓喜した。そして深海側も…

「何…何ナノアイツハ!!私達ガドウシヨウモヨナカッタアノ怪物を、アンナニアツサリ倒スナンテ。しかも艦娘ノ味方ヲシテイルミタイダシ、マズイジヤナイ!!」

「ナンナノヨナンナノヨナンナノヨ、アイツ!フザケンジヤナイワヨ!!フー、フー、……落ちツイテ、マダアノ怪物に我々が開発シタ薬品ガ効カナイツテ決マツタワケジヤナイワ。島の全方位に薬品ヲ散布スレバ艦娘ダケニ集中デキル、ソウスレバ」バン

「姫様大変デス!」

「何!!今忙シイノヨ!!」

「アノ怪物ニ薬品ガ効イテマセン!」

「……………ハ?」

余りの報告に姬たちは固まる

「アノ怪物ハ薬品ノ効果範囲ニ入ツテモカマワズニ此方ニ向カツテキテマス」

報告を受けた姫は苦虫を潰したような顔をした

「クツ……コノ基地ヲ放棄スル」

「!!!?」

「ナツ!本気カ、コレダケノ戦力ガアルンダ何トカナルダロ、私達モイ

ルンダシ」

仲間が説得するが

「アノ怪物ヲアツサリ倒スヨウナヤツニ勝テルト思ツテイルノ、今ハ撤退シテ対策ヲ練ルワヨ。今外ニイルヤツラハ出来ルダケ時間ヲ稼ガセナサイ。他ノ者ハ必要ナ物ヲ集メテ撤退ノ準備ヲ。…急イデ!!」
そう言うとは他の深海棲艦達が動き始めた

一方ゴジラは艦娘達と合流し、一緒に深海棲艦を倒していった(蹂躪)最初深海棲艦は黄色い液体をゴジラに掛けていたがゴジラは何ともなくむしろいきなり黄色い液体を掛けられイラッ!としていたので掛けて来た奴等を熱線で風呂払ったりしていた。

そうやって順調に深海棲艦との距離を詰めていったが、異変が起きた

ゴジラが深海棲艦の陣地に入ろうとした瞬間ゴジラは海の中に潜ってしまった、いや引きずり込まれた

「大丈夫かゴジラ!!」

急に海に消えたゴジラを心配して長門から連絡が来る

「ああ、大丈夫だ。どうやらもう一匹エビラが居たらしい、コッチは任せて長門達は深海棲艦を頼む」

「了解した」

そう言うって通信を切りエビラと対峙するゴジラだがエビラを見て警戒を強めた。なぜなら今対峙しているエビラが今まで倒したエビラとは違ったのだ

大きさは一回り大きく、そして甲殻の色が赤ではなく青なのだ、これだけ見てゴジラは他とは違うと確信した

(これがモン○ンだったら亜種って感じか、注意しないと痛い目見そうだ)

そう思いゴジラはエビラ(亜種)とにらみ合う

「ぐう、この…クソエビがー！！！！」

ゴジラが叫びながら力を込めエビラを持ち上げ

「調子に乗ってんじゃねー！！！！」

遠心力をつけ思いつきり投げ飛ばしたその反動でハサミはゴジラから離れ、飛んでいったエビラは深海棲艦の基地である島の陸地まで飛んでいき深海棲艦達を巻き込みながら転がっていった。

そしてゴジラもそれを追って島に上陸しエビラと再び対峙したが、エビラは先程と違い陸に上がったせいで動きが鈍くなっていてそれに気づいたゴジラはニイと笑い

「さつきはよくもやってくれたな、お礼にこんがり上手に焼いてやるよ」

そう言うゴジラは熱線を吐き出した

XXXXXXXXXXXXXXXX

最初は何とか逃げようとしていたエビラだが、段々熱線を受けた場所が赤くなり始めた

XXXXXXXXXXXX

「まだまだー！！」

しばらく熱線を吐き続けているとエビラは全身が赤くなり完全に動かなくなった、ゴジラはそれを確認すると

「上手に焼けましたー！！ハア、ハア手こずらせやがって。ハア、ハアさあ後は…」

そう言うゴジラは残っている深海棲艦達を見るが、そこにはもうほとんど深海棲艦は残っていないかった。残っているのは今現在艦娘達と戦っている者と陸上にいる者しか居なかった。

陸上にいる深海棲艦もゴジラとエビラの戦いに巻き込まれたせいではほとんど残っては居なかった、それを見て遠くの沖を見るとあちこちに逃げているであろう深海棲艦の姿があった

「あーこれは今ここにいる奴等を倒せばもうコッチの勝ち何じゃないか。じゃあもう一踏ん張りしますか」

そうしてゴジラは陸上に残っている深海棲艦を次々と倒していった、その途中リトルが

「…そろそろ大丈夫かな、ゴジラ、私ちよつと用事あるから降りるね」
そう言うトリトルはゴジラから飛び出して行った

「えっ！ちよつと待てよ、いくらなんでもまだ危険じゃないのか。皆が上陸した後でも…」

「大丈夫、大丈夫、私妖精だから…：こちらトリトル敵基地に到着した、これよりスニーキングミッションを開始する」

そう言うトリトルは基地の中に入っていった

「本当に大丈夫だろうか…」

ゴジラは少し不安になりながら残党の処理を再開した

—————深海棲艦side—————

「生き残ツタノハ、コレダケカ？」

「イイエ、他二モ脱出シテイルモノハ居マス」

「ソウ、デハマズハ他ノ仲間トノ合流ヲ優先サセマシヨウ」

「姫サマ」

「何、今考エテルノダケド」

「実ハ、コノ者達ガアノ怪物ノ血ヲ浴ビタヨウデシテ」

「ナンデスツテ！ソレハ本当!!」

姫が目を向けるとそこには赤くなつた姿で立っているヲ級やり級達が生居た

「ハツハイ、近クデ戦ツテイタ時ニアノ怪物ノ血ヲ浴ビマシタ」

その答を聞いて姫は笑いだした

「フッフッフ、良クヤツタワ。アナタ達、ソノ血ヲ一滴たりとも落トスンジャンナイワヨ!!」

「エッ！アツハイ!!」

「フッフッフ、アツハツハツハツハ。コレデ！我々ニモアノ怪物ニ対処スル方法ガ解ルハズダワ!!急グワヨ…」

そうして撤退した深海棲艦の一行は仲間と合流すべく先を急いだ

—————深海棲艦sideout—————

そしてゴジラ達は残党の処理を終え、今度は内部への制圧部隊が組み入れ突入していた

『こちらA班、残敵なし、クリア』

『こちらB班、残敵なし、クリア』

『こちらC班、倉庫区に大量の資材を発見、これより制圧を開始する』
制圧部隊からの連絡を聞きホツとする武蔵

「どうやら完全に制圧できそうだな、大量の資材も手にはいれば、こちらの首も繋がったな」

「ああ、だがまだ油断は出来ん、まだ隠れている敵が居るかもしれない」

「そうだな、最後まで気を引き締めていこう」

そんな会話をして居ると無線が鳴った

『こちらC班、聞こえますか』

「ああ、こちら指令所、聞こえてるどうした、敵でも出てきたか」

「いえ、敵ではありません、ただからの倉庫が2ヶ所ありまして…』

「何？どういう事だ」

『私にも解りませんが倉庫は今確認してるだけで5ヶ所、3カ所は鉄に弾薬、燃料、ボーキサイトが大量に入ってましたが、一番大きい残りの2ヶ所には何もありません』

「そうか、あれだけの数の深海棲艦が居たんだ、もしかしたら増設したばかりか撤退するときを持っていった可能性もあるな」

『どうしますか？』

「調査は後に回す、今はコノ基地の制圧を急ぐんだ」

『了解、通信終わります』

そうして順調に基地の制圧は終わり、コノ海域の解放が完了した。

そして、敵の基地だった島には今艦娘達が並んでいる、そしてその後ろにはゴジラが立っていた

「ただいま、ゴジラ」

「リトル！お前、どこに行ってたんだよ心配したんだぞ」

「ゴメン、ゴメンちよつと報酬を取りに行ってたんだよ」

「報酬？いつの間にそんな約束してたんだ？」

「ん？約束なんてした無いよ。ゴジラの事だからどうせ報酬とか考えてなかったでしょ、だから私が貰ってきたの」

「うっ…確かに、でも何か悪いじゃん」

「悪いとかじゃないの！働いたんだから正当な報酬を受け取りなきやでしょ…あつどうやら終わったようだよ」

リトルに言われ前を見るとそこには武蔵が前に立っていた

「皆、たった今基地内の完全に制圧が完了した。これによりコノ海域は解放され作戦目標が達成された、我々の勝利だ!!!」

「「「おーーーーー!!!」」」

武蔵の宣言により艦娘達から歓声が上がった

「そして今回、怪獣エビラの出現によってより多くの犠牲が出た。後ろに居るゴジラが来てくれなければ我々は全滅し人類は敗北していただろう。改めて感謝する！」

そう言うとき艦娘達全員がゴジラの方へ向き頭を下げた、その光景を見てゴジラは照れながら顔を掻く

「さて、全線基地にはもう連絡してある物資が届くまで我々は交代で警備をする、他の者は怪我人の治療をやってくれ、幸いゴジラと一緒に居るリトルの話によればここへの入渠施設は我々が使ってたものと変わり無いらしい、状態の酷い者を優先に使うようにしてくれ、それとゴジラ、悪いが人手が足りないんだゴジラも島の周りの警備をしてほしい頼めるか」

「ああ、俺は大丈夫だ、任せてくれ」

「すまない、君も怪我をしているのに…」

「いやこんな状態だし仕方ないさ、それに怪我といってももう塞ぎ始めてるし、この中じゃ一番動ける、問題ないよ」

「すまない、助かる。そう言うわけだ皆後一踏ん張りだ頑張ってくれ、では行動開始!!」

こうして物資が届くまでゴジラは島の警備をすることになったのだった

23話

現在ゴジラは見回りに行くために浜辺に来ている。そこに第9鎮守府の艦娘達がやって来た

「おーい、ゴジラー！」

「ん？川内達か？怪我はもう大丈夫なのか？」

「うんー！リトルが入渠施設を私達が使えるようにしてくれたから、お陰で皆怪我を直すことが出来たよ」

「そうか、でもあんまり無理するなよ、あんな戦いの後なんだから今は休んどいた方がいいんじゃないか？」

「うん、そうするよ…所でゴジラはこんなところで何してんの？お陰で探すの大変だったんだから」

「そうかそれは悪かったな、俺は今から見回りに行くところだけど」

「えっ！今から？ちよつとゴジラ怪我は大丈夫なの？あのエビラと戦ってた時怪我をしてたじゃない！」

「ん、ああ。腕の傷はもう塞がって来てるし脇腹の方も血は止まってるから大丈夫だよ」

そう言っつてゴジラはハサミで挟まれた腕と刺された脇腹を見せた、そこには血は止まっているが見るからに痛々しい傷が見えていた

「なっ!?こんな傷で海に出ようとしたの!!」

傷を見た川内はゴジラに詰め寄る

「お、おう。まだエビラの生き残りがいないとも限らないからな、それに俺だったら何かあったら対処できるからな、皆はゆつくり休んで……」

「ふざげないでよー確かにゴジラなら何とかしちゃうかもしれないけどさ、ゴジラは私達と違って怪我をしても入渠すれば治る訳じゃないんだよ！」

それなのに怪我のしたままの状態で見回りに行くなんて、そして怪我の治った私達に休んでくれなんておかしいよ!!」

川内が叫ぶ、ゴジラとしては先のあの戦いで疲れているであろう艦娘達に気を使ったつもりだったが、そこに川内が急に怒りだしたので

ゴジラは驚いて固まっていた

「いいい！見回りは私達が行くからゴジラは休んでて」

「えっ、！いやだっ…」

「い・い・ねー」

「あっ…はい」

川内の、いやこの場にいる全員の圧力に負けゴジラはおとなしく言うことを聞くことにした

「それじゃあ、今から見回りに出る人決めるよー」

「二二「ハーハーイー」二二」

と見回りに向かう編成を決め始めた第9の艦娘達

「それじゃあ、ゴジラさんは休んでいてくださいね」

そう言われゴジラはその場をあとにした、そしてやることのないになったゴジラは昼に戦ってそのままになっているエビラ亜種のところに来ている

「ここにがあると邪魔になるよなー」

そう思いエビラを解体し始めるゴジラ

「ふおおおお、！やっぱり固いな。もう少しぬおおおおお!!」バキバキバキバキ

ゴジラが力を出すと徐々に殻が剥がされていった。そして一ヶ所剥がれると後はさほど苦労せずに解体が出来た、そして殻を取った後にはほどよく火が通りおいしそうな漂わせた白身が姿を現した、それを見たゴジラは涎が出てきた

「ごくり、旨そうとは思っていたがこれは予想以上にくるな、こんだけあれば腹一杯食べそうだ…ちよつと味見を、」

そう言っつてゴジラが口を開けると

「おっ、解体してくれてたのか」

後ろから声を掛けられビク!!つとするゴジラが後ろを向くと、そこには武蔵と長門が立っていた

「ここに置いておくと腐ってしまうからな、助かるよ」

「ん、おおお、丁度手が空いてたからな、今のうちにやっところかなーっつて」

「そうか、すまなかつたな…」

そう言った武蔵は少し俯いていた

「ん？どうしたんだ？」

「いや、先程と皆に怒られてしまつてな、君が怪我をしているのに海の見回りを頼んでしまった。君は我々と違つて入渠して怪我を治すわけでもないのに、あの戦いを見て私は君が無敵の生物の勘違いしてしまつたようだ、君も傷つき痛みには耐えながら我々と共に戦つてくれたのに、本当に申し訳ない」

そう言つて武蔵は頭を下げた

「いや、別に気にしてないから大丈夫だ、それに怪我だつてもう治りかけだし気にしないでくれ、俺も好きで手を貸してるんだし、皆にも良くしてもらつてるからな」

「そうか、そう言つてもらえると助かる」

しかし気まずい空気は変わらずにいたのでゴジラは話題を変えることにした

「所でこのエビラの身はどうする？食べるか？」

「ん…ふむ、見事な白身だ、確かに旨そうだなただこいつは食べられるのか？」

「うーんまあ俺が良く火を通したし見た感じ大丈夫そうだが」

「まあ試しに食べてみるのもありか、丁度簡単だか祝勝会を開こうと思つていたんだ、この量なら全員に分けても余裕で余るだろう」

「では、祝勝会の会場はここに作るか？」

「そうだな、そうしてくれ」

「解つた皆に報告しとく」

こうしてエビラ（白身）の前に祝勝会の会場が作られることになった、そして会場設置のために手が空いた艦娘達が集まつてきた

「うわー、でっかいですねー」

「ほんとにねー、良くこんなのと戦つたよねー」

「ゴジラがいなかったら本当にあぶなかつね」

「ああ、お陰でこうして祝勝会が開ける、それと喜べお前達今夜のメインディッシュはこのエビラだぞー！」

「！！「おおおー！！」！！」

「！！「えっ!!」！！」

「赤城さん、これは！」グー

「ええ、これは腕がいえ、お腹がなりますね」グー

「こんなに食べられるかなー」

「ゴジラさんも食べるから大丈夫なんじゃない？」

皆が盛り上がってきた所で数人の艦娘達が声をあげた

「ちよ、ちよつと待って！」

「ん、どうかしたか？」

「どうかしたかじゃないですよ！皆こいつを食べる気なんですか!？」

「そうだが？なにか問題があるのか？」

「問題って…問題しかありませんよ!!こいつらは私達の仲間を食べてたんですよ!!」

その言葉に全員が固まった

「そ、それは本当なのか！」

「本当です。私達補給艦隊が襲われたときに1人…」

「…そうだったのか。だったらこいつも我々の仲間を食ってるかもしれないのか」

「じゃあ、どうしますか？流石に仲間を食べたかもしれないやつを食べるのはちよつと…」

「ああ、流石にこれを食べる気にはならないな。ゴジラすまないがこいつを海に沈めてきてくれないか」

「お、おう解った」

こうしてゴジラ若干残念に思いながらエビラ（白身）を運んでいった、そして他にも

「ああ、海老の白身が、エビチリ、エビフライ、海老天がああああああ!!」ガク

「クツ赤城さんしようがないわ、こればかりはしようがないのよ…」ガク

そんな言葉が後ろから聞こえてきたがゴジラはエビラ（白身）を持って海へと入っていったそしてしばらく泳いだ所で

「ここなら大丈夫だろう、ここにするか」

そしてゴジラはエビラ（白身）を手離し…

「…やっぱちよつと味が気になるな、皆にバレなければ大丈夫かな」

そう言つてゴジラはエビラ（白身）に噛みついた、その瞬間ゴジラは目を見開いた

「うまつ！なんじゃこりやめちやめちやうめえ。どっどうしよう止まらない」

「えーそんなにうまいのー」

そう言つてリトルが出てきたのでエビラの身をちぎつてリトルに渡す

「おーうまいぞリトルも食つてみるよ」

「えーでもこいつも艦娘食べたかもしれないでしょ？」

「う、まあそのなんだ…ちよつと食べてみるよ」

そう言われ白身を口にに入れるリトル

「ふおおお、これは美味しいね程よい弾力が癖になりそうだよ。これはお酒に合うね♪」

そうしているうちにエビラの白身はきれいにゴジラ達によつて食べられてしまった

「ふー。久しぶりに腹一杯になったな」

「そうだね、今までここまで食べることに無かったからね、今度つから見かけたら狩つところか」

「いや、そんなに居てもらっても困るんだが…そろそろ戻ろう結構時間経つちやつたし」

こうしてゴジラとリトルは皆のところに戻つていった

24話

ゴジラ達が戻ると先程の場所にはテーブルや椅子、料理などが並んでいた

「おおゴジラ、随分遅かったな？」

「ん、おっおう、まあ少し深いところに沈めてきたからな」（汗）

「そうか、ご苦労様こちらももうすぐ準備が終わるからそれまで休んでくれ」

「ん、解った、ありがとな」

「フッフ、気にするな」

しかし休むと言ってもどこで休めばいいのか解らないので、とりあえず邪魔にならないであろう港付近で見回り組が帰ってくるのを待つことにした

「ねえ、ゴジラ」

「ん？なんだ」

「とりあえず戦いは終わったけどこの後どうするの？」

リトルが今後について聞いてきた

「どうしたいのって言われてもな、艦娘とは仲良くなれたしパイプも作った。後は自分の島に帰ってのんびり過ごしてたまにこうやって作戦に手伝ったり、遊びに行ったりできればなと思ってるけど」

その答を聞いたリトルはと大きく「はあああ」ため息を吐く

「ゴジラがそうしたいのは解ったけど、少し考えが足りないんじゃないかなあ」

「えっ！そうか？」

「そうだよ！良く考えてよ、今回のことで私達のことには艦娘や深海棲艦はもちろん人間にも知られるんだよ!!」

「それはそうだな、そういう風にしたからな」

「はあく、あのね。一匹で連合艦隊を壊滅させるだけの力を持った生き物を人間達がほっとくと思う？」

艦娘だって今は仲良くしてるけど皆が皆ゴジラを受け入れた訳じゃないんだよ!!」

「う…、今はそうかもしれないけど少しずつ解ってもらえば…」

「甘い！甘い甘い甘い。砂糖よりも甘い!!、いい！艦娘は人間と共に戦ってるの、その人間がゴジラを邪魔に思ったり危険生物として認識すれば艦娘とも戦うことになるかもしれないんだよ!!」

「……マジか」

「マジ、本気と書いてマジ、しかも人間は信用しないって言っちゃってるから危険視されるのはほぼ確定だろうね」

「マジかく、どうしよう」

その言葉を聞いてリトルは本日三度目のため息を吐く

「まあ、そんなことだろうとは思ってたから色々考えといたけど」

その言葉にゴジラは顔をあげリトルに迫る

「マジで!!どんな考えなんだ？」

「落ち着いてよ、まず私達のことをよく知ってるのは第9 鎮守府の川内達だ、その川内達にもまだ私達の家である島の位置は鎮守府から3日行ったところの島としか言っていないから正確な場所はバレてない、だから…」

「だから？」

「隠し通す!!もうこれしかないね。第9に配ったインカムには私には直接呼びら掛けられるようにはしてあるけど逆探知とかは出来ないようにしてあるからね、それで場所は特定はできないでしょう。でも！ゴジラが今回みたいに作戦を手伝った時に。贈り物だーとか、これ作ったんですー、とかって発信器みたいなものを隠したものをもらったりしたら不味いですよ。だから何か貰ったときは今後私が確認しますから」

「そっそうか、そういうことにもなる可能性はあるもんな」

「可能とかじゃなくて確実にありますー!」

その後ゴジラはうんうん唸りながら考え

「うーん、そうだよなー、よし解った！とりあえずこの祝勝会が終わったら島に帰ろう、そんでしばらく様子をみよう」

「うんまあ、それがいいんじゃないかな、一応こちらが人類と敵対する意思がないことだけ伝えとけば多少は意味があるでしょう」

「よし、そうと決まれば別れの挨拶しないのだな」
「!!?ング……まあゴジラがいいならそれでいいよ」

そんな話をしていると遠くから貨物船を連れた見回り組が帰って来た

「おーい、ゴジラー、私達が帰ってくるまで待っていてくれたの?」

「んー、いや暇だったからここでボーツとしてただけだよ」

「もうゴジラは素直じゃないなー、まあいいけどさー」

「それよりも川内、ありがとな俺の変わりに見回り行ってもらって助かったよ、それと、おかえり」

「!!?急に真面目にならないでよもー……まあ悪い気分じゃないかな、ただいま、ゴジラー!」

「んで、これが物資積んだ貨物船か」

「うん、途中で見かけて一緒に連れてきたんだ」

「丁度よかったな、今祝勝会の用意してるからこれでもう少し豪華な飯にありつけるだろうー!」

「祝勝会やるの!!やったー!!皆に知らせてくるー」

そう言つて川内は走つていった。そうして時間が経ち祝勝会が始まろうとしている、現在会場にはほぼすべての艦娘が集まっている。

そして壇上には武蔵と長門、そして後ろにゴジラが立っている、そして

「皆集まっているな、今宵は簡単ではあるが祝勝会の場を設けた。酒は提供できないのが残念だがジュースで我慢してくれ、それでは我々の勝利を祝して乾杯!!」

「!!「カンパーイー!!!」!!!」

こうしてささやかながらも祝勝会が始まった、そして思い思いのグループに別れ時間が過ぎていく、その中でもゴジラの周りにも多くの艦娘が集まっていた

「ゴジラ、楽しんでくれてるかな?」

そういつてきたのは武蔵だ

「おおー楽しませてもらってるよ♪」

「本当か?ただそこで立って見てるだけに見えるが」

「いや、皆来てくれてるしこういう光景を見るのも悪くない」

「そうか、それならよかった…ところで良かったら私にも見せてくれないかな?」

「ん? 見せるって何を?」

「君が見ている光景をさ、私も興味がある」

「あー、そう言うことか、喜んで。さっ、どうぞ」

そう言うゴジラは武蔵の前に頭を持っていき武蔵を乗せて立ち上がった

「おー! これは凄いな、ゴジラから見た景色とはこんな感じなんだな」

「どうだ、お気に召したかな?」

「あー、ここに酒がないのが唯一の不満かな」

「ハハハ、そいつは残念だったな」

「ああ、残念だ…:こうして見ていると我々が勝ったのがようやく実感が出てきたようだ」

「実感?」

「ああ、あの絶望的な戦力差のなか我々は戦った、本来なら今下で笑いあってる仲間が居なくなってたかもしれない、そんな戦いのなかゴジラ、君が来てくれたから我々は最小限の犠牲で勝てた、本当に感謝しているよ」

「お礼はもういいよ、俺が来たって助けられなかった奴は居るんだし、それに最終的にここを制圧したのはここに居る皆なんだから、それにまだ戦いは続いてくんだいちいちそんなことでお礼いつてたら切りがないぞ」

「そうか…:そうだな、でもこうして皆の笑顔を見れているのは間違いない君のお陰だ、そのことを感謝しているのは忘れないでくれ」

「ああ、解った」

「所でゴジラはこの後どうするんだ?」

「ん、別に、自分の住んでる島にかえってのんびりするつもりだけど」

「そうか…:もしよければなんだが、これからも我々に手を貸しては

くれないだろうか?」

「ああ、別に手を貸すのはいいぞ」

「本当か!!」

「ああ、ただ勘違いしないでほしい事がある」

「…勘違い?」

「そうだ、俺はあくまで艦娘の味方をするんであって人間の味方をする訳じゃない」

「!!…それはなぜと聞いてもいいかな?」

「それは、まあ簡単に言えば俺は人間が嫌いだからだ、もちろん人間にもいい奴と悪い奴がいるのは知っているし話せば仲良くできるかもしれない。だが、人間が俺を見て、知った場合、どうなると思う」

「それは…」

武蔵は黙って俯く

「そう、この力を見たら俺を危険視して攻撃してくるかもしれないし、利用しようと考えてるやつだって現れるかもしれない、もちろんそれは人間だけじゃない。今回の戦いを見て艦娘の中にも俺を怖がってる子も居るはずだでも俺は人間よりも艦娘の方が好きだから、嫌われようとも艦娘に助けが必要なら俺は助けに行く」

「だが、それは結果的に人間を助けることになってもか?」

「ああ、別に人間が嫌いであって憎んでる訳じゃないからな、正直どうでもいい向こうが俺たちに攻撃してこない限り俺は別に人間と戦うつもりもない、ぶっちゃけ艦娘と仲良くできたらそれでいい!!」

「そっそうか、ま、まあ手を貸してくれるんであればこちらとしては十分心強い、それで連絡手段なんだが」

「あー、それなら、リトルー!」

そうしてリトルを呼ぶ

25話

ゴジラに呼ばれリトルが近づいてくる

「何ー?」

「武蔵が俺達との連絡手段が欲しいんだと」

「えー、んーゴジラがいいならいいけど、じゃあおーい長門ー」

「ん?なんだ」

「長門の所の通信機って改造してあったよね、それ頂戴」

「え、確かに改造してあるがしかしそれは…」

「いいから、そっちの方が都合がいいの!」

「う、うーむ」

「長門、私からも頼む、リトルがこう言っている以上そちらの通信機を譲ってくれないか?」

武蔵はそう言って長門に頼むが長門は少し悩むがリトルと目が合
いリトルが頷いて合図する

「う、…む、わっ解った、渡そう」

そう言って長門は渋々武蔵に通信機のインカムを渡す

「すまないな、たす…か…る、ん」

武蔵は受け取ったインカムを見て固まった、受け取ったインカムは
作戦の時は長門の髪で見えなかったが、本体部分には猫や犬などの
シールが貼ってありマイク部分には肉球型のスポンジが付いた長門
カスタムと化していた

「大切に使ってくれ」グス

「じゃー貸してー」

そうして武蔵からリトルにインカムが渡された

「じゃー、始めるよー」ベリベリ

「あー…!!!」

リトルはインカムを受けとるとすぐにシールなどの装飾を剥がし
ていった、その光景を見た長門は項垂れながら

「わ、私の…ポチとタマが…」ガク

「そんなに落ち込まないでよ、後で別で長門用に作ってあげるから」

「本当か!!」カバ

「ホントホント、んじゃちよつと行ってくるね」

そう言っつてリトルは建物のなかに入っつていった

「…なんかすまんな」

「いや、いいんだ」

「因みに他にもああいうのあるのか?」

「ああ、あるが」

「そうか、今度私にも譲っつてくれないか?」

「!!ああ!ああ、もちろんだ、今度私のコレクションも一緒に見せようじゃないか」

「フツそうか、それは楽しみだな」

こうして長門と武蔵は固く握手をし絆が深まったのであった

「…何があつたの?」

建物から出てきたリトルはその光景を見て困惑した

「ああ、いや何でもないんだ、それで通信機は?」

「うん、こつちは調整しといた、これでどこでも私たちに繋がるはずだよ、ただ艦娘用に調整しあるから人間には使えないからね」

「人間が使うとどうなるんだ?」

「うーん、頭がパーになるか最悪死ぬ」

「そつそうか、気を付けよう」

「じゃあ後はよろしくね、私はまだ甘味が食べたりないんだから」

リトルはそう言っつてその場を後にした

「これでいつでも連絡がとれるんだな?」

「まあ、そうらしいな」

「そうか、ではこれから改めてよろしく頼むぞゴジラよ!」

「ん、おつおう、まあよろしくな、頼られるのは嬉しいがあんまり頼りすぎるとなよな」

「ああ、気を付けよう」

こうしてささやかながらも行った祝勝会は楽しく続いていた

そして次の日

「さて、それじゃあ俺達はこの辺で帰らせてもらおうよ」

朝の朝礼の終わりにゴジラは帰ることを皆に伝えた、その言葉を聞いた一部（主に第9鎮守府）の艦娘達が固まる

「ちよ、ちよっと待って！帰るって何処に帰るの？」

たまらず川内が質問する

「えっ、自分の家？島か」

「えっ、だってゴジラは私達と一緒に鎮守府に帰るんじゃないの？」

「いやいや、それは無理があるだろう、俺みたいなのが一緒に帰ったら他の人がビツクリするだろうし人間の近くに住む事事態無理だよ」

「じゃあ、隠れて住めば…」

「隠れてまで住もうと思わないし、どのみち自分の家があるんだ、そこに帰るよ」

「皆、ゴジラもこう言っている事だ無理に引き留めるのも悪いだろう、別に今生の別れでもないのだ連絡手段もあるから安心してくれ。しかし、こんな早朝から帰らなくてもいいだろう、もう少しゆっくりしてった方がいいのではないか、怪我の事もある」

「怪我はもう大丈夫だよ、体調もバツチリだ、でもそろそろ報告を受けたい人間達来るんだろう？そうなると面倒なことになりそうだからな、その前に出発するよ」

「そうか、寂しくなるな」

「ちよっと待って」

「ん、どうしたんだ、まだなんかあるのか？」

「うん、流石に急すぎて…せめて後三時間、いや二時間待って欲しいの！」

「？、まあ別にいいけど、大丈夫なのか？」

ゴジラはそう言って武蔵の方を見る

「ああ、問題ない船が着くのは多分午後になるだろうからな」

その答を聞いてゴジラはもうしばらく滞在する事が決定した

「それじゃあ、後二時間後居るようにするよ」

「ありがとう、それじゃあ二時間後に港で！」

「解った」

そして話が終わり艦娘達は解散していった。残ったゴジラは二時間どうするか考えていると武蔵が

「ゴジラよ、どうせ後二時間何するか迷ってるんだろう。私と話さないか?」

「ご名答、その通りだ。だからその申し出は有難い」

「そうか、それはよかった。丁度聞きたい事があったんだ、ゴジラ、君は第9鎮守府と知り合いなのか?」

「!?、いや違うけど、何で」

「そうか…君が現れた時の長門達の反応や、エビラと戦っていた時も皆戸惑っていたのに第9の艦娘だけがゴジラへの援護や動き、対応が他の者達と違っていた。それにさっきの君が帰ると言ったときの反応も他の者と明らかに違っていた、正直確信を得たのはさっきのやり取りを見てからだ…どうだろうか」

「う、うーん。まあそのなんと申しますか、まあ武蔵ならいいか、そうだが俺は第9鎮守府の皆とは知り合いだ今回の作戦に俺が出てきたのも第9の皆に頼まれたからだ、作戦開始の何日間かは一緒に暮らしてもいた」

「!!では最初から我々の近くにいたのか?」

「そうだ、最初から気づかれないうちに皆の後を着いてきてた、それで傾合いを見て俺が加勢する予定だった」

「予定だった?」

「ああ、エビラが現れたからな、丁度俺が補給艦隊から離れて武蔵達の居る前線に行こうとしたらやつが現れてな。流石に予想外で初動が遅れちまつてそれで何人かやられちまつた。すまなかつたな」

「そうだったのか…いや、酷な言い方だがゴジラが居てくれたからこれだけの損害で済んだのだ、本当ならもつと被害が出ていたそれこそ全滅していたいだらう、だから君が気に病む必要はない」

「そうか、…ありがとう」

「気にするな、助かったのは本当の事だしな。所で何故秘密にしたのだ?」

「うーん、簡単に言うともんどくさかつたからだ」

「めんどくさかった?」

「ああ、本当は大本営に俺の事を報告するつもりだったんだが、なんて報告したらいいか解らなくて第9の提督が悩んじゃってな、それで途中で俺が偶々近くに居て手助けに来たって事にしようって事になったんだ」

「なるほどそれで口裏を合わせていたのか…しかし、報告がめんどくさいからって。まあ解らなくもないが、しかしなあ」

そう言つてゴジラを見たあと武蔵はため息を吐いた

「ま、まあ提督もこんなことになるなんて思わなかったし、悪気があつた訳じゃないんだ、許してやってくれ。それとこの事は出来れば内緒にしたままにしてくれ」

「はあ、まあ君が言うならそうしよう、しかし今度はその面倒な報告を私がしないといけないのたぞ」

「う、確かに」

「それに、人間の味方をする訳じゃないと言つた割には第9の提督をやけに庇うではないか」ジトー

「いや、それはそのほら、一応人間の中ではそこそこ付き合いが長いから多少は、ね」

「まあいい。それで…」

こうして武蔵に第9鎮守府との関係がばれ、その後も色々な話をしている和二時間はあつという間だった

「そろそろ時間だな、港に向かうか」

「お、もう時間か結構あつという間だったな」

「フフフ、そうだな」

「どうする、乗ってくか?」

そう言つてゴジラは自分の頭を指す

「そうだな、折角だし乗せてもらおうか」

ゴジラは武蔵を頭に乗せると港に、向かつて歩きだした

26話

ゴジラ達が港に着くと、そこにはすでに艦娘達が集まっていた
「あつ来たー！」

「おう、待たせたな」

ゴジラはそう言った後、体を体を屈ませ武蔵を降ろす、そこに長門が近づいてきて

「やはりゴジラと一緒にだったんだな」

「ああ、ゴジラと少し話がしたくてな、お陰で楽しい時間が過ごせたよ」

「そうか、それはよかったな」

「ああ」

長門と武蔵は少し話すとゴジラの方を向き

「さて、ゴジラ。わざわざ時間を作ってくれてありがとう、我々から君に感謝の印として渡したいものがある、川内」

長門がそう言うと川内がゴジラの前へとやって来た

「ゴジラ、手出して」

川内に言われゴジラは手を川内の前に出す、すると川内はゴジラの手に長い布を乗せた

「これは？」

ゴジラは手に乗せられた布をみると、布には沢山の何かが付いているようだった

「それは私のマフラーだよ♪そしてそこに付いてるのは今回一緒に戦った鎮守府のピンバッチとか部隊章を縫い込んだんだよ」

「ほお、たった二時間でよくこんなに縫い込んだな、ありがとう、有り難く貰っとくよ♪」

ゴジラがそう言うと川内は若干頬を膨らませながら

「本当だよ！急に帰るって言うんだもん、お陰で大変だったんだからね！」

「おつおう、悪かったな、有り難う」

「次からは気を付けてよね……それじゃあゴジラ、またね」

「ああ、またな」

川内はそう言つて戻つていった、そして今度は武蔵と長門が

「それでは今度こそさよならだな」

「なに、どうせすぐ呼ぶつもりなんだろう？」

「ふふふ、確かにそうかもしれん」

「まあ我々も今後は忙しくなるからな、頼りにしてるぞ」

「まあほどほどにしてくれよ。それじゃあまたな」

「ああ、ゴジラのお陰で我々は助かった、本当にありがとう。そしてまた会おう、友よ」

「!!…あーまたな戦友!!」

そうしてゴジラは武蔵達、艦隊との別れを済ませ海に入り暫く潜らずに進んだところで

「リトル」

「なにゴジラ」

「これ、お前預かつといてくれないか？俺が持つてると無くしそうでだし、つかボロボロにしそうで怖いわ」

「いいよー」

リトルはそう言うのとゴジラからマフラーを受けとるとじっと見つめ

「うん、発信器や盗聴機の類いは付いているようだね」

そう言つてマフラーをしまう

「付いてても壊したりするなよな、折角貰ったんだから…」

「解ってるよ、流石に私もいきなり壊したりしないよ」

「…まあそれならいいが、いいのか？」

「いいのいいの、さっ、さっさと帰ろう！」

「お、おう」

こうしてゴジラ達は初の大規模作戦が終わり島へと進路をとった。

—————

そして艦娘達と別れて数日後、もうすぐ島につく頃だが深海棲艦が前よりもあちこちで見られるようになった。多分先の戦いの残党なのだろうゴジラを見ると一目散に逃げていく、中には向かってくる艦隊も居たが全て蹴散らした、そんなこんなで久しぶりに島に帰って来たゴジラ達

「あー、何かすごい長い時間帰ってなかった気がする」

「まあそれなりに長く離れていたし、間違いじゃないんじゃない」

「んー、まあ色々あったからな、ふあゝゝ悪い俺もう寝るわ」

「了解、私はまだやることがあるから先に寝てて大丈夫だよ、お疲れ様」

「やる事？何かあるのか？」

「うん、この子達にここを案内しないとね」

「ふくん、案内ねゝゝん？案内？誰を？」

「この子達だよ」

そう言うとりトルの後ろから妖精さん達が現れた

「んな！その妖精さん達どうしたんだよ!!」

「え？鎮守府に居たのをスカウトしてきた」

「スカウトして来たってゝ大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫、妖精って何人か集まれば後は勝手に増えたり減ったりするから」

「えーゝ、でも何だって連れてきたんだ？」

「そりやもちろん生活のためだよ、いつまでも穴蔵生活じゃつまらないでしょ、それに食料の自給率UPで甘味を作らねば!!」

「本音はそつちか。まあいいや、これからよろしくな」

ゴジラはそう挨拶すると妖精達も頭を下げて挨拶を返してくれた

「それじゃあ、俺は寝るから何かあったら起こしてくれ」

「解ったー」

「んじやお休み」

「お休みー」

そうしてゴジラは眠りについた、そして現在妖精さん達は整列しており、リトルはその前に立っている

「さて諸君、君達にはこれからある事をしてもらおう、取り敢えず小屋の中に入れてくれたまえ」

「了解でーす」（リトルにはちゃんと妖精の声が聞こえています）

そう言うのと妖精さん達は小屋の中へと入っていった、そして最後にリトルが入り口の扉を閉め「ガチャリ」と鍵を閉めたのであった、そして数分後

「アーー!!」

「俺のそばに近づくなー」

「こんな所に居られるか！俺は部屋に…アーー」

「ホゲーー!!」

その日の夜、リトルの小屋から叫び声が止むことはなかった…

「……………次の日……………」

「ふあゝゝ…あー良く寝た、久しぶりに陸でゆっくりできたな、リトルの奴はもう起きてるかな？おーい、リトルー」

「なーにー」

そう言つて小屋からリトルが出てきた

「おはよう、良く寝れたか？」

「おはよう、うーんちよつと寝不足かなー」

「寝不足？そーいや何かやるつて言つてたな、そんなに掛かったのか？」

「うんまあーね、おーい！」

リトルが小屋の方に声をかけると小屋からリトルと同じ大きさの妖精さん達が出てきた、格好は青の繋ぎに帽子を被っており、帽子には大きく「G」と刺繍がされていた、それを見たゴジラは唾然とする「な、な、まだ出てくるだど！」

そう、昨日居たのは10人位だったのに小屋から出てきた妖精達は100人位になっていた

「い、一体昨日何があつたんだ！」

「んー、そこはほら妖精だから」

「答えになつてないんだが…」

「いいのそんな細かい事は、いい！私達は今より良い住みかにするためにゴジラのために作った妖精チーム、名付けてGフォース!!」

リトルは高々とそう宣言するが

「G：フォースってそれ対俺対策に作られた部隊じゃないの」

「えーい！細かい事は気にしないの!!そんな事よりも皆聞いて、ここが今日から私達の家だ、これからリフォームして私達の住みやすい様にしていく、資材はここから持つていってくれ！」

リトルがそう言うのと着ぐるみの中をもぞもぞとさせた瞬間大量の資材がリトルから放出された、それを見たゴジラは更に驚愕した

「おっお前！…こんだけの資材…どうしたんだよ、どっから持つてきたんだ！」

ゴジラがリトルには問い詰めると

「えっ？勿論深海棲艦の基地からだよ、もう少し艦娘達の動きが遅ければもつと持つてこれたのに、倉庫2部屋分しか取れなかったよ」

「な、な、な何してんだよー!!これじゃあ盗んだみたいじゃんか!!」

ゴジラが混乱する中リトルは涼しい顔をしながら

「大丈夫、盗みじゃないから」

「へ…本当に？」

「だってこれは艦娘が制圧する前に取った奴だし、それに私たちも戦ったんだから正当な取り分だよ」

「えー…」

「えー、じゃないの！あのままだったらどうせなにも貰わずに帰るつもりだったでしょ!!」

「うっ…まあそれはそうだな」

「だから私がちゃんと取り分を貰ってきたの、ちゃんと皆にも回るように調整して取ったんだから」

「そっそうか、まあそれならいいのか？……ん、でもさつきお前もう少し遅ければもつと取れたって言ってなかったか？」

「さあ！みんなこの資材を使ってリフォーム開始!!」

「ちよつ、こいつ誤魔化しやがったな…まあ持つてきちゃったんだからしょうがないか、有り難く使わせてもらおう」

リトルの号令により妖精達は動き出した

「それじゃあ、リフォームはあの子達に任せてつと」

「俺達はどうするんだ？」

ゴジラがリトルに話しかけるとリトルは後ろを向いたまま答えた

「ゴジラさあ、鎮守府に行った時に遠征にも言ったよね…」

「あつああ、行つたけど？」

なんとなく雰囲気飲まれリトルから距離を取る

「私が資材を手に入れて、仲間を集めて、最初に作った物はなんだと思う…」

「えっ！いや、リフォームするつて言つてたし何か重機とかか？」

「ノンノンノン、違うよ、私たちが最初に作ったのは…これだー！！」

そう言つてリトルはいつの間にか置いてあつた巨大なビニールシートを引つ張つた、そしてそこにあつた物は

「こつこれは!!…ドラム缶？」

そこにはゴジラの半分より少し大きめなドラム缶が4つ並んでいて、リトルはなおも後ろ向きのまま

「ゴジラ君…」

「はっはい」

リトルに呼び掛けられ反射的に返事を返してしまつたゴジラ

「資材は使うと減るんだよ」

「お、おう、そつそうだな」

嫌な予感がしながらも答えるゴジラ、そんなゴジラにリトルは振り返りながら言つた

「じゃあ遠征行こつか」ニッコリ

それはそれは清々しいほどの笑顔だつた、その顔を見たゴジラは「あっはい」

こうしてゴジラは自宅のリフォーム（改造）の為に資材集め、遠征

に行くという仕事が出来た

27話

ゴジラが遠征など資材集め、そしてリトル達が島のリフォームという名の改造が始まって2週間たった頃

「ゴジラー」

「うん、何だリトル？」

「ゴジラ喜んで、とうとうリフォームが終わったんだよ!!」

「何！マジか!!」

「うん、それでこれからゴジラを案内するね！」

そう言うとりトルは普段ゴジラが寝ている洞窟の中へと入っていった、ゴジラは頭に？を浮かべながらもリトルの後を着いていった「なあリトル、これといって変わったようすはないんだが、何ならいつも俺が使ってたて工事してた様子も無かったんだが？」

ゴジラがそう告げるとリトルは

「フッフ、まあそんなに慌てないですよ」

リトルはそう言うとき壁際に歩いて行くと壁の一部が「カシユツ」と音をたて開き中からボタンが出てきた、リトルはそのボタンを押すと今度は「ガコン」と音をたて洞窟の入り口が閉まり次に少しの浮遊感を感じた

「これは、したに降りてるのか？」

「うん、そうだよ、今までゴジラが寝てた場所は玄関、入り口になるよ」
♪

「マジで、工事の音とかそんな感じ全然なかったんだけどいつの間に……全然気づかなかった」

「そりゃ近隣住民への騒音防止はバツチりだしね！気づかれるようなへマなんてしないよ！」

「お。おう、そりゃすごいなぶつちやけ俺しかいないから近隣住民なんて居ないんだけど、まあそれは良いとして今まで俺が寝床にした所を入り口になるなら俺はどこで寝れば良いんだ？」

「……………」

「……………えっ嘘でしょー！」

「アハハハ、冗談、冗談だよ。安心して、ちゃんと部屋を用意してあるから」

「あ、あははは、そつそうだよな、何だちよつとビックリしちゃったよ、あははは、驚かせるなよなーあははは………所で随分深いんだな」

「うん、ゴジラでも広々と使えるように結構深くしたからね、その分色々大きく作ったんだよ」

「なるほど、何か悪いな氣い使わせちゃって」

「いいよいいよ、皆作りがいがあって言ってたし、あつもう着くよ」
リトルがそう言うのとエレベーターは「ガゴン」と音をたて止まる、そして扉が開くとそこは広く、長い廊下となっていた。

そして右側は人間のサイズの扉や階段がいくつも作られており、左側はゴジラより少し大きめの扉がいくつも作られていた

「右側は私達が使う部屋とかがあって、左側がゴジラの使う部屋になつてるよ」

リトルはそう言うのと案内を始めた

「最初の部屋はゴジラの部屋になつてるよ、人間で言うとなんルームだね、広めに作つてあるから問題はないはずだよ」

リトルの話聞いて中に入ると思ったより広々としていた、そして何よりも

「こつこれは布団だと…」

布団が敷いてあったのだ

「うっそマジで布団じゃん!!」

そう言つてゴジラは布団に飛び込んだ、そして暫く転がり布団の感触を楽しむが、次の瞬間布団から離れた

「やばいー今の俺の体じゃ布団ボロボロになるじゃん、やっちゃった」

そう言つてゴジラは恐る恐る布団を見るが布団は無傷で少しシワになつてるぐらいだった、そこにリトルが

「フッフ、ご安心をーこの布団は防虫、抗菌防刃さらに耐熱、その他諸々付いた特殊素材で作られてるからゴジラが寝ても大丈夫!それに壁に付いてるテレビで外の事も解るし通信も出来るようにしてるよ♪」

「おお！すげー！これで俺も地面に寝なくて済むのか……うつ目から汗が止まらない!!」

「フフフ、喜んでもらって何よりだよ。しかし！まだまだ他にもあるよ！」

そう言つてリトルは別の部屋へと案内する、次の部屋は扉を開けると小さな部屋があり奥に更に扉が付いていた、それが3ヶ所ありその奥には…

「ここはゴジラ専用放射能風呂だー！！！！」

「おいー！！流石に放射能は駄目だろー！！！！」

ゴジラがそう抗議するとリトルは

「大丈夫、大丈夫。外には絶対漏れないようになってるし何重にも安全装置を置いてるしね、それに何よりゴジラしか使わないしね」

「えー、そういう問題じゃない気がするんだが…」

「大丈夫大丈夫、放射能はお湯に溶かしているし、空気中の放射能もゴジラが吸収すれば大丈夫だから安全だしね♪ゴジラが完全に放射能を吸収したお湯は検査されてから外に出すから大丈夫、それと奥にはウラン鉱石を使ったサウナもあるからのんびりできるよ♪」

「サウナは嬉しいが、え…本当に大丈夫なんだよな」

「大丈夫だって、それにこのお風呂に入ればゴジラにとって入渠するのと同じで怪我が直るんだよ」

「うん、まあ俺のエネルギー源が放射能だからそうなんだが……いいのかなー?」

「いいのいいの、じゃ、次行くよー」

そしてリトルの案内は続き、他にも何故か作られていた会議室や作戦指令室など他にも色々な部屋を案内してもらい、今は食堂に来ている

「ここが食堂だよー、食事はここで出されるから皆ここに集まって食事を取ることになるよ、私達とゴジラじゃ大きさ違うけど皆と一緒にの方がいいでしょ」

リトルに説明されながら周りを見ると確かに妖精達が食事やお茶をしていた

「おー、かなり広く作ったんだな、因みに誰が料理作ってんだ？」

「もちろん妖精達だよ、材料は今の所鎮守府から貰った物を使っているけど、地上の一部や他の階で農業エリアと畜産エリアを作ったからその内自給自足出来るようになるよ♪」

「マジか！もうそんな事まで出来るのかよ」

「もちろん！私達に掛ければ簡単だよ」フンス

「スゲーわ、妖精マジでスゲーわ」

「まあね、でも驚くのはまだ早いよ、本当に見せたいのは別の階なんだから♪」

そう言うとりトルは別のエレベーターにゴジラを案内し、ボタンを押した。

そして目的の階にエレベーターが止まり扉が開くとそこは

「じゃーん!!」ここが兵器格納庫及び工廠になっておりまーす。ここで色々な物を作ることが出来るよやったね♪」ニッコリ

「………は？」

りトルの説明と目の前に広がる光景にゴジラは啞然とし工房を見渡した

「あの一、りトルさん。これは一体何なんですか？」

「何って工房だよ♪ここで兵器開発や量産が行うことができるんだよ♪」

「いやいやいやいや、だよ♪じゃなくて何でここで兵器開発とか行うことが出来るんだよ、しかも量産まで!!!」

ゴジラは頭を抱えながら自分の思ったことをりトルに聞いていく

「そんなの自分の家を守るために決まってるじゃない」

「…は？」

ゴジラは本日2度目の「は？」である、その様子を見てりトルはまたかと「ハアアアア」と長めのため息を吐く

「ゴジラ君、私達は今、戦争をしているんだよ！それは解っているね」

「えっ、おう、それはもちろんだ前回の戦いでは自分の至ら無さを痛感したよ」

ゴジラはそう言うと言った自分の手を見て自分の力の無さを感じていた、

それを見ていたリトルは

「うん、そう思えるのは良いことだよ、ただまだ認識が足りてないね。いい、私達は完全に深海棲艦から敵と認知されている」

「まあ、あんだだけ暴ればそうなるだろうな」

「そうなるどころもいつかは発見されて攻撃されるかもしれない、その時にゴジラが居なかつたら守ることなんてできないし、居たとしても完全に抑えられる訳じゃないんだから被害がでる、私達はその被害を抑えるための防衛兵器を作りたいの！」

「なるほど、確かにそういうのが必要になってくるのか、俺が居なくても安心して島を任せられるのはでかいな」

「でしょー、その為に……でもあのでっかい建造装置は何だ?」……………」

ゴジラの間にリトルが固まる

「あつあれはそのままの建造装置だけど……」汗

「いやいや、俺は艦娘は作らないし提督にもならないしっていうか良く考えたらここにある施設ほとんどまんまん鎮守府じゃねえか!!」

「まあ、それはここ作った子達は鎮守府に居た子達だからね」

「あつ、そつかそうだったな、まあそれは別に良いんだ防衛のために兵器開発もまあいいさ、でも建造装置って艦娘作るためにあるんだろ?俺は艦娘作る気はないぞ」

「別にこれは艦娘を作る建造機じゃないよ」

「……えっ違うの?」

「こんな大きな艦娘居るわけないじゃん」

リトルは呆れたように首を振る

「じゃあ、なにを建造するんだよ」

確かに自分の目の前にある建造機はゴジラよりも大きな物だった

「……それは、もちろん対怪獣用の兵器を作る為だよ」

リトルのその言葉を聞いてゴジラが固まる

28話

「えっ対怪獣用?」

「そう、もしまたエビラとかが複数出てきたらゴジラだけじゃ大変じゃない。この前は大丈夫だったけど艦娘と一緒に戦ったらゴジラだけじゃ絶対に守り抜くのは無理でしょ」

「うーん、確かにそれは言えてるな」

「それに、ゴジラが居ないときにこの島が敵に襲われた時には最大の防衛兵器になるでしょ♪」

「なるほど、そうすれば俺の心配事はほとんど解決するな」

「でしょ♪私も考えて作ってるんだから、むしろゴジラが考えなすぎで困ってるんだから!」

「うっ…それは、すいません」

「解ればよろしい!では早速兵器開発と建造してちょうだい、そろそろ工廠の妖精達が我慢の限界が来ちゃうから」

「限界?」

「そう言ってゴジラが足元を見ると、工廠の妖精達が群がってきていた」

「開発だー」ヒヤッハー

「アヒヤヒヤヒヤヒヤ建造の時間だゴラー!」ゴオオオオ

「早くー、何か作らせてくれー」ガンガンガン

まるで何かに飢えた獣のような目をしながら近付いてきた妖精を見てゴジラは

「よ、よーしそれじゃあ開発と建造するぞー」(棒)

その言葉に妖精達が反応する

「オッシャー、野郎共釜に火を入れる仕事だー!」

「!」おー!」!」!」!」

「よーし、じゃあここに材料を入れてねー」

リトルに言われゴジラはその通りに材料を入れていく

「よし!これで建造が始まったね、完了までは…一週間位だから結構期待できるね♪それじゃあ次は兵器の開発を始めよう」

「お、おう」

急に慌ただしくなった工場を見て、目を回しながらも何とかゴジラは開発を行うことができた。

結果は地对空ミサイル、対空砲台、対空機関砲更に戦車と93式自走高射メーサー砲に93式メーサー攻撃機と戦闘機が開発できた。

ここまで作るのに大分時間が掛かった、基本開発と建造はゴジラが居ないと出来ないらしくずっと工場に張りつけ状態だった

「はあー、大分時間がたったな、もうここまで作れば良いだろう」

ゴジラはそう言っただけで休もうとしたがそこに一匹の妖精が近付いてきて

「いや、まだレーダーとか作ってないし、他にもミサイル迎撃システム、それとバリアか防壁とかを最低でも作ってもらわないと困ります」

妖精はそれだけ言うと自分の仕事に戻っていった、ゴジラはそれを見つめながら

「……………マジか」

こうしてゴジラは言われた物が出来るまで工場に居続ける事になり一日が終わった、そして資材もほぼ無くなってしまった

—————

—————

—————

—————

—————次の日—————

「ア————、あんなにあつたのに」ガクリ

ゴジラは倉庫の中を見て項垂れていた、昨日まで大量にあつた資材は兵器の開発や島のリフォームに使われ、ほとんど無くなってしまった、因みにあの妖精に言われた物は全て作ることができた

(まさか本当にバリアとかが作れるとは思ってなかった)

「なあ、リトル」

「何？」

「この際島が要塞化してるのはいいんだけど、最近妖精さん多くなってるよね?」

ゴジラは周りを見ると多くの妖精さんが忙しなく動き回っている

「あー、それは開発した兵器と共に出てきた妖精だね、昨日はずっと開発してたからそのせいだよ」

「マジか!じゃあこれからも増えてくのか?」

「いや、もう大体開発も終わってるし必要以上増えないはずだから、もうそんなに増えないんじゃない」

「そうか、なら安心?なのか?」

「ゴジラがなに心配してるのか解らないけど、大丈夫だよ、それよりも早く遠征に行つて資材集めなきゃ」

リトルのその言葉にゴジラはガクツと首を落とした、そんなゴジラを見てリトルは

「ほら、落ち込んでないで、開発は済んだし建造も待つだけなんだから、後は蓄え分を取りに行かないと」

その言葉を聞き、ゴジラは

「蓄え分とな!後は貯めていけばいいのか!!」

ゴジラの変わりように戸惑いながらリトルは

「う、うん、もう防衛戦力は十分だからね、今度は貯めてかないと」

「そうか、漸く終わりが見えてきたぜ!よっしゃー!さっさと貯めてのんびりするぞー!!」

そう言つてゴジラは遠征へと向かつていった

「まあ、開発も建造も後でまたするから一時的なんだけどね、まあゴジラには黙つとこ♪」

そう言つるとリトルはゴジラを追いかけていった、そうして一週間がたった

「いやー、貯まった貯まった」ニコニコ

ゴジラは倉庫の中を見て満足していた、この一週間休まずに資材を集めをして倉庫一杯まで集めてきたのだ、それと同時に今までちらほらと見かけていた深海棲艦は居なくなつた

「フッフハハハハ、これで休めるぞー」

そう上機嫌なゴジラにリトルが

「いやー集まったね」

「おう、これで当分は大丈夫だな！」

「うんうん、それは良いことなだけどさ、何か一つ忘れてない？」

「？何かあったつけ？」

「建造、昨日で終わってるよ」

リトルはそう言うのと建造装置を指差す、ゴジラも装置に目を向けると建造装置に「建造完了」と表示されていた

「忘れてた！昨日で一週間たったんだ。それじゃあ早速見てみようぜ」

「まったく！折角の建造第一号なのに忘れるなんて!!」プンプン

そんな会話をしながら装置の前までやって来た二人

「じゃあ、オープン！」

リトルのその言葉と共に装置の扉がゆっくり開いていく、そして開いていくと同時に中の物のシルエットが見えてくる

「お、おー！これは当たりだよー」

リトルは、はしやぎながら建造された物を見る、そこにはゴジラを模して造られたメカゴジラ（平成初代）が立っていた

「おおーすげー、本物初めてみたよ！……なあリトル」

「何？」

「一応確認なんだけど、いきなり襲ってこないよな？」

「あー、それは大丈夫だよ、このメカゴジラも私達妖精が動かすからね」

そう言うのとリトルはメカゴジラの足元を指差した、そこには三人の妖精が立っていた

「我々がメカゴジラの妖精です。よろしくお願いします」ビシ

そう言うのと妖精達はゴジラに向かって敬礼した

「おう、よろしく頼むよ、俺はてつきりメカゴジラが自分で動くのかと思っただよ」

「あははは、メカはメカだからね自分では動かないよ、それじゃあ今から移動させますね」

そう言うのと妖精達はメカゴジラに乗り込んでいった、するとメカゴジラの目が光り動き出した

「おお、動いた!」

建造装置から出てきたメカゴジラは、ゴジラよりも少し大きい動きもスムーズだった

「この後どうしたらいいですか?ドックにいった方が良いですか?」

「あーそうだな、どうしようリトル」

「うーん、まあそのまま過ごしてと良いけど取りあえずはドックに行つてて」

「解りました」

そうしてメカゴジラはドックへと移動していった、その様子を見ながらゴジラは

「これであらかた対怪獣兵器ができたな」

「うん、これでここも磐石になったね、一安心一安心と、言いたいところだけど……ゴジラ」

「うん?何かあるのか?」

「もちろん!作つたは良いけど実戦で使えなきや意味無いでしょ?」

「まあそうだな、じゃあちよつと深海棲艦を……なに言ってるのゴジラ?」……え?」

「深海棲艦もそうだけど、メカゴジラは対怪獣用として作つた兵器だよ」

「えーでもそれじゃあ他の怪獣を探さなきゃ……そんな必要ないよ……え?」

「居るじゃないここに、怪獣王と呼ばれた怪獣がさ……」ニツコリ

そう言つてリトルはマイクを取り出す

『全妖精に通達、これより一時間後演習を行う、全基地防衛部隊全力出撃、目標はゴジラ、これの上陸阻止、全兵力をもつて阻止せよ』

リトルの放送を聞いて基地全体が一気に慌ただしくなった、その光景を見てゴジラは

「えー……マジでえ……」

「さ、さっさと開始地点に向かうよ」

リトルに言われ渋々ながらゴジラは移動しはじめた

29話

島を出て演習開始地点まで来たゴジラにリトルが

「じゃあゴジラはこれを被ってね」

そう言つてリトルから渡された物は

「こ、これはメカゴジラ（昭和版）の頭？」

「それ被つたら熱線が出ない代わりに光線が出るようになって、光線に当たった者は脱落つて事になるから遠慮しないでいいよ、でも物理攻撃はそのままダメージおっちゃうから控えて欲しいな」

「解つた、じゃあ被るぞ」

ゴジラは内心ワクワクしながらメカゴジラ（昭和版）の頭を被つた
「よし被つたね、それじゃあそろそろ時間だし行くよー」

『演習開始！』

リトルの合図と共に島から大量のミサイルが飛んでくる

「マジかよ…」

その言葉を発すると同時にミサイル群がゴジラを襲う、爆発と爆煙が起こる暫くして煙の中からゴジラが出てくる

「ちよ、これ実弾じゃねーか!!」

「そうだよ、これはゴジラのような怪獣相手にも攻撃が効くかどうか
も試すためでもあるんだから、実弾に決まってるじゃん！」

「マジか…」

ゴジラは項垂れながらも島へと進んでいくと

「項垂れてる暇ないよ！次、次!!」

リトルの指差す方には93式メーサー攻撃機の編隊が迫つて来て
いた、そして一斉に攻撃を仕掛けてくる

「痛だだだだだ、ビリビリする、ビリビリする！」

その様子を見てリトルは

「うーん、まだまだそんなもんか…ゴジラ！反撃もちゃんとしないと
演習になんないよー！」

「お、おう本当に大丈夫だよな？」

リトルに急かされながらもゴジラは反撃の光線を出した、その光線は攻撃機の何体かに当たると当たった機体から白旗が出てきた後退却していった

「本当に大丈夫そうだな、なんかちよつとツツコミたいがそこは気にしないようにしよう！」

そう言つてゴジラは残りのメーサー攻撃機に次々と光線を当てていった。そして上陸間際の海岸沿いには戦車と93式自走高射メーサー砲部隊が展開していた。そしてゴジラが射程に入ると一斉に攻撃が始まった。

「おお、陸に近づくくと大分攻撃が激しくなってきたな、だがこれくらいならまだ余裕だな！」

ゴジラがそう言つて進軍を開始していた頃指令室では

「ゴジラがもうすぐ上陸してしまう！その前にメカゴジラをぶつけるぞ、カタパルト用意！射出口開け」

「メカゴジラ、カタパルト接続完了、出力上昇中、メインブースター点火！」

「よし、メカゴジラ発進!!」

指令妖精の声と共にメカゴジラは発進した

—————

———

———

「よし、大体片付いたなこれで上陸…?」

そこまでのいい掛けた所でゴジラの目の前の地面が割れ空洞が現れた、そこをジツと見ていると中からメカゴジラ（平成）が飛び出してきたそのままゴジラへと体当たりをかました

「ぐべらああああ!!!」

ゴジラはそのまま吹っ飛び海へと戻された

「ぐう、ビックリしたー！なかなか効いたよ」

そう言つて海上に浮上したゴジラの前にはメカゴジラが海の上をホバー移動していた

「よし、レーザーキャノンとパラライズミサイル発射、牽制するぞ」
「了解」

メカゴジラは目からビーム!!……目からレーザー、肩からミサイルを発射しながらゴジラを中心にするように円を描きながら動いている、ゴジラも光線で応戦するが流石に今回はすぐには白旗は上がらない

「くそ、流石にそう簡単には勝てないか……だが！」

ゴジラはメカゴジラを捉えながら島の方へと移動を開始した、それを見たメカゴジラは

「くそ！気づかれたか、距離を詰めてショックアンカーを打ち込むぞ、島から離すんだ!!」

メカゴジラは一気に距離を詰めて両腕を上げた、そして両腕からアンカーを射出しゴジラに当てる

「いったあ！あいつらアンカーまで使ってきたきやがった」

「命中！電流流します」

ゴジラにアンカーが当たったのを確認したメカゴジラは電流を流し始める

「アババババババ、マジかアイツラー」バリバリバリ

「このままアンカーでゴジラを縛り上げるぞ」

「了解!!」

そしてメカゴジラは電流で動きが鈍ったゴジラの周りを回り始めた、そしてゴジラを縛り距離が近づいた所で

「よし、止めにトランキライザーを打ち込んで終わりにするぞ」

「了解！って私達了解しか言っていないね……」

「そうだね、モブだからかな……」

メカゴジラは腰部に取り付けられたミサイルを発射しようとした

瞬間

「ぬおおおお、体内放射ー!!」

ゴジラを中心に青白い衝撃波が発生した、その衝撃によりメカゴジラは吹き飛びそうになるがアンカーが巻き付いてたお陰で吹き飛ばされずにすんだ、だがゴジラに刺さったアンカーを通してゴジラのエ

ネルギーがメカゴジラに流れていった

「うわああああ、電気回路がショートしました!!」バチン

「各駆動系にも異常発生!」

「システムダウンします!!」

そしてメカゴジラの動きが止まり、頭の上から白旗が出てきた、それを確認したゴジラはワイヤーを取り外しながら

「ふう、流石にメカゴジラには大分苦戦したな、と言うかあそこまでする? マジで殺しにかかってきてなかった?」

そう不満を漏らしながらメカゴジラを島へと運んだ行く

「勿論です! そうじゃなかったら訓練になりませんか!!」

その言葉を聞いてゴジラは絶句する

「マジで、いや確かに訓練だからてを抜くのもなんだけど、なんか…複雑!」ガクリ

「いや、別に本当に殺すわけでは無くてですな、気持ち的にはって事ですよ」アワアワ

「そうです、そうです」

落ち込んでいるゴジラを見て慌ててフォローするメカゴジラの妖精達

「お、おう、そうだよな気持ち的には、だよな。それならいいだ、うん、……いいのか?」

そんなことを話ながらゴジラはメカゴジラをドックへと運んでいった

「お疲れ様ゴジラ、どうだった初めての演習は?」

「ん? 結構よかったと思うぞ、後は連携と練度を上げてけばいいんじゃないか」

「ふーん、なんか当たり障りのない感想だね」

「そりや実際追い詰められたからな、あまり偉そうに言えないよ」

「まあ練度が低いのはしょうがないよ、これから上げていかないとね」

「そうだな、……あっそうだ!」

「どうしたの?」

「メカゴジラと言えばもう一機欠かせないのがあるじゃん!」

「なに?」

「ガルーダだよ、ガルーダ、あれって一応戦闘機に入るから開発になるのかな?」

「うーん戦闘機なら開発になるかな」

「そうか、ならさっそく……因みにメカゴジラに開発を頼むことってできるか?」

「まあ頼めないこともないよ、ぶっちゃけ材料をいれてくれさえすれば開発はできるからね♪」

「ふーん、じゃあメカゴジラに頼もうかな、もしかしたらメカゴジラ関係で開発されやすくなるかもしれないし」

「それはいいけど、メカゴジラの修復にはまだ時間がかかるよ」

「え!なんで?」

「何でって、ゴジラがメカゴジラにエネルギーを流したせいでメカゴジラが壊れちゃったんじゃない!」

「え、だって…あつ光線じゃなくて体内放射したからか!」

「そうだよ!だからもう少し時間が掛かるの、解った!」

「!」

「はい、すいませんでした。でもなー、あー、リトルあれはメカゴジラに使えないのか?」

「あれって、なに?」

「高速修復材」

「あー確かに使えると思うけど、かなりの量必要になるよ」

「どうせ大量にあるんだし問題ないよ、それに使えると解ればこれらの運用方法も変わってくるだろう」

「まあ、確かにそうだね、それじゃあ早速やってみようか」

「よし来た!」

二人はそう言ってドックへと向かった、そしてそこにはメカゴジラが入渠（風呂）に沈んでおり、修復されるまで後三日と表示されていた

「なんか入渠の仕方雑じゃない…」

「いいのいいの直るんだから」

「まあそうなんだが、うくん…」

「唸ったってしょうがないでしょ…えーと、どうやら必要な高速修復材は100個だって」

「うーうん、思ったよりも少なかったなじゃあそれでやってくれ」

「了く解つと所でさゴジラさ」

「なんだ？」

「気に入ったのは解るけど、そろそろそれ脱いだら」

「そう言っつてリトルはゴジラの方を向く」

「?何を…ハッいや別に忘れてただけだよ!!」

「そう言っつてゴジラはメカゴジラ（昭和版）の頭を脱いだ」

「たかう、所でどうだうまく言ったか？」

「ん、問題なく使えるよ、これで直った」

「うし、それじゃあ早速メカゴジラには開発をやってもらおう」

「そしてゴジラ達はメカゴジラと共に工廠へと向かった」

30話

「えー、ではメカゴジラにはガルルーダを開発してもらいたいと思います」

「解りました、もし別の物ができた場合はどうします?」

するとゴジラはメカゴジラの両肩をガシツと掴んだ、何かとゴジラの顔を見るとゴジラのハイライトは消え虚ろな目で

「回すんだ、出るまでぐるぐると、回すんだよ…」

そのなにかを悟ったかのような顔で迫ってくるゴジラを見て

「りよ、了解です…」

それしか返事を返すことができなかったが、リトルが

「いや、取り敢えず10回位やってみて出なかったらまた別の日にやってみようよ、資材も結構掛かるかもしれないし」

「解りました。それじゃあ開発して来ます」

そう言つてメカゴジラは開発を始めた

「…どうしたのさ、ゴジラ」

「…ハッ俺は何を!いいいや何でもない、気にするなこれでうまくいけばこの島の戦力は完璧になるな」

「うん、そうだね。所でゴジラさそろそろこの島、とかあの島、とかじゃなくてちゃんと名前つけようよ」

「んくそうか、そうだな、もうずっとここに住むことになったし名前付けるか!、うーんと、そうだな、ゴジランド、ゴジラアイランド、うーんWW2に關係するっていうとラゴス島、:いやでもラゴス島って実在するしな、やっぱり素直にバース島にするか、うん!この島の名前はバース島だ!」

「了解、じゃあ今日からこの島はバース島、そしてここはバース島鎮守府とする!!」

「ふあ!?!」

リトルがそう宣言するとバース島鎮守府いや、バース島全体が光だした、そしてその光のなかで

「ちよ、お前!鎮守府ってどう言うことだよ!!」

ゴジラがそう叫ぶが、光は大きくなりやがて光の柱が生まれたが数十秒程で光が収まると

「「「おーーーーー!!!」」」

「どうとうここが鎮守府になつたぞー!!」

「これで私達の手も十分に発揮する!!」

「ひゃっはー、宴だ宴だー」

妖精達の豹変ぶりに戸惑うゴジラ

「いったいどうしたって言うんだ妖精さん達は？」

「説明しよう！これは今まで私達妖精はここで働いているが正式に配属されてない状態だったの、それが今回の島の名前が決まって場所が決まった、そしてベース島鎮守府にする事で配属先が決まった事になる、本来私達は鎮守府に力を貸すことで力を発揮される、だからここを鎮守府ってことにしたの！実際それだけの設備は揃ってるからね♪」

「なるほど、じゃあ今まで妖精さん達は十分に力を発揮出来ていなかったって事なのか？」

「そういうことだね、これだけで今まで2割位しか力が出せなかったのが10割出せるようになるよ」

「そんなに違うのか!？」

「違う違う、どう、納得した？」

「お、おう…:した」

「ならOK」

「ゴジラ提督開発が終わりました！」

ゴジラがリトルに説明を受けていると、後ろからメカゴジラが声を掛けてきた

「へ？」と二人同時に間の抜けた返事をする

「え、何が終わったの？」

「何って開発ですが、ガルーダー機開発完了しました！」

「え…もう終わったの？」

「はい、こちらへどうぞ」

そういわれメカゴジラに着いて行くゴジラ達、そして格納庫へと案

内された、中には一機のガルードダがそこに鎮座していた

「おおー！マジで出来てる。これでスーパーメカゴジラになれるな
！」

ゴジラがガルードダを見て喜んでいるとリトルが

「あー、このままじゃ合体できないよ」

「は？なんで」

「なんでってまず改修しないとだめじゃない」

リトルに言われてゴジラもハツとした

「そういえば、改修して合体できるようにしてたんだよな、なら早く改
修作業始めようぜ！」

しかしリトルは

「うーん、その事なんだけど私達だけじゃ無理なんだ」

「え、無理って、どうして？」

「私達ができるのは建造と開発、それだって他の人のてを借りないとい
けないけど、改修、改造するにはある艦娘の助けがいるんだよ」

「ある艦娘つてもしかして…」

「そう、明石だよ彼女技術力とか力とかなんかそんな感じの物が必要
なんだよ」

「え！そうなると明石建造しないとダメなのか？」

「うーん、まあ今回は特別に手配はしといたけど…」

「けど？」

「ちよつと待ってね」

そういうとリトルはどこかに連絡を取り始めた

「もしもーし私ー、そつちどう？……………うん、……………あつそうな
んだ、こつちも準備できてるから……………うん、すぐにやつちやつて
じゃあよろしく♪」

そう言つてリトルは通信を切つた、そしておもむろに円盤状の機械
を取り出し床に設置した、すると機械が作動したのか円盤の上に大き
めの穴が空いた。しばらく穴を見ていると穴から「にゅっ」と人が出
てきた、と言うか放り出された、ゴジラは放り出され倒れている人物
をみるとピンクの髪が特徴的な艦娘だったと言うか明石だった

「あつ…明石？」

「……………」

呼び掛けても反応が無かった

「お、おいリトル！明石から反応ないんだけど大丈夫なのか？」

「ん？ああ、大丈夫大丈夫寝てるだけだから」

「zzzzzzzz」

「あつ本当だ、でもなんで寝てるんだ？」

「そりやくそのく頼んだとき寝てたんじゃないかな？」

「頼んだときに寝てたって…!!それってまさか…」おつと、ちよつと待ってて」

リトルがゴジラの話を遮ると先ほどの穴からまた一人艦娘が放り出された、それを見てゴジラは驚愕する

「おい！リトル！もう一人明石が出てきたぞ!!」

「zzzzzzzz」

「あー、少しタイミングずして拉ち…ううん！運んで貰うようにしたからね、ちよつと待っててね」

リトルは液体の薬品を取り出すと布に染み込ませてそれを明石の鼻に近づけると

「zzzz…ん？んあ、うつくつきーい!!」ガバア

薬品の臭いを嗅いで飛び起きた明石

「くつきーい、なんの臭いですか人が寝てるどころいきなり…ん？」

「おはよう、明石！」

「リトルさん！どうしたんですか、いつ鎮守府に来たんですか？」

「ん、いや、ここは鎮守府じゃないよー」

「えっ、はっ！」キョロキョロ

リトルに言われ周りを確認する明石、するとゴジラと目が合い

「うえー！ゴジラさん!!なんで建物の中に…え、ここどこ!？」

流石に目の前にゴジラがいた事で混乱の増す明石に

「落ち着け明石、俺を知ってるってことは第9の明石か？」

ゴジラは確認のために明石に質問した

「はい、そうですね。解つてて連れてきたんじゃないんですか？」
「いや、俺はリトルの出した装置から明石が出てくるとは思つてなかつたからな。まあなんだ、久しぶりだな」

「う、うん久しぶり、まあ向こうでは余り会う機会がなかつたけどね、リトルさんの装置から出てき…」「くっさーい!!」あつ、あちらも起きたみたいですね」

そう言うとき先程の声が聞こえてきた方に振り向く

「う、なんなんですか人が寝てる時にい…あれ、いつ寝たんだっけ、また寝落ちしたのかなまあいいか、それで、誰ですかこんなことしたのは」

そう言つて起き上がった明石の前にリトルが立っていたそれを見て

「え！誰ですか貴方は？」

「おはよう明石、私はリトル妖精だよ♪」

「よ、妖精さんですか？しゃべる妖精なんて、ましてや大きさが違います、本当の事を話さない！さもないと人を呼びますよ」

明石はリトルを睨みながら機装を展開した

「工作艦とはいえ私も艦娘です、そう簡単に捕らえられると思わないことです！」

今にも飛びかかつてきそうな明石を見てリトルは

「ふ、ふふふ、フハハハハハハ」

「な、何がおかしいんですか！」

「フフフ、おかしいに決まつてる明石。君は既に…捕らわれているのだからなー！！」ドヤア

「…な、なんだってー！！そんなここは大本営のはず…」「キョロキョロ」

周りを見渡し今自分がいる場所が見覚えのない居場所と解り崩れ落ちる明石

31話

「そんな、本当に連れ去られてたなんて…貴方の目的はなんですか？」
「フツフツそれは…もう一人の明石呼んだら話すよ。おい、明石ーこっち来てー」

「あつはーい、やっと呼んでくれましたね、さあ説明してもらいますよ」

そう言つて近づいてくる明石を見てもう一人の明石は

「な、私！じゃあやっぱりここはどこかの鎮守府なのね、貴方の所属はどこなの？」

「へ？私は第9鎮守府所属ですけど…」

「じゃあここは第9鎮守府なのね、どうしてこんな事を！」

「ええ!!いやいやいや違いますよ、私もいつの間にか連れてこられてたんですよー、ねっリトルさん!!」

そう言つて第9の明石はリトルを見る

「うん、そうだけど今から説明するんだから少しは落ち着いてよ」

「なっ！元はと言えば貴方がこんなことしたのが原因なのになんですかその態度は!!」

本營の明石はリトルの態度に怒り文句をいい始め、それを第9の明石が止めに入っていた

「ちよ、落ち着いてくださいよ話が進まないじゃないですか」

「何言ってるんですか!!私達連れ拐われてるんですよ！、落ち着いてのんていられますか!!」

「もおく話が進まないよ、ゴジラーちよつとどうにかしてよ」

今まで成り行きを見守っていたゴジラは急に話しかけられ戸惑う

「え！俺…えくともしもーし、みんな落ち着いて、ね」

そう後ろから明石達に呼び掛けると

「なによーまだ他にも居たのね！、いい…かげ…ん？」

振り向きながら文句を言う明石はゴジラと目が合った瞬間固まった、その様子を見てゴジラも何か声を掛けた方がいいかと思ひ声をかけようとした時

「なつななななんじやこりやー！！」

明石が急に叫んだので近くに居たものは耳を塞いでいた

「あ、貴方一体な、何なのよー！」

明石は何かそう問いかけるとゴジラは

「え、あー初めまして俺はゴジラ、そしてそっちにいるのが妖精のリトルだ。まあさつき紹介しあつてたから解るだろうけど、ようこそ我が家へ」

そうゴジラが答えると第9の明石が

「へ？我が家つて、ここつてゴジラの家なんですか!!」

「おう、そうだぞすごいだろう」ドヤア

「ええ、とても驚きました。鎮守府にそっくりでしたから、内装とかは家の鎮守府に似てたから最初解りませんでしたよ」

「ギクツ！ま、まあ参考にさせてもらったからな…」

「うーん、でもゴジラさん中には入れないのにどうやったんですか？」

「うえーそれは、その…」

ゴジラが第9からリトルが妖精さんを勝手に拉…スカウトしてきたことがバレると不味いと思い、誤魔化そうとするがうまく言葉が出せないでいると

「そこは私がしつかり見てきたからね♪、それにここ自体私達妖精が作ったんだからゴジラに説明できるはずないでしょ」

「あー、そっかそれもそうですよね」

「ひどい!!確かにそうだけど俺だって資材集め頑張ったんだからいいだろ〜」

「まっ、それでいい事にしましょうか」ニヤ

「そんな〜」

「「H A H A H A H A」」

そうして三人で談笑していると本営の明石が再起動した

「……………はー、いやいやいや何仲良く話してるんですか!!、もしかして貴方達知り合いなの!!」

本営の明石の問いかけに第9の明石は困った顔をする

「え〜っと、どうしますリトルさん、どこまで話したらいいでしょう

何とか…」

などと明石（本営）がブツブツ言っているがリトルが

「はいはくい、二人とも工廠エリアに着いたよ」

「え!?ここ工廠なんですか!」

「うん、それじゃあ開けるよー」

そう言つてリトルは工廠の入り口の扉を開けた、中には様々な兵器が置いてありそれを見た明石達は

「おおー!!」

「な、なんですかあの兵器は、見たことないですよ!」

「あつちの戦闘機も私達が見た事無い形してますよ!」

あちらこちらに自分達の知らない兵器が置いてあるのを見てテンション爆上がりの二人にリトルは

「はいはい、まだ我慢してついてきてね」

そう言つて明石達を奥へと連れていく、するとどこからかBGM（メカゴジラで最初に流れる奴）が聞こえてきた。そして一際広い場所に着いたが周りは暗くなつていて奥が見えないようになっていた、そんな場所に連れてこられた明石達が戸惑っているとリトルが前に

「コレが君たちを呼んだ理由だ!!!」

と言いながら振り向きそれに合わせて照明が点灯する、その光に目を細める明石達だが目が慣れた二人の前にはメカゴジラが立っていた

「……………」

「フッフ、驚いたろう、実h「ろぼつとだー!!」」

「な、何ですかこれ二足歩行形じゃないですか!!、何でできてるんですか!」

「プログラミングは!武装はなに使うんですか!性能はどんな感じなんでするか!!」

「ちよ、ちよつと落ち着いてよー!」

あまりにもエンジンの掛かった二人に押されながらもリトルは説明を始める

「うーんと、まずこの兵器の名前はメカゴジラ、名前で解ると思うけどゴジラを模して作ってあるんだけどもう一つ見せたい物があってね」
「それは！」

「なんですか！」

「隣に置いてある戦闘機なんだけど、名前はガルーダって言うんだこいつはメカゴジラと合体させて性能を上げる事ができるんだ」

「合体見たいです!!」

合体と言う言葉に反応して更にリトルに詰め寄る二人

「落ち着いてっつてば、じゃああれ持ってきて」

リトルがそう言うのと他の妖精がプロジェクター等の機械を持ってきて設置していく。そして画面にメカゴジラとガルーダの合体シミュレーション（例のポリゴン）を二人に見せた

「まあこんな感じになるんだけど…」

リトルが画面から二人に視線を持っていくとそこには全身キラキラとした明石達がいた

「すごいすごいすごい！…こんなのがあるなんて生きてて良かったー！」

「くー♪ロボの合体、ロマンしかないよねー！早く実際に見たいです!!」

「ねー♪」

イラ「あー喜んでる所悪いんだけど実物はまだ合体できないんだよ」

「え？」

「なんで出来ないんですか!!」

「それはこのメカゴジラもガルーダも私達妖精が建造と開発したから、そしてメカゴジラを合体させるには改修をしないといけないんだ」

「はあ？」

「私達が作った物を改修できるのは明石。君達だけだ、ましてや君達は私達と交友があるからね頼らせてもらったって事♪」

リトルが一気に明石達に説明をしたが明石達は固まったままだっ

た

32話

「へ？え、えー！ー！！じゃ、じゃあ私達がメカゴジラを合体できるように改修するんですか！」

「その通り！今回二人を呼んだのは一人だとサスガに大変だろうから二人に来てとらったの、もちろんうちの妖精は好きに使ってくれていいから」

「ほ、本当にいいんですか？」

「いいって言うてるでしょ、はいこれ図面ね、後部屋とか案内するから着いてきて」

そしてゴジラとリトルは明石二人を連れ、居住区へと案内した

「左側はゴジラの通る道になってるから気を付けてね、私達は右側ね」

「わ、解りました、はあく……」キョロキョロ

そうしてリトルが二人に説明していくと明石達が立ち止まった

「ん？何してるの着いてきて」

「…………ハッ！いやいやいや、何か見ちゃいけないマークがでかでかと書かれた場所があるですけど!!」

そうやって指差す方には??のマークが書かれた扉があった

「あ、あれって放射能や核とかに使われるマークじゃ……」

「うん、そうだよ」

「うん、そうだよってえ？、ええー！ー！！い、一体何のために使ってるですか!?ハッ！もしかしてここの稼働電力として使ってるんですか！」

「いや、風呂だけど」

「へ？……………お風呂？」

「えっえっえ？どう言うことなんです？あつ！ゴジラ達にとってはあのマークはお風呂を表すマークなんです、いやービツクリしましたよ、こんなところにそんな危険な物が有るはず無いですもんね、はあくビツクリさせないでくださいよ」

「いや、普通に放射能のマークだけど。俺以外入ると危ないから絶対はいるなよ」

「……え、えゝあの、ゴジラさんは放射能とかご存じなんですか？」
「そりやもちろん俺一応水爆大怪獣なんて呼ばれてもいるんだぞ。
ん、こっちでは呼ばれた事無いのか？」

その説明を聞いて明石達は再び啞然とするが

「そ、そのお風呂と言つてましたがゴジラは平気なんですか？」

「ん、俺は放射能を吸収してエネルギーにしてるからな

、それに傷付いた時に入れば直るのも早くなるし艦娘で言うところ
の入渠するのと同じだよ」

「は、はあ入渠と同じ……」

明石達は互いに顔を合わせ

(見なかったことにしよう！)

と、互いに意思疎通していた

「そ、それで私達はもう作業に入つても大丈夫なんですか？」

「ん？ああ問題ないけどしつかり休憩はとるようにしてよ、体は壊さ
ないように」

「はい、では早速!!」

明石達はそう言うが必要な図面やデータをもつてあつという間に
自室に入つていつてしまった

「本当に大丈夫かな？」

ゴジラはそんな二人を見て心配そうに見ていた

「まあ大丈夫でしょ」

そんなこんなでメカゴジラの改修計画が始まった

「うゝん何事も起こらなきやいいんだか…ん？」

「どうかしたの？」

「いや、なんか呼ばれたような？変な感じだな、気のせいかな？」

「気のせいじゃないの、ほらほらゴジラはゴジラでやること有るんだ
から」

「ハイハイ……まあ大丈夫だよな……」

少し遡って深海棲艦側では

「トウトウ改修二使エルクライマデニハ抑エラレルヨウニナツタワネ、後ハコレヲ誰ニ使ウカ……」

「チヨット」

「ウヒヤアー！ナ、ナニヨ、居タノ？」

「居タノジヤナイワヨ、最初ツカラ居タワヨデキタノナラマズ私ニ報告シナサイヨネ、ココジャ私ガトップナンダカラ」

「ウ、ゴメン」

「ソレデ、完成シタノネ」

「エエ、ナントカ細胞ノ動キヲ抑エテ体ニ慣れサセテクヨウニ調整シタワ、後ハコレヲ誰ニ使ウカヨ」

「ウーン、正直コンナ何ガオコルカ解らない物使イタクナイケド、マズ私達ノ様ナ姫級ハ除外ネ失敗シタ時ノリスクガ大キスギルシ……」

「ウーン、ジャアヤツパリ部下ノ誰カネ、措素体ガ弱スギテモ意味無イカラヤツパリヲ級、タ級、リ級、ル級、レ級トカノエリートカフラグシップ？」

「ソウネエ、出来レバ航空戦力ヲ強化シタイカラ空母カラ選ビタイワネ」

「ソウスルトヲ級カレ級ダケド、レ級ハ今誰モ育ツテナイワ、貴方ノトコロヲ級街居タワヨネ、ソノ子ドウナノ？」

「アーアノ子ナライイカモシレナイワネ、早速呼ビマシヨウ」

そして姫級達の前に一人のヲ級が呼び出された

「ヲ、呼ビデシヨウカ姫様」

「エエ、トウトウアノ怪物カラトレタ血液ヲ元ニ私達ヲパワーアップサセルコトガデキルヨウニナツタノ、ソレデソノ第一号ニ貴方ヲト思ツタノダケド、ドウウカシラ」

「私……デスカ。ソノカヲ手ニ入レレバ私ハ、私達ハ奴ニ勝テルノデシヨウカ？」

ヲ級の問いかけに姫は

「正直解ラナイワ、デモ對抗スルカハ手ニハイルハズヨ」

「ソウデスカ……解リマシタ、ソノ申し出受ケサセテクダサイ」

ヲ級の返事に満足そうに笑う姫級

「ソレデハ早速始メマシヨウ、ヲ級ハソコニアルカプセルノ中ニ入ツテチヨウダイ」

「ハイー」

そしてヲ級はカプセルノ中へと入りその時を待った、しばらくして液体がカプセルの中に注入されていく、そんな中ヲ級は

(これで奴に、皆の仇を取ることが出来る！)

このヲ級はあのエビラの居た基地から姫と一緒に逃げてきた者達の一人だった、そして最初にエビラに襲われた艦隊の一人でもあった。

ヲ級が生まれて初めて海に出た日、その日は自分が初めて海に出ることに不安を感じながらもワクワクもしていた、一緒に出撃する仲間は優しく、途中で食べようと大きな木の実を担いでやってきた。

それを見て笑い自分が初めて楽しいと言う感情が芽生えのたのを知った

その後、仲間達と哨戒をしていると奴等に出会った、初めは一匹だけ数の多い自分達が負けるとは思わなかったが、奴には攻撃が効かなかった、更に奴等は他に何匹も出てきた、自分達は何とか逃げながら救援要請をだした

しかし一人、また一人と奴等に捕まり喰われていった。最後に残ったのは私とあの木の実を持った奴だった、私は空から援護しながら一緒に戦ったが無駄だった彼女も奴に捕まり喰われてしまった。

味方はまだ来ない私も終わりなんだと思ったら今度は足がすくみ立っていられなかった、私はこの時初めて恐怖を知った

「イヤダ、死ニタクナイ、イヤダ!!」

そう言っただけ逃げようとしたがうまく体が動かなかった、そうしているうちに奴等が追ってきたが

XXXXXXXXXX

一匹が悶えだし何かを吐き出した、それは彼女の持っていた木の実だった、そいつは嫌がるように悶え海の中へ帰っていった

それを見て私は何個か持っていた木の実を奴等に投げつけ艦載

機で攻撃して爆発させた

木の実の汁が掛かった奴等は悶え始め海へと帰っていった。そしてその場で呆然としていると救援に駆けつけてくれた仲間へ声を掛けられそこで私はようやく助かったのだと理解した。

それからはあの木の実を使って奴等を近づけないように薬を作り、奴等からの被害がなくなった

しかし、今度は艦娘共がやって来た、最初はどうせ奴等に食い殺されて終わりだとみんな言っていたが、艦娘共は怪物と一緒に攻めてきた、信じられなかったそれでも奴等が怪物が戦っているのを見てまだ勝てると思っていた…が、怪物は奴等をあつという間に殺し私達を襲ってきた、逃げるしかなかった。私達が殺せなかった奴等を殺せる奴に勝てつこないと思いかむしやらに逃げた、逃げてる途中姫様達とも合流し一緒に逃げた

そして今、姫様が研究していた物が完成した、それを私に使ってくださる奴等に、あの怪物に対抗できる力を私が手に入れる…：私には、私はこの力を使って仲間を、仲間達を守りそして、奴等を殺し皆の仇をとる!!

—————

———

———

「プシュー」と音をたてカプセルの扉が開く

「調子ハドウ、ヲ級立テル?」

姫がそう言ってヲ級に呼び掛ける

「ハイ、問題無イデス」

ヲ級もそう言うのと立ち上がり数歩歩く

「何力変ワツタ事ヤ違和感ハ無イ?」

「イエ、今ノ所ハ：ウツ!」

ヲ級は急に左目を押さえる

「!!ドウシタノ?」

姫が声をかけるがヲ級はゆっくりと左目を押さえていた手を離す

「オー、コレハ!!」

「ドウヤラ成功シタヨウダナ」

ヲ級の左目は紫色に光っていた

33話

「ヤッター！ヨシヨシヨシ、デモエート、ソウダナマズ落ちツクンダ私！深呼吸、スー、ハー、ヨシ！ヲ級才前ハマズ体二慣レサセナイトイケナイカラ、今日ハユツクリ休ムヨウニ!!」

姫Aの言葉を聞いた

「エ、シカシ今ノ所問題無サソウデスシ…」

「イイカラ、タダデサエ未知ノ物質使ツテルンダカラ経過ヲ見ルノモ大事ナ事ナンダカラ、トリアエズ日常生活シテミテソレカラ今日ハ戦鬪行動モシナイヨウニネ」

「ワ、解リマシタ」

姫Aに言われ少し不満もあつたが従うことにしたヲ級

「ソレデハ失礼シマス」

そう言つて部屋から出ようとした時

「うっ…!!」

ヲ級はその場で蹲り動かなくなった

「チョットドウシタノヨ！」

駆け寄る姫Aがヲ級に手を掛けるとヲ級はそのまま倒れてしまつた、そして

「グ、アア、ガアアアアアアアアア」

ヲ級は苦しみだした

「ア、アアアアツイアツイアツイ、ガ、アアアア」

「ク、皆ヲ級ヲ取り抑エテ！薬ヲ使ウワ」

姫Aの指示により何人かの深海棲艦が取り抑えようとするが

「ガッ！」

「ウワア」

「グエー！」

全員がヲ級によって吹き飛ばされてしまった、しかもヲ級の艤装の触手がどんどん伸びて増えていつていた、そしてついに

「アアアアアアアアアア!!」ブチブチブチ

ヲ級の体からも触手が生えてきたのだ、そのせいで触手は部屋を埋め尽くす勢いで増えていつている

「チョット！コレハドウナツテルノヨ!!」

「解ラナイワ、デモヒトツ言エル事ガアルナラ、ヲ級ノ体ガ耐エラレ無カッタシタト思ウ」

「ジャア…」

「失敗ヨ、残念ダケドコノ子ハ殺スシカナイワ……発砲用意！」

「姫Aに言われ、周りに居た姫Aの部下達はヲ級に狙いを定める

「ゴメンナサイネ、……撃テ！」

「姫Aの号令により攻撃が開始された

「グ、アア、ガアアアアアアアアアアア…姫…さま」

「…!!ヲ級…ゴメンナサイネ、貴方ニハコノ力ハ大キスギタヨウネ、ココデ貴方ヲ処分スルワ」

「グ、アツソンナ…グア」

「サヨナラ…ヲ級」

「そう言つて姫Aは部屋から出ていった、そしてそれを言われたヲ級は

「ソン…ナ、グア、ハアハアナカ…マナノニ、グ、コンナ事……」

「ヲ級は仲間であるはずの深海棲艦達に未だに攻撃を受けているのか………未だにヲ級は生きていた

「クソ！キリガナイ」

「ドウシマスカ？」

「トリアエズ、姫A様ニ報告シテクル、攻撃ハコノママ続ケテクレ、何かアレバ連絡シテコイ」

「了解シマシタ」

「そう言つて一人部屋から出ていった、しかしその時ヲ級の触手は未だに増殖していた

「グツ、ハアハアハア、アツギ、アツ」

「痛みはなんとか耐えられるようになってきたが、体が熱い、寧ろどんどん熱くなってきたている。

「そこに仲間の攻撃だ、私は仲間のはずなのになんで…姫様は言っ

指示ダシテルノヨ!! イイコトココデハ私ノ指示ニ従イナサイ。…全軍ニ退避命令ヲ一旦基地ノ外デ様子ヲ見マス、物資ヲ持テルダケ持つて出ルヨウニ徹底シナサイ補給艦ヲ最優先ニ出スヨウニ残リノ者ハ出来ルダケ触手ノ進行ヲ遅らせて物資搬出ノ時間ヲ稼グヨウニ伝エテ

「ハッ！了解シマシタ」

こうして深海棲艦の基地全体に警報がなり辺りが騒がしくなる

「私達モ早く行キマシヨウ」

「待チナサイ」

「…ナニヨ、マサカ今起キテル事ガ私ノセイダツテイ言イタインジャナイデシヨウネ」

「解ツテルジャナイ、アンナ得体ノ知レナイ物ナンテ持ツテ来ナケレバ」

「フザケナイデ！貴方ダツテ協力シタジャナイ!!」

「確カニシタワヨ、デモチャンスト調べタカツテ何度モ言ツタジャナイ!!」

「ソウヨ、ダカラ何度モ何度モ調べテソシテヨウヤク実験ニタドリ着イタンジャナイ！貴方モ納得シタカラヤツタノヨソレヲ失敗シタカラツテ今更…」ズズズーン

「クツ、今ハ言イ争ツテル時間ハ無いワネ…行クワヨ」

そして深海棲艦達は基地を脱出し離れた場所に集結し様子を見ている

「負傷シテイル者ハ後方ニ下ガツテ修復ヲ行エ、無事ナ物ハ弾薬ト燃料ノ補給ヲ行イイツデモ動ケルヨウニシテオケ」

姫Bが指示を出していくなか、基地の監視をしている部下から報告が入る

「姫様、見テクダサイ基地ガ!!」

そうやって指差した基地は既に所々触手が溢れていたが次の瞬間基地全体が陥没し、中から夥しい量の触手のか溜まりが現れた。

更に基地周辺の海面から2ヶ所、触手がせり上がり巨大な柱を形成した、そして柱の先端はヲ級の艦装の形をしていた

「何ナノヨアレハ、貴方本当ニ何ヲ使ツタノヨ…」

「ダカラ解ラナイワヨ、怪物ツテ事ハ解ツテタケド」

そう答えた姫Aは悪びれた様子がなく姫Bはそれを見て啞然とするのであった。

「ハ？ソレハドウイツタ意味デシヨウカ？」

独り言のつもりがすぐ近くにいた部下に聞かれたらしくそれをめんどくさそうに返事をする

「ソノママノ意味ヨ：アンタハイカナイノ？」

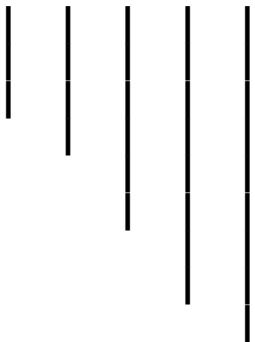
「ハイ、本当は行キタイノデスガ自分は腕をヤラレテシマイマシテ戦鬪に参加出来マセンデシタ」

「ソウ、貴方運ガイイワヨ、私達ハ後方デ様子ヲ見ルコトニシマシヨウ、戦イガ始マレバサツキの意味解るわ」

「ハア？シカシナゼ？十分に離レテルノ二更に下がるんですか？」

「アンナ訳の解らない奴が動くかもしれないのよ、距離は取れるだけ取つといた方がいいのよ」

そう言つて残つたものをつれて後退を始めた、そして攻撃側は柱に向かい進軍していった



「ヨシ、空母勢ハ攻撃機ヲ出シ、制空権ト先制攻撃ヲ戦艦ハ柱ノ根元ヲ狙エ、重巡々駆逐ハ雷撃ヲクラワセテヤレデモ攻撃開始!!」

姫Bの号令で深海棲艦たちの攻撃を開始された、駆逐、重巡らによる雷撃、戦艦による砲撃により柱を形成している触手の一部が吹き飛んだがすぐに再生され元に戻つてしまった

「ヤツパリ報告ドウリネ、デモコレナラドウカシラ」

そういうと姫Bは前へと出て狙いを定める

「食らいなさい!!」

他の砲撃とは比べ物にならない程の轟音と共に発射した弾は真っ直ぐに柱の根元に吸い込まれ爆発した。

柱はまたすぐに触手によつて再生され始めたが、今までの攻撃よりも姫Bの砲撃が強力だったため再生に時間が掛かつてるようだった

た、それを見た姫Bはなにかを確信したように笑う

「アハハハハハ、ヤツパリ回復速度が速クタツテソレ以上ノ攻撃ヲ受ケタラ回復シニクイワヨネ、ソレヲ一点二集中シテ繰り返セバ倒セルハズ。」

全艦、マズハ片方集中シテ倒スワヨ!!」

そうして姫Bの艦隊は二本のうち、一本に集中攻撃を開始した

「フフフフ、イイ的ジャナイ、ナンナラマダ練度ノ足りテナイ奴ラノ的ニシテモイイワネ、何ダ楽勝ジャナイ

アハハハハ私モ久しブリニ戦闘ガ出来テ嬉シイワ、コノママ
…」

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

その時柱の上にあつたヲ級の艦装が口を開け咆哮をあげた

「何?今更叫ンダ位ジャ私達ハ怯マナイワヨ、各艦攻撃ヲ「姫様!」:
ナニヨ」

「アレヲ見テクダサイ!!」

そう言つて部下の一人が指差したのは柱の上にあるヲ級の艦装から艦載機が射出されていた、それもかなりの数を出し続けているそれを見た姫Bは

「クツ!全艦対空戦用意、後方ニイル空母ニ迎撃機ヲ出サセロ、体勢ガ整ウマデ私達デ時間ヲ稼グゾ」

そして艦隊は対空戦に移行したが…

「姫様…アノ、」

「ナニヨ…」

「アノ近ツイテクル敵ノ攻撃機大キクナイデスカ?」

「ハア?何ヲ言ツテ…ル…:…ノ…:」

そう言つて見た敵の戦闘機は自分達のよりも何倍も大きかった

「…:…!!オ、大キイナラ攻撃ガ当テヤスイハズヨ、イイカラ狙イナサイ!!」

そうしてどんどん近づいてくる攻撃機、もうすぐ射程内に入る…:…
して

「撃チ方始メ!!」

前衛にいる艦隊が対空射撃を始めたが

ガン！ゴン！ギン

その全ての攻撃が敵機に効かなかった

「へ？…ソナバカナ!!」

一瞬呆けた姫Bだがその間に敵の攻撃が始まる、巨体の攻撃機の放つ機銃は一発一発が強力で駆逐、軽巡クラスはあっという間に轟沈してしまふ威力だった

さらに敵機からの爆撃は効果範囲も広くそのせいで艦隊はかなりの損害が出ていた

「ゴツコチラノ航空隊ハドウナツテイル！」

「上ガツテマス、上ガツテマスガ!!」

そう言つて上を見あげると、味方の航空機が自分の何倍もある敵機に機銃を撃つていたが効いてる様子はなく、それどころか機体をぶつけられて落ちていく姿だった

「ナツ!?ソナ…クツ！全艦撤退ダ、引ケ、引ケーー!!」

そう言つて撤退を開始した艦隊だが、空からの攻撃が激しく上手く離脱出来ないでいると、一発の砲弾が近くの部下に当たり沈んでいった

「ダ、誰ガ撃ツタ！誤射ヲスルナ!!」

激昂する姫だがまた一人近くにいた部下が砲撃を受け沈んでいった、姫は砲弾が飛んできた方を見ると自分達の進行方向に無数の触手が水面から伸びていた。

その触手は木のように枝分かれしていてその枝の部分が砲頭になっていてそこから砲撃をしていたのであった、そしてその触手の木は既に艦隊を包囲していた…

「予想以上ニ二化ケ物ネ、コンナノ勝テルハズガナイ…、アイツノ言ウ通りダツタ、デモ私モ簡単ニ死ヌツモリハナイワ何トカ一点集中攻撃デアノ包囲ヲ突破出来レバ何トカ…残ツテル者ハ私ニ続イテ包囲ヲ突破スルワヨ着イテキナサイ!!……………」

号令を出す部下からの返事がなく周りを見渡すとそこには既に味方の姿は無かった

後方から聞こえてくる化け物の咆哮から逃げるようにその場を立ち去った……

35話

バース島

「うん?」

「どーしたのゴジラ」

「いや、最近なんか感じるって言うか引つ張られるような、誰かに呼ばれてるような変な感じなんだよな」

「うん?少なくとも今ゴジラを呼んでるのは私だけ」

「ん。そうなんだけどリトルとはまた別の奴に呼ばれてるような感じなんだよな」

「何それ、まあいいや明石達がメカゴジラの改修終わったって」

「ん、おーそうなのか………ハツ!?マジで!あれから三日しかたっていないんだけど、明石達ちゃんと休んでるのか?」

ゴジラの心配の声を効いたリトルは下を向き汗を流している、その様子を見たゴジラは

「どーゆーことなのかちやーンと説明してくれるんだろうな」ニッコリ

若干怒気の入った声でリトルに説明を促す

「あー、私から説明すると初日に明石達が自分の使う部屋に戻って、必要になる工具を持ってきて作業し出したんだけど止まらなく、いや止められなくなっちゃたんだよ」

「止められなくなっただって?」

「うー例えば『何なんですかこれ!たぶれつと?これで図面が見れるの?」

えっ!こっちの新品の工具使っていていいんですか!!へっへへへ、ほ、他にも工場には色々な設備がある!、っ、使ってみたい!それでメカゴジラを、フ、フフフフフ』って感じで二人とも結局働き続けてメカゴジラの改修終わらせちゃったんだよ

後は起動テストとドッキングテストだけだって、それも今やって

るみたいだし、まあ取り敢えず見に来てよ」

そう言つてリトルはゴジラを工廠につれていくとそこには

ガルードと合体したスーパーメカゴジラが立っており足元に居た明石達が此方に気づいてくれた

「あつ、ゴジラさんリトルさんこんにちは♪」

「こんにちは♪」

「おつす、二人ともメカゴジラの改修終わらせたんだった」

ゴジラはそう問いかけどんな反応するかと思つていと

「あ！そんなんですよ！さつきドッキングテスト終わったんで後は実戦テストやればOKです！」

「まあ後はスーパーメカゴジラがどんな性能なのか楽しみです!!」

「あ、ああそうだな、ただな二人ともお前達三日も休まずに働いていたら、一休みしてからの方が…」なに言つてるんですか！今、今ですよ、今この頭の冴えた状態だからこそテストをやるべきなんです!!」

「オ、おうそうなのかでも取り敢えず一旦休憩した後でも…」

なおも明石達を休ませようとするゴジラを見て一人の明石(9)が右腕にグローブを装着する、そして

「だまらっしやーい!!!」

といい拳をゴジラに正拳突きをする、勿論届いていない何のためにとゴジラとリトルが首をかしげる

「なあ、いったいなにを「ガスン」おぶら!!」

困惑していたゴジラの頭上の天井クレーンアームがゴジラの頭を叩いた

「イツツー！ナニコレ意外と痛いんですけど」

そう思いつつ明石達の方を見ると、とても喜んだようだった

「ヤッパリ自分の思い通り動いてくれる機械は素晴らしいですね！」ニッコリ

「いや、でも行きなり殴らなくなつていいでしょうよ！」

「ア、アハハハ思ったより綺麗に決まっちゃいましたアハハハハ」

「……………」ジーン

「ご免なさいでしたー!!」ドゲザー

「…ううまあいいよ、謝ってくれたしね、それはそうとどうして三日も休まずに作業してたんだ？」

ゴジラがそう聞くと、明石達は少し困ったようにしてから少しずつ喋り始めた

「うーん、なんて言ったらいいのかわからないのか。そうですね作る事に飢えていたって感じですかね」

「作るのに飢えてた？」

「いや、私（9）の場合ですけどね、ゴジラさん達が海域を解放するまで私は装備とメンテナンスと修理しかやってなかったんですよ」

あーあとは、解体もしてたんですけどね、資材が無くて開発なんて出来ないでいたんですよ。

ずーっとメンテと修理、そして時々解体、その繰り返しでした。でもゴジラさん達が皆さんと海域解放してくれた。

お陰で資源が前よりも入るようになりました、だから今度こそ自分で装備を開発、改修出来ると思ったんですけどね…：今度は戦力がほしいからって建造優先で資源を使っているんで私達…いや私はやってみることは前と同じなんだな…って

部屋に居て気づいたらこんなところに連れてこられて、さらにこんなスゴイ巨大メカを私の手で弄らせてくれて、さらに新品の工具見たことも触ったこともない様な機器類を使っているなんて聞いたらもう寝てらんないですよ!!!」

「そうですよゴジラさん、大体どこの明石も一緒でしょう、私（大）もこの三日間心が踊って仕方ありませんでした。

本当はもう少し調べながらゆっくりやりたかったんですが、体がもう我慢できなかつたんです！

そして今！私達が改修したメカゴジラの実戦テストが行われるなんて聞いたら…：…」

「休んでなんかいられないです

よ!!」

「お、おう、そ、そうかそうだよな自分で仕上げたんだから見たいよな、よし、じゃあ早速やろうやろうやろうでソレが終わったらすぐに休む

ようにな」

「え、終わったあとはメカゴジラをくまなく検査してデータ取らなきゃだしー」

「…はあ、解った取り敢えずそれが終わったら休むようにしてくれよ」

「は、はい」

「それじゃあ早速外に出ましょう！」

そう言うのと明石達は移動しようする

「ん？こういうのって中からモニターで見るもんじゃないのか？」

「はあ！なに言ってるんですか！生で見るからいいんじゃないですか！！」

「そうですよ、自分の目で近くで見た方が興奮すじやないですか！！」

「お、おう解った解ったから、な、外行こ外…」

「ヒヤッハー！！」

二人の明石はその勢いのままゴジラ達を置いて外へと出ていった

「ハア、まあ二人が楽しんでくれてるようだからいいか」

そしてゴジラは明石達の後追い外へと出ていった

その後ろで

「リトルさん、準備できましたけど直ぐにヤりますか？」

「いや、テストが終わった後にしようその方が良さそうだし…」

「解りました、決行の時は合図をお願いします」

「ん、了解」

「では…」

そう言っつてリトルと一緒に居た妖精は去っていった

— 砂 浜 —

「ここならよく見えますね♪」

「ええ、これでカメラがあれば最高なんですけどね♪」

「そうですね」

「おーい」

「あつ、ゴジラさん遅かったですね」

「いや、二人が速すぎたんだからね」

「そんなこと無いですよー…ん？あー！始まるみたいですよ」

明石（9）が指差す方に目を向けると、メカゴジラが発進していく所だった。

それを明石達は「オーー！」と声をだし喜んでいた。

そして、メカゴジラが用意してある標的を色々な武装を使って破壊していく様子を目をキラキラさせながら見ていた。

次にガルーダが上空を飛び回り浮いているバルーンを次々に破壊していく、そして全ての標的を破壊したガルーダはメカゴジラに近づいていくその様子を明石達は興奮ぎみに眺める。

そして、ガルーダとメカゴジラが合体すると

「うっひゃー！かっこいいー！！、もう最高ー！！！！」

そう叫び、終始興奮しながらテストを見ていた、そして、

「あー、これで終わりですかー…」

「残念ですねー、でもここで教えてもらった技術を使えば艦娘の強化に使えますからね♪、これから忙しくなりますよー！」

「それもそうですね、まあその前に少しここで休ませてもらいましょう」

「そうですね」

「ようやく休む気になったか、お二人さん」

「アハハハ、ご迷惑かけます」

「いいよいよ、こつちの都合で手伝ってもらったんだ、2、3日位休んで「その必要は無いよ」…ん？リトル…」

「その、必要がないとは？」

「こういう事だよ」サツ

リトルが手で合図を出すとリトルの周りから武装した妖精が出て来て明石達を囲んでいった

36話

「え、ちよつと!」

「おい!リトルこれはどういう事だよ!!」

明石達を取り囲む妖精を見て声をあげるゴジラに対しリトルは平然としていた

「まあまあ落ち着いてよ。別に危害を加えるつもりはないから。さて、二人とも今日までメカゴジラの改修を手伝ってくれてありがとう、とても助かりました」

「え、!?あ、はあどういたしまして」

「しかしこの場所、技術は隠さないといけないので、お二人のここでの記憶を消させてもらいます」

「へ?え、ちよつ『パス』とおく…」バタン

「な、!急に何『パス』をおく…」バタン

「ちよ、!おいリトル何やってんだよ!!二人に何をした!!」

「落ち着いてゴジラ、ただ寝かせただけだから」

「寝させただけって、記憶も消すとか言ってたろ!」

「うん、そうだよ。あの麻酔を撃った時点でここでの記憶は消えるから」

「消えるからって、そんなの撃って何か副作用とか無いだろうな!」

「うくん、副作用は肩凝り、目の疲れの解消、体の活路上昇、体の疲れの解消、肌のツヤ、ハリの回復とかかなこれで今までの徹夜の疲れはバッチリ解消されるよ♪」

「へ?それが副作用?」

ゴジラはリトルから話を聞いて呆然とする

「うんそうだよ。……あつ!ゴジラは失礼だな、私達が艦娘を傷付けるはずないじゃん」

「え、あ、ああ、そだよな、でもこれは、うくん」

「まあまあ、あ、そうだ」

何かを思い出したリトルは寝ている明石達のところに行きハサミ

を取り出した。そして明石達の髪を少しずつ切って保管した
「これでよし♪それじゃあ明石達を元の鎮守府に戻しといて」
「了解しました」

リトルがそう言うのと周りに居た妖精さん達が明石達を持って消えていった。

そしてその一連の出来事にゴジラは着いていけないで居た

「ほら、ゴジラ行くよ」

「え、お、おう」

リトルと呼ばれ訳も解らずに着いていくとゴジラ達は再び工廠に戻ってきた

「なありトル、工廠に来てどうするんだ？」

「ん、そりや建造だよ」

「建造ってまたメカゴジラ作るのか？」

「まあそれもありませんけどね、今回は艦娘を建造してもらいますー」

「へえ、ええ、艦娘!!いやいやいや、艦娘建造っていや、それはなー、前にも言ったけど艦隊運用とか指示出し出来ないんだから艦娘悪いよー!」

「落ち着いてよゴジラ、今回建造するのは明石だから」

リトルのその言葉に固まるゴジラ

「明石を?なんでまた?」

ゴジラの言葉を聞き大きなため息をはくリトル

「あのねゴジラ、今回は明石に来てもらったけど(強制)向こうも大変なんだよ。」

それなのにまたこっちでなんかあってその度にこっちに来てもらうのは大変でしょ」

「う…確かに」

「家には建造機はあるんだから建造した方が早いでしょ、毎回記憶を消さずにすむし、それにどのみち明石の力が必要になってくるからね」

「うーん、建造する理由は解ったけど明石が出来るまでどれくらい建造する事になるか解らないぞ。俺運無いし…」

「一回だよ」

「……ん？一回？」

「うん一回、やれば明石が出来るよ。」

今回はそのために明石達の髪の毛を少しもらったからね」

「あーそれで髪切ってたのか、でも本当にそんなんで明石が来るのか？」

「フーン♪それは論より証拠、早速材料を入れてこの明石の髪を入れて、さあゴジラスイッチを押して！」

「お、おう」

ゴジラは言われるままにスイッチを押すと建造が始まる

「高速建造するよー♪」

妖精の一人がバーナーを持ち建造機を火炙りにした

「終わったよー」

そう言って建造妖精さんが合図してくれた、そして建造機の扉が開き中から明石が出てきた

「いやー、なんかでつかい建造機ですね」

出てきた明石を見てゴジラは啞然として固まっていた

「やあやあようこそ明石、私の名前はリトル、このバース島鎮守府の………妖精だよ!!」

「あつこれはこれはご丁寧に……つて妖精さんが喋ってる！しかもデカイ!!」

「アハハハ、それはまあこの特徴みたいなものだからそのうち慣れるよ♪」

「ハア解りました……。う、うんでは改めまして、工作艦、明石です、少々
の損傷だったら、私が泊地でバッチリ直してあげますね、お任せください!!」

「オー」パチパチパチ

「アハハー、有難うございます、ところでリトルさんこの提督はどこにいるんですか？」

「え？それならもう目の前にいるよ、ほら」ユビサシー

リトルの指差した方を見るとそこにはゴジラが明石を見ていた

「……………あ、あのリトルさん？提督はこゝこの前に立っているそのくひ、人ですか？」

「うん？人ではないでしょ、ゴジラは怪獣でここの提督だよ♪」

「へ？……………バターン」

明石はゴジラを見て倒れてしまった

「あーあ、ゴジラが威圧するから〜」

「えーいやいや威圧なんてしてないから！ちよつとビックリして固まっただけだから!!」

「でもゴジラ見て倒れたのは事実だからね、まあちよつど良かったんだけどね

皆、明石をあそこに運んで」

そう言つてリトルが近代化改修室と書かれた部屋を指し、指示を受けた妖精さん達が明石を連れ中へと入る。

すると扉の上に着いているランプが光「改修中」と表示された

「……………おいリトル」

「なに？」

「なんで明石を近代化改修室に？」

「あー、そりやいまの装備や装甲、エンジンじゃ駄目だからチヨチヨイとね♪」

「チヨチヨイってなんだよチヨチヨイって何するんだよ！」

「ん〜、だから家仕様に改造するんだよ、そうすればゴジラの熱線の一回か二回なら受けて…も…うん、大丈夫になったらいいなって感じに」

「なつたらいいなって、お前な〜…」

「まあまあ、でもこれは本当に必要なことなの、深海棲艦にしる怪獣にしる私達はそれ対抗しないといけないの、そのためには私達の技術で近代化して強化しなきゃいけないの、解る？」

「う、確かにそうだよな、すまん考えなしだった」

そう言つてゴジラは納得しリトルに謝罪した

「うんうん、解つてくれたならいいだよ。」

……………それじゃあ次の建造しようか♪」

「おう！……っておかしいおかしい、え、明石だけじゃなかったのか？」

「チツ流されなかったか…」

「おい、聞こえてるからな」

「まあ、聞いてよゴジラ、このバース島の防衛戦力は主力はメーサー攻撃機や他の航空機なんだけど。」

それが今かなり余ってる状態……と言うかも倉庫が一杯なんだよね♪それで「おいおいおい、ちよつと待て」なに？」

「え？倉庫一杯ってあのだだっ広い倉庫、格納庫に入らない様に作った予備の倉庫も一杯ってことか？」

「うん、そう…」

「……どんだけ作ってたんだよ、まあそれは取り敢えずいいや、それでなんで艦娘建造が出てくるんだ？」

「あー順を追って説明すると最初開発で必要な兵器とその数作ったじゃない」

「そうだな」

「どうやら必要な分作った後はやることなくってしまった妖精さん達が「じゃあ予備も作っとこう」となり、少しずつ作っていたんだが来日も来日も演習しかしないで減ることがなくそのまま増えてったそうだ。」

そしてさらに建造担当の妖精さんもメカゴジラ以外建造してないからストレスが溜まって、なにか作らせろって抗議が来たんだよ。

そこで私が今度艦娘建造するから待っててって言って何とか落ち着かせたんだよ。あのままだったらメカゴジラを量産されて大変な事（主に資源が）になってたよ…」

「そ、そうだったのか」

「んで、今回丁度明石を建造するから、他にも空母の艦娘も建造して島の防衛強化しようと思ってるんだよ。」

勿論護衛艦もね♪」

「なるほど、まあ妖精さんのためじゃしよーがないか、でもなーうー

ん」

なおも洩るゴジラを見てリトルは

「初期艦……」

「え？」

「初期艦どんな艦種だろうが初期艦はゴジラの望む艦を建造してあげるよ!!」

「……………マジ」

37話

「マジ」

「ほ、本当に誰でも一人確定で建造してくれるのか」

「マカセンシヤイ！」

「じゃ、じゃあマクロ「それは無理！」…エーなんでもって言ったじゃーん」

「いや他の世界（SS）には居るかもしれないけどそれだと家の世界（SS）が大変になっちやうから駄目です」

「ちえー、んじゃあ、その「モジモジ」

「なにもじもじしてんのさ、さあ遠慮せず言っごらん」ニツコリ

「お、おう。じゃ、じゃあ大鳳ちゃんでお願ひします」

「はいよ大鳳だね、了く解」

そしてリトルは建造機に材料を入れていきスイッチを押す

「な、なあ今回髪とか無いけど大丈夫なのか？」

「大丈夫、見てて」

そう言うとりトルは建造機の前に立ち、口を開けるとリトルの背鰭が光リトルが熱線を吐いた

「な、何ー！！！」

暫くして熱線を止めたリトル

「ふうく、疲れたー」グダー

「お、おうお疲れ、お前熱線出せたんだな」

「そりやー、ゴジラの精霊だし出せるよ」

「そっか、そうだよな。ところで建造の方は？」

「もーバツチシだね♪開けていいよ」

そう言って建造機を指す

「お、おうそれじゃあ開けるぞ」

ゴジラはドキドキしながら扉を開ける、そして……………

「そう、私が大鳳出む…か…：…へ？」

大鳳は挨拶の途中で固まった、それを見てリトルは

「着任ご苦労様、私はリトルゴジラの妖精だよ」

「……あつ失礼しました。これからよろしくお願いします、おつきい妖精さんですね」

「あーこの妖精は大体大きいから、それとそこで固まってるのがこのバース島鎮守府の提督、ゴジラだから」

そう指差す方にはガッツポーズをし、上を見上げながら泣いているゴジラが居た

「えーこのく人？が提督ですか!？」

「そう、このバース島「うおおおーやったー!!」うるさいなー」

「とうとう、とうとう大鳳を手に入れた、長かった長かったくくく」

「ちよ、ちよつとゴジラ!」

「ん、なんだよリトル?」

「その大鳳を目の前に挨拶もしないのはどうかと思うよ」

「ハ!そうだったな。う、うん、改めまして俺はゴジラ、このバース島鎮守府の……責任者だ」

「……………」

「……………」

「ん?どうしたんだ二人とも?」

「い、いえ」

「ゴジラ、こつち来て」

ゴジラは言われるままにリトルに着いていき、大鳳から少し離れたところで話始めた

「ハア〜、ゴジラはそんなに提督になりたくないの……」

ため息をつきゴジラを見るリトルの顔は真剣な顔をしていた

「う……いや、やりたいっちゃやりたいけど、やっぱり自信無いし艦娘に嫌われたらどうしようとか考えちゃって……」

リトルはそんなゴジラの思いを聞き

(コイツメンドクセ〜)と思った

「あーもう、提督やりたいんでしょ!」

「うん、まあ」

「駢やつちやいなよ、私達もサポートするから」

「……本当か?」

「勿論!!」

「じゃあやってみるよ」

「よし!! (チヨロ♪)」

こうしてゴジラとリトルは大鳳の前に戻ってくる。

大鳳は先程と違う空気に若干警戒していると

「え、改めまして、バース島鎮守府の提督、ゴジラです」ペコリ

「どうもはじめまして、よろしくお願いします」ペコリ

そう言つて大鳳にお辞儀する二人に着いていけないのだった

「え、えくと、ここが鎮守府であり。その、ゴジラ…さんが提督というのは解りました。

いや、まだ混乱しているのですが。あの、それで他の人…人間はどこに居るのでしょうか？」

そう不安そうに聞いてきた大鳳にリトルが

「人間はここには一人もいないよ、居るのはゴジラと私、それと明石と妖精達だよ」

リトルの答えに驚愕する大鳳

「え!!それじゃあこの建物や施設は…」

「うん、全部私達妖精で建てたんだよ」

「え、えくと、それでこの規模の…ああ、なるほど」

建物の大きさに驚いていたがゴジラを見て何かを納得した大鳳、そして

「改めまして、装甲空母大鳳着任しました。これからよろしくお願ひしますね、提督」ニッコリ

「……………」ズキーン

その時ゴジラに電流が走る

「こちらこそよろしくね、良かったねゴジラ受け入れてくれて…ん?ゴジラ?」

ゴジラに話しかけても返事が返ってこなかった

「ちよ、どうしちゃったの。おーいごじらー…って、ええ!!」

「どうしたんですか!提督に何があつたんですか!!」

「きつ」

そしてその前にはプリプリと怒ったリトルと困惑した大鳳が立っていた。

「まったくもう！せっかく大鳳が挨拶してくれたのに気を失うとか失礼じゃないー！」

「はい、そのとおりでございます」プスプス

「あ、あの私気にしてませんから、もう許してあげてください」

そう言っただけで仲裁してくれる大鳳を見てリトルはため息をはく

「はあ、今回は大鳳に免じてこれくらいにするけど気を付けてよね」

「はい、気を付けます」プスプス

「よろしい、では大鳳には最初やって来てほしいことがあります」

「はあ、何でしょうか？」

「近代化改修（バース島版）を受けてもらいます。整備妖精！」

「はい、ここにいますよー」

リトルの呼び掛けに整備妖精が何人かやって来た

「それじゃあ大鳳を連れてってあげて」

「解りました、大鳳さん着いてきてください」

「あつはい解りました、では提督、後ほど」

そう言っただけで大鳳は妖精達と奥へと進んでいった

「なありトル近代化改修って明石が受けてるやつか？」

「うん、そうだよ」

「ふーん結構すごい事してんだな」

「ふーんって他人事じゃないよ、まだ艦娘は建造するんだから」

「え！まだ作るのか!!」

「当たり前でしょ！大鳳だけじゃ大変だし、護衛の子だって必要でしょ。それにまた近代化するんだから時間かかるの！解ったらさっさと建造するよ!!」

「イ、イエス、ママ」

こうしてゴジラはリトルに言われるがままに建造を行い空母、軽空母、戦艦、重巡、軽巡、駆逐と三十人近く建造し。

そのすべての艦娘がゴジラに会い、ビックリして気を失い、その流れで近代化改修室へと運ばれていった。

そのためゴジラはまだ録に挨拶していないのであった

そして全員に気を失われたゴジラは現在……………部屋の隅で
いじけていた!

「なんでや、なんで全員が全員俺を見て気を失うだよ〜」(泣)

「いやーまあ生まれて最初に目に入ったのが私達だからねえ」

「天龍や川内、大鳳は大丈夫だったぞ」

「そりゃー、天龍の時は気を失ってる場合じゃなかったし、川内には前
もって忠告してたからじゃない?大鳳はまあ、私から入ったから……
かな?」

「でもまさか戦艦や空母達も気を失うとは……ショックだなー」

「まあもう少ししたら全員起きるからその時ちやんと挨拶しよ、ね」

「はあ、そうだな」

そして全員が起きたと報告を受けるまでゴジラは落ち込んでいた

……………

現在建造された艦娘達は講堂に集められている、そして集められた艦娘達は誰もが不安な顔をしており下を向いていた

そんな中講堂の扉が開きリトルが入って来て壇上へと上がる

「はいはい注目」

艦娘全員がリトルに注目する

「はい！皆こっち向いたね。それじゃあ改めて自己紹介するね♪私の名前はリトル、そしてここはベース島鎮守府というところです。皆はこの鎮守府に配属になります。ここまではいいですね……では更に分から言うことは一番知っていてほしいことなのでよく聞いてください……」

リトルは一旦艦娘達を見渡してから言葉を発した

「ここベース島鎮守府は日本海軍どころか日本とも一切……いやちよつとあるかなまあいいや取り敢えずあらゆる国家とも関係ありません。ここは独立した組織です」

「「「……え？、えー……!!」」」

「ちよ、ちよつと待つてよ！……ここが日本じゃないどころか日本とも関わりがないってどういうことなのよ！」

私達は日本の船なのよ!!それに独立した組織って……」

「まあまあ皆落ち着いてよ、最初に言ったけど貴方達はこのベース島で建造された艦娘ですから……この艦娘であることは覆りません。」

それに貴方達にはこのベース島の技術を使つての近代化改修が施されています。仮に別の鎮守府に異動する場合は元に戻してからの異動となります。

因みにそのまま異動した場合は連れ戻しにいくので注意してくださいね」ニッコリ

リトルの言葉を聞いて啞然としている艦娘達だがその中から声が上がった

「あ、あの……」

「はい、なんですか？」

「連れ戻すつて事は私達の居場所とか解るつてことですか？」

「勿論！私達はもう仲間なんですから、もしもの時に何処に居るか解るようになってるよ♪」

「あつ……そうですか、解りました」ズーン

リトルの返答に更に艦娘達は驚愕し、質問をした艦娘はまた下を向いてしまった

「他に質問とかある？」

リトルがそう聞くと二人が手を上げた

「はい、日本とは少しは繋がりにあると言っていましたですがそれはどういった繋がりになんですか？」

「……うーん何て言ったらいいだろう。因みにもう一人の質問も聞いてもいい？」

「あつ、はい私はこの組織がどういう物なのか聞こうとしてました」

「なるほど、じゃあこの質問に答える前にそろそろ呼ぼうかな。おいゴジラー入ってきて〜」

リトルの呼び掛けに講堂の扉が開きゴジラが入ってくる

。ズシンズシンと音を立て歩いていき艦娘達の前まで来たがゴジラが入ってきた瞬間大鳳以外の艦娘達は顔を青くして下を向いていたが

「こ、こんにちは」

ゴジラが挨拶をすると艦娘達は一斉に顔を上げた。

艦娘達は建造されてすぐにゴジラを見て気絶してしまったので、ゴジラが言葉を話せるとは思っておらず驚いていた

「因みにこのバース島鎮守府の提督だから」

「！！！！……提督！！！！」

リトルのその言葉に艦娘達は騒がしくなるがリトルがてを叩いて静かにさせる

「ハイハイ静かに。それじゃあまずは提督であるゴジラから挨拶をどうぞ」

「え！！」

ゴジラはいきなりリトルに振られオロオロしながら艦娘達を見る

「あ、あーその、初めまして俺がこのバース島鎮守府の提督のゴジラです。多分皆戸惑っていると思うんだけど、その…えーと、ここで出会えたのも何かの縁だと思うので一緒に楽しくっ？やっついていけたらと思ってるので、その、よろしくお願いします」

そう言っつてゴジラは頭を下げる

「「「……………」」」

「なんか転校生の挨拶みたいだねwww」

「うるさいよ！いきなりでこれくらいしか思い付かなかったんだよ!! 苦手なんだよこういうの!!」

「アハハハ、怒らない怒らない、取り敢えずは皆の緊張は少し緩くなった感じだから結果オーライだね」

「マジで!」

「ホントホント。で、さっきの質問何だけどここのゴジラは一部の鎮守府と交流があつて時々頼み事を聞いたりしてるんだよ、勿論報酬とか貰ってるからまあ傭兵みたいな感じかな。まあそういう繋がりなんだよ、解った?」

リトルの言葉に艦娘達は首を縦に振る

「よし、じゃあ顔合わせはこんなところかな、次は海に出て艀装の説明をしてそのまま訓練をしてもらうから。それじゃあ移動してー」

「ちよ、ちよっと待ってください!」

リトルが指示を出した後に艦娘の一人が手を上げた

「何?どうしたの」

「私達まだこの施設がどうなってるか教えてもらってないんですけど…」

「あー、そうだったね。じゃあゴジラの後着いていつてよ」

「お、おう。それじゃあ皆俺の後に着いてきてくれ。」

まあ、外に出るまで施設の説明してくから何かあったら遠慮せず聞いてくれ」

ゴジラはそう言っつて移動を開始した、艦娘達もその後に着いていく。

ゴジラはこの際だから施設を一周しようと考え工場、食料生産区、移住区など説明しながら周りそのお陰で艦娘達の警戒心が薄れてきた頃

??

??

??

??

??

「…………あの、あそこは」

「ん？ああ、あそこは俺の風呂になってるんだよ」

「へ、へくお風呂なんですネ〜…」

「おう、でも俺以外が入ったら死んじやうから入っちゃダメだぞ」

「二「死ぬ!!」二」

「あ、あのじゃああのマークつてもしかして…」

「放射能のマークだぞ♪」

「だぞ♪って、えっ!?!お風呂なんですよね、どうなってるんですか!!」

興奮してゴジラに詰め寄る艦娘達に対してゴジラは

「あーあの放射能が俺のエネルギーなんだよ」

「エネルギー?」

「うーんまあ俺の飯?って感じかな」

「放射能がご飯って…………!!あの!ゴジラさんに近づいても平気なんですか?」

「うん、放射能は俺が吸収するから問題ないぞ」

「そ、そうですか」ホッ

「おう、んじやこれで大体一通り案内したから外にいくか、リトルも待ってだろうし」

こうしてゴジラと艦娘達は外へと向かったが先程の説明を聞いて更なる不安と戦っていた

——— 浜 辺 ———

「遅いよゴジラ、なにやってたの?」

浜辺につくと既に待機していたリトルが文句をいつてきた

「悪い悪い、家の案内をついでにしながら来たから」

「案内……まあいいか後でも先でも同じだしね。それじゃあ艦娘の皆はまたさつきみたいにならんでね」

リトルの指示により浜辺に整列する艦娘達

「はいそれじゃあ早速艦装に慣れるための訓練を始めます。各艦事に艦装を装着してください」

リトルに言われ艦装を装着すると着ていた服がグレーへと変わっていく

「おー、これが私達の艦装なんですネ」

初めて見る自分の艦装に様々な反応を示す

「はい皆装着しましたね、では最初に改修して変わったところを説明するから。まず皆の着ている装甲んだけど耐熱性のある「NT-1」というのを使用してます。さらにナノマシンも合わさってるので小破位なら自力で回復することができます。」

更に明石にはナノマシン装甲の技術を教えたのでその応用で中破までなら直ぐに修理が出来るようになってます」

「え、それじゃあ入渠しなくても怪我が直るの？」

「うんまあ大破までいっちゃうとね、さすがに入渠した方がいいけどね」

「では次は武装だとかエンジン部分だけど武装はそんなに変わってないよ。ただ弾を自動装填にしたぐらいかなエンジンの方もガスタービンとかに変えただけだから……あとは皆が実際に動いて自分の艦装に慣れくれるしかないね。」

じゃあ向こうの海の上にダミーバルーンとか設置してあるから、あれを使って訓練してね。説明終わり！」

「え、終わりですか？」

「え？あとなにか……あ」

リトルが周りを見ると空母達が待っていた

「あー確かに説明してなかったごめんごめん」

えーとまずは空母の艦載機何だけどもーサー攻撃機と普通の艦載機九十九爆撃機とか選べるんだけど、まあそこはバランスよく選んでくれればいいからそれと……」

ガガガガガガガ

空母達の目の前にメーサー攻撃車両が止まり中から妖精が数人出てきた

「私達を乗せてください!!!」

39話

そう空母達に言うが言われた空母面々もどうしたらいいか解らずにいた

「艦載機載積めるんだからこのメーサー車も乗せられますよね！4台でいいので乗せてください!!!」

「え、ええ。私達に言われても、…確かに載せれるには載せられますけど。それを決めるのは提督だし…どうしよう」

そう言つて他の空母達に目を向けるが全員が首を横に振つていてお手上げ状態だったがりトルが

「いいんじゃない、乗せても」

「え!!」

「実際に載せてみればいいじゃない。どうなるか」

「ええ、大丈夫なんですか?」

「それを確かめるためでもある、取り敢えず軽空母には艦載機の他にメーサー機二機積んで他の正規空母には4機メーサー機を積んでください」

「り、了解しました」

こうして空母達は何故かメーサー車を積み込み海に出ることになった

— 海 上 —

「はい皆、海上に立ったね、それじゃあまずは普通に自分の艦載機を飛ばしてください」

リトルの号令により自分の艦載機を上げていく空母達

「く、なんか反動が凄いわね」

「ええなにか扱いが難しいです」

「んく?でも私達今日初めてだから余計そう思うんじゃないですか?」

「あく確かに!」

「まあ、練習あるのみ…ですよ!」

「「おー！」」

「はい、おしゃべりはその辺にしといて今度はメーサーを取り出してね」（まあ普通の装備じゃないんだから違和感が出るのは当たり前なんだけどね）

そして空母達がメーサーを意識すると体の周りにメーサーのパラボラが浮いていた（ファンネル見たいに）

「ほおー、これが。これはどうやって使うんでしょう？」

うーんと、と空母達が悩んでいるとメーサーの妖精から

「撃ちたいものを強く思うか目で見て撃ててやればうてますよ」

「ほー何となく解りました！それじゃあさっそく、うーん……ハ！」
ビイイイイイイイ

大鳳が教わった通り実践するとパラボラから光の光線が発射された

「……うわーすごい、すごいです、こうなるんだー」

はしゃぐ大鳳を見て残りの空母達も同じようにしてみると全てのパラボラから光線が出て空へと延びていった

「はあくこれは対空に使えそうやな」

「そうですね、これがあれば色々やれる幅が広がりそうです」

そう言つて空を見れば先程と飛ばした艦載機が同じように光線を出しながら飛んでる姿が目にはいる

「ホンマウチラ来るとこ間違ってるんとちゃうかな」

「う、うーん……」

そうして午前中は艦娘達の艦装の取り扱いと、海上走行の練習をして終わった、そして昼食後

「はいみんなそれぞれじゃあ午後は海に出るよ」

リトルの言葉を聞いて少し間が空き

「また艦装の練習ですか？」

「あー、そっかまだ慣れてないしな」アハハハハ

そんな言葉が舞うなかで

「いいえ違います。実際に外洋に出て深海棲艦と戦ってもらいます」

リトルの言葉に全員が固まる

「……え、ええ!!だってまだそんなに訓練してませんし」

「たがらくいくんじやない、君たちが早く戦力として働いてもらわないと困るんだから」

「それは…そうですけど急すぎませんか?」

「いいのいいのどうせこの辺には深海棲艦居ないんだし少し遠出しな
いといけないから道中?海中?艦装の練習にもなるから」

「この辺にはいないってどこまでいく予定なんですか」

「そりや敵と会うまで」

「弾薬や燃料、修理に必要な資材はどうするんですか?」

「あー、確かに補給艦でなかったからね。でも安心して、ここには毎日
大量の物資を運ぶ達人がいるから……ね、ゴジラ!」

そういつてみんなゴジラを見る

「へ?俺!!」

「うん、だってゴジラだったら何度もドラム缶一杯で燃料弾薬ボーキ
サイト鋼材を持って、何往復もしてるじゃない」

「いや、確かに運んではいるけど、いいのか?」

ゴジラの問いかけに

「いいのいいの、さっ、これで何の問題となくなったね、それじゃあ午
後は外洋へと行きます。あー安心してメカゴジラも来るから」

そこまでリトルがいった時点で何人かの覚悟は決まっていた、生ま
れてからまださほどたっていないがいずれ戦う事になる深海棲艦、
いったいどんなやつらなのか自分達はちゃんと戦えるのか、その不安
を取り除くために今から拳に力が入る

「それじゃあ早速皆海に出て、ゴジラは物資のはいったドラ……今回
は貨物船を引っ張ってきて。陣形はゴジラを中心に前方に駆逐半分
軽巡半分左右に重巡後方に空母と戦艦その更に後ろに残った駆逐と
軽巡で展開して、メカゴジラはその後ろから着いてくるからんじや、
行動開始!」

リトルの号令により艦娘は次々に海へと入っていく、ゴジラは中心
になるので既に沖の方で待機中だ

「何か今から作戦が始まるような緊張感だな」

「まあ、あの子達にとって初めてのことだからね緊張してるんだよ」
「まあ、そんなもんか、所で何だつて急に出ることにしたんだ？」

ゴジラは疑問に思いリトルに聞いてみるとリトルは真剣な顔つきになり

「さつきもゴジラは呼ばれてる気がするつて言つてたでしょ」

「あーうん、今も呼ばれてるような感じはするよ」

「それね、私にも伝わってくるみたいなの」

「マジか！それじゃあこの遠征つて」

「うん、それを確かめに行こうつてこと、もちろん艦娘に万が一が起こつた時に対応するためメカゴジラにもついてきてもらつてるし、仮になにもなければないで実際に深海棲艦と戦つてもらつて経験を積んでもらえばと思つてね」

「うーん、確かに何かあれば俺とメカゴジラで足止めくらいはできるだろうしな、解つた俺も気になつてたから助かるよありがとな♪」

「いいつていいつて」

二人が話していると

「提督、全員配置に着きました」

「よし、それじゃあ全艦微速前進発進」

「二」了解「二」

こうしてゴジラ一行は出港したが

――2時間後――

「はあーやつぱり海を走るのは気持ちいいですね」

「いいから警戒しなさいよ、もう島から離れてるんだからどこから敵が来るか解らないわよ」

「はーい…」

――更に3時間後――

「あのーゴジラ提督、ひとつ質問してと宜しいでしょうか」

「ん？何、何でも聞いて」

「そのく今のところ深海棲艦が一匹も出てきてないんですけど……」

どこまで行く予定なんですか？」

「えっ!? うーんとこの辺のは全部いなくなっちゃったから今日は戦闘はないんじゃないかな?」

「えー! それじゃあ今やってる警戒とかは無駄なんですか!!」

「へ? いやいやいや大切だから、もしかしたらはぐれとか居るかもしれないだろ、そういのにも警戒しないと痛い目を見るからな」

「あっ……そですよ。すいませんでした、でもなんでここには敵が居ないんですか?」

艦娘に聞かれ答えに困るゴジラ、ようやくなんとかギリギリ会話できるとなったのに

『俺が全部倒したからなんだよ♪』何て言ったらまた心の距離が広がってしまうどうすれば……ハッそうだ

「い、いや〜バース島の航空隊とかが近づいてきた深海棲艦は皆殺しだーって言ってたからそのせいなんじゃないかな〜」(汗)

とつさにそんなことを言うと

「えっ! 航空隊の妖精も結構ヤバイんですね…」

「あ、あーまあ普段演習だけだからそういうので発散してるんだよ」

「な、なるほど深いですね(聞が)」

そうこうしているうちに日が沈み辺りが暗くなっていた

「はいそれじゃ今日はここで休みます。ゴジラの持ってきたコンテナに弾薬燃料ボーキが入ってるので妖精さんの指示に従って補給してください」

リトルの指示により艦娘達は補給を開始する。その様子を見て

「はいはい、ちゃんと見張りも立てるようにね、こういう補給中とかは狙われやすいからねーここが戦場だったら皆仲良くお陀仏だからねー」

その言葉を聞き並んでいた艦隊の一部が離れ警戒を始めた

その様子を見ていたゴジラは

「大丈夫かな?」

「まあ初めての航海に初めての戦闘、いくら前世の経験があつたってこの姿じゃまだ慣れないんだか、これから一緒に強くしていこう♪」

「ん、そうだなまだなにもかも初めてなんだもんな、少しずつやっ
ていこう」

「まっ、まずはこのなんだか解らない感覚の正体だね」

「ああ、なにもなければいいんだけどな」

そうしてゴジラとリトルは自分達が進んでいく先の海を見る

40話

「ゴジラ提督ー！」

「ん？何、」

「はい、全員の補給が完了しました」

「お、そうかそうか、じゃあ半分は警戒残りの半分の子は休むようにして明日は5時に出発するから其れも伝えといて」

「はい！了解しました！」

そういつて朝潮は走っていった

「ま、夜の警戒する必要もないんだけどね。この辺の狩尽くしたからな〜…」

ゴジラはそう言つて夜空を眺めた

——次の日——

「ぬあああああああー」

艦娘の一人が声をあげる。

「なによどうしたんのよー！」

「敵は！敵はいつたいつになつたら出てくるんだよ！もう出発して半日以上移動してんだぞ!!」

「どうどう、落ち着いて。この先なにかあるのは確実なんだから」

ゴジラはなんとかなだめようとするが

「ウーだつてよー家からこんな離れてるのに敵の一匹も出てこないだぜ」

更に愚痴をこぼしてると

「はあ…きつと提督は人目のつかない場所で私達全員食べるつもりなんだわ、空はこんなに…青いのに不幸だわ」

「姉様空は曇っていますわ、きつとこの後雷が来て艦橋に当たつて感電すんだわ」

「姉様!!」ダキ

「山城!!」ダキ

そう言って抱き合う不幸姉妹、しかしそれを無視して先を見る

「確かに曇ってきたな……これは」

「うん、ここまで来るとよく感じるよ」

ゴジラとリトルは先にある分厚い雲の場所を見据えるそして

「大鳳来てくれ」

「はい、なんですか？」

「あの分厚い雲がある場所を偵察機で偵察してきてくれないか」

「え？はい解りました。偵察機発艦!!」

大鳳が偵察機をだし雲のところへと目指すと、その先に空は雲におおわれているが海面から巨大な柱が3本立っていた。そしてそこを確認したときに大鳳が見たのは、柱のある場所から更に奥に島がありそこで何かが動いているのを、ここから離れなければと思った瞬間偵察機は落とされてしまった。落とされるときに見た光景は深海棲艦達による対空砲火、さまざまな艦種が居た中で一番目立っていた個体が居た

あれは

「姫級の深海棲艦……」

「大鳳、どうだった？」

「……はあどうだったもなにも前方に敵がいますしかも戦力はこちらが不利、あんな要塞みたいな所無理ですよ。引き返してもつと仲間を増やさないと勝てませんよ」

「そうか、因みに敵はどんなやつだった」

「え、うーん最初見たのは大きな柱の上にヲ級の艦装が着いた柱が3つ、そしてその奥には何かは解りませんが島があつてそこにで何かが居ました。あとは柱の前に敵の艦隊、そしてその艦隊を司令塔らしき姫級が居ました」

「うーん」どゴジラは考えた、これは

「絶対ろくでもないことになりそうだ!!……帰りたい」

「ゴジラ駄目だからね。あんなのが動き始めたらゴジラでしか対処できなくなるし、しかも呼んでるのって間違いなくあれじゃん、絶対そうじゃん行くしかないよー!」

リトルに言われ頭を抱えるゴジラ

「まさか軽い気持ちで来たらとんでもないの出てきたな。はあ、取り敢えずもう少し離れたところで作戦たてよう」

「うーん確かにそうだね、あれはただ突っ込んで勝てる相手じゃないよ」

そう言ってゴジラとリトル達はその場から離れていった

島の後方

「全員聞こえてるね」

ゴジラの前には艦隊が並んでいた

「えー今日の作戦なんだけどまず空母攻撃機を使って制空権の確保、その後俺と駆逐から軽巡、重巡が突撃、んで戦艦は後方から空母の護衛をしつつ此方の支援要請で艦砲射撃で援護してもらおう…っー感じで行こうと思うんだけどどうだろうか？」

「えーと、どうだろうって言われても私達だって初めての戦いなのに、うーん、あつ因みにあの柱は誰が相手するの？」

「そりゃもちろん俺がするしかないな」

「じゃー私達はゴジラ提督に邪魔にならないように周りの敵を倒していけばいいのね」

「んー、まあそうだなもちろん俺の方を手伝っ「そうになると私達は提督を守りながら戦う事になるのね」

「え、？いや別に俺一人でも…「いい！いくらでかくたって生き物なんだから、私達みたくに入渠して怪我がなおる訳じゃないんだから、無理なんかしっちゃ駄目よ!!」

「あつ、はい…」

「あなたがいくら強いといっても向こうは艦砲や魚雷、さらに空からも攻撃してくるんだから気を付けなさいよ！」

「うす、（くうーここまで心配してくれるなんて最高）まあ取り敢えずこんなところかな、因みにメカゴジラは遊撃で危なそうなところに援護にいつてやれ」

「了解しました」

「他に何かあったらいつてくれ」

「はい！」

「なんだ」

「あの、島に蠢いているのはどうするんですか？」

「あーあれねー、うーん解らん」

「はい？」

「正直何が起こるか解らないんだから最初に周りの敵を片付けるって感じだな。その調査もその後だ」

「解りました」

「よし、他にはないな……では明朝攻撃を開始する各員それまで装備の点検と弾薬、燃料の補給をしとくように空母もボーキサイトの補給忘れるなよ、その後は自由にしておいてよしでは解散」

その言葉によって艦娘達は散らばっていく、正直ここまで大事になるとはだれ一人として予想しておらず。全員がパニック寸前だった。

軽い気持ちでせれこそ艦装の練習のつもりで来たはずが敵の基地を発見し、その攻略をすると言う

生まれてきてまだ数日の艦娘達は大いにパニックっていた幸い作戦は明朝それまでに落ち着かなければとそれが作戦開始までに間に合うかどうかは解らない。

だが、皆思う生まれてまだ数日だが自分達が生まれてきた理由が今から示されるんだろうと、深海棲艦を討ち平和のための一歩がいまだされるんだとそう思うと気分が高揚する、作戦開始までまだ後数時間ある、私も少し休んでおこうと思う

明朝

「これより、敵基地攻略作戦を開始します。各艦隊は所定ん位置についてください」

「A隊ゴジラ位置に着いた」

「B隊駆逐、軽巡、重巡位置についたわ」

「C隊戦艦、バッチグーヨ」

「D隊空母配置に着きました」

「E隊メカゴジラとか配置ヨシ」

全体から報告を受けたリトルは

「全艦隊配置に着きました異常ありません。それじゃ行くよゴジラ」

「おう、さつさとやってさつさと帰ろうや」

「そうなればいいけどね……スウー作戦開始!!」

D隊は攻撃機を飛ばして制空権を確保してください」

「了解第一次攻撃隊各艦発艦始め!!」

「了解」

大鳳の号令により他の空母からどんどん発艦していく攻撃機

「ねえ大鳳？」

「なんですか、今は発艦中ですよ」

「そうんですけど何でメーサー攻撃機はあげちゃだめなの？」

「それはもしもの時に残しているんです。まずはこれで様子見です」

「ほおなるほど」

「解ったのなら早く仕事してください！」

空母から続々と飛行機が飛び立っていくなか、それを追うようにゴジラ達AB隊が動いていた

「ちよつと、急に作戦が始まっちゃったけど提督……ゴジラは大丈夫なの？」

ゴジラは生き物なんだから私達の戦いに巻き込まれたら死んじゃうかもしれないよ」

「……確かに、でもこの先にいるやつは俺が相手しないとだめなんだよ。そのために力を貸してくれこれはそのための作戦でもあるんだ」
「大丈夫なんでしょうね？」

「……まあなんとかなるでしょ♪」

「ふぎけないで！あんた仮にも私達の提督なんだから生きて帰ってこ

なかつたら承知しないんだから!!」

そう霞はゴジラに言う

「まあ、自分の部下を信用するのが提督だ！私達の初の実戦派手に飾ってやるぜ！」

「でも司令官は後ろで待機してもらった方がいいんじゃないですか？」

その言葉を聞き全員がゴジラを見る

「確かに、なんで私達の前にいつてるんだ？」

作戦は開始された

41話

作戦が開始された艦隊の前を行くゴジラを見て

「いや、そもそも武装も何も無いじゃない、早く後方に下がってなさいよ。もうすぐ敵の射程内に入るわよ!」

そう言っただけで追いつきゴジラを後ろにした陣形が出来上がるが、直ぐにゴジラは大丈夫だと言っただけで前に出ようとしたが信じてもらえずゴジラの意見は通らなかつた。

そうこうしているうちに攻撃機の攻撃が始まった、遠目から見ても攻撃が成功したのは解ったが目標の柱は小破位で他の柱も同じような結果だった。次の瞬間ヲ級の艦装が咆哮をあげた

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

「くうくうくう。うるさい何なのよ!」

突撃しようとしたAB隊はその咆哮を聞いて止まる、そして朝潮が柱を指差し

「柱の根本、なにか出てきてます!!」

そうして柱の根本から出てくる「何か」を見てみると

「あれは深海棲艦?」

柱の周りから次々と深海棲艦が浮上してきたのだしかもその深海棲艦は全て下半身がコードのような物が大量に繋がっていた。

そしてその中には姫Bの姿もあった

「あれが、深海棲艦。私達の敵……」

「ああそうだ。でも何か変だ皆注意してくれ」

そうしてゴジラ達は深海棲艦の基地へと進軍して行くが

「ちよつともう敵の射程内に入ってるのに敵からの攻撃が少なすぎるわ、何かあるんじゃない?」

敵からの攻撃は少なく散漫とした攻撃しか返ってこないのだ

「確かにおかしい。本来ならこつちも空も大乱闘になってもおかしくないのに一体何を考えてるんだ?」

「ナカマ」

「ん?今何か言ったか?」

「いや、言っていないけど」

「ナカマが来々、ナカマが来た」

「ナカマがきたナカマが来たナカマが来たナカマが来た」

深海棲艦からの攻撃は完全に止み、バース島の面々もどうしたらいいか解らずに攻撃をやめていた、そして



一際大きな咆哮が鳴り響いた

その方向を見ると深海棲艦の基地と思われる島の方から聞こえていた。全員がその島を見ていると島の一部が動きだし盛り上がりつつ、よく見るとそれは触手でどんどん増えていき形を作っていくそしてその形を見てゴジラは

「あれはビオランテ……えっでもなんで……」

と驚愕していた、自分の知っている限りビオランテはゴジラ細胞とバラそして人間の細胞を掛け合わせた人為的に作られた怪獣だったはず。

じゃあいつ俺の細胞が取られたんだ？そして何と掛け合わせたんだ、仲間って言うてるのは俺に対して言うてるんだとしたらやっぱり最近の呼ばれてるような感じはこいつのせいって事だよな、うーん会話できないのが……ん？会話

「リトル！」

「なに？」

「あいつに俺の遺伝子とか入ってたらリトルを通して会話とか出来るんじゃないか？」

「え！あいつに、うーんまあ多分大丈夫だと思うけど」

「解ったそれがわかれば十分だ」

そう言っってゴジラはビオランテ本体へと進んでいく

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ、私達はどうすればいいのよ！」

「あ、忘れてた取り敢えず下がって様子を見ててくれ」

「様子を見ててくれて本当は大丈夫なんでしょよね」

B 隊の皆は心配そうに見てくるがそれをゴジラは

「うーん残念ながら大丈夫にはならないだろうな、だからいつでも攻撃できるようにして自分達が優位に戦えるような場所を陣取るんだ」

「……解ったわ、そのくで、ゴジラはどうするのよ」

「俺はあいつと話してうまくいけば戦わずにすむけど多分戦いにはなる……」

「じゃあ私達も一緒にいった方がいいじゃない」

うんうんとB 隊の艦娘達は首を降る

「いや、それだと何かあったとき守れないしそこまで気を使えなくなるから、下がって後方の敵を倒してくれた方がいいから」

「な！……くつ解ったでもあんたも無理するんじゃないわよ」

「まあ善処するよ、取り敢えず交渉失敗したら咆哮あげるからそれを合図に攻撃再開して」

「……………解ったわ」

「よろしく」

そう言ってゴジラはビオランテ本体へと進んでいった

その間の攻撃はなくすんなりと本体の近くまで行くことができた、そしてゴジラとビオランテは対面した

「あ、あーそっちは俺の声聞こえてるのか？」

「キコエテイル」

「あーならよかった取り敢えず行きなり攻撃したことを謝らせてほしい」

「何故だ？」

「えっいやそりゃ攻撃しちゃったからとしか」

「私二ハ一切効いていなかった、損害がアツタトコロもう直っているからモンダイナイ」

「そうかならよかった、それでここからが本題なんだが俺たちと戦う意思はあるか？」

「？ナゼだ、我々はナカマだ争う必要はないだろう」

「いやまずそこから勘違いしている俺とお前は仲間ではない」

ゴジラの発言にビオランテが反応した

「仲間ではないのではナゼコンナニモお互いが呼び会うんだ、ワタシハお前が近づいてくるにつれてとても安心感がアツタワタシ以外のナカマが近くにいると言う安心感が、それをお前は気のせいだと言うのか？」

「ん、うーまあ確かに近づいていくにつれて何かに呼ばれている感じはあったが、それが仲間からとは思わなかったよ」

「そうか、では改めてニンシキしてほしいワタシとお前は仲間だこの世界でたった二人の…仲間だ」

ビオランテの言葉を聞いて考えるゴジラ

「それじゃあお前はその後どうするつもりなんだ？」

「この後。決まっている、艦娘や人間共を根絶やしにし私を裏切った深海棲艦共も殺し尽くしてやるのさ」

その答えを聞いたゴジラは

「あーそう、じゃあ俺はあんたとは仲間にはなれないな」

ゴジラの言葉を聞いてビオランテは驚いたが直ぐに冷静になり

「アーそうか、お前の部下のことか安心しろ、そいつらは特別に除外しといてやるまあ、裏切ったら容赦しないがなハッハッハッハ」

これでもう気にする必要ないだろうと言わんばかりに笑い声をあげるビオランテ

「アー無理！」

「ハハハ…：ん、今なんと言った？」

「無理絶対無理お前と仲間とか死んでも無理だな、部下を残してやるって上から目線って言うのもムカつくし。確かに自分とその周りのやつが無事ならそれでいいやつて思ってるけど、俺別に滅ぼそうとかしてる訳じゃないんで」

「ほお、ではどうするのだ言つとくがこの周りは既に私が取り込んだ深海棲艦や分体から攻撃機をだし貴様を殺す用意もできているんだぞ」

「はあー、あっそそれがどうした、お前はもう俺の間合いに入ってるんだぞ」

う!!」っ!!」

「状況が動き出したんなら直ぐに決断しろ今こうしているうちにも状況は変わってるんだ。ましてや訳の解らない奴相手に出し惜しみしてる場合か、出せる奴は出した方がいいじゃねえか。しかも俺達は最新鋭の機体だ遊ばせとく理由なんか無いだろう!」

そう言っつて妖精は黙り、大鳳からの命令を待つ

「……………解りました。ではメーサー攻撃機は直ちに発艦し前線の支援に向かっつてください」

「了解!」

ニヤリ

そう言っつて妖精達は大鳳のボウガンへと入っつていく全員が入るのを確認した大鳳はボウガンを構え引き金を引いた

「皆さんをお願いしますよ!!」ガシユガシユガシユ

射出された矢は直ぐにメーサー攻撃機に戻り更に光、本来の大きさに戻り飛んでいった

大鳳はそれを唾然とみていたが直ぐにもとに戻り次々とメーサー攻撃機を発艦させていった
が

「ひゃっはー! 実戦だ実戦だー!!」

「死にてえ奴はどこにいる、ぶっ殺してやる!!」

「戦争だ我らにはそれが必要なのだー!!」

飛んでいったメーサー攻撃隊の残した台詞を聞いて

「だ、大丈夫よね」

とてつもない不安が大鳳を襲っていた!

42話

前線では巨大なヲ級の艦装から飛び立った巨大な攻撃機がバース島の艦娘達に襲い掛かっていた

「きゃあーもう、攻撃が激しすぎる!!味方の航空機は何やってるのよ!!」

「正面と空から攻撃なんかもう少し持ちこたられれば……」

「なんとかってなんとかなるの!さつきから攻撃しても落ちやしない!!」

「しかも正面の敵も増えてきてる様にも見えるんだけど……」

ドガン「いったい!!もうさつきから痛いじゃないよの!!」

B部隊は深海棲艦と交戦状態なつてからは防戦一方だった。正面からは深海棲艦からの砲撃、上空からは巨大な攻撃機からの攻撃を受けていた。

味方の攻撃機がなんとか応戦していたが攻撃が効いておらず空戦でも防戦の一方だった

しかし

ドガン「直撃だど!この程度で吾輩は沈まぬ!」

ドガガガ「イタタタ!アカン!こらアカンで!」

ガキン「うお!被弾くま!」

バース島で改良された装甲のお陰で攻撃が当たっても大したダメージは入ってはいなかった。が、今回が初の実戦であり敵が大量の深海棲艦と怪獣(深海棲艦の基地と思ってる)を相手にして、自分達を押されている負けるかもという思いから焦りだしていた。

「このままじゃ……」

「直上!!　　また爆撃が来るぞ!!」

艦隊の上空から巨大な攻撃機が編隊を組んで爆弾を一斉に落とすのが見えた流石にこの量は無理だと衝撃に備えるB隊

ビイイイイイイ

と言う音がしたあと上空で爆発が起こる

「なっ、なんだ」

「あれみてください敵の大型の攻撃機を攻撃してますよー」

「じゃああれは、仲間の攻撃機か…」

『こちらD隊所属のメーサー攻撃部隊だ、B隊の援護に来た、空はこちらに任せろ』

「やった本当に味方なんだか『ヒヤッハー！実戦だー！ー！全員ぼこぼこにしてやんよお!!』……!!」

『これから！毎日！船を！焼こーぜー!!』

『敵はどこだ！一匹残らず殲滅してやる!!』

「あれ、味方なんだよな？」

「そのはずです」(汗)

メーサー攻撃機が着いてからは空ではどんどん敵機が減っていったメーサー攻撃の一撃で大型戦闘機を落とし制空権をとっていった

「これで目の前の深海棲艦集中できる、ここから反撃だ!!」

「「応!!」」

こうして体勢を整えるB隊に更に

「おまたせしましたー!」

そう言つて後ろから来たのはメカゴジラだった

「メカゴジラさん!どうしてここに?」

「いや、ようやく後方に抜けようとする敵攻撃機がやんだんでこっちに援護に来たんですよ」

実はメカゴジラは前線を抜けて後方の味方を攻撃しようとしていた攻撃機を何気に一体で全て迎撃していたのであった

「ほんとですかこれでここもどうにかできそうですね」

「ええ、でも敵は三ヶ所に拠点を置いてるんでそこを潰さないとなの大規模戦闘機はで続けるかもしれません」

そこで部隊を二に別けて二ヶ所を同時に攻撃します」

「えっでも私たちだけで出来ますか?」

そう不安を漏らすとメカゴジラは

「出来る出来ないじゃないやるんです、今私たちがやらなくては今後もっと大きな被害が出るかもしれないかもしれません。」

「だから今私たちがやるんです」

「メカゴジラ…よし解ったよやってやるやってやるよ!!」

「そう言つて気合い入れ直す艦娘達」

「よし、大丈夫そうですねではまず私と攻撃に参加する人は誰ですか？」

「最初は全員が手上げたがそれは却下され結局メカゴジラがメンバーを決めた」

「えー、五十鈴、球磨、多摩、霞、荒潮、加古、古鷹、青葉が一緒に来てください。残りのメンバーはここにいるメーサー攻撃機と後方からの艦砲射撃を駆使して柱の破壊をしてください」

「了解しました!」

「こうしてB隊は二つに別れて攻撃を開始することが決定し今は別れて突撃の用意をしている」

「はあ、今度は突撃ですか、今の私たちにあれは倒せるんでしょうか」「ごちやごちやいってんなよ、ようやく空の方も片付いてきたんだ。なんとかなるさ、いや何とかするのさ!」

「麻耶さん…はいがんばりましょう!!」

「そう言つて突撃の用意する艦娘達の一人が」

「ちよつ、あれなんですかね?!」

「ああ、あれってなんだ…なんだありやこつち来てるぞ!!総員待避、待避ー!!」

「どうはあはああああ」ドッパーーーン

「きやあー」ザバー

「うわあー」ザバー

突如降ってきた物の衝撃で高波が発生したがなんとか踏ん張って耐えた艦娘達、何かが落ちたところをみると海面からゴジラが現れた

「うう、思ったより飛ばされたなー」

「えっ！て、提督!!」

——時間は少し遡って——

ゴジラとビオランテの戦いは、無数の触手がゴジラに襲いかかりゴジラがそれを熱線で尻ぎ払っていた

(くそ、さつきから触手が鬱陶しくて近づけない)

「どうしたどうしたそんなんじや俺は捕まえられないぜ」

そう言っつてゴジラはビオランテを挑発するが

「クハハハ、もう既に捕まってることさえ気づかないとはな!!」

ビオランテがそう言うと同時にゴジラの周りの海面大きく揺らぐと、更に大量の触手がゴジラを襲いゴジラに巻き付いた

「なっ！ぐおおお」

急に増えた触手に対応できずに縛り上げられたゴジラ

「どうだ動けないだろ。更にこうすれば!!」

振りほどこうと暴れるゴジラの体が触手によって持ち上げられ海面から離れていった

「ハハハ流石に重いな、これで身動きがとれなくなっただろ」

そう勝ち誇ったように喋るビオランテ

「クッ！こんなんどうってこと無いね、喰らいやがれ!!」ゴオオオオオ

ゴジラは何とかビオランテに熱線を放つと熱戦はビオランテに当たり爆発した

「グアアアアア!!」

体が爆発し苦しむビオランテはたまらず捕まえていたゴジラを思いつきり投げ飛ばし無理矢理距離を作った。

投げ飛ばされたゴジラはかなりの距離を飛ばされ

「うおおああああ……おぶう!!」ドッパーン

着水したゴジラはどこまで飛ばされたか周りを見てみると

「うう、思ったより飛ばされたなどこだどこ」

「し、司令官!? 大丈夫ですか?」

「え!? 朝潮か?、こんなところまで飛ばされたのか。俺は大丈夫だ今どんな状況だ?」

「あっはい現在私達は部隊を別けて柱に対して攻撃を開始してました」

「ん? いましたって?」

「いえ、司令官が飛んできたので。今はこの場の確保を優先してます」
「マジか、俺のせいかなまなかつた。別れた部隊はどうなってるんだ?」

「そちらはメカゴジラさんと攻撃を開始してます。」

説明を聞いたゴジラは『ニツ』と笑い艦隊に指示を出す

「よーし、ならこっちもさっさと攻撃し始めないと。こっちの艦隊は俺の後ろから着いてこい」

それだけ言うゴジラは柱に向かい進み始める

「えっちよつと司令官、それだけですか!? 司令官!.....もおー行くしかない!! 突撃します!」

そう言つてゴジラの後を追う朝潮達だが目の前には柱を守るように展開している深海棲艦達が居た

「本当にあれに突っ込むんですか、まだ上空からも狙われてるんですよ」

「おう、皆は後から上空の敵機の相手してくれ」

「相手してくれて言われても。ああちよつと待つてくださいよ!」

文句のいい終える前に前進し続け、そして敵の射程内に入ると凄まじい量の砲弾がゴジラを襲った。その状況を見て

「司令官! 引いてください危険です!!」

そう言うと同時にゴジラの背鰭が光始める、そしてゴジラは熱線を吐き深海棲艦達を風ぎ払い柱を守っていた艦隊はそのほとんどが姿を消した

「.....は?」

ゴジラの後でこの光景を見ていた艦隊は目を丸くし固まっていた。その中で一番早く正気を取り戻した霞が

「ちよ、ちよつと。今のは一体なんなのよ……」

「ん？ 今のは俺の必殺技の放射熱線だ」キリッ

「え？あ、そ、そうなの……ま、まあ体もどこか怪我してる様子無
さそうだし……」

「おう！ あれ位なら余裕だね♪」

そこまで聞いて霞はため息をはく

「はあ、心配して損したわ。まさかこんなに強いなんて」

「ハハハ、心配してくれてありがとな、でもおしゃべりしてる暇は余り
無さそうだ。向こうはどんどん出てきてる」

「？何を言ってる……!!」

ゴジラに言われ柱の方を見ると先程ゴジラが尻ぎ払った筈の深海
棲艦が海から這い出てきていた

「な、なんで！ さっき確かに……」

そう呟きながら観察すると海の中から触手が集まり深海棲艦の姿
へと変わり先程お同じようにゴジラたちの前に立ちはだかっていた

43話

「なによあれ、深海棲艦ってああやって生まれくるわけ…」

次々と這い出てくる深海棲艦を見て呆然としていると

「うーん、そうなのかもしれないな、でもやることは決まったな」

「どうするのよ?」

「出てくる元を叩くんだよ、多分あの柱はあいつらの元になってるだろうからさっさと潰すぞ」

ゴジラはそう言うのと更に熱線を吐き、出てきた深海棲艦を尻ぎ払い柱を無防備にする

「よし、じゃあ全員で一斉に攻撃するぞ」クルリ

ゴジラがそう言うて艦娘に目を向けると

「こっちは空の敵で手が離せません!」ババババ

「ぬおおお、でかいのが来るクマー、そっちに構ってる暇無いクマーー!!」ババババ

「やるなら早くやってくださいー!」ババババ

「……あっはい」

空からの敵機にてんやわんやしている艦隊に怒られゴジラは柱に熱線を放った、一回では倒しきれずに数回熱線を当て続けた柱は爆発炎上しその機能を停止させた。

柱を破壊したせいでもた這い出てきていた深海棲艦や敵の戦闘機は機能を停止し落ちて崩れていった

「成る程やつぱり元を断てばそつから出てきた奴等は崩れてくのか。取り敢えず周りの柱を優先的に潰すぞ、他の艦隊の状況は?」

「は、はい今確認します。………はい、はい解りました。メカゴジラの方はあと少しで倒すことが出来るそうです、それとD隊からメーサー攻撃機が増援としてもう少しで着くそうです。なので残りの柱は後1つの筈です」

「お、そうかこれで空の敵に注意しなくてもよくなるぞ。おっちようど来たみたいだな」

そう言うて空を見るとまだ残ってた敵の航空機に突っ込んで行く

メーサー攻撃機が見えた……しかし

「ヒヤッハー敵はどこだよ、全員で消毒してやるぜー！」

「くそが！雑兵だらけかよこは！」

「マツハで蜂の巣にしてしてやんよー!!」

妖精さん達のテンションがおかしな事になってるのは何故なんだ

「……まあ、これでもう大丈夫だろう（妖精さんもストレス溜まつてるのかな?）」

「メカゴジラさんもこっちに来てくれるそうです」

「そうか、それじゃあ俺はあいつらの本体へ向かうから皆は残りの柱を倒してくれ」

「ちよつと一人で向かう気なのー！」

そう言つてゴジラを引き留める

「そのつもりだけど?」

「なんで、私達じゃ役に立たないから」

「……そうだよ、あの柱の本体のビオランテとの戦闘になったら艦娘じゃあやられるだけだ。だから柱を倒したらメーサー攻撃機とメカゴジラだけが戦闘に参加してくれ、他の子達は後方で警戒していてくれ」

「嫌よ、離れた場所からでも砲撃くらい出来るはずよ役に立って見せるからー！」

そう言われ艦娘達を見るが全員が最後まで戦う意思を見せた

「それじゃあ柱を倒したら此方の援護に来てくれ、ただし無理はするなよ無理は」

「解ったわ!!まかせて！」

そうして艦隊とゴジラは別れた

「それじゃあさっさと柱を倒しにいくわよー！」

そしてB隊は最後の柱とそれを守る深海棲艦達と対峙する

「よし、じゃあ指揮は私がとるわ」

「鳥海なんか考えがあるのか?」

「ええ大丈夫よ、私の計算によればこの戦いは私達の勝ちの間違いないわ」

「え〜本当かよ」

「いいから、ではいきますよ。全艦砲撃用意、最初は敵の守備隊を目標にして……砲撃開始!!」

B隊と柱の戦いが始まった

両者の砲撃、雷撃が交差し互いに砲弾の雨を降らすがこちらは回避行動を取るが深海棲艦は回避行動をとることなく攻撃を受けていた。それを見た鳥海は

「やっぱり……全艦攻撃目標を敵守備隊から柱の根本へ変更して」

指示を出すとすぐさま柱の根本へと攻撃が開始された。そして、その攻撃を深海棲艦は今度は自らを盾にして柱を守るように動き出した

「やっぱり。駆逐艦は敵守備隊に攻撃を集中して敵を抑えてください、軽巡と重巡で柱を攻撃します！後方のC、D隊にも攻撃要請を、これで決めます！」

「了解」

そうして駆逐艦の攻撃により敵の守備隊の注意をそらしその間に軽巡重巡により柱への直接攻撃が開始された。

前線から攻撃要請を受けた戦艦からの長距離からの艦砲射撃と、空からの攻撃機による攻撃が一斉に柱に降り注いだ。その結果柱根本は大きく削れ柱は徐々に傾いていく、その間も攻撃は絶え間なく続けられあと一歩で柱を倒せそうな時、柱のヲ級の艀装から新たに大型機攻撃機が大量に飛び立った、その光景を見た鳥海は

「上空敵機！対空戦用意！」

そう叫ぶが敵機にあつという間に近づかれ、敵の爆撃や機銃を受けた。いくらバース島の艦娘とはいえ連戦による損耗によって被害が増えていく、味方の航空機もメーサー攻撃機が対応しているが敵の数が多く艦娘達の援護が出来るほどの数が居なかった

「ぐう、んだよう!!」ドドドドド

なんとか応戦するがこちらの機銃では威力が足らず余り効いていなかった

「おい！鳥海どうすんだよ、このままじゃまた柱が治っちゃまうぞ」

「クツ！なんとか柱が立たないように攻撃を集中させて」

「集中つたつて上からこんなに狙われてちや無理だ！」

「もうちよつと、もうちよつとなのに!!」

鳥海が叫んだ瞬間敵の大型機が一気大量のメーサー攻撃により落ちていった

「え？」

鳥海達が見上げると続々とメーサー攻撃機の増援が戦闘を開始していた、それを見た艦娘達は歓喜する

「やった！増援だこれで：「ゴオオオオオ」うわつぶ、何だ！」

更に艦隊の上をメカゴジラが通り越し艦隊の前に降り立つ、そして上空の敵に向かいビームキャノンを放ちつつ更に前方へメガバスター放ち敵の守備体を風ぎ払っていった

「すげえ…」

あつという間に上空と海上の敵を一掃していくメカゴジラを見て、呆気にとられる艦娘達尻目にメカゴジラは完全に無防備になった柱に向かい全武装を使いあつという間に柱を破壊した。柱を破壊したメカゴジラ艦隊に近づき

「いやー、遅くなりました。最初どう倒せばいいから解らずに雑魚ばかり相手にして倒すのが遅くなってしまつて。倒した後補給に戻つたら余り減つてなくて補給するまでの時間の方が掛かつてしまひ此方に来るのが遅くなってしまいました。決して初の実戦にテンション上がって必要以上に戦闘を繰り返してたわけじゃありません、ええそんなことありません。なつ二人とも」

「ありません、ありません!!」ブンブン

そう言い訳するメカゴジラの妖精達、その言い訳を聞き唾然のする艦娘達だが摩耶と鳥海が

《big》「お前らふざけるー!!!」《big》

二人の叫びが海に木霊した。そして

「よおビオランテ、戻ってきたぞこんちくしょーが」

ゴジラは再度ビオランテの前に居た

「戻ってくるとは思っていたがずいぶん早かったな」

「おう、俺の仲間がああ邪魔な分体を破壊してくれたからな」

「仲間：クク仲間だと、アハハハハ、面白い事を言うなあ」

「ああん、何がおかしいか聞いてやろうじゃねえか！」

「仲間などいいではないか!!」

「!!」

「私を利用し、私が倒れるのを何もせずただ眺めているだけ…そんなのが仲間のはずがない！ワタシハアノ女に、姫Aに復讐するためにこの力を手に入れた！、貴様もそのうち裏切られる。私のようにな」

「ハツ家に限って「それは無いなんて言うんじゃないだろうな」………」

「奴等と自分を見比べてみる。余りにも違うではないか、そんな異質な関係が続くと思うか？」

「それは、…やってみないと解んないだろ」

「ハハハ、その程度でしか考えてないのかこれでは時間の無駄だな」

「何だと「先程の攻撃は効いたよ、だから私もやり返さなくてはな」…何？」

ビオランテがそう言うのと周りの海面が大きくうねる

「さあ、今度はこっちからいくぞ………」ガパア

2体の怪獣の戦いが始まった

44話

ゴジラはビオランテが大きく口を開けるのを見て

「溶解液かならこっちは熱線で『バシューー』…え？」

ゴジラが溶解液を熱線で応戦しようとした瞬間ゴジラの横を光線が横切る

「は？」

ゴジラは光線が横切った跡を見る

（あ、あれー。ビオランテって光線なんか出したっけー？い、いやいや落ちて着け威力的にはそんな大したこと無いだろ…よし）

「ほ、ほーんお前もそそんな事出来たんだな、だが俺には効かないぜ！！」

「ほお、ならこれならどうだ？」

ビオランテは触手を無数の触手をゴジラに向ける

「これならどうだ」

それを見たゴジラは

「……マジで？」

次の瞬間ビオランテと触手から光線がゴジラを襲う

「ぐおあああ…、これは!!」

容赦無く放たれる光線に耐えるゴジラ

「ぐう、これは水圧カッター、ヤバいなんとか耐えられたがもう少し威力があつたらヤバかった、迂闊に距離を詰められなくなったぞ。……は！ここにあいつらが来たら大変なことになる！」

ゴジラはここに艦隊が来た時の想像が頭に過り直ぐに艦隊に連絡をいれる

「何どうし』お前ら絶対こっち来るな!!』!?は、はあいきなり何よ、さっき約束したじゃない！こっちは約束どおりあの柱ぶつ飛ばしたんだからね！今からそっちに向かうわ」

『何!?!もう倒したのか?…でもすまないがこっちにぐばあは!!』

「え!?!ちよつとどうしたのよ!」

『ぐう、すまん今戦ってつてこのゴオオオオええい鬱陶しい。悪い

がもう切る、来るなよ絶対来るなよ!」

「えつちよつとゴジラ! ねえゴジラ!」

通信が切れただ事ではない雰囲気全員が顔を会わせる

「な、なあ私達この後どう動けばいいんだ?」

「え!? それは…提督はああは言っただけど押されてる感じだったし急いで救援に向かった方がいいはずなんだけど……………」

「そうよ! 押されてるんだったら急いで助けに向かった方がいいに決まってるわ!」

そう言つて移動しようとする霞に朝潮が

「でも司令官が苦戦するような相手に私達が行つて何が出来るんでしょう?」

「うっ……………! そうよこつちにはメカゴジラがいるんだがらメカゴジラと向かえば」

「それだったらメカゴジラだけ向かわせた方がよくないかクマ」

「私達の攻撃は余り効いてる感じしなかったしにや」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………では私達はここで待機してメカゴジラだけ救援に向かつてもらうと言つてことですか?」

「それが。最善かと……………」

そう言つて俯く艦娘達。そこに

「へーイ! 話は全部聞かせてもらいまマスター」

「遅くなつてごめんなさい。C艦隊D艦隊、B艦隊と合流しました」

後方にいたCD艦隊が合流した

「先程の提督との通信や皆の会話は聞いてました。確かに提督が苦戦するような敵ですが私達にもまだ出来ることはある筈です」

大鳳がそう言つて今度は金剛が

「フフーン、私達に出来ることソレはー、霧島!」

「ハイお姉さま、艦隊の頭脳であるこの私霧島が考えた作戦があります」

「作戦!!」

「ステイ、ステイ。落ち着くネ、サー霧島説明を！」

「はい。といつても先程までやってたことをやるだけなんですけどね
！」ドヤア

「は？」

「what!」

「ど、どういうことですか？」

「いえ、私達が前に出てきたんですから先程柱と戦ったときのよう
にC隊の私達が遠距離攻撃を、B隊に砲撃位置の指定、近づけなければ
私達CD隊の護衛D隊は攻撃機による攻撃で提督の援護、ソレで相手
をボコボコにすれば私達の勝利です!!」

霧島が言い切つてから数秒の沈黙が流れた

「確かにそうですよ私達が近くで戦わなくてもいいって

、提督も言つてましたし別に最初から問題無かつたんじゃないです
か。そうと決まれば急いで行動しますよ!!」

そう言つて合流した艦隊+メカゴジラは移動を開始した

「アハハハハ、皆元気になってよかつたヨー」

「そうですね、まあここであのまま待機と言われても私達は動きまし
たけどね」

「yes! 私達も後方で撃つてるよりも前線で戦いたいですからネー
♪」

「ええ、航空機で全線の様子は解つてましたけど、こう言つてはなん
ですがやはり退屈でしたからね」

「もつと暴れたい!!」ネー!!」

意気揚々と進んでいく二人の後ろで

「山城聞いた、私達あんなバトルジャンキーの居るところに来ちゃつ
たのよ…」

「ええ姉様、きつと」お前ちよつとあそこの奴等蹴散らしてこい」つて
一番最初に突撃させられるんだわ」

「……不幸だわ」

そう言つて艦隊に着いていく姉妹の姿があつた。

そして、しばらく進むと徐々にゴジラとビオランテの戦いが見えてきた

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」バシューーバシューー

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」ゴオオオオオオ

2体の巨大な怪獣は互いに距離を取り離れた場所から攻撃しあっていた、その戦いを見た艦隊の艦娘達は先程の熱が覚めていくのが解った。あの戦いの中に自分達が本当に入っていくのかと思うと全員が震えていた

「皆いいわね次にゴジラがビームを出したらソレに合わせて攻撃するわよ」

「「応!!」」

全員が震えながらも直ぐに攻撃できるようにして様子を見ていると

「ああ!!」

一人が声をあげゴジラの方を指差すとゴジラがビオランテの大量の触手がゴジラの体に巻き付きゴジラを持ち上げていた。

そしてビオランテはゴジラを目の前まで持つて行く、ソレを見て「全艦攻撃開始!・ゴジラを縛っている触手を優先的に攻撃してください!!」

大鳳から攻撃開始の命令を受け各艦は一斉に攻撃を始める、そしてその攻撃によりゴジラを拘束していた触手はどんどんその数を減らすのが完全に取り除けないでいた。

それどころか更に触手を増やし壁のようにして砲撃を止めている「くそーこれじゃあ攻撃が通らない!」

「任せてくださいー!」

「!!」

そういったのはメカゴジラだった、メカゴジラは全武装を使い壁と

「ぐううおああああー！！！！」ドゴーン

ビオランテは大爆発を起こして全ての触手、深海棲艦、大型戦闘機は機能が停止した。だかその後不思議なことが起こった。全てが燃え、灰になっていくなかその灰が淡い紫色の光の玉になって空へと昇っていった。それはビオランテを中心にその現象が起き、ゴジラ達は困惑する

『提督これは一体何が起きていますか？ ビオランテは倒したんじゃないんですか！』

「ああ、倒したはずだ、でもこれって…」

『これってやっぱり知ってるんですか？ 提督、聞いてますか提督！ちよつと!!』

ゴジラは艦娘達からの無線を無視して空に上がる紫に光る玉を眺める

「これってビオランテの最後の粒子だよな、確か劇中ではここで沢○さんの顔が出てきたっけ、まあ無いだろうけど元になった奴の顔が出てきたりしてな」

そんなことを思っていたがバカらしくなりこの戦いを共に乗りきった自分の艦隊の艦娘達に目を移す

「オーイ皆大丈夫かー」

「ウラメシヤ」

「ん？」

「提督！今起きてる現象はなんなんですか!？」

「うえ！いや俺に聞かれても、ただ倒したからそうだったっただけだと思うぞ」

「本当に！ 本当に！ 倒したんですよ!!」

「あ、ああそのはずだ」

その答えを聞いた艦娘達は一斉に歓喜の声をあげた

45話

「やったー勝ったー!」

「私達の初勝利だー!!」

泣く者や抱き合う者、その場にしゃがみこんで泣いている者。皆それぞれに戦いが終わったことに安堵し様々な形で喜んでいた。そんな時

『コツ……チ』

「ん?」

「おい、今誰か俺に何か言ったか?」

ゴジラは周りを見渡すが誰もゴジラの方を見ていなかった

「…?、なありトルさつきなんか言ったか?」

「えっ?私は何も言ってないよ」

「ん?じゃあ気のせい『コツ…チ…だ』また!」

「うん、今のは私にも聞こえた!」

「此方って言ってたな」

ゴジラはその声にしたがって移動すると、そこはビオランテの本体がいた場所だった

『ココ……コ……コ……だ……よ』

「ココだったって、瓦礫しかないぞ」

ゴジラは周りを眺めていると、1ヶ所だけうつすらと光る場所があった。ゴジラはそこへ行き光っている場所の瓦礫を退かしていくと其処には2メートル位の紫の玉があった。ゴジラはソレを取ろうとすると玉は点滅し始めがゴジラが手に取るとその点滅はゆっくりと光るようになった

「ねえ、これってもしかして卵?……どうするのよ、これってビオランテの卵じゃ」

「よし連れて帰るぞ!」

「えっ!?どうしたの、連れて帰るのはいいけど即決だったね」

「あ、ああうんなんかこの卵見ると守らなきゃって思ってたな」

「ふーん、まあゴジラには任せるけど皆にはどう説明するの?」

「そのまま説明するぞ」

「なんて？」

「拾ったって」

「は？それだけ、本気でソレで行けると思ってるの？」

「行ける！文句も言わせない！」

「あー、まあほどほどにね」

リトルはあきれたように言ったが、もちろんこの後艦娘達は納得しないのだがゴジラが絶対に連れて帰ると駄々をこね渋々納得せざる終えなくなる。

そして現在、ビオランテ（深海棲艦の基地）の内部の制圧を行っているが元々あった基地はビオランテに制圧され吸収されてしまったのでビオランテが消滅した時に一緒に消滅してしまったので特に得られるものはなかったが、これでこの海域はゴジラ達が解放したことになったのだった

「どうする？」

「どうするって何を？」

「ココだよココ、今現在私達の戦力じゃココに回せるほどの戦力はないんだよ。第一、勢力を拡大する気無いんだから持っててもしょうがないでしょ？」

「うーん、でもこのままにしたらまた深海棲艦の拠点にされちゃうんじゃないか？」

ゴジラとリトルは向かい合い

「どうしようか？」

「どうしました？」

そこに現れたのはメカゴジラだった

「いや、ココの扱いについてな。うちの拠点にするにしてもちよつと遠いし、だからといってこのまま放置するのもなーって考えてたんだよ」

「あーなるほど、…別に私だったらココの管理くらいできますよ」

「え!?メカゴジラが！うーんでもメカゴジラはバース島の守りの要なんだぞ。ここに駐屯されるとなー」

「いや、別に私飛べるんですからバース島からこの場所位の距離くらいだったらそんな時間かかりませんよ」

「あ、あーそっか飛べるもんな、しかもマツハで。じゃあお願いしちゃおうかな、とりあえず今回持ってきた残りの物資を置いてって一回皆で帰って修理したら今度は物資と防衛用の兵器をいくつか持って来てから管理の仕事に入ってくれ」

「了解しました」

こうしてゴジラはバース島支部（仮）を手に入れた。

「でもどーしようね」

「なにが？」

「いや、ここを第2基地にしてもなあって。……コンビニでも建てとく？」

「なんでコンビニ!?!便利だけどそっちの方が意味わかんないよ……」

「じゃあ学園を作って名前をアズー「ソレはマジでヤヤメロ」……あっはい」

「ん、んーとりあえず整地して倉庫的な所にしとこうか」

「まあ、ゴジラがそうするって言うんなら……」

「?、リトルは何かあるのか?」

「うーん、ゴジラはさ、海域解放とかする気あるの?」

「無い!」

「だよねー。じゃあ倉庫がわりにしとけばいいんじゃない、後は一応艦娘達にも聞いてみれば?」

「あーソレもそうだな聞いてみるよ」

ゴジラは勝利の余韻に浸ってる艦娘達の元へ行く

「おい、ちよつと皆集まってくれ」

ゴジラに呼ばれ集まってくる艦娘達

「集まったな」

「どうしたの?急に集まれたなんて」

「いや、制圧したこの場所の扱いなんだけど。どうする?」

「?どうするって私達の管理下になるんだから前線基地になるんじゃないの?」

その言葉を聞いてゴジラは顔を背ける

「どうしたのよ?」

「いやー、そのー」

「なんやハッキリせんものー、しゃべりたいことあったらしゃんと喋りや」

他の艦娘もゴジラの態度にしびれを切らして問いかける

「何か問題があるんですか?」

「いや、無いと言うか有ると言うかーそのー」

「ハッキリ喋れよ!あんたが提督なんだぜ!」

「!...うーんその俺としては別に勢力を拡大するつもりも海域解放とか考えてないから管理するのは最低限だけで。後はそのままにしとこうかなって考えてるんだよ」

その言葉に艦娘一同か固まる

「「は?」」

「じゃあなに、必死に解放したココは別に必要なかったってこと?」

「いやー、別に必要ないって訳でもないんだが...」

「じゃあなんなのよ。初めて私達で勝ち取った場所よ!そこが必要ありませんでしたなんて、...じゃあ私達は何のために戦ったのよ!!」

「え、実戦経験を積ませるためだけだ」

ゴジラに言われて全員が「ハッ!」とする確かに自分達は海域を解放した。しかし元は自分達の経験を積むために戦いをしに来ただけでその結果たまたま深海棲艦の基地を見つけ戦闘になっただけであるつまり...予想外!

「えつと因みに提督はどうしようとしてるんですか?」

朝潮が手を上げゴジラに聞く

「俺としてはメカゴジラだったらココの管理が出来るらしいから暫くはココを倉庫にして、そのうち他の艦娘が来たときに譲ろうかと思ってる」

「他のやつらに...」

「うん、でもそれだと皆頑張ったのに納得しないだろうからどうしようかなーって」

「…………フウー私は、私は提督がそう決めたのならそれでいいわ。他の皆はどうか解らないけど私は今回の戦いで何もできなかったし。と、というか殆ど提督が倒したんだから文句の言いようがないわ」

霞がそう言って他の艦娘達を見る

「確かに、これと言って活躍できなかったし。私もソレでいいと思う」「そうですね。皆さんもそれでもいいデスカ？」

「OK」「いいよー」「かまへんよー」

それぞれ返事を返したあと全員がゴジラを見た。そして大鳳が前へ出て

「今回は余りお役にたちませんでした、次は私達だけで戦いきって見せます！ そのときは私達に決めさせてもらいますよ♪」

そう言ってウインクをする大鳳を見て照れるゴジラであった

「お、おう。その時はお、お願いします」

「ところで提督が持っているは何ですか？」

大鳳がゴジラの持っている卵について聞いて聞いてきた

「!!、あ、あーこれは、そのー、そこで拾った卵だ…多分」

「卵？ 一体なんの卵なんですか？」

「え、いや、さあそれは解らん」

「解らないのに拾ったんですか？ それをどうするつもりなんですか？」

「えつとそ、育てようと思ってる…」

「なんの卵か解らないの？」

「お、おう。ん？」

徐々に大望に詰め寄られているとゴジラの手の中の卵に変化が起きた。卵がガタガタと手の中で揺れ始めた

「提督、これって生まれようとしてるんですかね？」

「へ？ いや、それはいくらなんでも早すぎないか？」

ゴジラがそういった瞬間卵がビキリとヒビが割れ更に卵が大きく揺れる

「お、おいこれって本当に生まれようとしてるぞ!!」

「二」「えええええー!!!」「二」

「お、おいこういう時つてどうすればいいんだなにすりやいいんだ!!」

「お、落ち着いてい、今計算をバババ。」

「あわわわ」

「み、皆落ち着いて下さい!」

艦娘達が慌てる中卵のヒビは大きくなり遂に

ビキキ、バカン

と音をたて割れた。そして一同は恐る恐る見てみると

「フ?」

卵の中から小さなヲ級が四つん這いで出てきた

「二」「し、深海棲艦だー!!!」「二」

46話

誰かが叫ぶと一斉に小さなヲ級に砲を向ける。それを見たゴジラは

「わああああーあー。ちょっと待て待て待て、落ち着け!!」

そう言つて艦娘とヲ級の間にはいりヲ級を手に抱えて守る姿勢をとる

「ちよつ、提督!何やつてるんだよ、そいつは深海棲艦だぞ!」

「そうだけど落ち着けて。この子はまだ子供だぞ」

「子供だからつて脅威になら無い訳じゃないよ」

艦娘達に詰め寄られながらゴジラは説得を試みる

「いいかお前達。この子は大丈夫だ、それに子供なんだからこれから俺達で育てていけばいい子に育つだろう。もしかしたら深海棲艦との交渉とかできるようになるかもしれないだろう」シウルシウル

「なあゴジラ」

「まあお前達の不安もあるかもしれないけどこの子はまだまだそんなに力は無いんだから「なあつてばゴジラ!!」ん?何だ?」

「それ!、腕見ろ腕!」

「腕?」チラ

艦娘達に言われて腕を見るとヲ級を持っていた腕は肘まで触手が絡み付いていてヲ級のいる筈の掌には触手の玉が出来ていた

「ブツ!!ちよ、えええええー!!」

ゴジラが驚いて叫ぶと触手の玉が開きヲ級の顔が出てくる
「ヲ?」

ヲ級は不思議そうにゴジラを見つめている

「……お、おう、な、なんでもないぞ気にするな」

「ヲ!」シウルシウル

ゴジラの言ったことを理解したのかヲ級はまた触手玉の中に戻つていった

「な、な!特に何事もなく無害だろ!」汗

「いやいやいや、無理があるやろ!どう見たつてそのヲ級はさつき

戦ってた奴と同じことしとるやんけ!」

「い、いや同じっていうかこれが本体、みたいな……」

「……はあ!」」

その後、ゴジラはなんとか艦娘達を説得してヲ級の面倒はゴジラが見ると言うことで何とか説得には成功した。因みにヲ級は説得中ゴジラの腕から離れず玉の中で寝ていた

「それで、どうするだよ」

「ああ、考えたんだが」

「おう」

「名前はやっぱりビオランテとヲ級でビヲにしようと思う」

「そうか……ってチゲえよ!!誰が名前のこと聞かよ。そうじゃなくて俺達の事だよ!」

「え?あーそっか」

「そっか、じゃないだろこの後どうすんだよ」

「うくんまあ、ココの管理はメカゴジラに任せたら俺達はバース島に帰るだけだな。皆修理とかは終わってるんだろ?」

「うー、まあ終わってるけどよ。他になんか無いのかよ」

「他に?……!あーなるほどな安心しろ帰ったらちゃんと祝勝会するから」

その言葉を聞いて全員の顔が笑顔に変わる

「……やったー!!!」

こうしてゴジラ達バース島鎮守府の艦娘達の初の実戦は全員無事に終えることができた

その帰投中

「なあ鳥海」

「なに?摩耶」

「私達が今回戦った奴等ってさ。他の鎮守府の艦娘達は何の改修もせずに戦ってるんだよな?」

「え?…確かに私達はリトルさん達に特別な改修されてるけど、他は

そんなことしてないかもしれないわね」

「じゃあさ、改修もされてないのにあんな怪獣と戦ってゴジラも居ないのに海域解放してるってことだよな」

「…そうね、そういうことになるわね」

「私達は特別な改修されてんのに何一つ役に立たなかった。それどころかゴジラ…提督一人に全部任せちゃった…。私、悔しいよ、たった一回の戦闘で役に立たなかった自分に。これじゃあ他の所の艦娘に会ったらどんな顔して会えばいいのか…：解らないよ」

そう言つて摩耶は俯いてしまった、そんな摩耶を鳥海は抱き締め

「そうね、私もそう思う、だから一緒に強くなろう。他の艦娘に会ったときに胸を張って会えるように強くなろう、ね。」

「ああ、ああ」

そうして泣いている摩耶達を同じ思いで聞いていたバース島の艦娘達は、自分達ももつと強くならねばと強い意思をもって帰路に着いたよ…：…そして、ゴジラは

「フースー、フースー」 z z z

「ぬはー、かわえええええ!!」 ビクンビクン

ビヲの寝顔を見て悶えていた

—それから三ヶ月後—

「あー、あれから三ヶ月かーあつという間だなービヲも背が伸びて

駆逐艦の子位に成長したしなー……。

「はあ三ヶ月もたったのか……」

「そうあの戦いのあとバース島に到着した俺達は祝勝会を行い大いに楽しんだ……と思っていた。」

「祝勝会が終わり片付けが終わってから艦娘達が俺の前、と言うかりトルの前に来て自分達をもっと強くできないかと聞いてきたのだ。聞けば先の戦いで自分達がどれだけ弱いか気づいたと言うのだ。それを聞いた俺達は

（え！めっちゃ強くしたはずなんですけど、まだ足りない!!）

「トリトルと一緒に驚愕した。一応そんな急に強くならなくても説得するが一向に聞いてもらえずトリトルにどうすると聞いてみると

「いや、これからの強化と言うか改造プランはあるけど……」

と呟いたところそれに艦娘が反応し直ぐにやってくれと頼まれ

「ゴ、ゴジラー、どうするのー」

トリトルに聞かれるが艦娘全員の上目使い（迫真）を受けて断れるわけもなく

「ま、まあ強くなるのもいいんじゃないかなー」（棒）

と了承してしまい

「うーんゴジラーがいいって言うならやるけど。時間かかるからね」

「……お願いします!!!」

こうして急遽艦娘達全員の改造が行われるようになり全員が工廠へと移動していった。そしてそれから

「三ヶ月も経ってるだよなー……」

「ヲ、ヲ、ヲ」

「暇だな、ビヲ」

「ヲヲ、ヲヲ?」

「こうやってビヲと遊んでるか遠征に行くくらいで他なんもやってないからなー……」

「ヲヲ、ヲヲヲ」

「そうだなーなんかするかー」

何とかやる気を出して立ち上がると

『もしもーしゴシラー聞こえるー？川内だけどー』

「ん？はいはい聞こえるぞーどうした？」

『あ、良かったー今大丈夫？』

「あー大丈夫だ」

『良かった、ゴジラさ暇？』

「おう、暇だぞ」

『ならさ悪いんだけど助っ人に来てくれない？』

「別に構わないけどどうしたんだ、珍しい」

『うん実はさ今新しい海域を攻略しようとしてるだけだよ。どうやら怪獣が出るみたいなんだよ』

「マジかどんな怪獣が出るんだ？」

『どんな怪獣？うーんまだ偵察してるときに見つけたぐらいだから詳しくはわかってないんだけど、光ってるらしいんだよ』

「光ってる？」

『そう、それと空を飛んでるんだよ。今解ってるのはこれ位なの』

「うーん（光ってて空を飛ぶ怪獣か……まさか！キングギドラか!!）川内、もしかしたらそいつはキングギドラかもしれない」

『え、キングギドラ？』

「ああ、とても危険な怪獣だ俺も直ぐにそっちに向かうから俺が着くまではその怪獣を見かけても絶対に手を出さな偵察もしない方がいい」

ゴジラの鬼気迫る言葉に川内も押され

『そんなに危険な奴なの？』

「あーかなりヤバい奴だ」

『わかった皆にもすぐに伝えるよ』

「おう頼んだ、それじゃあすぐに出るわ、場所はどこだ？」

『場所は前にゴジラと攻略した島だよ今は前線基地として動いてるんだ』

「あーあそこな解ったそれじゃあまた後で」

そう言って通信を切ろうとする

『わーちよつと待ってゴジラ!』

「ん、どうした?」

『うん、えーと実はさ、もうひとつお願いしたくてさ聞いてくれる?』

「まあ、俺にできることであれば」

『やった、ありがとう実はさ食料が少なくなってきたさ、来るときに前みたいに綱引いてほしいんだよね』

「それくらいならお安いご用だよ」

『ありがとうー!それじゃあ待ってるね♪』

「おう、無理だけはするなよ」

『解ってるってば、それじゃ』

「おう、また」

そう言つて今度こそ通信が切れるゴジラはすぐに出発しようとするが

「さてそれじゃあ急いで……」

「ヲ、ヲ、ヲ」

目の前のビヲを見て

「ビ、ビヲ連れてけねーじゃん!!」

と目の前に問題があることに気がつく

48話

「はあ、はあ。お、お久しぶりです。ゴジラさん」

「お、おう久しぶりです。どうしたんですかそんな急いで？」

「ええ、ちよつとすみません。スーハー、スーハー、赤城、加賀こつちにいらつしやい」

息を整えた鳳翔が若干威圧感のある声を聞いて、こそこそとこの場を離れようとしていた赤城と加賀達が『ビクッ!』とする

「あ、赤城さん。呼んでますよ」

「加賀、鳳翔さんが呼んでます」

互いに自分の名を呼び合い誤魔化そうとする4人

「4人共です。いいから此方に来て座りなさい」

観念して鳳翔の前に正座する4人

「あなた達ようやく観念しましたね」 ヒクヒク

「……」

「言いたい事が色々ありますけどまずは皆に謝りなさい」

「……はい……すみませんでした」

4人が土下座で謝るのを見て事態が飲み込めないゴジラは、近くに來ていた天龍に尋ねる

「な、なあ。天龍一体何があつたんだ？」

尋ねられた天龍は困つたように苦笑する

「あーその。簡単に説明するとあの4人がここの食料ほとんど食い尽くしちゃつたんだよ」

天龍の答えに唾然とするゴジラ

「は？、食べ尽くした？。あの4人が全部？」

「ああ、まあ他にも居るんだが……まあ殆ど全部4人でと言ってもいいかもな」

「ホワイ？」

「うーん。順を追つて説明するとだなー……」

天龍の説明によるとあの4人は片方が第9鎮守府でもう片方が大本営から來た赤城と加賀で、最初のうちは互いに訓練や演習で競い

あっていたのだが。ある日食堂で

「私達って誰が一番ごはん食べられるんですかね？」

その瞬間空気が変わったそうだ

「はあ。そちらの赤城さんは変なこと言いますね。おかわり下さい」

「そうですね、気にはなりますけど…こちらもおかわりをお願いします」

「どうしたんですかお二人とも？、急におかわりなんてして。私もおかわりを」

「そんなこと言ってやはり意識してるんですね。お代わりください」

「二」おかわりをお願いします！」「二」

そして始まったフードファイトは、その日の全メニューの売り切れという形で終わった。

…だが、その後が問題だった。赤城と加賀達に火がついてしまったのだ。

訓練の後は必ず食堂へ4人で行き、その日の分の材料が無くなるまで食べ続けた。そのせいで他の艦娘達の食事が制限されるほどだったという。

その時点で止めれば良かったのだが料理を作っている間宮さんがちよつとテンションがおかしくなり赤城達に料理を作り続けてしまったのだ。

その事が解り鳳翔さんが止めに入ってくれたからそのときは良かったもののどうしてそんなことになってしまったのか間宮さんに聞いたところ

「おいしいおいしいと次々に料理を食べてってくれて、なんだか楽しくなってきたきちやつて…ごめんなさい」

とその時に間宮さんと一緒に赤城達も謝って一旦は落ち着いたのだが。只でさえ娯楽の無い環境に舞い込んできた出来事に一部の艦娘達が盛り上がり隠れてフードファイトを再開したのだ。

最初は渋っていた子達も徐々に熱に当てられはまっていった

まった艦娘達。

仕舞いには自分もやると言い出し増えていく参加者、減っていく食料。そしてそれは食料を管理している間宮さんに気づかれるまで続いた。

間宮さんが食事の下ごしらえをするために食料庫に入ってみると殆どの箱が空になっていて、それを擬装するための工夫もされており犯人を見つけるために動き出す。

それによってフードファイトの会場を発見し制圧。今回関わった艦娘達にお説教と罰を与えたのだが、この騒動の中心に居た赤城と加賀達は逃亡今の今まで逃げ続けてきたのだ！

「へ、へえく…大変だったんだな…」

話を聞き終えたゴジラはそれしか言えなかった

「ああ、まさかこんな大事になるとは思わなかったよ……」

「所でどんな罰を受けているんだ？」

ゴジラは興味が湧き聞いてみると

「あ？、えくつと確か暫くの間皿洗いと消費した食料確保の為の強制労働と禁酒1ヶ月だったかな。まあそれでも節約してようやく皆に食事がちゃんと行き届くかどうかって感じになっちまったから、本当にゴジラが来てくれなきゃヤバかったな」

「え!?そんなに深刻だったのかよ!、日本からの補給物質とかはどうなんだ？」

その言葉を聞いて顔を歪ませる天龍

「その補給物資を俺達が運んできたんだよ。一応はこの基地でも自給自足できるようにって畑とかはあるんだけど、まだ収穫できる物が少なくって……まあ一応食える奴はあるんだけどまだ数が足りない状態だから。今回ゴジラが獲ってきてくれた魚は干物にして日持ちを長くするために今皆で作業してるんだよ」

「うわあ、俺もう一回獲ってこようか？」

「いや、有り難いけど多過ぎても捌ききれないから今日は大丈夫だ」

「そうか、まあ必要な時は言ってくれよ」

「ありがとな。……所でゴジラさ、大きくなつたか？」

「えっ！俺がか？いやそんな感じしないけどな、え、大きくなってる？」

「ああ久しぶりだから見間違いかと思ったけど大きくなってると思うぞ、成長でもしたのか？」

「いや、全然そんな感じにはなってなかったんだがな、知らないうちに成長したのかな？」

「まあそれならそれでこっちからしたら心強いよ。今回の作戦もよろしく頼むぜ！」

そう言つて天龍は拳をゴジラに突き出してきたので、ゴジラも天龍手を近づけて『コツン』と叩いてもらう

「おう、よろしくな」

「あつそうだ明日会議があるからゴジラはそれに出てくれ作戦の説明と今回の怪獣について聞かれると思う」

「そうか解った」

「……なあゴジラ、今回の怪獣って結構ヤバイんだろ。その、俺達が行つてゴジラの足手纏いになったり……しないか？」

不安そうに聞いてくる天龍にゴジラは

「大丈夫だ、詳しいことは明日いうが俺が居れば奴は倒せるから。その間深海棲艦を天龍達に任せるんだ足手まといなわけ無いだろ」

「！……そうか、そうだよな。すまねえ変なこと聞いちゃまった。へへありがとなゴジラ♪」

「いいつてことよ。まあ俺も緊張すると思うからそんな時はフォローしてくれよ♪」

「おう任せとけ！……はははは」

「あははははははははは」

天龍の緊張もとけ場が和んだ様子を見て、見ていた鳳翔も安心する「ふふ、これなら心配要りませんね」

そう言つてゴジラ達の方を向いている鳳翔を見て、逃げだそうのする赤城と加賀達……だが

「あなた達、まだ逃げようなんて考えていたんですね」

いつの間にか逃げ道を塞ぐように赤城と加賀達の前に立つ鳳翔、そ

の後ろには鬼が見えていた。

それを見た瞬間赤城と加賀達はすべて諦めた。

その後赤城と加賀達は鳳翔さんに後から合流した間宮さんによって3時間に渡り説教され、この事件は幕を閉じたのだった

そして赤城と加賀達が説教されてる間にゴジラが獲って来た魚などを干す準備をし終えて、残りの魚を夕食に出すようにして、その日は久しぶりのまともな食事になったと皆喜んでいた

——次の日——

「昨日はあんな醜態をさらしてしまって、すまなかった」

そう言つて長門と武蔵はゴジラに頭を下げていた

「いや、別に俺は構わないんだが……………」

「……………」

頭を下げて二人の首には『反省中』と書かれた板が下げられていた
「お前ら二人も加害者側だったのか…………」

「いや、その。……我々も最初は止めるために乗り込んだのだが……」

「その場の空気に当てられたというか、司会の艦娘に乗せられてしまつて…………」

「ミイラ取りがミイラになつたと」

「うっ、そ、そう言うことだ……しかし！「う、うん！」!!」

「そろそろ会議を始める時間ですよ」ニッコリ♪

尚も弁明しようと口を開けたところで鳳翔さんからストップが入る

その様子を見てゴジラは

『「このトップは間違いなく鳳翔さんだな……逆らわないようにしよう』』

などと考えていた

47話

「どーすっかな。な、なービヲ?」
「ヲ?」

「あのな、俺ちよつとの間出掛けてくるんだが。その……留守番とかできるかな?」

ゴジラの問いかけにビヲは少し考えてから親指をたて。そしてゴジラの頭の上に乗る

「ラー♪、ラー♪」

ゴジラの上ではしやぎ出すビヲ

「いや。その、ビヲ。そのな、一緒に行くんじやなくてな、ビヲはここで留守番してほしいんだよ。な、解ってくれたか?」

ゴジラ of 言葉を聞いたビヲは固まり、そして

「……ヲ、」

「解ってくれたか!じゃあ悪いんだけど降りてもらって……」

「ヲ、ー!!ヲ、ー!!ヲ、アー!!ヲ、アー!!」

ビヲは泣き出した

「ちよ、!ビヲ泣くな!大丈夫だから。ちゃんと帰ってくるから、ちよつとの間だけだから!!」ワタワタ

「ヲ、ーイワイワイイ」

ビヲはゴジラの頭の上にへばりつき駄々をこねる

「すまん、ほんとすまん。帰ったら遊んであげるから。な、な?」

「ヲ、ー!!ヲ、ー!!」

尚もなき続けるビヲと説得するゴジラ達の所にメカゴジラが現れる

「ゴジラさんどうしたんですか!? 島中に泣き声が響いてますよ!」

「お、メカゴジラか助かった。実はカクカクシカジカで……」

ゴジラはこれまでの事を一通りメカゴジラに話した

「なるほど。じゃあビヲちゃんは我々が預かりますよ」

「マジで。大丈夫なのか?」

「ええ。何度か遊んだこともありますから。さっぴろちゃん、此方へ」
そう言つてメカゴジラがビヲの前に手を出すと

「ヲーヲー！」バシ！バシ！

触手を使つてメカゴジラの手を払い除けた

「……！！」ガーン（――。ん。ん。）

手を払い除けられたメカゴジラはショックを受けた

「あつーコラ！！」

その様子を見て咄嗟に声をあげてしまったゴジラ、しまったと思ひ自分の口を押さえるがすでに遅く、ビヲは自分が怒られたと思つたビヲは

「………ヲ、ヲ、アアー――」

更に泣き始めたビヲはゴジラの頭の上でビヲランテ化し始めた

「ちよ！重い！」

「あーちよつと待つてください。さ、ビヲちゃんこつちですよー」アセアセ

そう言つてメカゴジラが半ビヲランテ化したビヲをゴジラの頭の上から持ち上げ抱き抱える

「ごめんな、どうしても連れていけないんだよ。出来るだけ早く帰ってくるから、その間ここを頼むな」

「ヲー、ヲー」

「……うー、すまん、それじゃあ行つてきます！」

ゴジラは何とかビヲをメカゴジラに預け川内達の居る前線基地を目指した

「ふう、何とか出てこれた。久しぶりに皆に会いに行くな。漁が必要だつて言つてたし張り切つてやるかな♪………うーん？なんか忘れて、あつ！ リトルが居ないじゃん、そうだよ、リトルと最近会つてなかつたから忘れてた。今から。じゃ遅いか、まあもしもの時は飛んでくるだろうし大丈夫か。」

久しぶりだな一人って。思えば此方に来て最初の頃以外はリトルと一緒に行動してたからな、この三ヶ月ビヲの相手しててそんなに経つてゐるって気付かなかつたな、って……ちよつと待てよ。あれ、

俺って艦娘と交流してなくね？」

ゴジラはバース島の艦娘達を建造してからの事を思い返してみた

艦娘を建造する↓↓直ぐに改造する↓↓皆と初航海↓↓ビオランテと遭遇、初戦闘↓↓無事に帰還、艦娘にお願いされ更に改造、そしてそのまま三ヶ月会ってない……

「あれー、マジで全然家の艦娘と交流してないんだけど!! いや、川内達とは通信してたけど いや、違う俺の思ってた生活とは全然違うですけど!!

……はあ、今回の戦いが終わったら改造終わってるかな？ 終

わってたらもつと皆と親睦を深めよう！うん！そうしよう！」

こうしてゴジラは今後の事を考えながら目的地を目指す

「くそ、深海棲艦の攻撃が激しい!!おい！他の連中は大丈夫なのか!？」
ドタタタ

対空砲を撃ちながら他の部隊の様子を聞く

「今はなんとか持ちこたえてるけど、敵の数が多すぎるよこのままだと時間の問題だよ!!…キヤア!!」ドガン

激しい敵からの空爆、そして遠距離からの砲撃。周りの味方はまだ

無事だがもうすでに敵に囲まれた状態になってしまった。

今の状況ではもう一か八かで特攻を仕掛けて敵の一点突破するしかないが、もしそれができてもその後後ろから敵の攻撃にさらされる事になる、……だが考えてる暇はない損害が少ない今しかチャンスはない。

周りを見ると全員が解ったかのように首をたてに振る、それを確認して一呼吸

「よし、それじゃあ行くぞ。増員……」
「あ、あれ……」

艦娘の一人が遠くの敵の居る場所を指す、見ると海面から光の柱が伸びており、その光に深海棲艦を呑み込んでいった

「あ、あれは!!」

その光景を見て叫んだ艦娘は喜びの顔に代わり先程まで敵が居た場所から出てきた怪獣を見て

「「ゴジラだ!!」」

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

—————

—————

—————

「……って感じの事があるかもと妄想しながら来たけど全然そんなことなかったな……」

「久しぶりだね♪ゴジラ」

「おう、久しぶりだな川内、それに天龍も出迎えに来てくれたのか？ありがとな」

「あはははは、本当はもっと来たいって言ってた子が居ただけだね。色々あってね……今回は私と天龍が出迎えって訳」

「チビ共もさつきまで居ただけけど人手が足りないって、神通に連れていかれちゃったんだよ」

「アハハハ、そうかそうかそれは残念だったな」

「確かに、ちげえねえや、アハハ：は」

「あーそれで、さ。ゴジラ」

「ん、どうした？」

「その、通信で話した漁をして欲しいんだけど、今から大丈夫？」

少し申し訳なきように川内が聞いてきたので

「あー、それならここに来る前に網を引きながら来たから結構掛かってると思うぞ？」

それを聞いた川内と天龍は喜び出す

「本当ー、助かったよゴジラ、早速陸にあげてくれる。今他の子達も呼んでくるから、天龍は間宮さん呼んできて!!」

「了解！、直ぐに呼んでくる!!」

そうして二人は人を呼びにいつてしまった。そこへ

「あら、久しぶりですねゴジラ、もう着いてたんですね♪」

「お久しぶりです」

「おー、赤城に加賀じゃないか久しぶりーつてええ！」

「どうかしたの？」

「いや、あーいや、加賀と赤城がもう一人づつ居たから驚いただけだ。

まだ慣れないんだよ」

「あーそうですね、私も最初の頃別の私を見ると少し違和感がありましたけど今はもう気になりませんから、慣れですかね♪」

「へえー、やっぱ最初は違和感とかあるんだ？」

「最初だけですけどね、お久しぶり：といった方がいいのでしょうか？、こうやって喋るのは初めてだからはじめてましての方がいいでしょうか？」

「んー、まあはじめましてでいいんじゃないか？」

「そうですが。でははじめまして、私は大本営に所属している一抗戦赤城です」

「同じく加賀よ」

「今回もこちらの要請に答えていただきありがとうございます」

そうやって赤城はゴジラに礼をする

「いやいや、俺で役に立てるんであればこれくらいは…」

「所でゴジラさんその網は？」

「ん？ああ、ここに来るまでに引いてきたんだよ、食料足りないんだつて？」

「まあまあ、有難うございます。ではそれはこちらで私達が責任をもつて食べ…預からせてもらいますね♪」

「そうね、生物だから急がないといけないわ」

そうして赤城と加賀はゴジラから網を受け取ろうとすると

「ちよ、ちよつと待ちなさい、あなた達!!」

「そ、その声は鳳翔さん!!」

声の方を向くと其処には急いできたのか息を切らせた鳳翔と天龍、その後から他の艦娘達も集まってきた

49話

「す、すまなかつた。…う、うん、では改めて今回の攻略会議を始めます。今回はまだ詳細は解ってないが攻略目標付近で怪獣らしき物が確認されている、その為ゴジラに応援を頼み来てもらった。しかもゴジラは今回確認された怪獣について情報を持っているらしい」

ゴジラが怪獣の情報を持っていると聞いてざわめく艦娘達

「今からその怪獣について話してもらおう静かに聞くように、それじゃあゴジラ頼む」

そうして話し始めるゴジラ

「あー、早速説明させてもらおうぞ、今回確認された怪獣は多分キングギドラって怪獣だと思う」

「キングギドラ?」

「ああ、あいつは金色の鱗で覆われているから光って見えたのはそのせいだと思う。特徴としては腕はないが首が長くてしかも3本ある、そして尻尾が2本で大きさが…ハッ!!」

「何だーどうしたんだゴジラ!」

急に何かに気づいたように声を上げるゴジラ

「い、いや。因みに実際にその怪獣を見たっていう艦娘は居るか?」

ゴジラの問いかけに一人の艦娘が手を挙げる

「えっと、私とその怪獣…えっとキングギドラ?を発見した時の艦隊の旗艦をしました」

「おおそうか、その時の事覚えてるか?」

「ええ大体の事は覚えていますが…」

「なら大体でいいからその怪獣の大きさって解るか?」

「えっと…その…すいません。解らないです。反射光が強くて…それに距離も離れていたのどれ位の大きさか解らなかつたです。けどあきらかに飛行機よりも大きくて早い物体が飛んで行ったんで、最初は深海棲艦の新兵器かと思って報告したんですけど…」

そこまで言うとその艦娘は言葉を切って武蔵達を見る

「うむ、その報告を受けて我々が怪獣の可能性もあると思ってゴジラに応援要請を出したのだ」

「なるほど、じゃあ大きさは解らないか…」

「?。なぜそこまで大きさが気になるのだ?」

「エッ!、いや相手の大きさを知つとした方がいいかなって思っただけでそんな深い意味は無い、全然無いぞ!!」アセアセ

「ふむ、たしかに相手をよく知ることは戦略的にも有利になるからな。しかしいくら怪獣とてゴジラほど大きいのはそうそういないだろ」ハハハ

長門が少し冗談っぽく笑いながら顔をゴジラに向けるとゴジラは顔を背けてる

「……………え?」

「い、いやそうとは限らないんじゃないかなー…前の戦いのビデオ…じゃないエビラの時だって大きいのが出て来たんだし用心に越したことはない」アセアセ

(本当は50〜100m以上あるかもしれないと言ったら大混乱だよ、でも知らせないと大変なことに…あー!どう伝えるのが一番ベストなんだ!、考えろ考えろ。あつ!そうだ、こんな時にリトルに聞けばって今いねーじゃんどうしよう…)

そんな事を考えていると長門が

「確かに。すまないあの戦いの最後に出て来たエビラは強かったし体も大きかったな、どうやら少し気が緩んでいたようだ」

〈パンツ〉と自分の顔を叩き前を向き直す長門

「それではこれより海域攻略の為に作戦と出撃する艦隊を決める!」

(あれ、大きさは話さっきので終わりか?ま、まあ有耶無耶になったのは助かったがいつ言おう…)

ゴジラが悩んでいるうちに会議は進み、次の日に艦隊を揃えて出発することが決まった

港には今回の攻略に参加する艦娘達が集まっていた

「おはようゴジラ、よく寝れた?」

集まってくる艦娘達を眺めていると川内がやってきた

「おお、おはよう俺はぐっすり寝れたけど川内はどうなんだ、また夜ふかししてないだろうな?」

「ギクツ!、い、いや、これでも早めに寝たんだよ!」

「お前なあ、作戦中に眠たくなったらどうするんだよ」

「へへへ、その時は内緒でゴジラが運んでよ」

「むう、まあ、気が向いたらな」

「うん!よろしく、……ねえゴジラ」

先程までのふざけた感じはなくなり急に俯く川内

「どうした?」

「今回の敵も強いんだよね」

「ああ、もしキングギドラだったらかなり辛い戦いになるかもしれない」

「……そっか、……ねえ、ゴジラさ、前は私の夜の散歩に付き合ってくれてたじゃない」

「ん?ああ、そうだったな」

「最近はまだ一人で散歩することが多くなっちゃってさ……この戦いが終わったらまた一緒に夜、散歩に付き合ってくれない?」

川内が心配そうにゴジラを見つめる

「えっ!いやそれは構わないけどお前それってフラ……やったー!絶対だよ、忘れないでね。それじゃあそろそろみんな集まってきたし私も行くね、それじゃあ後で」

そう言うとゴジラを残し走っていく川内

「それってフラグじゃん…」

一人でつぶやくゴジラであった

その後、集まった艦娘達に武蔵が今回の深海棲艦の基地があるであろう場所とその道中キングゴドラと思われる怪獣との戦闘があるかもしれないので空母を中心とした艦隊を組むという説明があり

「今回の戦いは今まで以上の強敵が現れるかもしれない。ゴジラでさえ強敵と言わしめる程の相手だ我々だけでは対処しきれんだろう、キングゴドラと戦う時は攻撃はゴジラに、陽動と攪乱は我々が行いゴジラとの連携を意識して戦うように、では作戦開始抜錨！」

号令と共に艦娘達は一斉に動き出し陣形を作っていく、その後ろにゴジラはついて行く形になっている。

出発して暫くははぐれや小規模な深海棲艦の艦隊との戦闘があったがそれらは問題なく撃退していった、だが…

出発して数日後

「なあ長門、そろそろ深海棲艦の基地が見えてくる頃なんだろう？」

「……………」

「長門？、どうしたんだ」

ゴジラは現在どのあたりなのか聞くために長門達の近くに来てるのだが長門は難しい顔をして黙ったままだった

「長門ー、おーいどうしたんだー？」

ゴジラが何度か呼びかけて漸く反応があった

「……………おかしい」

「おかしいって何がだ？」

「我々は今深海棲艦の基地に向かっているはずなんだ」

「？、そうだな」

「だかこの海域に入ってからのはぐれ艦隊どころか深海棲艦一匹とも出会っていないのだ。普通ならもう哨戒している敵や偵察機が飛んでいても不思議じゃない距離までは来ているはずなのに…」

「……………ここまで何も無いのが逆に気味が悪いと、そういう訳か」

「ああ」

「じゃあどうするんだ、引き返すか？」

「いや、まだ基地の場所を確認してない。その後でも大丈夫だろう」
「そうか」

「……！ゴジラ、あれだ見えてきたぞ。あそこが今回の我々の目標だ」
そう言つて長門は見えてきた島を指差す、ゴジラも目標となる島を
確認する

「ほおー、あれかー……ん!?」

「どうしたんだ!?!」

「えっ！いや何でもない何でもない」

「えっ何、あの島って……バス島じゃん!!え、どゆこと。うちの周りでキングギドラとかって飛んでなかったはずだけど。深海棲艦は……まあうん、えーと、この辺で光って飛んでるのって……あー、メカゴジラかあー）アツチャー

ゴジラが考え込んでいると武蔵と長門が話し合っていた

「どうする武蔵、このまま攻め込むか情報を集めるか？」

「うーむ、向こうに気づかれた様子もないし一気に攻めるのも手かもしれんが……第一敵が居るかも怪しいしな」

「確かにここまで何も無いのも不気味すぎる」

「まずはあの島に上陸部隊を送って何かあるか確かめさせるか？」

「だがもしあの島が深海棲艦の基地だったら上陸部隊が危険になるんだぞ、それに万が一キングギドラの寝床だったら……死に行かすよ
うなものだぞ」

「ああ、最悪キングギドラと深海棲艦が我々の様に手を組んでいる場合もある。だがこのままじつとしていくわけには行かないだろう」

「だが……」

「これからの行動を考えている二人にゴジラが近づき

「なあ、あの島が今回の攻撃目標なんだよな？」

「ん？、ああそうだが今どうするか「あの島が俺んちなんだけど」決め
……」

場が固まる

「……えっ?……は!?!」

「だから俺の家、マイホームあの島に住んでんの！」
「な、なんだってー！！！！」

50話

ゴジラからの予想外の情報に混乱する二人

「ゴ、ゴジラの住処だったのか。…じゃあ深海棲艦がないのは」

「まあ、俺とかが見つけたらサーチ・アンド・デストロイしてたからな
それでだと思っ」

「…そ、そうか…」

そう聞いた武蔵たちはゴジラならそうなるかと何とか納得するこ
とにした

「じゃ、じゃあキングギドラはどうなんだ、まさか一緒に暮らしている
友達なのか？」

「うーんその事なんだけど、なんて説明すればいいのか…おっ！
ちょうど戻ってきたみたいだ、あれを見てくれ」

そう言っつてゴジラは空を指差す

「ん？ ……あ!?あの光は！」

ゴジラの指さした方角から光る飛行物体がすごい速さで迫ってき
ていた

「た、対空…「まあ待ってっ」…しかし！」

艦隊に指示を出そうとしたがゴジラか止めた、その間にも飛行物体
は近づいてくるが近づくに連れてジェット音が聞こえてきて徐々に
音が大きくなっていく

そして飛行物体は艦隊の周りを一回りしてから高度を下げてゴジ
ラの横にホバー移動で止まった。それを確認してゴジラが

「え、光の飛行物体、キングギドラと思っっていたんですが。実はうち
の防衛メカのスーパーメカゴジラの事でした!! 騒がせてすいませ
んでした!!」

その光景を見た艦娘達は自体が飲み込めずにいる

「な、……はあ!? スーパーメカゴジラ??？」

「そうです、家の防衛の要です！」

『どーもー、はじめましてメカゴジラです』キリ

「え、あ、ど、どうも………なんか、もう驚きすぎて何がなんやら……」
ガックリ

「あははは、すまないな、でもこれで戦わなくても済むんだから良かったじゃないか。折角だし家で休んでいけばいいさ」

「ハハ、確かに……ハアア、よかつたー」

「確かにそれはありがたい申し出だ宜しく頼むよ」

ギドラや深海棲艦と戦わなくても良くなった、武蔵達はそんなゴジラの提案にのり動こうとしたその時

『ところでゴジラさん達は何でこんなところでこんなに艦娘連れて何やってるんですか?』

メカゴジラの質問に答えるゴジラ

「いやな、艦娘達と海域攻略しに来たんだが。その目標が何とバース島だったんだよ。俺も着いてびっくりしたよ! あははは」

『なるほど海域攻略ねえ……。じゃあゴジラさん戦いましょう』

「ははは、え、いや、今なんて?」

『だからゴジラさん戦いましょう』

「な!、え!?!いやいやいや戦うたって誰と深海棲艦なんて居ないぞ!」

『ゴジラさんこそ何言ってるんですか、戦うのは艦娘とです!』

メカゴジラの言葉を聞いて固まるゴジラ

『艦娘と戦うんです』

「え!?!、なんで! 戦う理由がないじゃん!!」

「そ、そうだ! 我々はゴジラ達と敵対するつもりはない!!」

すぐさま武蔵達は敵対の意思はないと伝える

「な、みんなもこう言ってるし戦う必要はく『あります!』」

「な、なぜ!?!」

『ゴジラさんちよつとこつちに…』

メカゴジラはそう言うのとゴジラと艦娘達から離れた場所で話し始めた

「おい、メカゴジラ一体何が問題なんだよ」

ゴジラは戸惑いながらメカゴジラに聞いた

『いいですかゴジラさん。あの艦娘達は海域を攻略しにきたんですよ、しかも目標はベース島です。ここまではいいですね』

「お、おう、それで？」

『つまり！ このまま何もしないで島にあげちゃったら攻略された事になっちゃうんですよ。そうすると今まで隠してきた我々の位置がバレるってことなんですよ！』

「え、そこはなんか口裏合わせてもらったりして誤魔化せないかな…『甘い、甘すぎますよゴジラさん!!』

『いくら口裏合わせても攻略した場所の報告書てバレルに決まってるよー！』

「でも、攻略できなかつたらまた別の艦隊が送り込まれてくるだけだぞ。どうすんだよ？」

「フ、フ、フ、よくぞ聞いてくれましたそこで役に立つのが…これだー！』

そう言つてメカゴジラはどこから出したのかメカゴジラ（昭和版）の頭を出して来た

「これでどうするの？」

『これは演習用の頭ですからこれをゴジラに被ってもらつて艦娘達を蹂躪してもらいます』

「ええ、蹂躪て」

『それで艦娘達にはうちの捕虜になつてもらいます。そうすれば攻略されることはないでしょう！ それにー！』

「それに？」ゴクリ

『なんかそのほうが面白そうだからです』キリ

「ガク」「面白いってお前なあー、…まあ一理あるな、けど大丈夫なのか？」

心配そうにメカゴジラに聞くゴジラ

『大丈夫ですって、別に本当に捕虜みたいな扱いする訳じゃないんですから。これが終わったら歓迎会とかしてあげれば大丈夫ですよ』
(?ー?) bグツ!

「うーん、そうかーそうなのか?」

なお悩んでるゴジラにメカゴジラは

『いいから早くこれつけてくださいよ』グググ

「アツ!ちよつそんな押し込むなって……あ!」スポン

『フー、入りましたねそれじゃあ、バース島防衛作戦、艦娘から島を守りきれ!を発動します。 …んじゃちよつと艦娘達にも説明してきますね』

そう言つてメカゴジラは艦娘達の方へと向かった

「何?ゴジラと戦え?、馬鹿も休み休み言え、無理だ!!」

うんうん、と他の艦娘達も首を縦に振って無理だとアピールする

『うーん、でも実際攻略目標がバース島って事は何かしらの報告を出すんでしょ』

「そ、それはまあそうだが…」

『でもそれは、人間達にこの場所がバレるということだ。それは容認できない。そこでこの勝負だよ、この戦いに勝ったら。まあ、この情報を人間に出してもいいよ』

「だが負けたら」

『ここで捕虜として暫くは居てもらおうよ、もちろん情報を教えるのもなしだよ』

「いや、勝つも負けるにしても…」チラ

ゴジラの方を見るといつの間にか変な被り物をしていてこちらを見ている

『まあ、ぶつちやけ拒否権ないんだけどね。あー安心して私は手を出さないから、ゴジラとだけ戦えばいいから。それじゃあ』

「…ゴジラとだけって言ったって」

『始めー』

「あきらかに勝ち目がないじゃないかー!!!」

「XXXXXXXXXX、XXXXXXXXXX」

ゴジラ（昭和版メカゴジラヘッド）がこちらに向かつてきているが艦娘達は叫びながらゴジラからの距離を取ろうと走り出した

ゴジラは逃げ惑う艦娘達を容赦なく追い立て光線を浴びせていく

「うわああああー「ポン！」…ん？ポン？」

「ポポポポポン」と光線を浴びた艦娘達の頭から白旗が上がる

『はーい、白旗が上がった人はこっち来てねー』

メカゴジラに誘導され安全地帯（檻）に入れられた艦娘は何が起こったか解らずに入れられていく、中には失神している者も居るが、意外と安全に行われた戦いは一方的な戦いだった。一部の者が

「いけー、行くっぴょん！ そこだっぴょん もっと追い込むっぴょん!!」

と騒ぎ、ゴジラの所へ行き頭に乗せてもらい調子に乗った駆逐艦と。その駆逐艦を抑えようと必死になっていた駆逐艦がいたが演習？は無事に終わった結果はもちろんゴジラの勝ちで、皆が「どうしろってんだよ!!」と叫んでいたが多分どうしようもなかったと思う。

それに初めてあの光線を受けて死にはしないと解つていても恐怖を感じた者は多くそのせいで長門が「光が！ 光があああ!!」と何かのトラウマを蘇らせてしまつて大変だった

そして暫くして落ち着いた頃にゴジラの案内でバース島へ上陸した

『はーい、捕虜の皆さんこっちですよー』

メカゴジラが艦娘達を先導して案内して行く、艦娘達はまさかここまでの規模の施設があると思つてなかつたので空いた口が塞がらい

状態になっていた

51話

現在演習（蹂躪）を終えた艦むす達は、ゴジラとメカゴジラに案内され。工廠区画に来て聞いた

カーン、カーン、ゴオオオオン、ガシユン、ウィーン
様々な機械音と妖精さん達の作業音がする中、武蔵達は立ち尽くしている

「な、なななんだ、この設備はー！ー！！」

「えー、この設備はこのバース島で使われている防衛兵器や、新兵器の開発といった…」

「いやー、そういうことではなくてだな…あーもう、ゴジラ!!」

叫んだ武蔵にすかさずここについてメカゴジラが説明を始めたが、いきなりこんな設備を見せられ混乱している武蔵はゴジラに説明を求めた

「ここがゴジラの住まいなのだろうか？」

「そうっ…すね」(汗)

「なのになぜこんな兵器やらなんやらがここで生産されているのだ！」

武蔵からの質問にゴジラは真剣に考えた。少しの間二人の間に時間が流れる、そして

「解りません!!」

「…は？」(#^ω^)ピキピキ

「だって、最初は洞窟で生活していたのにいつの間にか工廠とか、建造機とか新兵器が知らないうちに増えていって。気づいたらこんな事になってたんだもん！」

「だもんでって、じゃあここはゴジラの意志とは関係なくこうなっているのか？」

武蔵の問いかけに焦るゴジラ

「えっ!?、いや、別に関係なくは無いですけどー。なんと云いますかー…ってへ♡」

「てへ。じゃなーい!!ハッ、そういえば建造機あるって言っていた

ななら…」

バシユーーー

急に武蔵の言葉を遮るように一つの扉が音を立てて開いていく

「フ、フ、フ、フ、久しぶりのシャバの空気デース」

その声とともに複数の足音が「ザツザツザツ」と音を立て扉から出てくる。そして出てきた艦むすはゴジラと武蔵の前で止まる

「お、お前らー！ やつと出てきたのか！」

「ハイ、提督。我々ベース島鎮守府所属全艦娘、全員改修完了しました」(ゝ・ω・ゝ) ッビシ

そう言い終えると全員がゴジラに敬礼をした。それを見たゴジラは固まったままだった

(えく、どうしちやっただよ皆、前はこんなことしてなかったじゃん)

ゴジラが戸惑っていると

「こ、これは、一体何がゴジラ、一体どういうことなのだ？」

ゴジラ以上に戸惑っている武蔵、そんな武蔵にベース島の金剛が近づく

「ハイ！もしかしてあなた達はここのニューフェイスデスカー？初めましてワタシハ金剛といいマース」

そう言って握手を求め

「あ、これはどうも、私は大和型二番艦の武蔵だ」

「oh！あの有名な大和型なんてスゴイデース！こんなビツクネームが後輩になるなんて、鼻が高いデース。それな他にもたくさんいますネー、ここも賑やかにマース！」

そう言って集まっている艦娘達を見る。そこへ

「しかしよー、提督。いくら何でもこんなに大勢建造してどうするんだ？」

「そうよー、資源だって無限にあるわけじゃないのよ！ちゃんと把握してるんでしょうね」

そう言つて詰め寄ってくる艦むすたち

「ヘイ！、そこまでにするネー、きつと提督も寂しかったんだヨ。それで建造しすぎてこんなに沢山艦娘を作ってしまったのネ」

「!!」

「提督！、そんなに寂しかったんですね。でももう大丈夫ですよ。私達がいる限りもう提督を一人にはさせませんから！」

「そうや、うちらはそのために強くなつたんやからな！」

バース島の艦娘達に何故か励まされるゴジラは困惑していた

「い、いや違うぞ！、確かに寂しさは少しあつたけど大体ビヲと過ごしてたからそんなでもなかつたし。何よりここに居る艦娘達は…「そーいえばビヲはどこで何してるんだ？」…え？、確かにどこに居るんだ？」

周りを見渡すと柱に隠れているビヲと目が合う。ビヲは一瞬目を輝かせたがすぐに首を振り『ツーン』と顔を背ける

(あー、置いてつたこと怒ってるのかなー、どうしよう！)

ゴジラは顔を少しかくと、もう一度ビヲの方を向いて手招きをして両手を広げる。すると

その光景を見たビヲは今度は満面の笑みを浮かべゴジラの方へと走つて行つた……が

「なつ?!深海棲艦だ!!」

事情を知らない武蔵達は、急に出てきたビヲを見て全員が艤装を出し砲塔をビヲへと向け戦闘態勢を取る。そしていきなりの事に驚き途中で止まつてしまったビヲと睨み合う?状況となつてしまった

「わー!!そうだった皆、違う、違うんだ。ビヲは敵じゃない」

ビヲの事を説明するのをすっかり忘れていたゴジラは慌てて艦娘達を止める

「……敵じゃない?、どういう事だ?」

「実はだな…(やつべー、ビヲの事をどう説明するか全然考えて無かつたー)」

「XXXXXXXXXX」

「!!」

「なっ!!怪獣!!」

ビヲは隙を尽いてビオランテになり、ゴジラへと走りあつという間にゴジラの体を登ってゴジラの頭の後ろに隠れた。そして頭の後ろに隠れながら艦娘達を威嚇し始めた

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

「あーほら、大丈夫だから、落ち着けて。なっ?」

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

尚も威嚇を止めないビヲを見て取り敢えず艦娘達に説明しようとしてゴジラは喋りだす

「あー、えつとこいつの事なんだけど名前はビヲと言ってな、俺のー、えーつと。!!、そう、娘だ!」

「!!」

「……えつ!娘!!」

「うんそう、娘、だから問題なし。ほら口元とか似てない?」

（うおー、さすがに無理がありすぎるか、だがもうこれで行くしかねえ!

はっ!これでもしビヲが『は?、ありえないんですけど』とか言われたらどうしよー!!）

「えつ?口元?、……うーん言われてみればなんとなく似ているような違うような?。い、いや流石に苦しくないか?…」

「うーん。ま、まあ今から説明するけどさつき合った艦娘を建造したあとだな…」

「ラーイ!ライライ!!」

「うわあ!、ど、どうしたんだビヲ!!」

「な、泣いているのか?」

ビヲはゴジラにしがみつき泣いていた。ゴジラは急に泣き出したビヲを心配そうに声をかける

「な、なんだ、どうしたんだ。どっか痛むのか?」

「グス、グス、ズビ」ブンブンブン

ビヲは首を振り違うと答えた

う…」

「ん？、まあ、そうだな。ここにいる者はゴジラと一緒に怪獣と戦った事があるぞ。まあ、ほとんどゴジラが倒してしまっただがな」

そこまで聞いてバース島の艦娘達は全員が『スツ』と正座しそして土下座の体制を取り

「す、すいませんでしたー」

「」

何故か全力謝罪してきたのであった

52話

「えっ!、え!?!」

「はっ?」

「そ、その歴戦の艦娘の方々とは思わず失礼な態度を取ってしまい。申し訳ありませんでしたー!!」

「えっ?、えっ? ちよつとゴジラよこれは一体どういうことなんだ?」

「い、いや俺も一体何がなんだか、何が何やらさっぱり解らん。なんでこうなった?」

ゴジラと武蔵は急に謝ってきたバース島の艦娘達をみて狼狽えていると。そこに

「その説明は私がしよう!!」バーン

バツとその場に現れたのはリトルだった

「リトル!、なかなか出てこなかったから心配してたんだぞ!」

「フフフ、なんで出てこなかったかって?…そんなの、出ていくタイミングを見計らってたからだだよ!!」バーン!!

「……………」ジ―

「……………」ジ―

「う、うん。それで一体なぜこんなことになってるか説明してくれるか?」

武蔵の言葉を聞いて見つめ合ってたゴジラとリトルだが、リトルは説明を始めた

「えーつと、まず何で謝っているかというと。まあやらかしちゃったからだね」

「やらかした? 我々はさっき初めて会ったのだぞ、一体何をやらかしたと言うんだ?」

「そう、武蔵達は今日初めて会ったけども、金剛達は武蔵や他のみんなの事を知っていたんだよ」

「知っていた? 我々の事をか?」

「うん、ゴジラと一緒に怪獣を倒した艦隊としてゴジラや私達から話

を聞いていたんだ」

「それで？」

「彼女達は皆に憧れを抱いていたんだよ。怪獣に臆すことなく戦い勝利したみんなの事を。……そして今、そんな憧れの対象である武蔵達に対して新人扱いプラス先輩面しちゃってヤバーイ！ ヤバくない？って感じ」

「あー…つまり憧れの先輩に生意気言っすいませんっすこと？」

「……はい」

「だそうです」

「だそうですって言われても我々としては別にそのことに関しては謝罪は受け入れるし問題もない……が！ 問題はその深海棲艦だ。百歩譲って艦娘がここに居るのは納得しよう。だが、深海棲艦となれば話は別だ。なぜ敵である深海棲艦のヲ級が！、しかも変異しているのがここにいるんだ！」

「だから娘…「ゴジラよ」……はい」

「ほんつつとうにそんな説明で納得すると思っっているのか」ニツコリ

「はい！ 1から説明させていただきます!!」

「よろしい。つと言う訳でゴジラから色々話をしてもらおう。皆もいいな？」

「二「はくくい」」

「なんか緩んでないか？ まあいい、ゴジラ皆を集められる場所はあるか？」

「ああ、それなら食堂とか「食堂ですっす!!」あるが…」

ゴジラが食堂といった瞬間反応した艦娘達が居た

「ゴジラ、食堂はどちらでしょう？」 ダラダラダラ

「先に行って席を取っておくわ」 ダラダラダラ

「赤城、加賀、お前たちはあゝ」

「ハハハ、まあすぐ着くからついてきてくれ」

そう言っつてゴジラは工廠から食堂への道案内を開始した。

艦娘達は皆ゴジラについて行ったが、一人あるものに気が付き引き寄せられていた

「ここが食堂か。かなり広いな」

「うん、私達が全員入っても余裕があるよ」

「まあ俺も使ってるからね。どうしても広い作りになるんだよ。席は空いてる所に適当に座ってくれ」

「解った全員近くの席に座るんだ。その後には……ん？」

武蔵が指示を出しているところあるテーブルではすでに食事を始めている艦娘がおり見てみると

「!!………またお前達か、赤城、加賀」ピクピク

「モグモグ。ゴツゴツゴ。ふおいふいですよ」

「ズバツ、ズズズツズツゴクン」

「食べてから喋れ！」

「……モグモグ、ゴクンこの料理すごい美味しいですよ!!」キラキラ
「頼んだらすぐに出してくれる所も高評価です」キラキラ

「お前達は……だが今はゴジラからの説明が先だ、食事はその後にしてくれ……」

「うーん解りました。でも一つ気になることがあるんですがいいですか？」

そう言ってゴジラに質問をする赤城

「うん？　なんだ」

「あつちのメニューを見るとゴジラ用と書いてあるのだけれど、あれは今食べている料理がゴジラ用の大きさに出されるってことなの？」

「え？　まあ、そうだな俺も色々な料理を食べたいから俺用の器で作ってもらってるんだよ」

「……そう、ですか。なら加賀さん……」

「ええ、赤城さん」

「私達の倒す敵が解ったわね」キラ

「ええ、鎧袖一触よ、心配いらないわ」キラ

「カレーライスゴジラ用で!!お願いしま《ガン!》《ゴン!》

「これからゴジラからの説明を聞くと言っているだろ」シユウ

更に注文をしようとした二人を拳で止めた武蔵はゴジラに説明を始めてくれと言う

「お、おう。えーとだな先ずはうちの艦娘達の事から……」

そう言つてゴジラは説明を始めた。リトルと一緒にこの島を大きくして防衛として艦娘やメカゴジラなどを作ったこと、そしてその艦娘達を連れて初の外海へ散歩のつもりが深海棲艦の基地を発見。しかも基地は怪獣に乗っ取られている状態でそのままにしておくのは危険と判断し、攻略を開始しなんとか敵の怪獣の撃破に成功。その怪獣の残骸を調べていた所カプセルがあり、開けると小さな深海棲艦(ビヲ)が入っていたので保護した。

……というふうの説明をしたゴジラ、その説明を聞いた武蔵は

「そ、それじゃあ。ゴジラ達はその海域を攻略したのか!」

「まあ、そうなるな」

「しかも怪獣に乗っ取られた状態だと……その怪獣つてもしかしてゴジラの上に乗ってるヲ級の事を言っているのかる?」

「……まあ。そうだな……」

「な、あ、それじゃあ深海棲艦は自らを怪獣化させる研究をしているということなのか!」

「いや、そこまでは解らなかつたけど、戦った時は俺よりも大きい個体だったぞ」

それを聞いた武蔵は頭を抱えた、他の艦娘達も絶句している

「それで、どうやって勝つたんだ……」

「そこは俺とメカゴジラが怪獣へ、艦娘達は残りの普通の敵を見てもらつて勝つた」

そこまで聞いて武蔵が感想をいう

「頭がどうにかなりそうだな。それが本当の事だとしたら、いや本当の事なんだろうが。我々だけでの海域攻略は実質不可能になるって事だぞ。うーん……あ! 因みにその時居た艦娘達は?」

「あー、それなら今皆にお茶出ししてるけど」

「今すぐその子達の話が聞きたい」

「解った、おーいベース島艦娘集合ー」

武蔵はゴジラに集めてもらったベース島の艦娘達を近くに座らせた

53話

「集まってもらってすまない。君たちにどうしても聞きたいことがあつてな」

「ハイ！何でも聞いてください！」

「その…敵の怪獣と戦った時の事を聞きたいんだが…どんな感じだったんだ？」

「そうですね、正直生きた心地はしなかったですね。敵はいっぱい居るし大型戦闘機は飛び回ってるし、それに「ちよつと待った」…はい？」

「そ、その大型戦闘機というのはどういうのだったのだ？」

「あー、怪獣がその大型戦闘機を飛ばしてたんですよそれもすごい量を、こつちの戦闘機の攻撃が効かなくて捌くのが大変でした…」

「…か、怪獣から戦闘機だと」

「ええ、私達も装甲とか改修されてなければあつという間に沈んでましたよ」

「どんな改修をしたのだ？」

「え!?!、えくとなんかすごい装甲にしてもって傷とかも勝手に治るんですよ。それにゴジラの熱線も何回かは耐えられるみたいです、そのおかげで助かりました」

「傷が勝手に治る？ゴジラの熱線をなんかいも耐えられる装甲だと？」

「ええ、それに後方には明石さんもいてくれたおかげで修理したりは問題なかったですね」

「なるほど明石が…明石が居るのか!?!」

「はい居ますよ、今は工廠に居ると思いますけど」

「今すぐここに呼んできてくれないか!!」

「わ、解りました、ちよつと待っていてください」

そう言つて朝潮が明石を呼びに行くのを見届けた後武蔵は出されたお茶を一気に飲み盛大にため息を吐く

「はあく、俄に信じられないが本当の事なのだろう…」

「はい、全て私達が体験したことです」

「…うーん、上になんて報告すればいいんだ…」

そう言って武蔵は頭を抱えてしまった、そこに

「あー、その事なだけどさ…」

ゴジラが会話に入ってきた

「…どの事だ、あり過ぎて私にはもう解らん…」

「この事、バース島のことは秘密にしてほしいんだけど」

「何？、それは私に報告書を偽造しろと言っているのか？」

武蔵はゴジラを睨みつけながら言い

「まあ、そうですね…でも一応こっちでどう報告するかっていうのは考えてあるからその案をとりあえず聞いてほしい」

ゴジラの話の聞くと武蔵はお茶のおかわりをもらい椅子に座り直す

「それで、その案というのは？」

「助かる。んじやまず我々はバース島には来ていない。というか見つけていないって事にして我々は深海棲艦の拠点へと向かい、その拠点で確認された怪獣を俺一緒に撃破し海域の開放をしたってことにしてくれない？」

「…なっ?!まさか!!」

「そう、このことを黙っててくれれば俺達が開放した海域をあげます!!」

「なあー！ 本気か？ せっかく自分たちで勝ち取った場所だぞ、それを…なぜだ？」

武蔵の問いかけにゴジラは

「いや、別に勢力を拡大させようとかは考えてないから持っててもしかたないんだよ、あーでも今はメカゴジラに整備とか管理してもらってるからかなり良物件になってるはずだ。どうだ？」

「たしかにそれはありがたいが。ただ…」

「ただ？、なんだなにか問題があるか？」

ゴジラの提案に考え込む武蔵

「いや、むしろ問題しかないだろう」

「え!？」

「まず拠点を譲ってもらって誰が残って管理、防衛すかだ」

「えっ?それは武蔵んところの艦むす達だろ?」

そのゴジラの答えを聞いて更にため息を吐く武蔵

「正直、そこに割ける戦力は我々にはない」

「え?なんで、戦力集めてこうして攻略に来たじゃないか」

「ああ、我々もそれを見越して更に被害が少なくなるようにゴジラに手伝いを頼んだ。：が、先の報告を聞いたところ深海棲艦は自らを怪獣にするすべを持っている!、そんな相手に我々はどうかやったらその基地を防衛すればいいんだ!!」

我々だって深海棲艦相手だったら遅れを取るつもりはない、が、怪獣相手じゃどう考えたって力不足だ!!」ドン!!

武蔵は思わず机を叩いてしまい、周りがシンと静まり返る

「お、おい落ち着けて、な、ほらお茶だぞ」

そう言ってお茶を進めるゴジラ

「ゴツゴツゴツ：プハー!すまん落ち着いた：：だがな実際問題艦むすの数が足りなくなるんだ。普通の防衛だったら次の増援が来るまでで問題なかったが怪獣が来るかもしれないとなると拠点の防衛面が不安だ」

そこまで聞いてゴジラも確かに言われてみればと思ひ考える

「うーんそうだな、メカゴジラそっちに回すようにするか：」

その言葉に武蔵家反応する

「メカゴジラを!貸してくれるのか!!」

「んく、貸すっていうかいま向こうの島はメカゴジラに管理してもらってるだが。そのままそっちの防衛に回せばなんとかなるだろう」
提案を聞いた武蔵は立ち上がり

「ああ、ああ、それならなんとかなる!：：だが本当にいいのか我々の方にメカゴジラを回して持つても?」

不安そうに聞いてきた武蔵に対してリトルが

「大丈夫です!!」

ゴジラと武蔵の間に入ってきた

「何もこの3ヶ月。艦娘の改修だけやってたわけじゃないよ！」

こんな事もあるのかと：「あのー、なんか呼ばれたみたいなんで来たんですけど、どうしましたか？」……」

リトルが喋っている途中に先程武蔵が呼んだ明石がタイミングよく、いや悪く入ってきた

「え、あ、すまん。呼んだのは私だ、すまないな急に。えっと、君がこの明石なのか？」

「はい、私がバース島鎮守府のあかしですが。何か？」

「いや、その、見た目が私の知っている明石とは違っていたものだから、つい…な」

「あー、それはですね、私も他のみんなと一緒に改修してもらってたんです。そしたら見た目変わっちゃってて、まあ前よりも良くなったんで気にしてはいないんですけどね」

そういう明石の姿は肌は褐色です髪と目はグレーになっていた、着ている服も他の艦娘と一緒にグレー色となっていた

「そ、そうか、問題が無ければそれでいいのだが。それで明石を呼んだのは：「ちよつとまでーい!!私が話してる途中でしようがー!!」

明石と話を続けようとしたところでリトルからストップが入る

「私が！ 今！ 話してる！ 途中でしようがー!!」ハアハア

「2回言った」

「2回言ったな」

「〜!!もういい！取り敢えず建造機の所へ行くよ!!」

リトルはポンポンと怒りながらみんなを先導していきそして

建造機前

「はいでは、さっきの続きです。メカゴジラをそっちに回すとこの防衛に支障が出ます。しかしそんな事もあるのかとこの3ヶ月で建造していた物が完成しています。それが、この機体ランドモゲラーとスターファルコンです!!」

〈バツ〉と両手を上げ2機の期待を紹介するリトル、周りにいた艦娘達

からは「おー！」という反応をもらう

「フフフ、この機体は（ウィキ参照して下さい！）という機体性能なんだ!!」

「おおー！！」

「驚くのはまだ早いよ。明石やって」

リトルがそう言うのと明石はパネルを操作すると、2機の機体の変形し合体したのだそれを見た艦娘達から

「おー！かっこいい!!」

「フフフ、これが対怪獣用兵器MOGERAだ！」

「うおおー!!!」パチパチパチパチ

リトルは艦娘達の反応に満足すると

「これでこのバース島の防衛の穴も埋まるよ」

「じゃ、じゃあ」

「メカゴジラをそっちのバース島支部（仮）に回しても大丈夫ってこと」

「い、いいのか、本当に!？」

「ああ、問題ないってさ」

ゴジラからのお墨付きをもらい

「いや、やったー！！」

そう言っって喜ぶ艦むす達、だがそこに

「あの一……」

「ん、どうした明石？」

「私は結局なんの為に呼ばれたんですか？」

54話

「あーそうだったな、おーい武蔵ー」

そう言っつてゴジラは武蔵を呼んだ

「呼んだか？」

「ああ、お前明石のこと呼んでただろ」

「おお、そうだった。済まなかったな、実は明石に頼みたいことがあるんだが？」

「はい？なんですか、私にできることなら…」

「助かる、こちら側の明石にそちらのらの技術を教えてやってくれな
いだろうか？」

「えっ!?、それつて…あのーすいませんそれは私が決めて良いことではないので提督に聞いてもらわないと…」

そう言っつてゴジラ達をチラチラ見てると

「ダメだよー、ここの技術を教えることは絶対ないよー」

そう武蔵に言うリトル

「しかし!!我々もハイそうですかとは言っつてられないのだ。訳は先に述べたとおり深海棲艦が強くなっていつている。せめて防御面装甲に關しての技術が欲しいのだ!!」

「はあくくダメダメつたらだめ。…：…やっばすぐに調子に乗るからな」ボソ

「そこをどうにはできないだろうか？」

「ウーんあのね、まずその技術を教えても運用できないでしょう。資源だつて少ししか余裕ないんでしょ、そこにこつちと似たようなもの作つたとしてもあつという間に資源が尽きて動けなくなるよ」

「ぐ…しかし」

「しかしも何もないのこの話はこれで終わり、終了ーつと」

そう言っつてリトルは両手をブンブン振る

「あーそうだ忘れてた。ゴジラ」

「えっ?あーなんだリトル」

「家の艦むすたちの武装について軽く教えておくね。」

「あーそっか忘れてたけどどんなふうになったんだ？」

「今から言うからまあ聞くだけなら大丈夫じゃない」

そう言っつてリトルは項垂れている武蔵に目をやる、すると武蔵と目が会いしばらく見つめ合っているのと急に武蔵が

「あ、あのすまない！その武装の説明、我々も同行させてもらっても構わないだろうか？」

そう言っつてきた武蔵を見て

「だつてさどうするゴジラ」

「どうするつてお前…まあいいんじゃないんですか」

「ありがとう！感謝する！」

武蔵達はゴジラの後を追いバース島の海岸部へと向かった

海岸部

「はいそれじゃーバース島の艦娘はうみにでてー」

リトルの号令によりバース島の艦娘達が艤装をつけて海へと出ていく

「はいそれじゃあ、簡単に説明するよー」

リトルはゴジラの頭に乗ろうとしたがビヲによりそれを阻止されて仕方なくゴジラの手に乗って話している

「う、うん！では気を取り直してバース島の艦娘の主砲はすべてレールガンにしました。もちろん火薬式にも変えられるけどね、それで砲弾の方は貫通力の強いフルメタル弾を使用します。

それと対空装備は対空メーサーを装備して空の怪獣にも対応できるようにしました」

ここまでの説明を聞いた他の艦娘たちは全員がポカーンとして説明を聞いている（ゴジラも含む）

「えっ？レールガン？。メーサーつて何？」

川内がリトルに質問するが

「まだ説明の途中だから後でね。えっと駆逐艦と軽巡は主砲一門と魚雷の他にミサイルを装備、対潜、対空、対艦と弾が選べますが積載量

には注意してね、重巡も同じ装備なるけど主砲は2連装になります。もしくはミサイルの他に高性能レーダーが取り付けが可能です。因みにこれには偵察用のドローンが6機付いています、これにより指令艦の役割も期待できます。

んで、戦艦は2連装レールガンが4門付いてるっていうのとある人の頼みでドリルが装着可能です」

「私の計算に狂いは無いわ!!」

「はいそーですね。え〜と次、空母は搭載機をメーサー攻撃機とスーパーX：はどつか行っちゃったんだよなく、スーパーXIIを搭載と戦闘機をまあ、いい感じて積んどくように」

「えっ!?!なんか雑なような取り敢えず了解しました」と空母勢が返事を、そして

「えーでは最後に航空戦艦は主砲等は他の戦艦といっしょだが：積み込む航空機はガルダー1号機は扶桑に、ガルダー2号機は山城に積み込むことになる。ガルダー1号機はメーサー兵器のままだが2号機はカードリッジ式の大形レールガンとなっているが注意 「やったわ山城！これで私達の勝ちよ。伊勢や日向なんか目じゃないわ！」

「はい！姉さまやりましたね、私達やりましたね！」

扶桑たちがはしゃいでる中リトルは説明を続ける

「ただ注意点としてはガルダーが発進すると推進力の力が強すぎるので中破してしまいます、どこがとは言いませんがまあだから注意するように…」

「山城〜♪」ルンルン

「姉さま〜♪」ルンルン

「ねえ山城、ガルダーを載せられる今の私達ならゴジラも乗せることができるんじゃないかしら?」

「そうですね姉さ…えっ?!いやいやそれは流石に無理だと思いますけど」

「ううん、何にか知らないけど私ゴジラを乗せられる気がするのよ、いや乗せるわ！」

「ちよつちよつと待ってください姉さま、一旦落ち着きましよう。ね、

「一旦…あつちよつと待って下さい姉さま！」

そう止める山城を無視してゴジラの方へと近づいてきた扶桑

「ん？どうしたんだ扶桑？」

「ゴジラ…私に乗ってみてください！」

「ブフォツ！ハア！の、乗るって俺が扶桑にか？無理があるだろー」

「いいえイケるはずですよ！」

「一体どこからそんな自信がゲーム(wows)じゃないんだからとりあえず俺を持ち上げられたら乗っても大丈夫なんじゃないか？」

「では行きます」

そう言つて扶桑はゴジラの足を掴み持ち上げようとする

「フグググ、フン、ハア！」

一分くらいそうしていて扶桑の後ろで山城が応援していたが
「どう持ち上げられそうなの？」

とリトルが聞いてきたので

「全然!!」ニッコリ

と全力で返すとそれを見た扶桑が持ち上げるのをやめ

「フー無理は良くないものね、今日はこれくらいにしときます」

と言つて去つていった

「何がしたかつたんだ？」

「さあ？、でも説明はざつとこんなところだけど…どう？」

「え?!どうっていわれてもなあ、でもまあこれで強くなったんたらいいんじゃない」

そう言つてゴジラは海の上に立っている自分の艦娘達を見る

全員笑つたり、照れてたりとした顔をしているが

「これで今度は足手まといじゃなくなるからな覚悟しろよな！」

そう言つて笑う艦娘達を見てゴジラは

(覚悟って何！強くなつたからほごぼこにするぞっていう意味なの！
演習の時にボコボコにしたから！その意趣返しか!!や、やばいレール
ガンなんかで撃たれたら俺…どうなっちゃうんだー!!!)ダラダラダ
ラ

「頼もしくなつたよね」

「あ、あーまあそうだな」

そうしてバース島の艦娘たちを見ていると

「ちよつと、ちよつとゴジラってば!!」

後ろから呼ばれ振り返るとそこには話に全くついていけない他の鎮守府の艦娘達がいた

「私達のこと忘れてない!!」

「えっいやいやいや忘れてないぞ、ただちよつと家の艦娘が魔改造されてて啞然としてたんだ」

「本当に!!」

「お、おう」

「それでこれからどうするの?」

「え?これからって?」

「いや、私達どうするのよ…」

「あ、あーそういうえば捕虜扱いだったな、つってもなー。バース島支部は武蔵達に任せるし…まあここにいる間は休暇って事でいいんじゃない。色々施設があるからゆつくり休んでくれよ」

そのゴジラという言葉に艦娘達は一気にテンションマックスになった

「やったー!!休暇だー!!」

「あーでも工廠の方とか立ち入り禁止のところにははいるなよー」

「「はーい」「」」

そう言いながら駆けてく艦娘達を見ながらゴジラは

「でも武蔵は明日現場見に行くからな」

「……………ジュー」(・ω・)

「う、ま、まあ今日はゆつくり羽根を伸ばして休んでくれ、それじゃあ後のことはリトルや他の妖精に聞いてみてくれ」

そうしてゴジラは少し離れた場所でお息をつく